
「全力のハクア」

sleepdog

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「全力のハクア」

【Nコード】

N0758N

【作者名】

sleepdog

【あらすじ】

小学五年生の二人がはじめた「天文係」の天体観測ピクニック。そのささやかな「天文係」の歴史に、あの夜、思いもかけない記念のページが刻まれた。流星が山の向こうに消えた一週間後、ちょっと変わった転校生ハクアがやって来た。ハクアが来てから少しずつ起きるおかしいこと。そして、ハクアのリミッターが外れる瞬間が

“ 僕がきみの力になる ” 現代ファンタジー小説、連載開始。

第1話 『転校生とギガバーガー』 1 / 3

名前もわからない星が無数に輝く景色は、はじめそれほどすごいと思わなかった。

でも、澄みきった星空が見おろす郊外の公園に来るようになったのは、同じクラスの気が合う女の子と、それぞれで一生懸命作った夜のお弁当を持ってピクニックに行く、というのがすごく楽しく感じて、それに女の子が話す星座の物語が面白かったから。実は、あとで父親に買ってもらった星座図鑑で確かめると、女の子の話は半分くらいデタラメな話が混ざっていて、何を讀んだのか不思議だったけれど、朱鳥タツヤはなぜか月本希に対し、間違いと言う気持ちにはならなかった。

ピクニックと言っても、たった二人である。放課後、家にランドセルを置いて、自分のお弁当を作り、宿題が出ていたらそれを済ませ、リュックを背負い、バス停で待ち合わせ、市営体育館行きに乗り、公園で星空を眺めて、そしてまたバスで家に帰るという短いものだ。郊外の公園は、住宅地に近いのに夜は完全に明かりが落ちるので、月本希が小さい頃から星を見に来ていた場所だった。

小学五年生の六月、梅雨もそろそろ明けるころ。朱鳥タツヤはさっぱりした短い髪に半袖半ズボン姿で、月本希は白いブラウスと水色のスカート。髪の高いおっとりした希には、星の髪飾りとピンク色のサンダルがとても似合っていた。

バスを降り、まずバス停の電灯の下でお弁当を食べる。公園に入ってしまうと、自分が何を食べているかもわからないほど明かりがないのだ。すっかり恒例な感じでおかずをいくつか交換しながらお弁当を食べ終えたら、草の匂いに包まれ、眺めが広い広場のベンチまで歩き、二人並んで腰かける。

歩幅も縮まるほどの暗さと静けさに、最初は恐い思いのほうがついていた。ただ、希はこの公園に着いたら口数が多くなり、このと

きだけはぐいぐい手を握ってくる。それに引つ張られてタツヤもだんだん目や心が慣れていった。希の手は握り返すと汗ばんで、やわらかかった。

希は星が本当に好きだ。季節によって星座が変わることも、時間によって星が動くこともすべて希に教わった。

天文新聞が作りたいの。

二ヶ月前、いきなり希からそう誘われた。タツヤは何もクラスの係をしていなかったが、それはやる気がないからではなかった。タツヤは父子家庭で、料理がまったくできない父親と、まだ小学二年生の妹と三人暮らしなので、食事はすべてタツヤが作っているのだ。それが忙しくて係をしていなかったが、まさかそんな誘いを受けるとは思っていなかった。希は、天文新聞を作る『天文係』というのを作りたいと言った。ない係を自分で作るなんてことは初めてだ。

美星小っていうのに、『天文係』がないのはダメだよ。

二人が住む町は美星町という。せつかく星が美しい名前の町だからと、希はクラスメイトにもっと星のことを知ってほしいと願っていた。希は最初一人で、担任の暮田晴海先生に頼みに行ったら、クラスでもう一人いれば作っていいと言われた。係のかけちはダメだから、他に声をかけられる人も少なかっただろうし、新聞を作るから字がきれいなタツヤと一緒に作りたいと言われた。字がきれいと女の子に言われたのは驚きだったが、タツヤは普段からよく話す希の頼みを断れず、校内でもこのクラスにしかない『天文係』というものができた。

郊外の公園の真つ暗な広場にあるベンチで、二人並んで星空をじっと見る。希のとめどないデタラメ混じりの星座物語をずっと聞いている。それが月二回くらいのペース。天文係はそれくらい小さな活動くらいだった。

そんな美星小天文係の歴史に、その夜、思いもかけない記念のページが刻まれた。

二人の眺める星空に　　巨大な流星が斜めに走って地面まで落ちたのである。

巨大と言っても、普通の流星が米粒大の淡い輝きだとしたら、この夜の流星はビー玉くらいのまぶしい白銀の輝きだった。タツヤも希も「あつ！」と同時に声を上げ、思わず立ちあがった。

「いまの落ちたよね。えっ、どこ？　どこだろ？」
希がすごく興奮している。

「うん、落ちたね。あれって星だったのかな？」

タツヤの目に見えた感じでは、この公園よりもつと山の中にあるどこかに流星は落ちたようだった。しかし、山の重なる向こうに落ちたとして、それがこの近くなのか、あるいは日本のどこかなのか、もしかすると海を越えた果てしないどこかなのか、それはわからない。ともかく、あれだけ大粒のきれいな流星をこの眺めのいい場所で見たことはただすごい感動で、しかも天文系の活動中だった偶然に不思議なよるこびがあった。

「いまのすごいね！　すごいよね！　明日、新聞にのるかな？」

希は目をキラキラさせてタツヤの手をぎゅっと握る。タツヤは少し赤くなった。

「どうだろう？　うん、気になるよね」

二人だけが流星を見たような奇跡を感じる興奮はあったが、バスで帰る時間も近づいていた。春に買ってもらったばかりの携帯電話を開き、時間を見る。今日はあれだけのことがあったので、タツヤはもう少し希と一緒にいたかった。

でも、流星の落下とは関係なく、バスはきちんと予定通りの時間にやってきた。ただ、バス停で待つ希は、握る手の汗ばみも口数もいつもより多かったから、やっぱり天文係にとって絶対に忘れられない特別な夜だったのだ。

次の日、タツヤは早起きして父親の廉太郎れんたろうから新聞を取り、隅々まで流星の写真や記事を探したが、何も載っていないかつ

た。少しがっかりして小学校に行くと、クラスメイトも何人か大きな流星を見たと言う。やはり流星が落ちてきたのは間違いないようだ。放課後、昇降口で希に声をかけ、帰り道タツヤの携帯でポチポチとニュースを探してみたが、それらしき情報はまだ見つからなかった。

そして次の朝、新聞にようやく流星の記事が載った。タツヤは希と一緒に見た光景が本物でちょっとうれしかったが、くわしい記事を読んで驚いた。漢字がかなり難しかったので廉太郎に手伝ってもらったが、流星の正体は『隕石』というもので、その落下場所はやはりここからそう離れていない山中だった。ただ、隕石は山都小学校という小学校に直撃し、校舎がすべて倒壊したと書いてあった。幸い夜だったので小学校は無人で、先生もみんな帰宅していて、被害にあった人はいなかったみたいだ。

ハサミで記事を切り抜き、学校で希に見せると、希もその記事と同じように切り抜き持ってきていた。二人して笑い、次の天文新聞はこれにしようと話した。

そして、隕石落下から一週間後　朝の天気予報で例年より早く梅雨が明けたと言っていたその日、ひとりの女の子が突然タツヤのクラスに転校してきた。学期の途中で転校生が来るのは珍しい。晴海先生のあとに続いて、女の子が教室に入ってきた。クラスがざわつく。

第一印象は女の子っぽくなかった。パイナップルみたいに明るい色の袖なしシャツに、大きなジャングルの絵がプリントされている半ズボンのデニムパンツと黒いハイソックスを履いている。髪は明るい栗色で、肩までの長さだった。

「はじめまして、寺野ハクアです！」

女の子だが、ハツとするほど声が大きかった。続いて、晴海先生が寺野ハクアのことを紹介する。

「寺野さんは山都小学校から転校してきました。今日からみんなよろしくね」

山都小学校と言えば、先週の隕石落下で壊れてしまった小学校だ。その後、タツヤは父親の廉太郎に聞いたのだが、もともと山都小学校は生徒が減っていて、もう廃校になりそうだったらしい。隕石は専門の研究所に回収されたそうだが、校舎は完全に壊れてしまったので、生徒はみんな転校することになったのだ。ただ、主な転校先は美星小学校ではなく、もっと近い小学校に行くことになっていた気がする。

晴海先生も隕石落下事故のことはクラスに話したが、タツヤが知っている新聞の内容ほど細かい説明でなかった。晴海先生が少しつけ加える。

「山都小学校から美星小に転校してきたのは寺野さんだけです。うちが美星町に引越すことになったので、美星小になりました。前の学校のお友達とは分かれてしまったので、仲良くしてあげてね」
クラスはみんないい返事をした。タツヤは後ろから二番目の席に座っていたが、寺野ハクアはタツヤのすぐ後ろの席になった。赤いランドセルにベタベタと派手なステッカーが貼ってあって、何となく馴染みにくそうだな、という印象をタツヤは持った。

晴海先生はそのまま一時間目の算数の授業をはじめた。先週やった小テストの返却があり、タツヤは九十五点だった。一問だけ間違えたのは残念だったが、前回が八十点台だったので、上がってうれしかった。

席に戻るといきなりハクアがまわりのクラスメイトに点数を聞いていて、当然タツヤも聞かれた。まだ仲良くなってないのに点数を話すのに気後れしていると、好奇心丸出しの顔でテスト用紙をめくり取られるように点を見られてしまった。

「うわっ、頭いいね！」

タツヤはハクアからすぐ取り返し、席にきちんと座り、間違ったところを見直した。

一時間目が終わり、休み時間にタツヤは後ろを向いて、寺野ハクアにあいさつをした。クラスの女の子も早速何人かハクアの席を囲みに来た。みんなが気になったのは、ハクアのことよりもむしろ隕石落下事故と壊れた山都小学校のことだ。タツヤも天文新聞を書くのにいいかな、と思つてそのまま輪に入つて聞いていた。気づくと、希も横に立つて話に加わっている。

「髪の毛そめてるの？」

「もともとこういう色だよ」

「ねえねえ、本当に学校なくなつちやたの？」

「うん、そうだよ。朝行ったら学校がバラバラになつてたの。ほんとビックリしちゃった。地面にでつかい穴ができたんだつて」

ハクアは別に暗い表情ではない。自分だったら小学校が壊れたらかなり落ちこむが、この子は平気なのかな、とタツヤは不思議に思う。

希も身を乗り出してハクアに聞く。やっぱり隕石のことが一番気になるようだった。

「寺野さん、隕石は見たの？」

「ハクアでいいよ」

「じゃあ、わたしも希つて呼んでね」

「うん！それで隕石なんだけど、あたしは見てないんだ。学校の門から入れなくて。学校もずつとお休みだったしね」

「そうなんだ……」

「ねえねえ、隕石つて光つてたりするのかな？」「隕石はもうどこかに持つてかれたの？」「何でハクアさんだけ美星小なの？」「ハクアさんちつてどこ？」「他の子は何小に転校したの？」と女の子たちが好き好きに口をはさむ。ハクアは質問攻めに答えるのは大変に見えたが、輪の中にいるのがわりと楽しそうだった。

盛りあがっているところに、学級委員の十和田とわだ霧枝きりえが割つて入ってきた。きりつと清潔に結んだポニーテールで、クラ

スで一番勉強ができる優等生。ロゲン力では誰も十和田霧枝には勝てない。

「寺野さん、給食が終わったら学校を案内するからね」

「うん。あつ、給食か！ 楽しみだね！ あと、ハクアでいいよー」

「案内してつて先生に言われてるの。じゃ、よろしくね」

「うんうん！」

ハクアは会心の笑みを返したが、霧枝とのやりとりは少しずれていたように思った。

寺野ハクアは持ち前の明るさと、隕石で壊れた小学校からの転校生という意外さで、一日中クラスの注目を集めた。声が大きくて休み時間でもかなり存在感があるし、給食でも男子並みのスピードでおかわりをもらいに行ったので、そういうのもかなり目立った。そして、給食のあとに学校案内に行くという約束を忘れて、三度目か四度目のおかわりをしようとしていたところを、十和田霧枝に止められるというのもあって、霧枝嫌が多い男子たちにもハクアの性格は受けていた。

ただ、ハクアが少し変わっているのは間違いない。放課後、タツヤが廊下で希と少し話をしたときも、希は不思議そうな顔をしていた。

「ハクアさんてほんと元気だね。前の学校……なくなっちゃったのに」

「普通落ちこむと思うんだけどなあ」

「うん。あと、給食すっごいおかわりしてたね」

「食べるのが早くてビックリしたよ」

寺野ハクアの転校初日は、クラスにインパクトを残した以外はわりと平穏に終わった。帰りのホームルームでも、晴海先生が「寺野さんと遊んであげてね」とみんなに言っていたが、その心配はなさそうに感じた。タツヤは家に帰り、廉太郎と妹の由果と三人で夕食を囲みながら、食欲旺盛すぎる転校生のことを話した。三年生の由

果はにこにこしながら「由果はそんなにおかわりしたことない」と笑っていた。タツヤも驚いたと言えればそれくらいの印象しかなかった。

しかし、それはまだハクアの本当のことをまだ一割ほども知らなかったのだ。

次の日、午後の理科の授業で、春海先生が小テストの用紙を配りはじめたとき、いきなりハクアが後ろからタツヤの背中をつついてきた。テストに少し緊張していたので、余計に驚いて振り返る。

「えっ、どうしたの？」

ハクアはかなりへばった顔をしていた。

「ううう、助けてー。前の学校よりすごい先のところやってるんだよ」

教科書は同じなのだが、山都小学校は授業の進みが遅かったようだ。タツヤは冷たい性格ではないが、テスト中に助けられるはずもない。ハクアの声が大きいので晴海先生に注意されるのも気になり、タツヤは小声で答えた。

「それなら、今日はできなくてもしょうがないと思うよ」

「えっ！ ダメ、先生があたしのことバカだと思っちゃう！」

ハクアが少し怒った顔になる。そんな顔をされてもタツヤは困るだけだ。

「あとでノートとかなら貸すよ。今はごめんね」

とにかく今はどうしようもない。これ以上は無理だと思ってタツヤは前を向く。

「えっ……じゃあ、借りるね！」

ハクアはそう言って、トン、とタツヤの後頭部を軽く突いた。少し気が散ったが、晴海先生がテスト時間を黒板に書いたので、教室の時計を見て、テスト用紙に目を落とした。

タツヤは頭が真っ白になった。問題は、魚の誕生に関する写真や

イラストを見て答えるというものだ。とりあえず、まったく何も出てこない。鉛筆がちつとも動かない。変な汗だけが出てくる。次の問題を見ても、やっぱり何も思い出せない。結局、タツヤが自信を持って書けたのは自分の名前だけだった。あとはいくつか記号を力で埋めたり、思いついた言葉をぼんやり書いたりしただけだ。

でも、タツヤはできないものは仕方ないとあきらめていた。思い出せないのだから、どうしようもないと。かなり時間が余ったので手を動かしていないと先生に怒られると思い、テストが終わるまで用紙の余白に変なドラゴンの絵を描いていた。

晴海先生が終わりの合図をして、後ろからテスト用紙を回してくる。先生が全部集め終わり、また授業が再開した。すると、ハクアがまたタツヤの頭をトンとつついた。

「ごめんね！」

タツヤは少し変な感じがしたが、とりあえず教科書とノートを開き、いつも通り授業を聞いた。振り向くと、テスト前はあれだけ困った顔をしていたはずなのに、ハクアはすっかり満面の笑顔だった。できなくても仕方ないと思っただけかな、とタツヤは感じた。

翌日、理科の授業で、そのテスト結果が返ってきてタツヤは呆然となった。たったの六点。三択の問題がふたつ合っていただけ。おかしい。答えはほとんどわかるのに、みんな空白だったり間違ったりして、タツヤは驚きで心臓が跳ね出しそうだった。

「朱鳥くん、昨日は風邪ひいてた？」

晴海先生はテストを返す時、今まで見たこともないほど不安げな表情でタツヤの顔を見た。さらに、用紙の余白にはドラゴンの絵が描いてあり、そこに晴海先生から赤ペンで『ちゃんと集中しましょう！ 次は0点にするかもよ！』という注意書きまでされていた。五年生にもなつてテスト用紙に絵なんか描いたことはない。でも、間違いないそれはタツヤがたまに気まぐれで描く変なドラゴンの絵だった。誰かのイタズラではないのだ。

理科の授業の後、休み時間にハクアの席で何人か女の子がテストのことを話していたが、タツヤはまだ最悪なテスト結果のショックが残っていて、後ろに会話があまり頭に入ってこなかった。家に帰ってもこれは廉太郎に見せず、部屋のゴミ箱に丸めて捨てた。テスト結果をゴミ箱直行にしたのは、これが初めてかもしれないとタツヤは悲しんだ。

第1話 『転校生とギガバーガー』 2 / 3

それから数日はおかしいことは起きなかった。授業もちゃんとわかったし、宿題もきちんとできたし、晴海先生もあれ以上は心配してこなかった。ハクアも理科以外はそれほど困っているようでもなく、タツヤが勉強を教えると言ったのも忘れたと見え、特にハクアと勉強の話題もなかった。

そして、身体測定の日がやって来た。ここでも思いがけないトラブルが起きた。男子と女子は時間を分けて測定を受けるが、午前中、女子がやっているときに、希が急に具合を悪くして保健室に運びこまれたのだ。ただ、身体測定が終わった後、クラスの女子何人か様子を見に行くと、希は普通の体調に戻り、一緒に教室に帰ってきたのだが、希は午後もずっと浮かない表情をしていた。こんなことはかなり珍しい。

今日は週に一回、学校の図書室で天文係の話をする日だったので、放課後タツヤは希に声をかけた。週一回なのは、他の曜日は希がいろいろな習い事に行っているからだ。目の前で見ると、希の顔色は全然悪くない。いつも通りだ。

「もう大丈夫なの？ 今日早く帰る？」

「うっん、平気だよ。図書室に行こっ」

図書室で話を聞くと、希も本当に自分でもよくわからないのだと言う。はじめ身長や体重を測っていたときは何ともなくて、視力検査を受けて、次の検査へ行こうとしたら、いきなり目の前がぼんやりしてしまい、気分が悪くなり、恐くて歩けなくなったらしい。でも、視力検査の結果は両目2.0だったのだ。先に身体測定が終わっていた女の子たちに支えられて、保健室まで何とか行き、ベッドに寝ていた。その後、終わって保健室へ様子見に来た女の子たちに抱き起こされたら、すぐに視力が戻ったというのだ。

タツヤは話を聞くうち、体調を心配するのとは違う、何とも言え

ない不気味さを感じた。ただ、うまく言葉にできないので、希には言い出さなかった。

「でも、目が急に悪くなったり良くなったりするの？」

「うつん、そんなことないと思うけど……」

「何か、視力検査で思い出すことはない？」

「え？ あ、ハクちゃんが来てくれたんだけど」

「ハクちゃんて、寺野さんのこと？」

「うん。視力検査が終わったとき、ハクちゃんがわたしの視力を聞いてきたの」

希が思い出したのは、普通に聞いていて少しおかしな話だった。

希は検査をして両目2.0と言われ、次の列に並ぼうとしたのだが、出席番号順つまりアイウエオ順で次に検査を受ける寺野ハクアが希に駆け寄ってきて視力を聞いたらしい。そして、顔にごみがついていると言つて希のまぶたに触り、視力検査に戻った。それから、希は急に目の前がぼんやりした状態になって、すぐしゃがみこんでしまった。その後は保健室だ。

タツヤは考えこむ。やっぱり何かがおかしい。ただ、それが何なのか考えてもよくわからなかった。

「あ、あと」

「うつん」

「保健室に行くとき、おでこに変なのがあるって言われたの。霧枝ちゃんから」

希と霧枝は幼稚園が同じでいつも仲が良い。

「おでこ？」

「うつん。おでこ。でも今はないよね」

希はイスをそばに動かし、手で前髪を持ち上げ、タツヤによく見せた。顔が近づいたので少しドキドキしたが、確かにアザのようなものはまったくない。

「転んだとき、おでこをぶつけたの？」

「うつん、転んでないよ。くらくらしたけど、座っただけ」

「じゃあ、今日どこかにぶつけた？」

「そんなことないよ。朝うちで顔を洗ったときもアザはなかったよ」
あとで霧枝にも聞いてみよう、とタツヤは思った。ただ、とにかくアザがあったのなら、希の具合は良くないだろうと考え、今日は早く帰ることにした。希はこの天文係が週に一度の大きな楽しみなので残念がったが、本気で心配するタツヤの顔を見て、おとなしく帰ることにしたようだった。

タツヤは、夜ベッドに寝転がりまた希の話を思い出すと、ずっと気になって仕方なかった。

次の日、霧枝に聞いてみると、希の話とだいたい一緒だった。出席番号では寺野ハクアの次は十和田霧枝なので、三人は並んでいたのだ。希の視力検査が終わった後、ハクアが話しかけ、ハクアが戻ったら希の具合が急に悪くなったという流れだ。

「あと、月本さんのおでこにアザがあったみたいだけど、覚えてる？」

霧枝は唇をとがらせる。

「うーん……花びらみたいなアザがあったかも」

「花びらみたいなの？」

「視力測定の前は、あんなのツッキーの顔になかったと思うんだよね。汚れじゃないと思うけど」

霧枝は希のことを昔からツッキーと呼んでいる。ただし、希をツッキーと言っるのは霧枝だけだ。

「汚れだったら寺野さんが何か言いそうだね」

「まあ、そうだね」

「それで……寺野さんはそれからどうしたの？」

「んー、普通に身体測定やってたけど。みんな終わってあたしとかが保健室にツッキーの様子見に行ったとき、テリーも一緒に来てくれたよ」

寺野ハクアをテリーと呼ぶのもたぶん霧枝だけだ。なぜなら朱鳥

タツヤはアツシーと呼ばれているからだ。

「そうなんだ」

「ツツキーをベッドから起こすのも手伝ってくれたし。テリーは思ったよりいい人だね」

霧枝の言い方はともかく、ハクアが後で保健室に行ったというのは初めて聞いた。タツヤが少し黙りこむと、霧枝がむすつとした顔で腕組みをした。

「でさあ」

「なに？」

「アツシーはツツキーのことが好きなの？」

霧枝は目の奥を覗きこむように突然聞いてきた。霧枝はクラス内のこういう話が大好きだった。今回、タツヤはいつもより希のことを心配しすぎて、変なふうに思われたのかもしれない。霧枝のじつとりとした視線が逃げたいくらい突き刺さる。

「え……違うよ」

「ふーん、そうなんだあ。二人だけで新聞書いてるし、絶対そうだと思うってた」

「新聞は面白いからだよ。星も好きだし」

「あつ、そお……。星はあたしも好きだよ」

「うん。ごめん、ありがと」

タツヤはこれ以上希のことを聞くのが恥ずかしくなり、逃げるように席に戻った。後ろの席にはハクアが寝ぼけた顔で座っていたが、ハクアと話すと何か変なことが起こる気配がして、自分からはなるべく話しかけなかった。そして、放課後になった。

借りていた本を図書室へ返しに行くと、たまたま希と行きあつた。まだ表情が明るくなかったので、タツヤは一緒に帰ろうと誘った。希はピアノの習い事がある曜日だが、今日はピアノの先生の都合でいつもより遅い時間らしいので、気分転換にちよつと寄り道をした。

梅雨明けの日差しが強く、二人でアイスを食べたくなり、大通りにあるバーガーザウルスのシェイクをめざすことにした。

「タツヤくんは、今日霧枝ちゃんとなに話してたの？」

希は横目でタツヤの顔をじっと見る。

「え……？ えっと、月本さんのこと」

「昨日のこと？」

「うん。ごめん。ずっと気になってて」

だが、タツヤは言葉が続かなかった。何か気になるかもよくわからないのだ。しかし、

「ほんとに？」

希の表情が少し明るくなる。「ほんとだよ」と答えると、希はほっとしたように微笑んだ。

バーガーザウルスは、並びにパチンコ屋やゲーセンもあり、かなり賑やかな場所にあった。店に入ろうとすると、一階の窓際席で大きな口を開けている寺野ハクアと目が合った。希が「ひゃっ！」と変な悲鳴を上げる。驚くにしてもそれはあんまりだ。タツヤは希の様子を確かめる。

「どうしたの？」

「ごめん、ちょっと驚いただけ。ハクちゃんもいるからお店で食べようよ」

希は明るく手を振って、窓越しにハクアへ合図した。ハクアも拳をエイベイと元気に振りあげて応える。横にランドセルがあったので下校途中だと思うが、同級生が一人でハンバーガーを店内で食べているのを見たのは初めてだ。タツヤと希は店に入り、タツヤがシェイクを二つ注文する間に、希はハクアに話に行った。タツヤはレジに並ぶ間、二人の様子を見ていたが、特におかしな感じもなく楽しそうにしゃべっている。

シェイクを二個持って席に行くと、ハクアはものすごい量のハンバーガーを食べているところだった。『ギガバーガー』という二段重ねの一番大きなハンバーガーを五個も買っていて、すでに三個食

べ終わり四個目にかぶりついてた。何となく今はハクアと距離を置きたかったが、希が店で食べると言ったので、仕方なくタツヤも希の横に座った。

テーブルが小さくて、希と肩がくっついて少し気恥ずかしかった。店内がエアコンでかなり涼しいからか、希はタツヤにぴったり寄り添うようにひじをつけてくる。

「んー、美味しい！」

「ほんとだね」

希の表情によやく明るさが戻り、タツヤは一安心した。

「ところで、ハクちゃん、ギガバーガーが好きなの？」

ハクアは口の動きを止めず、巨大な食べ物をもぐもぐと両手で握っている。こんな量でも太っていないから不思議だった。

「これさあ、暴れるほどうまいよね。毎日でもイけるよ！」

言い方がおかしい。タツヤはトレーの上でくしゃくしゃになった袋に目を落とす。

「……家でごはん食べられなくなるよ」

「んっ？ いいの！ たまにはいいの！ ギガバーガーは別腹なんだよ」

「別腹ってごはん食べたあと言うんだよ」

「うっそ！ プレパラは頭いいなー」

いきなり変なことをハクアは言った。いつからそんな意味不明のあだ名になったのか。

「え？ 何でプレパラって言うの？」

希がいきなりタツヤに聞いてくる。不思議な表情というよりは少し困った顔をしている。

「……いや、僕もわかんないけど」

「あ、ごめん。この前、あたし理科のテストで一個だけ間違えたんだ。それがプレパラートだったの。『あ、プレパラートはわからなかったんだ』と思ってさ。それでつい言っちゃった」

この転校生は、何を言っているんだ？ 理科のテストで、そ

れだけ間違えた？

タツヤはシェイクを吸うのを止めて、ハクアの言葉をよく思い返した。理科のテストは、タツヤが六点しか取れなかったテストのことだ。顕微鏡の器具の名前を答える問題もいくつかあった。

希も難しい顔をしている。

「んーと……？　ハクちゃんがプレパラートって書けなくて間違えちゃったんだよね……？」

「あー、んー、そうそう」

ハクアは変な苦笑いをしている。

理科のテスト。それでハクアは百点近く取ったみたいだが、テスト直前に『助けて』と言ってたはずだ。どうしてそんな点数が取れるのか。

ハクアが最後のギガバーガーに手を伸ばす。

「プレパラも、テストができなかったからって、暗い顔すんなって！」

タツヤは背筋がずっと寒くなる。エアコンやシェイクのせいではない。どうしてハクアは見せてもないテスト結果を知っているのか。

「……僕はプレパラじゃないよ。変なあだ名はつけないでよ」

「それに、朱鳥くんは頭いいんだよ？」

希がフオローを入れてくれたのはうれしかったが、今まで取ったことのない点だったシヨックが戻ってきて、完全にシェイクを飲む気をなくしてしまった。それと、ハクアが自分の間違えた問題をタツヤのあだ名にしたことも気になった。その間に、ハクアはギガバーガーを全部食べ終わり、ドリンクのふたを開け、ガリガリと氷を噛んでいた。文字通り、完食だ。

結局タツヤはシェイクをこっそり残し、希が飲み終わるのを待って、三人で店を出た。帰る方向が一緒だったので、三人で通りを歩いていると、五、六人の高校生たちが道幅いっぱい歩いてきて、

誰かのカバンがハクアの肩にぶつかった。ハクアはよろけてタツヤの腕にしがみつく。タツヤはビクツと身を強ばらせ、慌ててハクアを支えた。ハクアは噛みつきそうな目つきで高校生の背中を睨んだが、高校生たちはまったく気にせずゲーセンに入っていく。明らかにガラの悪い感じだった。

「あいつら、小学生だからって『ごめん』の一言もないのか!」

ハクアはいきなり鼻息が荒くなった。ただ、文句を言っても絶対に敵わないので、タツヤはその場を過ぎようとしたが、ハクアは何を思ったかゲーセンの中をまだ覗いている。希が不安げに声をかける。だが、険しい顔で仁王立ちしたままだった。タツヤはせめて飛びかかるのは止めようと、ハクアのそばまで行った。

「寺野さん、もう行こうよ」

「待て、あいつら何か変だぞ。何してる?」

短髪の高校生が、ズボンに手をつっこんで両替機の前に立っていた。さっき見た高校生たちの一人だ。

「何してるって……見えないの?」

タツヤはハクアに聞き返す。両替機は店の奥でもないし、外からでも普通に見える。お釣りの返却口がピカピカ赤く光っている。あれはお札が残っている時のサインだったと思う。ハクアはそれが気になるのだろうか。

「あたし、目が悪いんだ」

「それならメガネとか」と言いかけたとき、両替機の前にいる高校生が奇声を上げた。

「おおっ! 超ラッキー!」

短髪の高校生は両替機からお札を取り出したようだ。

「オレ、今日マジやばいかも!」

どうした、と言って仲間が集まってくる。あのお金はもしかすると前に両替えした人がすっかり取り忘れたものかもしれない。

「すいません、それ僕のです!」

すると案の定、店の奥から走ってきた。近くの私立中学校のブレ

ザーを着ていて、見るからに気弱そうな感じだった。タツヤは何となく嫌な予感がして、早くハクアを連れてこの場を離れたかったが、腕を引いてもハクアはまったく動かなかった。

「朱鳥くん、ハクちゃん……」

二人とも店の入口から動かないので、希も心配になってそばに来た。店内では、ブレザーの気弱な中学生が、さっきのガラの悪い高校生たちにぐるりと囲まれている。店員の姿はどこにもない。

「それ、僕のなんです。返してください」

声がどんどん高くなっていく。

「ごめん、わりイんだけど、これ、オレのお金だよ？」

「いや、でも……。僕のなんです……」

「ふざけんなって！ お前のって言うショーコがないじゃん」

「でも……あの、カ、カメラとか見れば……」

震える手で、天井を指差す。暗くて見えにくいのが、天井に監視カメラがあった。

「ん？ どうしたの、このひと」

別の高校生が後ろから現れ、ブレザーの肩にぐいと腕を回す。

金髪で体格が大きく、かなりの威圧感があった。

「なんかさ、オレがとっちゃったって言うてんの。超又レギ又なんだよね」 そう言っ、短髪は両替機から取ったお札をポケットに入れた。仲間たちが口を出す。

「なにになに？ メーヨキソン？」

「ちよ、それ合ってんのかよ？」

「ぶはははっ、いや合ってんだろ、バカ」

すると、ブレザーの肩をつかんだ金髪の高校生が、尻を蹴りあげる。

「なあ、店でさわぐのはメーワクだから、ちよつと外出て話そうぜ」
ブレザーの中学生を強引に取り囲んで六人が店の外に向かってくる。店員はまだ来ない。近くにいるのかどうかわからない。ハクアは恐い顔でじっと目を凝らしたまま黙っていた。目が悪いからよ

く見えないのか、何を考えているのか全然わからない。まさか止めに入るつもりではないだろうか、タツヤはかなり不安になった。

不良たちは店を出て、すぐそばの薄暗い路地に入ってしまった。ブレザーの中学生が立ち止まりそうになるので、金髪が後ろから何度も尻を蹴りあげ無理やり歩かせている。「プレパラ、あれはいじめか？」

そう言つて、ハクアはようやく歩きはじめた。

「いや、ああいうのは『かつあげ』だよ」

変なあだ名がくり返されたことに抵抗を感じたが、タツヤは素直に答えた。ハクアは早足になり、不良たちが入っていった路地のところを曲がり、前方に再び見えた集団の背を睨みつける。

「カツ……わかった、覚えた。お前は頭がいいけど、あれを見て平気か？」

「悪いことだと思う。だけど、僕らが注意しても聞かないよ。店員さんと呼ばないと」

「でも、店を出たぞ」

「じゃあ、交番に行かないとダメだ」

「そっか。国には いまさら頼れないな」

意味不明な言葉を残して、次の瞬間、ハクアはタツヤの手を振り払い、まっすぐ駆け出した。ビルの谷間の暗い路地に、ハクアの走る音がよく響く。

「待て、おまえらあああつ！」

赤いランドセルを背負った女の子が大声を出しながら突進していく。不良たちがすぐに後ろを振り返った。タツヤは胸の鼓動が一気に速まったが、足がすくんでハクアを追いかけられなかった。

「ぶはははっ、なんか小学生が走ってきたぜ！」

ロン毛の不良が集団の前にさつと躍り出て、ハクアの進路に大きく立ちふさがる。ハクアは走る勢いのまま、その足に飛びかかった。「貸せッ！」

ハクアはそう発すると、ロン毛から一旦距離を取った。

「ぶはっ、貸せとか言っちゃってるよ？ 最近のちびっ子はアタマおかしいな」

「ゲームすぎなんじゃね？ ったく、これだからゆとり世代は」

「それ、オレらもだろ？」

仲間たちが高笑いすると、ロン毛が急にひざから崩れ落ちた。

「あれっ?! なんでなんで?!」

ロン毛はパニック状態でわめきながら尻もちをついた。仲間がからかう。

「バーカ、どうしたんだよ？ ちびっ子に負けんなよー」

「ちがう、足の力が全然入んねんだよ！」

悲鳴に近い声を上げながら、ロン毛の体はアスファルトの道に転がった。

「はあ？」

「こいつ、新しい彼女とエッチすぎてお疲れなんじゃないの？」

「うわー超それくせえ。ゆとりのリア充はちびっ子にやられとけ！」

仲間たちがまた笑っている。その間に、ハクアは他の不良たちの足元をすばしっこく動き回った。

「ったく、うぜえな！」

不良たちは手や足を出すのも面倒くさそうに、カバンを振ってハクアを払おうとするが、ハクアは体を低くしてちょこまかと背後に回る。離れた場所から見えているタツヤには、何が起きているのかまったくわからない。ただ、寺野ハクアがさらに一人もう一人と足に飛びかかり、次々と高校生の大きな体を道に転がしていくのだ。もしかして、テレビで見たことがある合気道とかいうものだろうか。足に飛びつく度に「カセツ！」と言っているが、武道で気合いを入れる発声のようにも聞こえた。

希も一緒にあっけに取られている。

「朱鳥くん……あれって何なの？」

「わかんない。合気道っていうやつかも」

「アイキドウ？」

うまく説明ができない。どう見てもハクアは、ただ相手の足に触っているだけのようだった。たったそれだけのことで、不良たちが糸の切れた人形みたいに倒れていく。だがそれにしても、道に倒れた不良が一人も起き上がれないのがどうも変なのだ。みんな何とか必死に立とうともがいているが、力む声がするだけで、尻もちの状態から誰も抜け出せない。

あっという間に、六人いる不良たちのうち五人を道に横倒しにし、最後に、ブレザーの中学生を太い腕で捕まえている金髪の不良が残った。すると、ブレザーが逃げないように、片方の脇で首を絞め、本気の構えになった。今まで小学生となめてかかっていた五人とは気配が違う。

それでも、ハクアは同じように後ろに回りこんで、足に飛びつこうとした。だが、金髪の不良はそれを読んで、足を真後ろに蹴り出した。その蹴りがハクアに命中し、ハクアの軽い体は吹き飛ばされて道に倒れされた。ランドセルがガシャツとつぶれる音が響いた。

タツヤは息を飲んだ。心臓が止まりそうだった。ハクアは痛みで苦しそうに顔をしかめている。そして、起き上がろうとしたとき、すぐそばに寝ていた不良の一人がハクアの肩をつかんで地面に押しつけた。「あっ！」希が鋭い悲鳴を上げる。もかくハクアの近くに金髪の不良が来て、足で踏みつけようとしていた。

「ハクアー……！」

タツヤは路地の入口から大声で叫ぶ。不良たちの注意がタツヤのほうに移る。

「もういいよ！！早く逃げろ！！」

助けを呼びに行く時間なんかない。不良の気を逸らしてハクアを逃がしたい、その一心だった。いくら武道を習っていても、小学生が本気の高校生に敵うわけがないのだ。

「大丈夫！ あたしは助けられるから！」

気迫のこもったハクアの声が路地の真ん中に再び響く。ハクアは、肩を押さえつけていた不良の脇腹を蹴り、すぐ抜け出して立ち上がった。脇を蹴られた不良はすさまじい苦痛の悲鳴を吐き、うずくまった。「痛い、痛い」と叫び続ける。道にただ寝かされたときとは明らかに様子が違う。他の不良も異変に気づき、口々に騒んでいる。金髪の不良はハクアに向き合い、カバンを構える。脇に絞められた中学生が逃げようとバタつくが、まったくびくともしない。それだけ強い力で押さえつけているのだ。

「おい、クソガキ、武道とかやってんだろ」

「ワルに話す義理はない」

ハクアは恐いくらい堂々としている。

「調子に乗るなよ！　さらっちまうぞ！！」

不良の口から出た言葉に、タツヤは体が震えた。いくら何でも高校生相手では無茶だ。どうしてハクアの腕を離してしまったんだろう、どうして逃げると言っても逃げないんだ、とタツヤは胸が痛む思いだった。

だが、ハクアはまったく物怖じしていない。それどころか不敵に笑った。

「　おどし文句はさ、力の強いほうが言うんだよ」

「てめえ！　ふっ飛ばすぞ、オラァ！！」

金髪は狙いをすましてカバンを振った。ハクアは横からの早い一撃を、キックではじき返す。カバンはものすごい破裂音を立てて空中に高く跳び、金髪の体の重心を浮かした。その足元にハクアは迷わず突進する。金髪は足をつかまれまいと、浮いた右足でハクアを蹴り倒そうとする。だが、ハクアはその向かってきた右足のすねを、なんと正面から力いっぱい蹴り返したのだ。

男子高校生と女子小学生のキック力がぶつかって、小学生が勝てるはずがない。ところが次の瞬間、金髪のキックは完全に打ち返された。鈍い音とともに、ハクアのほうが見事にキックを振り抜いたのだ。

「ぐあああつー!!」

金髪は今日最大の悲鳴を上げ、体をねじらせて道に倒れた。そのときの衝撃で、ブレザーの中学生は、金髪のヘッドロックから解かれた。中学生はよろめきながらも、何とか転ばず踏みとどまった。すでに半分泣き顔で、道にうめく不良たちを見て、さらに二歩三歩と後ずさる。

集団の真ん中に一人悠然と立つハクアの顔を見る。だが、どう見ても、通りすがりの正義漢でなく、赤いランドセルを背負った女子小学生であった。

「さて、あとはお金だね」

ハクアが不良たちの顔を見渡した後、短髪の不良に近づいていく。「ねえ。さっきの両替機で取ったお釣り、すぐに返して」

不良は、ハクアに迫られても足がまったく自由にならず、ただ慌てるばかりで、腕を振り回す様子はまるで幼児のただっこみみたいだった。ハクアはため息をつき、後ろで足を抱えて痛がっている金髪の不良を指差した。

「見てたでしょ？ あんたも、あいつみたいに蹴られたい？」

「ふ、ふざけんな！ クソチビがなに」

「あのさ」よく通る声で、相手の言葉をさえぎった。「もう一回言っけど、おどし文句は、力の強いほうが言っただよ」

「……」

短髪の不良は押し黙り、ポケットからお札を出してハクアに投げつけた。千円札四枚が宙に舞って地面に落ちる。ハクアはそれを拾い、立ちすくむブレザーの中学生に渡した。そして、中学生はお礼も何も言わず、青ざめた顔で向こうへ逃げて行った。

そのあと、希は消え入りそうな声でタツヤのシャツを引いた。

「ハクちゃんを、早く、こっちに……」

「うん……わかった」

タツヤは、ハクアがなぜ高校生に蹴り勝ったのかわからず混乱し

ていて、胸の鼓動もまったく静まらなかったが、とにかくハクアをこの危ない場所から早く離れさせたい一心だった。ランドセルを力チャカチャ鳴らして駆け寄ると、ハクアも一仕事終えた感じの満足した顔でタツヤのほうに歩いてきた。だが、不良たちは尻もちをついたまま、悠々と自分たちの横を通り過ぎるハクアの姿を野犬のように見んでいた。

「寺野さん、ケガはない？」

「ん？ ハクアでいいって。さっきそう呼んでくれたでしょ」

「えっ、あ、うん」

「これからもそう呼んでね。なんかうれしかったの」

「そっ、そんなことはどうでもいいよ。それよりケガは？」

「うん。ちつと、すりむいた」

何気ない顔で言うが、ひざの皮がめくれ、じわじわと血が出ていた。金髪にはじめ蹴り倒れたときの傷だろう。これは絶対に痛いはずだ。

「ねえ、早く戻ってきて！ 危ないから！」

希が遠くから二人に声を飛ばす。タツヤは一気に緊張が高まった。「ちくしょう！ このクソガキ！」

道に寝ていたロン毛が、手元にあった何かを拾って投げた。タツヤは慌ててハクアを手で押すと、ボン！という音がして、ランドセルに衝撃を受けた。当たったのはタツヤのランドセルだった。足元に石が落ちる。ロン毛がどっちを狙ったのか、それともコントロールが狂ったのかはわからない。だが、一歩間違えれば、タツヤは後頭部に大きなケガをしていたかもしれない。身の凍る思いだった。

「まったく、こりねえヤローだなあ！」

タツヤがひるんでいる間に、ハクアが猛スピードでダッシュして、ロン毛を正面から蹴り飛ばした。ロン毛は慌てて両腕でガードしたのだが、その防御をまるで物ともせず、固いアスファルトへ激しく打ち倒した。ロン毛は「うおおお……」と胃から何か吐きそうな声

を出し、仰向けになつてあえいだ。

そして、ロン毛の頭のそばにハクアはしゃがみ、まぶたの上に手を当てた。

「お・に・い・ちゃん」ゾツとするほど可愛い声を出す。「あたしがおにいちゃんに、まっくらな世界を見せてあげてもいいんだよほら、どう？ やつちやつていい？」

タツヤは無邪気な言い方に恐さを感じ、必死でハクアの腕を引っ張った。

「もういいから！ ここから逃げよう！」

「うーん、まあ、そうだね」

大通路まで走つて戻り、途中で希の腕も一緒につかんで、三人で路地から離れた。もう追つてこないと思う場所まで三人で逃げてから、タツヤはひとまず呼吸を落ち着かせた。ハクアは元気いっぱいだが、希は顔を赤らめ息を切らしている。

タツヤはかなり気が動転していたが、それでも不良たちの輪から走り去るとき、不思議なものを見た気がした。何人かのおでこに桜の花みたいなアザがあるのを見たのだ。不良たちがゲーセンを出てきたときは、誰にもこんなアザはなかった。だが、ハクアに倒された不良たちをそばで見たとき、全員にくっきりとアザがあつたのだ。ハクアはおでこなんて蹴つていないのに。

それから、落ち着いて考えれば、ハクアが不良たちを打ち負かした強さは、どう考えても変だった。男子高校生が、小学生に転ばされて起き上がれないなんて信じられない。小学生の女の子とキックを打ち合つて負けるなんて。これだけおかしいことが重なつて、タツヤは寺野ハクアという転校生にきちんと話を聞かないといけない、と決心した。

「寺野さん、さっき、いったい何をしたの？」

「ん、なにって？ ケンカはダメ？」

「そうじゃないよ。あれは、普通のケンカじゃない」と僕は思う「ハクアの目つきが変わる。はつきりとまじめな顔になった。」

「僕のテストのことも、月本さんの身体測定のこと、絶対おかしいと思うんだ」

タツヤは続ける。希も不安げな目でじっと見つめている。

「……あたしに何が聞きたいの？」

「僕もわからない。だから寺野さんから、ちゃんと僕たちに言ってしかし、次にあったのは沈黙だった。ハクアは不良を倒したときとは違う険しさでタツヤを見る。タツヤも目を逸らさなかった。希がこわごとと口をはさむ。

「朱鳥くん……。ハクちゃん、ひざをケガしてるから、先に手当したほうがいいよ」

言われて思い出した。走ったせいで、血がさらに流れて真っ赤になっている。ハクアもどうして痛いと言に出さないのか。

「うん、そうだね。ごめん」

「あのさ」

ハクアもようやく重い口を開く。少し悲しげな顔つきになっていた。

「じゃあ、今からうちに来てよ。ここじゃ、話すのイヤだから……」

ハクアの家は町外れにあった。大人が一人暮らしするようなワンルームマンションだ。前の小学校が隕石で壊れて、一人だけ美星町に引っ越してきたと聞いたが、よく考えれば、小学校が壊れたこととハクアの引っ越しは関係がないように思える。

ドアを開けて、湿り気のある部屋に入る。広さはタツヤの部屋より少しあるが、小さなキッチン以外はたった一部屋だけ。床には布団がくちやくちやになっていた。家具らしいものは全然ない。テレビも電話も本棚もない。部屋の角には、服が入っている大きなプラスチックケースが三つ重ねて積まれていた。中の服は、赤やオレンジや黄色がやたら多い。

まずは、押入れの中からほりだらけの救急箱を探し出し、希が消毒液と脱脂綿でハクアの傷を手当てした。包帯はなかったのので、きれいなガーゼを当ててテープで止めた。ハクアはお礼を言い、布団をすみに押しつけた。顔色を見ると、痛みもだいぶん引いたようだ。「うーん。さてと、どこから話そうかな」

ハクアはキッチンの小さな冷蔵庫から、コーラの大きなペットボトルを取り出す。さっきのギガバーガーと言い、本当に体に悪そうなものしか口にしていない感じた。

希も、ずっと不思議そうに部屋を眺めていた。紙コップにコーラを注いで出されたが、一口つけただけで、すぐ置いてしまった。炭酸が苦手なのかもしれない。

「ハクちゃん、お母さんは働いてるの？」
「いないよ」

ハクアはさらつと言う。うちと同じだ、とタツヤは胸の内ですつたと言わなかった。

「あ、ごめんね……」

「いやいや気にしないで。お父さんもいないし」

「えっ?!」

タツヤと希は二人して目を丸くした。両親がいない人というのは同級生にはいない。希は少しショックを受けたのか、急に黙りこんでしまった。タツヤが続ける。

「いないって……?」

「失踪。行方不明って言ったほうがわかる?」

二人の口が一気に重くなる。これ以上何を聞いていいのかわからない。両親が行方不明というのが想像できない。

「……なんで?」

「わかんない」

「い、いつから?」

「生まれたときから」

ハクアの説明では、生まれて数ヶ月後に両親がいきなり行方不明になってしまったらしい。身寄りがなかったので、施設に入れられ、小学校四年までそこで過ごしたと言った。そのとき通っていたのは山都小学校の前の小学校だったらしい。山都小学校に転校したのは養父になりたいという人が名乗り出てきたからで、施設を出て、その人の家に住んだと言う。タツヤはつらいはずの身の上をカラッと話すハクアに対し、胸が苦しくなる。

「じゃあ、転校は二回してるんだね」

「まあね」

「養父の人はどこにいるの? 一緒に住んでないの?」

「会ったことないんだよね」

「えっ?!」

養父はアメリカに住んでいて、授業料も出してくれるし、家賃や食費も銀行口座に毎月送ってくれるが、顔は知らないという。仲介人という弁護士の人から、山都小学校に入る手続きをしてもらって、それで一年は過ごしたが、隕石落下事故で別の小学校にまた転校が必要になって、そうしたら、養父からは山都小学校跡から離れて暮らすように、と依頼があり、弁護士の人が選んだのはこの美星町だ

ったというのだ。

自分たちのこれまでと共通点がなさすぎるハクアの話に、タツヤと希はすっかり混乱状態だった。顔も見ることがない人から生活費をもらっている、というのが何となく不気味だった。ただ、別に悪いことではないのはわかる。もちろん、両親が行方不明というのは気が重い話だけれど。

「じゃあ、一人で住んでるんだ」

ふにやふにやになった紙コップを持ち、タツヤはコーラを飲み干す。ハクアはすぐおかわりを注いでくれたが、一杯で十分だった。

「うん。昔住んでた施設は、一緒に住んでる子どもが何人かいたけど、あんまり仲良くなかったんだ。ほんと、一人がいいよ」

「そうかなあ……」

「ねえ、ハクちゃん、なんで施設のみんなと仲良くなかったの？」

希がふいに口を開く。希は、仲間外れとかそういう言葉に敏感だった。女の子ならよく仲良しグループに分かれるが、希はあまりそれがあまり好きでなく、かといって、十和田霧枝のように誰に対してもどんどん口を出す性格でもない。ただ、自分から傷の手当をすると言いつつ、ハクアともっと仲良くなりたいと思っているのだと思う。

「性格が合わなかったんだよ」

ハクアは伸びをしながら答えた。希は悲しい顔をしたが、ハクアは気にしていない。

「あと、施設のごはんは、肉がいつも少なかったんだ。オカズハンターをしすぎたら、みんなから嫌われちゃった」

「オカズハンターって？」希がまじめに聞く。

「となりの子のお皿から、肉を盗る奥義だよ」

それはダメだろう。

タツヤが聞きたい話は、ハクアの身の上ではなかった。今日まで

に起こったおかしなことを、少しでもすっきりさせたかったのだ。
窓の外を見ると、日もだいたい暮れてきた。きれいな夕陽の色が、三人のこじんまり座る部屋へ斜めに射しこんでくる。

「寺野さん、話すって言った約束だよ」

ハクアは笑った。

「そんな恐い顔するなつて。ごまかしてるわけじゃないから」

「朱鳥くん……」

「ただね、これは二人だけの秘密にしてほしい」

うん、と真剣にうなづく。

「あたし、超能力を使えるんだ」

「えっ?!」

「うーん、どれから話そうかなあ」

「いや……」

「超能力はね、体に適性がある人となない人がいて、適性があつても普通は発動できないんだけど、隕石が近くに落ちてきたときに目覚めることがあるんだつて。あたしはそれが早くて、小学二年生のとき」

「ちよつと、ちよつと、待つて!」

タツヤは慌ててハクアの話を止めた。希も一緒に目を丸くしている。

「超能力つて?」

「だからいま言ったじゃん。体に適性がある人がいて」

「そうじゃなくつて! 本当に、超能力なんてあるの? あの、テレビ番組とかでたまに子どもを探すとかやつてるやつ?」

「うーん。テレビ見ないからわかんないけど、あたしは子どもは探せないよ」

「じゃあ、何ができるの? 透視とか? 瞬間移動とか?」

「そんなものはない。少なくとも、『メテオドロップ』にはない」
意味不明な言葉がまた飛び出した。超能力という言葉はイメージできる。スプーンを曲げたり、壁や封筒で隠されたものを当てたり、

行ったことがない場所を写真に映したり、そんな怪しげなテレビは見たことがある。だけど。

「メテオ……？」

「うん。さっき言った、体に超能力の適性がある人で、隕石のせいで目覚めた超能力を『メテオドロップ』って言うの。あたしはそれが使える人なの。どう、わかる？」

「……ごめん、まだわからない。隕石ってのは、山都小に落ちたやつ？」

「違うよ。山都小に隕石が落ちるずっと前から、あたしは超能力を使えたの。でも、隕石で目覚める超能力だから、隕石に近づくと体に変化があるみたいなの。それで、今回は引越すことになったんだと思う」

「むずかしいな……」

希も一緒にうんうんと同調した。

「じゃあ、超能力の話をするよ。あたしの使える能力は、『レンタルフォース』っていうんだ。これは、人の力を借りて自分の力にプラスするものなんだ。すごいでしょ？」

「えっと、人の力を借りる……？」

「うん。実際にやってみるよ」

そう言って、ハクアはいきなりタツヤの横に迫ってきて、耳をつかんだ。熱い指先が耳たぶに触れて、心臓が高鳴った。女の子に耳を触られるなんて生まれて初めてだ。

「借りるね」

すると世界がいきなり無音になった。

目の前で、ハクアが何か話しかけてくるが、ぼそぼそと低い音しか聞こえない。ハクアが拍手をしたり、手でテーブルを叩いたりしたが、音がまったく耳に届かない。急に孤独の恐さが一気にこみあげてきて、背筋がゾクゾクと震えた。「あ、あ、あ」と言っただけが、自分の声が、自分の耳に聞こえない。これは、これはどうなるんだ！　もし一生このままだったら　！

希のほうを向くと、ハクアと希で何か話しているようだが、やはり聞こえない。すると、希がピンクのポシェットから携帯電話を取り出して、タツヤの顔を写真に撮った。何をされているのかわからない。頭が混乱して、目頭も熱くなっていた。

そして、横からいきなりまた耳を触られた。驚いてハクアのほうに振り返る。

「どう？」

音が戻った。

「聞こえるでしょ？」

もちろん聞こえるが、ハクアの顔が近くて思わず後ずさった。タツヤはすっぴかりのどがカラカラになっていて、仕方なく気の抜けたコーラを流しこむ。

「要はこんな感じなんだ」

「……ごめん、もう少しちゃんと説明して」

「いま、レンタルフォースの能力を使って、プレパ　ごめん。えっと、たつつの聴力を借りたの。だから、たつつんは音が全然聞こえなくなつて、あたしはたつつんから借りた分の聴力がアップしたんだ。それで、さつきちよつと遠い踏切の音まで聞こえたけど、のぞみんは聞こえてないよね？」

ハクアは説明がいつもマイペースだ。

「えっと……うん、踏切の音は聞こえてないよ」

希がこわごわと答える。あだ名は、タツヤはたつつん、希はのぞみんになつたようだ。

「僕も、いきなり音が聞こえなくなつた」

「この能力は、右手が発動で、左手が解除なの。だから、右手で触つたら音が聞こえなくなつて、左手で触つたら元に戻るんだ」

「……でも、左耳を触られただけで両方が聞こえなくなつたよ」

「借りるのは『力』なの。両方の耳に触らなくても聴力を借りられるんだ」

人から力を借りる超能力。何だか信じられない。だが、タツヤは

実際に何も聞こえない世界と、元通りの世界の両方をこの短い時間で体験してしまった。これはマジックなんかではない。

ハクアは自分のコーラを飲み干し、四杯目か五杯目かを紙コップになみなみと注ぐ。そう言えば、ギガバーガーセットのドリンクもコーラだった気がする。

タツヤは深いため息をついた。

「 やつと意味がわかった」

「 たつつんは、ほんと飲みこみがいいね！」

実体験すれば、そんなに難しい話ではないとタツヤは感じた。

「 寺野さんが使える超能力はその『レンタルフォース』だけ？」

「 うん、そう」

「 そうか じゃあ、理科のテストも、視力検査もこれを使っただね？ それで、僕はすごくショックを受けて、月本さんは保健室に運ばれたんだ」

ハクアの顔に浮かんでいた笑みが消えた。

また、三人の間に沈黙が生まれる。

「 あ、でも……」

希が何か言おうとしたが、タツヤはさえぎった。

「 僕のテストのことはもういいよ。だけど、月本さんにはちゃんと説明して、謝ってほしい。それと、もし月本さんが許してくれたって、友達の視力を勝手に取ってしまう人と、僕は友達になれない」

ハクアはしおれた顔で、一部始終を素直に打ち明けた。まず、理科のテストの件はやはりタツヤの知力を一時的に借りたのだ。テスト直前にタツヤの後頭部に右手で触って、「借りる」という発動条件になる言葉を言い、テストを解いた。プレパレートと答える問題がわからなかったのは、実はタツヤがわからなかったということだ。そして視力検査については、ハクアは最近目が悪くなっていたが、メガネやコンタクトをつけるのがすごく嫌で、どうしようかと迷っていた。そうしたら、すぐ前の希が視力2・0で、ついやってしま

ったというのだ。希のそばに行つて、まぶたを触つて視力を借りた。それで希の視力2・0がプラスされた。希が保健室に運ばれたので、しまったと思つて、終わつてから保健室に行くクラスメイトについて行き、希をベッドから起こすとき、左手でまぶたを触つて元に戻したのだ。

「たつつん、のぞみん、本当にごめんなさい」

ハクアは深々と頭を下げた。

「わたしはもういいよ。すぐ治つたんだし」

希はやさしすぎる。いきなり視力を奪われて、目の前が異常な世界になる恐さを体験したはずだ。タツヤも聴力を奪われたとき、音のない世界に突然放り出された。まだ目の前に二人がいて、しかもハクアに何かされたとかわかつていたから良かったが、保健室に運ばれてベッドにいたときの希は、もっと大きなショックがあつただろうとタツヤは思う。しかも、メガネやコンタクトが嫌だという自分勝手な理由なのだ。それを簡単に許す希は、本当にやさしすぎる。

タツヤは真相を聞いて、再び深いため息をつく。

「不良とのケンカも、その能力を使ったの？」

「うん、そうだよ。あれは、連れてかれる人を何とか助けようと思つたから……」

「どうやって？」

「あいつらの足に触つて、脚力を取つたの。それだと立つてられないから、逃がすのには一番いいんだよ」

「そっか、そういうことか」

「あと、脚力を借りると、あたしの脚力もアップするから、あのときあいつら五人分のキック力がプラスされてたの。最後の金髪のやつは、足を触らせないようにカバンを使つたり蹴つたりしてきたから、足を思いきり蹴り返してやつたんだ！」

高校生五人分の脚力があれば、かなり強力なキックになる。金髪が振り回したカバンを蹴り飛ばしたこともわかるし、金髪とハクアがキックを打ち合ったとき、あれは一对五だったというわけだ。

「あつ！　なあ、解除は左手で触るんだろ？　じゃあ、あの高校生たちはあのままずっと起き上がれないの？」

「ううん。ずっと借りてるのは無理で、だいたい三十分くらいで勝手に戻っちゃうんだ。あいつらはもう歩けると思うよ」

「そうなんだ」

だが、一時的な効果だけれど、このハクアの超能力はとんでもない凶器だと思った。もし一対一でも、最初に相手の視力や脚力をなくしてしまえば、相手は一気に弱くなる。脚力がプラスになれば攻撃するのも逃げるのも思い通りだ。そして、そんな超能力を持った人が、普通にここにいるということがかなり恐くなった。もしかして、これは警察に言ったほうが

「すごかったよね！」

「えっ？」

「ハクちゃんがあの中学生を助けたときだよ。朱鳥くんもそう思ったでしょ？」

希が強引にハクアの好感度を持ち上げようとしている。あの勇気と行動力はすごいと思った。タツヤもそれはわかっていた。カツアゲされたお金もちゃんと取り返した。ハクアが誰よりも一生懸命で、すぐ頼りになった。それもわかっていた。だが、倒した不良に対し、追い打ちで視力まで奪おうとしたハクアの性格の恐さも一緒に思い出す。それを見たのはタツヤだけだ。

「ハクちゃんの能力って、絶対にもっと人の役に立つと思うんだよね」

あれだけ危険な能力の話聞いて、希は何も恐れずハクアの両手をぎゅっと握る。

「えっ……そうかな？」

ハクアもすぐ調子に乗せられている。あれほど深々と同級生二人に頭を下げた反省の心はもうどこかへ消えたのだろうか。

「うん。ほんと、ハクちゃんはすごいと思うよ。重いものとか運べそうだし、高いところのものとか取れそうだし、固いビンのふたと

かも取れちゃうかも！」

希の明るい笑顔を横で見ているのがつらい。タツヤは聴力を奪われていたときの恐怖が頭にこびりついていた。あんな恐ろしい感覚は忘れようとも簡単に忘れられない。

「でも、そのぶん、誰かの力はなくなるんだよ。レンタルフォースって、そういうものなんじゃないの？」

ハクアは黙っている。結局その通りなのだ。静まった時間が、重く、胸に積み重なる。

だが、希は珍しくタツヤの言葉に対し、首を横に振った。

「でもね、朱鳥くん。ちゃんと返せるんだから大丈夫だよ。ハクちゃんもさつき反省して謝ったんだし、それでも友達にまだなれないっていうのは悲しいよ。友達なら、ハクちゃんがこの力をうまく世の中に役立てられるように応援するものなんじゃないの？」

「だけど……」

タツヤはさつき警察に通報することまで考えてしまった。希の言葉はよくわかる。ときどき、それは何も言い返せないほどタツヤの弱い部分に真正面から入ってくるのだ。どうして希の言葉はこんなに簡単で、やさしく、強いのか。

「ハクちゃんの力はみんなに教えられないけれど、今日から、わたしたちが美星小のハクちゃん応援団だよ」

ハクアはじつとうつむいている。少し　涙ぐんでいるのかもしれない。

「隕石って、ほんとに奇跡みたいな確率で地球に降ってくるんだよ。『天文係』のわたしたちがハクちゃんの応援団になるのも、奇跡みたいなものだよね」

希はまっすぐな瞳で、タツヤの手をぎゅっと強く握ってくる。手のひらが熱く汗ばんでいる。隕石の確率とかはたぶんデタラメだ。でも、希に手を握られるともうタツヤは何も話せなくなるのだ。

タツヤは、目を赤くはらしたハクアの顔を見た。小さな肩を震わせ、鼻をすすっている。もしかしたら、これまでの施設や小学校で

は、この能力を人に役立てようなんて言う友達はいなかったのかも
しれない。だったら、これだけハクアが明るく腹を割って話してく
れたのも、自分と希を信じようという気持ちなんじゃないか、とタ
ツヤは感じた。

「朱鳥くんがわたしのことを心配してくれるのはうれしいの。でも
ね、わたしはぜんぜん大丈夫。あれくらい宇宙サイズで考えたら小
さいことだよ！」

まあ、宇宙サイズで、考えたら……。

そして、とどめを刺すように、希が上目づかいにタツヤの顔を覗
いてくる。

「こんなをお願いしてもダメ？」

「いや……」

「ハクちゃんとわたしはもう友達なんだよ。朱鳥くんもちゃんと言
ってね」

ここで謝るタイミングをなくしてはダメだ　転校してすぐ『友
達にはなれない』なんて言われたら、自分ならどうしようもなく落
ちこんでしまうはずだ。

「ごめん」

「もう。ちがうよ、ハクちゃんに言って」

希にしかられて、ハクアと向き合う。どちらも恥ずかしくて顔が
真っ赤だった。

「ほんととはもう怒ってないんだ。ハクアの秘密は守るよ。あと、困
ったときは僕も力を貸すよ。もう、僕は『たつつん』だから」

言葉にして、心のつかえがすっと和らいだ。

「ありがと。良かったね、ハクちゃん」

「うんっ！ たつつん、ありゲフフッ」

炭酸のゲップが混ざって大事なところが台無しだった。

希の習い事の時間が迫っていたので、二人は帰ることにした。ハ

クアはすつきりした顔で、マンションの前まで見送りに来てくれた。歩き出すと、ハクアは「あつ、大事なことを忘れてた」と希を呼び止めて、タツヤに携帯の写真を見せるよう言った。

「携帯の？」

「うん。さっき、レンタルフォースの実験しているときに撮ったやつ」

「ああ……なんで僕の顔なんか」

「ん？ ほら。かわいいでしょ」

希が、携帯のデータフォルダに入れたタツヤの顔写真を見せる。

そこには、おでこに桜の花びら　というよりは、犬か猫の肉球みたいなアザができていた。ハクアが倒した不良たちのおでこにあったものと似ている気がする。ハクアが説明をする。

「レンタルフォースで力を借りているとき、相手のおでこに猫の手つぽい形のアザができるんだよ。で、力を返すと消えるんだ。かわいいだろ？」

これが、霧枝が希のおでこで目撃した花びらのアザとか、タツヤが不良たちのおでこに見たアザのことか。

「ハクちゃんは携帯持ってないんだよね。じゃ、あとで朱鳥くんにも送るね」

「いつ、要らねーよ！ 早く削除しろって！」

「ダメ。ハクちゃんとの友達記念だよ」

希は夕陽に照らされた温かい笑顔で、うれしそうに携帯をポシェットにしまった。

第2話 『お泊まり会とコーンポタージュ』 1 / 3

不思議な気分だった。朱鳥タツヤは部屋のベッドに寝転がり、ぼんやりとしていた。まだ胸が少しドキドキしている。自分が作った晩ご飯の味もよく覚えていない。ただ窓の外を眺めると、隕石が落ちたあの夜みたいに、今夜も星空がきれいだった。

あたし、超能力が使えるんだ。

寺野ハクアは明るい顔で打ち明けた。他人の力を借りられる超能力『レンタルフォース』。それはすごい。驚いた。本当にすごい。だけど、使い方を想像するとやっぱり恐かった。聴力を取られて何も聞こえなくなったあの感覚を思い出す。自分が自分でなくなったようなパニック状態になった。

ハクアはマンションの小さな部屋に一人きり。両親もいなくて、兄弟もいなくて、養父という人に会ったこともないと言っていた。力を借りる他人が、ハクアのまわりには同級生くらいしかないのだ。冷蔵庫にはコーラしか入ってなくて、ちゃんとしたご飯も食べていない感じだった。

ハクちゃんの能力って、絶対にもっと人の役に立つと思うんだよね。

月本希の笑顔が浮かんでくる。タツヤはあるとき希の勢いに負けてしまったが、本当にそうなのかな、と少し冷めた頭で思い直す。ハクアの能力があつたら役立つことって……と考えてみたが、あまり思いつかなかった。それに、能力を秘密にしたまま世の中に役立てるなんて本当にできるのかな、と疑問に思う。

気分転換をしようと、枕もとのマンガに手を伸ばした。ちょうど主人公が仲間のパワーを集めて最強クラスの魔法を放ち、魔剣士を倒すクライマックスだった。だが、タツヤにとっては、あの不良高校生たちをすべて倒したハクアのほうがずっと迫力があつた。不良たちが道に倒れる音、カバンを蹴り返す大きな衝撃音、キックが思

いきりぶつかった生々しい音、全部はつきり記憶に残っている。

ケンカで役に立ったって意味がない。ケンカなんて無いほうがいいに決まっている。タツヤはなぜか少し不安な気分になり、マンガを途中で閉じた。ため息が出る。

携帯を取り、希に何となくメールを送ったら、『起きてるよ 眠れないの どうしたの?』という返事がすぐ来た。タツヤは、ハクアの超能力のことをどう思っているか希に聞きたかったし、たぶん希が眠れない理由も同じだと思ったけれど、メールに書けなかった。結局、返信は『星を見てたらメールしたくなった ごめん おやすみ』と書いて送った。タツヤは自分でも意味が分からなかった。でも、希から『なんかうれしいかも おやすみ』と返ってきて、そのまま部屋の電気を落とし、もう少しだけ星空を眺めて眠った。

次の朝、教室に入ると、ハクアはいつもと変わらず熱帯系の派手な色のＴシャツを着て、いつも変わらない感じで話しかけてきた。あんなすごいケンカをして、ひざをケガして、超能力の秘密を話したのに、不思議なくらい普通の笑顔であいさつをしてきた。タツヤより早く教室に来ていた希も、タツヤの姿を見て二人のそばに来た。胸に大きな赤いリボンのついたブラウスを着ている。

「朱鳥くん、ハクちゃん、おはよう」

「おはよう」

「ウィース！ 昨日はおつかれさん！」

ハクアはなぜかいつもチンピラみたいな軽いノリのあいさつだった。希がクスクス笑う。

「ハクちゃん、ひざは大丈夫？ もう痛くない？」

黒いショートパンツから日焼けした足がむき出しで、ひざはバンソウコウが何枚も適当に貼られていた。

「これくらい余裕、余裕」

「ハクちゃんは本当に元気だね」

「うん、風の子だからね」

それは冬に使う言葉だと思ったが、タツヤは何となく黙っていた。ハクアは唇をとがらせて机の下でタツヤのイスをコツコツと蹴る。

「どうした？ タツヤは暗いな」

「く、暗くはないよ」

「そっか。ならいいや。よし、これは二人におわびのシルシだ」

そう言ってハクアは赤いランドセルからガサガサと音を立て、コンビニの白いビニール袋を出した。そして机の上に、うまい棒を何本も取り出した。なぜかサラミ味ばかりだ。

「十本買った。二人に好きなだけもらってほしい」

「えっ、ハクちゃん……ダメだよ」

希は小声になり、慌ててうまい棒をビニール袋に戻した。近くの席の同級生も少し物音に気づいたが、幸い、学校委員の十和田霧枝に大声で告げ口する人はいなかった。

「いや、そんな遠慮するなって。サラミ味はダメか？」

タツヤは首を横に振る。パンパンにふくらみごっこつしたビニール袋をランドセルに突っこんだ。急いでやったので、うまい棒が少し割れたかもしれない。

「違うよ、ハクア。学校にお菓子持ってきたらダメなんだよ」

「えっ、マジで?!」

「当たり前だよ。前の小学校は良かったの？」

「いや、ダメだった」

「じゃあ、ダメじゃん!」

晴海先生が教室に入ってきて、日直が起立の号令をかけ、チャイムが鳴り、希は小走りに席へ戻った。

ハクアが超能力が使えると分かったからと言って、毎日おかしいことが起きるわけでもなく、ハクアも授業にだんだん追いついてきたみたいで、何事もなく普通に終わった。放課後、あらためて学校帰りに公園のベンチで、二人はハクアからうまい棒を配られた。

希は辛いスナックはちよつと苦手と言って、二本しか取らなかった。八本もタツヤがもらうことになった。やはり全部サラミ味だった。希がうまい棒をそのままランドセルに入れようとしたので、タツヤは希にビニール袋をあげた。

「朱鳥くんはやさしいね」

希にまっすぐ微笑まれると恥ずかしかったが、いま食べる用を二本残して、あとは全部ランドセルの平べったいポケットに並べて入れた。ハクアがじつと見ている。

「ハクアも食べるよね？」一本渡す。

「もちろんだ！ 十円で食べられるサラミなんて！」

サラミじゃないと思うけれど、タツヤは静かに袋を破ってかじった。それより、タツヤにとって、女の子を下の名前で呼び捨てるのはハクアだけで、たった一日で言い慣れてしまったことが不思議だ。何だか男友達みたいだからかな、とタツヤは感じる。

「ハクア」

「たつつん、今日は顔が暗いな。サラミ味じゃないのが良かったか？」

「違うよ。……ねえ、ハクアは 両親がいなくて寂しくないの？」
タツヤはストレートに聞いた。ハクアは顔色を変えずにうまい棒にかぶりつく。

「いないものは仕方ない」

「ハクちゃん……」希が悲しい顔をする。

「いないものは仕方ない」

ハクアは二度くり返し言った。

「実は、うちもお母さんがいないんだ」

タツヤは告白する。希が心配げな目で何か口を挟みかけたが、結局黙ったままだった。希は両親、おじいさん、おばあさんと一緒に暮らしている。タツヤは運動会や町内会の行事で見てうらやましいと思ったことがある。だから、ハクアのことを考えると、どうしても超能力より一人暮らしであることに気がいつてしまうのだ。

ハクアはうまい棒のしつぽを噛み砕いて完食した。

「お母さんは、死んだのか？」

ずしんと重い言葉だった。うまい棒を食べるタツヤの口が止まる。
「うん、二年前に病気でね……」

入院していた病院で死んだ日のことを今でもよく覚えている。あのとき、妹を連れて初めてタクシーに乗った。父親の廉太郎が病院に駆けつけたのはその少し後だった。

いつも明るい母親が大好きで、葬式の後もタツヤはずっとめそめそと泣いてばかりいたが、あんまり泣いたらお父さんが悲しむよ、と担任の先生に言ってもらった。クラスの中には離婚して片親の家庭である子も何人か知っていた。だけど、自分の母親がいなくなるなんてちつとも思っていなかったのだ。

「そっか、暗い理由はそれなんだな」

ハクアは勝手にタツヤのランドセルに手を伸ばし、うまい棒をもう一本抜き取った。何も言う気は起きなかった。

「たつつんは、ほんとにやさしいな。あたしのことも心配してくれてうれしいよ」

「うん……でも、ハクアは明るいよね」

「まあね。落ちこむとご飯おいしくないし。でも、あたしもあんな力より、ちゃんと親がいてくれたらなあ、って思うんだー」

「……ハクちゃん」

「けどさ、いないものは仕方ないし、あるものは仕方ない。よく分かんないけど、たまたまそうなったんだよ。でも、おいしいものを食べたい、仲のいい友達を作りたい、好きな子とおしゃべりしたい、とかはみんなと同じでしょ」

「うん」

タツヤの心配をよそに、ハクアはにつこりと笑った。

「弱いなら強くなる、暗いなら明るくする、怒ったらぶつかる、お腹が空いたらご飯を食べる。それで大丈夫なんだよ」

「そうだね」

タツヤも少しすつきりした笑顔を返した。ハクアの目を見れば、少しも悩んでいないし、美星小でも楽しい毎日を送っているように感じる。

「たつつん、だからさ、ちょっとお願いがあるんだ」

「うん、なに？」

「今度のぞみんと一緒に、たつつんのうちに泊まりに行っていていいよね？」

「えっ?!」

タツヤもいきなりで驚いたが、希もきよとした顔をしている。そんなことは全然話していなかったみたいだ。タツヤは家に同級生の女の子を泊めたことは今までない。ハクアは本当に強引な性格で、少し戸惑ってしまうが不思議と嫌な感じはなかった。

ハクアは得意げな顔で、タツヤの目の奥をぐいつと覗きこむ。

「ねっ、寂しければ遊びに行けばいいんだよ」

「……うん、じゃあ、土曜日とかに来てよ。月本さんは、習い事あったっけ？」

「ううん、土曜の夜はないよ。じゃあ、お母さんに言っとくね。うわあ、すっごい楽しみ」

希も当然タツヤの家に泊まるのはこれが初めてだ。

「ハイ、決まり!」

ハクアはうれしそうに声を上げ、うまい棒の粉がついた指先をペロリとなめた。

「あー、なんか、やっぱり本物のサラミが食べたくなってきたよね! ちょっと買いに行かない？」

「えっ? いや、そうでもないけど……コンビニなら一緒に行くよ」
そして、ハクアがコンビニのおつまみコーナーで、ベビーサラミのお徳用パックを買うのに付き合った。ハクアは店を出て早速パックを開け、二三個食べはじめた。サラミの臭いが鼻まで迫ってくる。さらに、希も一個、タツヤも五個渡されたが、これ以上ビニール袋なしでランドセルに入れると、本当に中が肉臭くなりそうだったの

で、ハクアのコンビ二袋をもらうことにした。

「じゃあまた明日ね！ たつつん、のぞみん」

ハクアは携帯も家の電話もないから話すのはまた明日だ。さすがに夕焼けのなか、サラミのパックを裸で持ちながら帰るハクアの後姿を見たら、超能力のことを抜きにしても、本当に変わった友達ができたとタツヤは感じた。希は習い事があるので、少し急ぎ足で帰って行った。

その晩タツヤは、父親の廉太郎に土曜日のお泊まり会の許可をもらった。五個のベビーサラミは廉太郎のビールのつまみになった。妹の由果も、希には何度か会ったことがあるし、ハクアのことほすごい興味があつたみたいで、お泊まり会をすごく喜んでくれた。タツヤは、作る料理の量が増えて大変だなと思ったが、何となく心が晴れた気がして、キッチンのカレンダーに赤ペンで花丸マークを描いた。

土曜日の六時、空のまだ明るい時間、タツヤの家から近いスーパーの前で待ち合わせて、ジュースやお菓子を買って行った。ハクアは唐辛子みたいに一面真っ赤なタンクトップと黒いスポーツバッグを担ぎ、希は花柄のワンピースを着て、編みカゴのトートバッグをさげていた。

スーパーで、ハクアは一晩お世話になるからと言ってソーセージの袋を買ったが、たぶん自分でかなり食べるだろうな、とタツヤは横目で見ていた。ギガバーガーとかサラミとかソーセージとか、ハクアは本当に肉が大好きで、ちゃんと野菜を食べてるのか心配になるくらいだ。ただまあ、タツヤは今夜の夕食はハンバーグを作る予定だった。ちなみに、希は牛乳プリンを二個買った。由果もこれが大好きなのだ。

廉太郎は駅近くのスポーツジムのインストラクターをしていて、土日はたいてい出勤していた。今日は夜八時くらいに帰るので先に

食べていいと聞いている。

タツヤの家は、中古の二階建てを五年前にローンで買ったものだ。駅からは遠くてバスが必要だが、タツヤは不便に思ったことはない。廉太郎はスポーツジムの店長をしていてまああの収入もあり、また母親の遺したお金で普通の生活は十分できていた。

家に着くと、由果がリビングで寝転びテレビを見ていた。水玉模様の靴下を上に向け、パタパタとさせている。

「うわっ、先客がいた！」

ハクアが驚いて目を丸くする。

「いや、妹だよ。顔似てるだろ？」

「あっ、そうなんだ。いくつ？ 名前は？」

タツヤは由果にテレビを止めてあいさつするよう言った。

「朱鳥由果です。三年生です。あの……ハクアさんですか？」

「おおっ、正解！ よろしくね！ たつつんの二個下か！。かわいいなあ、ゆかたん」

「へっ？ あ、あの」

由果のあだ名は一瞬でゆかたんになったようだ。由果はハクアの勢いに少し気後れしているが、無理もない。また希も、由果に会うのは一ヶ月ぶりくらいで、由果の背は大して変わっていないのに大きく変わったと言って喜ばせている。

タツヤは二人をリビングに残して、ひとりキッチンに入った。ハンバーグの種は昼間に作っており、炊飯器もタイマーで炊いてあり、あとはサラダを作ったり、ハンバーグを焼いたりするだけだった。換気扇を回し、紙パックのコーンポタージュを鍋に注いで火にかける。タツヤはクラスの中でもかなり背が高いほうで、調理台の高さも平気だった。

ハクアが由果のそばに座るなり、由果の悲鳴がリビングに響いた。いきなりなれなく由果のほっぺをぷにぷにして遊びはじめたのだ。希は、キッチンでタツヤを手伝おうか迷ったが、ハクアと由果を放っておけなくて、二人の近くにすっと座った。

「ハクちゃん、無茶しないでね。由果ちゃん、大丈夫？」

「うん……うん」

由果はまともにしゃべれそうにないが、泣きそうな顔はしていない。

「あれ？ のぞみんはゆかたんに会うのは初めてじゃないんだっけ？」

ハクアはほつぺをいじる手を少しゆるめる。

「うん、今日が三回目だよ。お泊まりは初めてだけど」

「そっか。なに？ 宿題とか？」

「ううん、先月、『天文新聞』をここで作ったの」

「天文新聞？」

「クラスの廊下に貼る、星のことを書いた新聞だよ。暮田先生にお願いして『天文係』を作ってもらって、朱鳥くんと一緒に新聞を書いてるんだ」

「へー。二人で？」

ハクアは由果のほつぺに飽きたみたいで、由果の頭をくりくり撫でていた。

「……そうだよ？」

希は少し引っこんだ声で返す。

「そっか、大変そうだね。なら、あの隕石のことも書くの？」

二週間前、山都小に落ちて校舎を壊してしまった隕石のことだ。

ただ、ハクアの話では隕石の落下現場には普通の人は入れないらしい。それに、山都小は車でないと行くのが難しい場所だった。

「隕石って？」

由果が希に聞く。

「ほら、流星のことだよ」

「あー。お兄ちゃんと希おねえちゃんが見に行ったやつ？」

希は顔を赤くする。

「ううん、見に行ったんじゃないくて、たまたま天体観測に行ったら運良く見ただけだよ」

ハクアは赤くなった希の顔を面白そうに横から覗きこむ。

「へー、二人は仲いいんだなあ。チューとかした？」

「しっ、しないよ！ 由果ちゃんの前で何言ってるの？」

「ハハハッ、あわてない、あわてない。赤くなつたのぞみんもかわいいねー」

「全然そんなじゃないし！ 天文係の活動なのっ！」

希は本気で怒っていたが、キッチンで野菜を洗ったり切ったりしているタツヤの耳に入らぬように、小声でハクアに返した。ハクアはちよつと希をつついただけで、もう天文新聞にも隕石にも興味がなくなつたようで、由果のすべすべした肌を触ろうとして、逃げ出す由果を楽しげに追いかけていた。

やがて、ハンバーグの焼ける音といい臭いがしてくると、ハクアはぐつたりした由果を放置してキッチンのカウンターにしがみついた。希も立ち、ハクアの横に並ぶ。

「やった！ ハンバーグだあ！ たつつん、すごいなあ。超いい臭い」

「ほんとすごいね。一人で作つたの？」

タツヤは肉を裏返すタイミングをじっと待っている。

「ハンバーグはだいぶうまくなつたよ。最初は何度か失敗したけどね」

「なあ、料理っていつからしてるの？」

カウンター越しのハクアの目が異様にギラギラしている。やっばりハンバーグで正解だったとタツヤは思った。

「二年前だよ」

「ん それって、お母さんが死んだときから？」

「そうだよ」

今でも覚えている。二年前、葬式が終わってから一ヶ月間くらい、毎日タツヤも由果もコンビニの弁当やスーパーの惣菜だった。廉太郎はまったく料理ができなくて、しかもスポーツジムの入会キャン

ペーンの時期で夜遅くまで働いていた。近くに親戚もいなくて、夕食はいつも兄妹二人きりだった。

母、貴志子は本を出すほどの有名な料理家だった。そのおいしい料理を毎日食べていたから、コンビ二弁当やスーパーの総菜に、由果は一週間と我慢ができず、もう何も食べたくないと言いつつ出た。タツヤは怒る気力もなく困り果てて、学校でいきなり泣き出してしまった。それをなくさめ励ましてくれたのは、希だった。希とは二年前同じクラスで、去年は別のクラスになり、今年また同じクラスになった仲なのだ。

二年前、母親をなくして失意のどん底にあつたとき、希は大切な一言をくれた。

じゃあ、朱鳥くんが料理を作ればいいんだよ。

そんなもの、うまくいかない、全然おいしくない、とタツヤは首を横に振った。だが、希はまるで動じない強い口調でタツヤにこう言った。

違うよ。お兄ちゃんが作ったものなら、どんなに下手でも由果ちゃんは食べれると思うよ！

母親をなくした寂しさを押しのけようと、タツヤは必死になって料理を覚えた。もちろん教科書は母親が出した本だ。野菜の切り方はそれで覚えた。最初は調理台の高さもつらくて、廉太郎に踏み台を作ってもらった。おかずも、野菜炒め、焼きそば、目玉焼き、わかめの味噌汁、その四つくらいしかできなかった。ニンジンが生焼けだったり、玉子をこがしたり、味が薄かったり濃かったりと失敗もしたが、由果はまずくても文句を言わず食べてくれた。

それでも、コンロや包丁の使い方に慣れれば料理は楽しくなり、味つけもうまくなり、レパートリーもだんだん増えていった。由果も明るくなつたし、タツヤ自身も涙を流さなくなった。だから、希にはすごく感謝している。

二年経った今では、ハンバーグも上手に作れるようになった。い

い焼き色になって、フライ返してハンバーグを四つとも裏返す。今日もいい調子だ。

「あたしさ」

ハクアがカウンターで鼻を鳴らして肉の臭いをうれしそうに吸いこんでいる。

「ハンバーグがすつごくうまく作れるダンナが欲しいんだよね」

「えっ?!」

タツヤと希が同時に変な声を上げる。

「なんだよ、そんなに驚くなよ。ただの夢だよ。別にいいだろ?」

「……まあね」

タツヤはフライ返しで押して肉の焼き具合をチェックした。香ばしい肉汁がいい音を立てて弾ける。

「でも、結婚する人ってもっとちゃんと選んだほうがいいと思うよ?」

希は何となくじつくり決めそうな気がするな、とタツヤは思った。
「いいんだよ、とにかくハンバーグがうまい人が一番なの! なあ、ゆかたんはどうだ?」

ハクアはいきなり由果に話を振った。

「由果は……やさしい人がいい」

「ハハハッ、じゃあ、あたしみたいな性格はアウトだな! ちえー」

「ちえー、じゃねーよ」

タツヤは普段のようにひとり黙々と料理を作るより、たまにこうしてしゃべりながら作るのも楽しいな、と感じた。

手作りハンバーグ、サラダ、コーンポタージュとひと通り食べて、予想通り、ハクアだけはハンバーグをさらに三個もおかわりして由果をかなり驚かせていたけれど、さすがにタツヤが「もう打ち止め!」と言ったときに、ちょうど廉太郎が帰ってきた。八時より少し前だった。

廉太郎はリビングに顔を見せると、希やハクアのあいさつもそこに、「タツヤが女の子をこんな家に呼ぶようになったか！」と意味不明な笑い声を上げ、汗臭いからと言ってすぐに風呂場に向かった。タツヤは少し顔を赤くして、思わず後ろを追いかけた。

「一人は強引に来たんだよ」

廉太郎の引き締まった分厚い背中にそうつぶやくと、廉太郎は笑って振り向いた。

「何にしても、お前はすっかり明るくなって頼もしいよ」

急に変なほめ方をするから、どう返していいか分からなくて廊下で見送っていると、いつの間にかハクアが横にいた。

「お父さん、すごい筋肉だな」

「えっ、ああ」

さっきの、一人は強引に来たと言ったのを聞かれたか少し心配になった。

「スポーツジムのインストラクターなんだ」

「そっか。じゃあ、肉もたくさん食べるかな」

何でハクアが肉にこだわるのかよく分からないが、確かに廉太郎も結構食べる。

「でも、ハクアのほうが絶対に食べる量は多いよ」

「だって、あたしは成長期だもん」

それは違うと思うけれど。

廉太郎は、風呂から上がってきて、ビールを飲みながら、ハクアが買ってきた粗挽きソーセージを喜んで食べた。ソーセージは、廉太郎のハンバーグを焼く前にさっと焼いたのだが、廉太郎とハクアの二人が競うように食べると、あっという間に全部なくなってしまう。ハクアはあれだけハンバーグを食べたのにまだソーセージが胃袋に入るのだ。どうなっているのだろう。

希と廉太郎は初めてでなかったが、ハクアは初めてで、山都小学校からの転校生と言うと、少しだけ隕石の話題になった。タツヤは

横で聞いていて、超能力のことが頭をかすめたが、ハクアもさすがにあれからいきなり使うことはなく、反省したのだと思える。

由果が牛乳プリンを欲しがったので、希も食べると言って、希が買ってくれたものを冷蔵庫から出して渡した。テーブルに戻ると、廉太郎のごつい腕や胸板を、ハクアが面白そうにじろじろ見ていた。「寺野さんは、今の学校にもう慣れた？」

「バツチリ楽しいです！」

「そーか、そーか。タツヤもよくうちで寺野さんの話するんだよね」いきなり廉太郎は変なことを言う。タツヤは気まずい顔で口ごもった。

「えっ、ああ……うん」

ハクアの超能力のことは家では話していないが、そう思われてしまっかな、と気になった。ただ、ハクアはそんなふうに考えていない様子だった。

「たつつんは席が近いし、頭いいから、勉強も教えてもらってます」

「タツヤ、お前、女の子にやさしい男だな！ いいぞ！」

「やさしいとか……そういうんじゃないよ」

廉太郎とハクアの会話は、タツヤはすぐ居心地が悪い。前に廉太郎と希が話していたときのほうがずっと気が楽だった。ちらっと希の顔を見る。希はテーブルにほおづえをついて話を聞いていたようだ。タツヤの視線にすぐ気づき、にこつと微笑んだ。希の横にいる由果もなぜか一緒に兄を見て、にこつと微笑む。二人の前にはそろって牛乳プリンの空のカップが並んでいた。

廉太郎の食事が終わり、リビングでプロ野球中継を見はじめたので、先に、由果と希とハクアの三人が一緒に風呂に入ることになった。タツヤは皿洗いをして、三人が出てくるまで廉太郎の横でコーラを飲みながら、ひと休みした。廉太郎はプロ野球を見ているときはほとんどしゃべらないので、タツヤもそばで静かに座っていた。

希は、よく日焼けしたハクアの裸をじつと見ていた。ハクアは今日みたいなタンクトップをよく着ているので、肩まできれいに焼けている。希はあまり日焼けしない体質で、母親から肌がきれいといほめてもらうのだが、少し日焼けしただけで皮がめくれてすごくヒリヒリするのが苦手だった。何となく胸のふくらみを見比べてみると、希と同じくらいでまだ小さかった。

一番にハクアが湯船に飛びこみ、ウーンと手足を伸ばす。「うはあ、広い！ 広い！」と大声ではしゃぎながら、由果に頭からお湯をかけまくっていた。由果は頭からびしょびしょに濡れ、すっかり小さくなっている。ハクアは前に施設で暮らしていたと言ったが、やっぱりこんな感じだったのかな、と希は思う。

希は、由果を後ろから抱くようにくつついて座った。ひとりっ子だから、由果が本当に妹みたいに思えてくる。

「由果ちゃん、髪洗ってあげようか？」

「ほんと？」

「うん、いいよ。このシャンプーでいいの？」

「うん、それ」

かわいいウサギの絵が書いてあるシャンプーを取り、手で泡立てて由果の髪をやさしく洗った。ハクアは鼻歌を歌いながら、アヒルのおもちやで由果の体にピュンピュンお湯を飛ばしている。由果が身をくねらせ、くすぐったがったので、希が注意すると、ハクアはまた「ちえー」という顔で壁にお湯を飛ばして、すぐ飽きた。

由果がクスクスと笑う。

「なんか、希おねえちゃん、お母さんみたい。やさしくて好き」
二年前のことを思うと、希は胸が切なくなった。でも、やさしくて好きと言われたのがうれしくて、由果の髪を洗いながら少しだけ頭をしっとり撫でた。

「……うん、そうかなあ」

ハクアは湯船から両足を外にぶらぶら投げ出している。足の裏が生白い。

「あたしも、のぞみんはいい奥さんになると思うよ。子供とかたくさん生みそうだね」

希は顔を真っ赤にした。

「そ、そんなことまだ分かんないよ!」

「まあまあ、あわてない、あわてない」

由果の髪を流し、体を洗って湯船に入れてから、希は自分の髪と体を洗った。由果はハクアがやたらお腹を触ってくるので何とか距離を置こうとしていたが、湯船に入っている限り無理だった。キヤアキヤア騒ぐのを見ながら、希もちよつとアヒルのおもちやを拾って、ハクアの肩にお湯をかけてみたりした。

ハクアと入れ替わりで希が湯船に入り、由果と二人並んで、ハクアが髪を洗う様子をじつと観察していた。ハクアは適当にシャンプーを選んだのか、廉太郎が使っていると思えるスーパーニックと書かれた別のシャンプーを使った。いきなり奇声を上げる。

「うわあああつ、これすごいスーサーするよっ! やばい、やみつきになる!」

「えっ? ハクちゃん、大丈夫?」

「あ、ハクアおねえちゃん、それスーサーするよ」

「だから、スーサーするって! さつきから言ってるじゃん!」

ハクアは大騒ぎしているが、何だかとても楽しそうだった。そしてシャンプーの泡を、シャワーでゆっくり流すのではなく、湯船から洗面器で湯をすくって、ザバアと頭からぶっつけた。元からこの色だと言っていた栗色の髪がきれいにぺったりとなっている。

ギリギリした目で、スーパーニックシャンプーを握りしめている。

「なあ、のぞみん、これで体も洗ってもいいかな?」

「えっ? ダメだよ、シャンプーだもん」

「ああつ、そっかー! くそー、なんだよー! スーパーニック石鹸とかないのかな?」

そんなに残念なことかな、と希は笑った。

プロ野球はホームランがたくさん出て試合は盛りあがっていたが、それ以上に三人の入った風呂がやたらとにぎやかだったので、タツヤはずつと気にしていた。

「そんなに気になるなら、お前も入ってくるか？ 俺は許すぞ」

と廉太郎に少しからかわれたが、由果だけならともかく、希やハクアと一緒に風呂に入るのは考えるだけでも恥ずかしくて、タツヤはつんとそっぽを向いた。

「違うよ。近所迷惑じゃないかなと思って」

「お前はやさしいやつだなあ。いいんだよ、あれくらい。成長期なんだから」

「だけど、お母さんなら、由果とお風呂で騒いだら『少し静かにしなさい』て言っただよ」

「お母さんはうちで仕事してたからな。そりゃ、気にするだろ」

「うん……」

「あの子たちがお風呂から上がったら、アイス出してやれ。株が上がるぞ」

「株ってなんだよ」

そういう会話があつて、タツヤはまた何となく風呂場のほうに意識を向けた。

やがて、長かったドライヤーの音が終わり、三人がそろって風呂場から出てきた。由果の髪も乾かしてもらっていた。タツヤは廉太郎に言われた通り、冷凍庫に入っているアイスの箱を出すと、ハクアも希もうれしそうに好きな味を選んだ。ハクアはラムネ味、希はストロベリー味にして、由果は一個だと多いので、希のを少しもらっていた。

野球中継も終わり、廉太郎は由果をそばに呼んで、録画したアニメと一緒に見はじめた。また、希とハクアは二人向き合うようにテーブルにつき、アイスを食べながら、廉太郎と由果の後ろ姿を見て

いた。タツヤはキッチンの明かりを消し、風呂場に向かおうとした。
「たつつん、ひとりの風呂は寂しい？」

後ろからハクアが声をかけてくる。

「ん？ そんなことないよ」

「あたしがもう一回入ってあげよっか？ この前のおわびで、
からだ洗うよ」

「えっ？！ いいよ！ 要らないよ！」

ハクアは何てこと言うんだ、とタツヤは思わず声を荒げた。廉太郎が面白そうに振り返り、にやにやと笑っている。由果も、タツヤが珍しく大きな声を出したので、タツヤの顔を見てきょんとしている。

「お、おわびは、うまい棒もらったから」

「んー。いや、あんなうまいハンバーグごちそうになったし」

「そ、ソーセージ持ってきたじゃないか！」

「あ、そっか。じゃあ、このアイスの」

「もういいから！ いつもひとりで入ってるから！」

タツヤは耳まで真っ赤になって、逃げるように廊下へ飛び出た。

第2話 『お泊まり会とコーンポタージュ』 2 / 3

あれはたぶんまじめな性格なんだ、とタツヤは湯船につかりながら思う。

うまい棒もサラミもあらびきソーセージも、おわびなのか自分が食べるつもりだったのか分からないけれど、ハクアは何かお返しをしたいと考えているのだと思う。施設で他の子からよく肉を取っていたと聞いたときはなんて乱暴な子なんだと感じたけれど、今のハクアは少し違うのかもしれない。タツヤは湯船に身を沈めながら、リビングの様子が気になって仕方なかったが、これと言って何もなく静かだった。

風呂から上がると、リビングには廉太郎ひとりだけだった。廉太郎はスポーツ雑誌を床に広げて読んでいる。

「おう、タツヤ。由果は部屋に寝かしたぞ。あと、月本さんと寺野さんの布団は、お母さんの部屋に敷いたから連れてってあげるよ」

「うん、わかった」

母親の部屋は、母親が仕事場と寝室にしていた部屋で、今も料理や食品関係の本や、母親が載っている女性雑誌が全部残っていた。仏壇もそこにある。昔は出版社の人がこの家に打ち合わせに来たので、ソファなどの応接セットもあったが、それはもう要らなくなったので廉太郎がリサイクル店で処分してしまった。

タツヤが母親の部屋を開けると、中は真っ暗だった。誰の気配もない。

「あれ？」

「あ、朱鳥くん」

振り向くと、廊下にパジャマ姿の希が立っていた。

「ごめん、おトイレ行ってたの」

「あ……えっと、月本さんと寺野さんの布団はここだよ」

「うん、ありがとね。ハクちゃんはさつき歯をみがいてたよ」
「そっか」

タツヤは部屋の明かりをつけ、思わずペタンと布団の上に座りこんだ。希も同じようにペタンと座った。希はこの部屋に入るのは初めてで、珍しそうに眺めていた。

「本がいっぱいあるね」

部屋には本棚がたくさんあるが、タツヤには難しくても読んだことがない。野菜や魚の本は何となく図鑑みたいで面白かったが、振り仮名のない字が多すぎて写真や絵を眺めたくらいだ。それよりも部屋で目立つのは、壁のあちこちに貼ってある書道の作品だ。これは全部、由果が書いたものだ。

「由果ちゃんの習字、すごいたくさんあるね」

「うん。由果は習字を習ってるんだよ」

由果は習い事で、去年から近くの書道教室に通っているが、廉太郎の話では、先生がものすごくほめるくらいうまいみたいだ。『ともだち』や『ひまわり』や『えがお』などの習字を、廉太郎が台紙に貼ってきちんと飾っている。タツヤは学校で書道はやるが、あまり得意ではなかった。

「今日ね、ハンバーグとってもおいしかった」

「うん」

「わたしも朱鳥くんみたいにうまく作れるかな？」

「うん、できると思うよ」

「わたしにも教えてね」

「うん」

希が次から次に話しかけてくる。タツヤは何となく今日は希とあまりしゃべっていない気がした。ハクアはまだ歯みがきから戻ってこない。部屋のドアは開けっぱなしだった。

「あとね、今日はみんなでお風呂に入って楽しかった」

「うん」

「わたし由果ちゃんの髪を洗ってあげたの」

「あ、ありがとう」

「みんなでお湯のかけっことかしたんだよ」

「うん」

「朱鳥くんはつまんなかった？」

「そんなことないよ。ハクアと一緒にじゃ、何されるか分かんないし

……」

「ふーん……そうかなあ」

「うん、いきなり変なこと言っし」

すると、希は急に黙ってしまった。コロン、と布団の上に倒れた。寝返りをうち、タツヤに背中を向ける。いつもきちんとしている希だが、布団の上で丸まった背中には不思議と由果くらい小さく見えた。

「どうしたの？」

「ん……眠くなっちゃったの」

希はもぞもぞと寝たまま体を動かして、布団の中に入った。

「もう寝る？」

少しの間、返事がなかった。タツヤは何となく掛け布団にそっと触れてみた。

「朱鳥くん、電気ちっちゃくして」

「あ、でも」

「ハクちゃんなら大丈夫だよ」

希が寝るので明るいままもかわいそうだと思って、タツヤは立ち上がり、部屋の電気を豆電球まで落とした。そのついでに、大きく開けていた部屋のドアも少し隙間を残して閉じた。タツヤがハクア用の布団の上に戻ると、希はいつの間にか寝返りをうち、こっちを向いていた。

希が、布団の中から手を伸ばしてくる。小さな声で「手握って」と言うので、タツヤはあたたかいその手を握った。隕石が落ちた夜、郊外の公園に行ったときのあの感触と同じだった。

「朱鳥くん あかね」

「ん？」

「もういつこ、お願いがあるの」

「なに？」

「ハクちゃんが来るまで、この部屋にいてね」

「うん、いいよ」

タツヤはそのまま座って手を握っていたが、少しすると、希が静かに寝息を立てはじめ、手を握る力も消えたので、布団の中に入れてあげて、ハクアの帰りを待った。ただ、タツヤもとろりと眠気が下りてきて、そのままハクアの布団の上に寝転がった。

翌朝、タツヤは目覚めたら、希の布団になぜか一緒に入っていた。そして、この部屋にハクアは寝ていなかった。もともとハクア用だった布団は、誰も使っていないくてきれいなままだった。

タツヤは朝ご飯を作ろうと思って起き上がった。希はまくらを胸に抱いたまま寝ていて、ハクアもどこにいるか分からないので、とりあえず廊下を通ってリビングに入った。廉太郎がコーヒーを飲みながら新聞を読んでいる。

「お父さん、おはよう」

「おはよう」

「あの……寺野さんは？」

すると廉太郎は少し困った顔になって新聞を閉じた。

「ったく、お前らは、持ち場で寝ろよ。ちゃんとしてたのは月本さんだけだな」

「えっ……？」

「寺野さんは二階のお父さんの部屋でマンガを読んでいたいで、そのままベッドで寝てたよ」

「お父さんの部屋で？」

「起こすのもかわいそうだから、そのまま寝かしといたけど。で、朝起きたら、お前は自分の部屋じゃなく、お母さんの部屋で寝てるし」

「あ……」

「月本さんと話でもしてたのか？
しろって言ったぞ」

お父さんは寺野さんも案内

「ごめんなさい……」

「ハハハ。ま、別にいいけどなあ。寺野さん面白い寝言を言ってたし」

「えっ、なに？」

「ダッカルビ！って、五回くらい言ってたな」

「ダッカルビ……？」

「ま、とりあえず二人と由果を起こしておいで。お父さん、もうすぐ仕事に出かけるから」

タツヤは洗面所で顔を洗った後、二階に上がり、一番気がかりな廉太郎の部屋から入った。廉太郎のベッドにはハクアが大の字で寝ていた。掛け布団が足もとに蹴飛ばされて、ベッドから落ちそうになっている。タツヤが起こそうとすると、寝返りをうち、背中の下から三冊もマンガが出てきた。タツヤも読もうと思ったことがないヤクザのマンガだった。廉太郎の本棚には他にもいろいろなマンガがあるが、ハクアはこういうのが好きなのだろうか。

強引に体を揺らすと、ハクアはようやく目を覚ました。寝ぐせがすごくて、髪の毛がめちゃくちゃに跳ねている。

「あれ？ たつつん、あたし、たつつんの部屋で寝ちゃったか……？」

「全然違うよ」

何ひとつ合っていないかった。

その後、二階で寝る由果を起こし、一階の母親の部屋に戻り、希を起こした。タツヤは希より早く起きたので、同じ布団で寝てしまったことを希は知らないかなと思っていたけれど、そうではなかった。希は夜中に一度トイレに起きたようので、ちゃんとそれを知っていて、タツヤは少し恥ずかしかった。

「なんだ、やっぱりたつつんは寂しかったんだ」

と寝ぐせを直すふうもないハクアに笑われたが、寂しかったから希の横で寝たわけではないので、ムスツとすねて何も答えなかった。すると、希が間に入って口を開いた。

「もう、違うよ。ハクちゃんがお部屋に来なかったから、わたしが寂しくなって朱鳥くんにいてもらったんだよ」

「そっか。でも、寝なくてもいいだろ？」

「うるさいな。勝手にお父さんの部屋に入るなよ。　僕が怒られたんだから」

廉太郎はそのとき部屋で着替えていて、リビングにはいなかった。「だって好きなマンガがあったんだ。でも、怒られたんだな。ごめんね」

「もう怒ってないけど……」

「よし、おわびにあたしが今度一緒に寝るよ」

「おわびはもういいよ！」

タツヤはキッチンに逃げ、夜のうちに炊飯ジャーで予約しておいた炊きたてのご飯を茶わんに盛り、ハムエッグを焼いた。由果は寝ぼけた顔で玉子焼きのほうがいいと言っているので、それを先に作ってあげた。

希と由果はすっかり仲良くなったようで、テレビを見ている由果の髪を、後ろからブラシでといてあげている。ハクアは窓辺に座り、晴れた空をぼうつと眺めていたが、ハムの焼ける臭いがリビングまで広がる、大声で「たつつん、ハムエッグは何枚まであるの？」とだけ聞いてきた。

そして、仕事力バンを手にした廉太郎がリビングに顔を出した。「タツヤ、ちゃんと平等に仲良くやれよ」

それだけ言い残してスポーツジムに出かけた。とにかくタツヤだけひたすら忙しかったお泊まり会は、ようやくこれで終わった。

タツヤはすっかり油断していた。土曜日のお泊まり会は、ハクアが超能力者であることを忘れるくらい普通に終わり、いろいろ変なことを言われて慌てたけれど、とにかく仲良くなれて喜んでいたのだが、次の週、学校で立て続けに二回もハクアに力を借りられて、とんでもない目にあつた。

タツヤは、ハクアが『レンタルフォース』で借りられる力は、前に希から借りた視力と、タツヤから借りた知力、聴力と、高校生の不良たちから取った脚力しか知らなかった。他にどんな力を借りることができるのか、ハクアから聞いたことはなかったのだ。

ひとつ目は、火曜日の家庭科の授業中だった。調理実習である。作る料理はカレーだった。男女混ざった五人ずつの班に分かれたが、たまたまタツヤ、ハクア、希は別々の班になった。タツヤは家でもカレーを作るくらいの腕前で、先生の説明もきちんと聞いて、まじめに作りはじめた。タツヤと同じ班のクラスメイトも、タツヤが野菜の皮むきや肉の切り方に慣れているのを見て、このままタツヤの作り方に任せてしまおうという雰囲気になっていた。タツヤも家で料理をやっている、と言ったから余計に安心したのだ。

一方、ハクアは自分の班に不器用な子ばかりなのを見て、かなり心配になっていた。何しろ調理実習は、家庭科の先生が「自分たちの作ったカレーを食べるんですよ。ハイ、頑張つて作ってください」と大きな声で言ったので、ハクアはそこからずっとタツヤの様子を観察していた。

タツヤは、別の班にいるはずのハクアがちよろと様子を見に来るので、あまり自信がないのかなとか、授業中なのに集中力がないな、くらいにしか思っていなかった。それで、ハクアが何度かタツヤの手や腕を触っているのにも気づかなかった。

「ちよつと借りるねー」

という能力発動の台詞をどこで言われたか、タツヤはよく覚えていない。ハクアに調理力を奪われた瞬間は、鶏肉と野菜を炒めた鍋を煮はじめるとタイミングで、沸騰しアクがたくさん出てきたのを、

タツヤはただぼんやりと見ていた。

「あれ？ この浮いたのは取らないの？」

と同じ班の子が聞いたが、タツヤは首を横に振った。

「うん、これでいいんだよ」

さらに、ずっと強火で鍋を炊き続けたので、お湯が吹きこぼれたり、途中からなぜか思いつきでニンジンを取り出して最後に戻したり、カレールーをよくかき混ぜずささと火を消したりして、よく分らないうちに食べる時間になってしまった。

タツヤの班のカレーは大失敗だった。水が多すぎてしゃばしゃばのうえに、ニンジンが生煮えで固かったり、カレールーがブロックのまま出てきたり、鍋の底でじやがいもが大量にこげていたりして、とにかくひどいものだった。

「なんだこれ……超まずい……」

「先生……ごめんなさい……」

同じ班の子はあまりの失敗に少し涙ぐんでいるし、完食する気力も、タツヤを責める気力もなかった。タツヤはすぐ落ちこんだが、自分は料理ができるはずなのに失敗した、という感覚はなかった。調理力がまだハクアから返ってきていないのだ。

そして、ハクアの班は上手に作りあげ、家庭科の先生からもほめられていた。ハクアはうまくいった自分の班のカレーをきれいに平らげて、大満足で家庭科の授業を終えた。それがちょうどハクアの『レンタルフォース』能力が切れる三十分くらいだった。ハクアがようやくそれを自覚して、教室へ戻るタツヤに声をかけると、タツヤはひどく暗い顔をしてきつく睨み返した。

「たつつん、ごめん！ つい」

その日、タツヤはハクアとほとんど口を聞かなかった。

ハクアのことを打ち明けられるのは希だけだった。希は、調理実習でタツヤの班が失敗したことを知らなかったので、タツヤから伝

えるまで気づいていなかった。ただ、希は火曜日は学校が終わった
らすぐピアノの習い事があるので一緒に帰れず、仕方なく夜になっ
てメールを送った。そのときにはタツヤもだいぶ頭が冷静になっ
ていた。

『メールできる？』

『うん』

待っていたみたいに、すぐ希から返信が来た。

『今日またハクアにやられたんだ』

『どうしたの？』

『調理実習ですごくまずいものになった』

すると、少し間があった。

『うーん そんな力も借りられるんだ』

『そうみたい 授業のあと ハクアにもゴメンで言われた』

『ハクちゃん わざとじゃないと思うよ』

『うん わかる これくらいはがまんするよ』

『朱鳥くん えらいね』

『しかたないよ』

『同じ班だった人には 明日あやまったほうがいいのかもね』

『そうだね』

『そんなに落ちこまないでね』

『うん つまんないメールでゴメン おやすみ』

『ううん大丈夫だよ おやすみ また明日ね』

ベッドに仰向けになり、携帯を閉じる。タツヤはもしも希がいな
くて、自分だけがハクアの超能力を知ってしまい、ハクアに力を借
りられても誰にも話せない感じだったらどうしよう、と考えた。何
だかすごく気が重かった。

ハクアは友達として一緒にいて楽しいし、せつかく仲良くなった
ばかりなのだ。あまり冷たくしたくなんかない。今回は、おそらく
土曜のお泊まり会でタツヤが料理が得意なのを知ったから、つい力

を借りにきてしまったのだろう、と思う。

弱いなら強くなる、暗いなら明るくする。

ハクアはそんなふうに言っていた。その前向きな気持ちは、タツヤは母親をなくした後の自分を思い出してもよく分かる。ただ、それなら、タツヤはできることをハクアに見せていくと、これからもどんどん借りられてしまうのかもしれない。ハクアは苦手なものが多いのだ。どうしてハクアはもっと何でもできる子じゃないんだろうか、タツヤはついそんなふうを考えてしまう自分が悲しかった。

もうこれ以上考えるのが嫌になり、いつもより早めに寝ることにした。部屋の明かりを消す。窓の外は曇っていて星ひとつ出ていなかった。

第2話 『お泊まり会とコーンポタージュ』 3 / 3

次の日、タツヤは自分からハクアに元気よく朝のあいさつをした。ハクアはしおれた顔で昨日のことを謝ってきて、またランドセルからコンビ二袋を取り出し、うまい棒を何本も出そうとした。だが、あわてて押しとどめ、「わかった。放課後もうから」と言っただけでハクアを静かにさせた。ただ、タツヤは何となくそれが嫌だった。そんなもの欲しくないし、昨日の調理実習で同じ班だったみんなのことを思うと受け取りたくない。

ハクアは、力を借りたいとき思いつきで能力を使い、迷惑がかかったらおわびを出してそれで平気というふうに考えているのだろうか。力を取られたほうはかなり困る、ということをやちゃんと考えていないのだろうか。タツヤはそう決めつけたくなかったけれど、まだ気持ちがいまいちとしていた。

タツヤは希にメールで言われた通り、調理実習で一緒だったクラスメイトに料理の失敗を一人ずつ謝って回った。みんなそれほど気にしていなくて、次は先生の言うことを聞いて作ろうと言ってくれた。タツヤはひどく落ちこんだことを少し反省した。

やがて午後から雨になり、六時間目の授業で、英語の時間になった。そして、昨日の今日で、ここでもまたハクアのことで問題が起きた。

晴海先生がプリントを配りはじめると、後ろからハクアが弱々しく声をかけてくる。

「なあ…… たつつん、これまたテストか？」

この前、理科のテストでハクアに知力を勝手に借りられ、すごく低い点を取ったことを何となく思い出す。ハクアは英語も苦手なのかなと思ったが、今日は貸してと言われてもダメだと言おうとタツヤは考えた。プリントが手もとに来る。テストではなかった。

「うっん、違うよ。書き問題だよ」

「カキ？」

日本語の文章がいくつか書いてあってそれを英語で書く問題のプリントだ。問題はあまり難しくなかった。みんな英語を書きはじめ、少し時間が過ぎたところで、晴海先生は一問ずつ生徒を指して、黒板に自分の答えを書かせるのをしはじめた。

「えっ、マジ?! 前で書くの？」

またハクアが後ろから話しかけてくる。

「そうだよ」

「たっつんはできたの？」

「うん、できたよ」

「そっか……」

ハクアのこのあせり方は嫌な予感がする。振り返ると、英語が全然書けていなかった。やはりハクアは英語が不得意なのだ。

晴海先生は、今日は列に一人ずつ指している。四問目あたりでタツヤとハクアの列の誰かが指されそうだった。ハクアが後ろからタツヤの腕を握ってくる。タツヤは背筋がゾクツとなった。

「たっつん……相談があるんだ。もし、あたしが当たったら、たっつんの英語の力を貸してくれないかな？」

そう言われると思っていた。タツヤは前を向いたまま小声で答える。

「ダメ」

「えっ?!」

「だって、僕も指されるかもしれないだろ？」

「うーん……」

友達だったら、ハクアのわがままを何でも聞いてはいけなないと考えた。弱いなら強くなると同じで、できないならできるようになる、というのは勉強でも料理でも一緒だ。足りない力をいつも好きなか人から借りていたら、何もできない人になるとタツヤは思っのだ。
「たっつん……」

「まあ、でもほんとに指されちゃったら、今日はこのプリントを貸してあげるよ。ハクアも書き写すのはできるだろ？」

「たつつん、頭いいな！」

ところが、四問目で晴海先生に指されたのはタツヤだった。タツヤは少しほっとして、自分のプリントを手にして前へ行った。チヨークを持ち、間違えないようゆっくり最初の単語を書く。

「次の問題は、寺野さん」

晴海先生は気まぐれで同じ列から二人指した。列に一人ずつの法則をたまたましなかったのだ。

「えっ?! はい！」

タツヤは思わず後ろを振り向く。目を丸くしたハクアがその場に立ち上がっている。

「寺野さん、五問目、黒板に書いてください」

「うー……」

ハクアはあきらめて前に出てきた。一応、自分のプリントは持っているが、ほとんど白紙のままだ。弱りきった顔で近づいてくる。

黒板の前で、タツヤの横に並んだ。

「……あたしも指された」

「そうだね」

「ねえ……借りていい？」

「無理だよ。まだ書き終わってないし」

「だって、たつつんはプリント見ればいいじゃん」

すると、晴海先生がハクアを注意した。

「寺野さん、おしゃべりしてないで書きなさい」

少し怒った言い方だった。晴海先生はハクアをじっと見ている。タツヤは一緒に怒られないように前を向き、黒板に書くことに集中した。

「ゴメン、やっぱ借りるね！」

「えっ」

横からハクアの小声が聞こえて、タツヤは頭の後ろを右手の指でトンと触られた。次の瞬間、手が止まる。黒板に何を書こうとしていたか分からなくなった。

後で思えば、手もとに答えを書いたプリントがあったのだから、ただそれを見れば良かったのだ。だが、タツヤは、前の理科のテストと同じで、いきなり頭が真っ白になって、そういう考えも浮かばず、チョークを置いて振り返り「先生、分かりません」と言っただけだった。

クラスから笑い声が起こったが、タツヤは分からないのは仕方ないと感じていた。晴海先生は、驚いたというか困った顔を見せたが、「じゃあ、席に戻りなさい」と言った。先生にそう言われたので、タツヤは素直に席に戻った。

黒板のところでは、ハクアがすらすらと英語の文を書いている。それを見てタツヤは、かなり大きな字だな、くらいの感想しか持たなかった。

そして、ハクアの書いた問題の答え合わせが終わったところで、ハクアが「じゃ、返すね」と言っただけで頭の後ろをトンと左手で触れた。この間、タツヤは記憶が飛んでいるわけではない。タツヤは、自分とハクアが晴海先生に指されて前に出て、自分だけ書けず、クラスみんなに笑われ、席に戻ってきたことをしっかりと覚えている。黒板に書きかけた自分の問題に、晴海先生が赤いチョークで答えを書くのも全部見ていた。

六時間目の英語が終わり、放課後になった。ハクアはタツヤに「また明日ね」と一言残し、朝渡そうしたうまい棒の入ったコンビニ袋をタツヤのひざの上にポンと置いて、教室から出て行った。クラスの子たちにゴム飛びして遊ぼうと誘われたのだ。

タツヤはすぐコンビニ袋をランドセルに突っこみ、みんなが教室

から出て行くのを待っていた。ハクアのことで少し考えていて、すぐ帰る気分になれなかったのだ。希がタツヤのそばに来た。気持ちがあまくまとまらない。今日のことは希に黙っておこうかな、とタツヤは考えていた。

「朱鳥くん、英語のとき、大丈夫だった？」

問題ができなくて笑われたことを希は心配していると思った。

「……なんで？」

「おでこにあのあざっぽいのが出てたから。またハクちゃんかな、と思って」

「ああ……そっか」

ハクアに力を借りられた人は、その間、おでこに猫の手のような形をしたあざが出る。たぶん席に戻るとき、希はそれを見たのだ。希は言わなくても気づいていた。

「まあね。ハクアが英語できなくて困ってたから貸したんだ」

「……そうなんだ」

「大丈夫だよ」

「うん」

希はまだ不安そうな顔のままだ。この話はもう止めたい、とタツヤは思った。

「月本さんは、今日は習い事は？」

「ううん。今日は天文係の日だよ」

水曜日は希の習い事が何もない日で、毎週、放課後一緒に図書室で天文新聞のことを話すことになっている。タツヤは頭の中がハクアのことですっきりで、すっかり忘れていた。

「あ、そうだったね。じゃ、図書室行こう」

「うん！」

ランドセルを背負い廊下を並んで歩きながら、ハクアのことをまだ考えていた。

ハクちゃんの能力って、絶対にもっと人の役に立つと思うん

だよ。

希の言葉がもう一度、タツヤの胸のうちに帰ってくる。そんなこと、もう何だか信じられない。昨日の調理実習もそうだ、今の英語の授業もそうだ、ハクアは自分の苦手なことから逃げることにしか超能力を使っていないのだ。晴海先生に困った顔をされるのも、みんなに笑われて席に戻るのも、本当ならハクアだったのだ。『レンタルフォース』という能力は、ハクアが借りたいと思ったとき簡単に借りられて、もしタツヤが貸したくないと思っても力は取られてしまつらしい。ハクアの部屋で言った、自分の言葉をタツヤは思い出す。

困ったときは僕も力を貸すよ。

タツヤは怒りたいというより、寂しい気持ちになった。きっと、友達になつたから、あんなことを言つたから、ハクアは困つたとき自由に力を借りられると思つているのだ、と考えてしまう。

友達つていつも近くにいるんだ。友達つて謝れば許してくれるんだ。だから、友達つてとにかく便利なんだ。それがハクアの考え方だとしたら。

ハクアはケンカではビックリするほど強かつた。あのときはタツヤもすごいと思つた。でも、ちよつと考えると、すぐ交番に行つたり誰か大人に助けてもらつたりすれば、ハクアがあんなふうに戦わなくても良かったかもしれない。

無茶をしたからハクアはひさをケガしたし、タツヤはハクアのそばに行つたから、危うく不良に石をぶつけられそうになつた。ケンカなんて、バトルゲームと違うのだから、相手を倒さないと終わらないわけではなく、ちゃんと大人に止めてもらうことができる。タツヤはそう思う。

「朱鳥くん……」

希にきゅつと腕をつかまれた。心臓がドキリとして立ち止まる。ハクアのことやケンカの記憶が一瞬で頭から吹っ飛んで、希の顔をじつと見てしまった。今日は星の髪飾りを左右両方につけていて、

暗い雨の日の廊下なのに、不思議とキラキラ光った。

「なに？」

「大丈夫？ 落ちこんでない？」

「うん、平気だよ」

希に手や腕を握られると、なぜか落ち着いた気持ちになる。ハク

アとはまったく逆だ。

「でも、なんかこわい顔してる」

「あ……ごめんね」

「もしね、具合が良くないなら……今日はもう帰ってもいいよ？」

「ううん。先週も天文係をしなかったから、今日はちゃんとやろう」

「でも、先週はわたしが具合悪かったから」

「それは月本さんのせいじゃないよ」

先週の視力検査でハクアに視力を勝手に借りられ、真つ暗な視界のまま保健室に運ばれた希。それでも、希は二人でハクアの応援団になろうと言った。

希はいつも元気づけてくれる。タツヤはいつまでも自分が暗い顔をしてないで、希との約束を守ろうと思った。

「早く図書室に行こつ。僕も天文新聞やりたいんだ」

「ほんと？」

「うん」

笑顔を見せると、希はそのままタツヤの手を引っ張って、廊下をまた元気に歩き出した。

図書室で一時間くらい天文新聞のことを話し、七月は『夏の三角形』というものを調べることに決まって、二人で一緒に帰ることにした。雨は上がっていて傘をささずに済んだが、水たまりを踏まないように声を掛け合いながら、ゆっくり道を歩いた。

タツヤは学校から少し離れたところで、ハクアにもらったコンビニ袋がランドセルに入っているのを思い出し、細い路地に入った。

希も不思議そうについてくる。袋の中を見ると、またサラミ味かなと思っていたが、なぜかコーンポタージュ味だった。お泊まり会でコーンポタージュを出したから、タツヤはサラミ味よりもこっちの味のほうが好きだと思ったのか、それはよく分らない。

希も、袋に入ったうまい棒を覗いて、タツヤの顔を見た。

「これ、ハクちゃんからまたおわびのしるし？」

「うん。昨日の調理実習のね」

「じゃあ、また明日もあるかもね」

「うん。月本さんも一本持つて帰る？」

「いいの？」

「いいよ」

「えへへ……おなか空いてるから、いま食べる」

「僕もそうする」

二人でうまい棒を食べながら路地を抜けると、住宅地の中にある少し広い並木道に出た。この道は、朝の通学や通勤の時間は混むけれど、夕方の時間は人の姿があまりなかった。二人が歩いていく方向の先に、外国人の家族らしい三人が立ち止まって話していた。年齢で見てもおばあさんとお母さんと男の子みたいだ。男の子は由果と同じくらいの年で、まだ小さい。このあたりで外国人を見かけるのは珍しい。みんな金髪だったので、タツヤはアメリカ人かな、と思って眺めていた。

「たっつん！ たっつーん！ のぞみーん！」

後ろから、いきなり大きな声で名前を呼ばれた。振り返ると、ハクアが手を空に高く突き上げていた。ハクアも、友達と遊んでいてこの時間に帰ってきたのだ。ハクアの横になぜか由果もいて、ハクアと一緒にタツヤのそばまで走ってくる。

「お兄ちゃん！ 希おねえちゃん」

「由果ちゃん」

「うわっ、うまい棒！」

ハクアはもう食べ物に意識がいつている。

「あ、これ今朝ハクアがくれたやつだよ」

「えー、そつかあ。じゃあ、あたしのは　ない？」

思いきりムスツとした顔をした。タツヤはため息をついた。希がクスクスと笑う。

「……いや、一本食べていいよ」

タツヤがうまい棒を渡すと、ハクアは「たつつんは器がでかいねっ！」とよく分からないことを言い、あっという間に食べてしまった。そして、タツヤにうまい棒の袋のゴミを渡してくる。仕方なく受け取ると、由果がそばにぴたりくっついて、コンビニ袋の中身を覗いた。

「　お兄ちゃん、由果のもある？」

「うん、あるある」

家に帰ってからにしようと思っていたが、由果にも一本渡した。

由果はここで食べずにランドセルに入れた。

ハクアと由果は、学校の門のところであたまたま一緒になったらしい。由果もお泊まり会であれだけハクアのいたずらから逃げていたが、嫌いではないみたいだ。ハクアは、由果が今日の給食で苦手なプロセスチーズを残したことをタツヤにバラしながら、由果の頭をつかんで「このワガママ娘めっ、牧場で働かすぞ！　いいのかっ！」と叫んで髪をくしゃくしゃにした。由果はキヤアキヤアさわぎ、ハクアが飽きて静かになったら、希に髪をやさしく撫でてもらっていた。

並木道を進んでいくと、さっきの外国人家族がタツヤたちに気づき、いきなり声をかけてきた。タツヤは驚いて立ち止まる。後ろにいた希やハクアたちもつられて止まった。タツヤに話しかけてきたのはお母さんだが、とにかく早口で、はじめの言葉も最後が『ミー』だったくらいしか聞き取れなかった。

「あ、あ……」

学校で英語の授業はしているけれど、単語を書いたり、教科書の

英語を読むくらいなので、本当に外国人に話しかけたら会話なんて全然できない。タツヤが何も言えずにいると、お母さんは手に持っていたメモ用紙をタツヤに見せてきた。何か英単語と数字が書いてあって、住所かもしれないと感じたが、もちろん読めるわけがないし、しかも斜めになった英語の文字だったので、これは絶対に無理だと思った。

まわりを見渡しても、大人の姿は見あたらない。並木道には、タツヤたちと外国人家族以外に誰もいなかった。お母さんは腕時計を見て、時間を気にしはじめ、おばあさんと弱り顔で話しているのを聞きながら、タツヤは早くここから離れたい、と思った。

「ねえ、どうしよう……？」

希と相談する。由果は、外国人家族を恐がって希の後ろに隠れている。

「朱鳥くん、わたしたちじゃ無理かも」

「うん、そうだよね」

タツヤは深くうなずく。おじぎして通り過ぎようと思った、そのときだ。

「よおし、出番だな。ここはあたしに任せろ！」

ハクアはいきなり一歩前に出た。

「えっ?!」

英語が苦手なハクアが何をしようと考えたのか、よく分からなかった。もしタツヤや希の英語力を借りたところで、外国人と普通に会話できるわけがない。ハクアを止めようか戸惑っている間に、ハクアは外国人の男の子と向き合い、右手でいきなり男の子の口を触った。男の子は驚き、ビクツとなった。お母さんとおばあさんは二人で話していて、それを見ていない。

「ハイ、ちよつと借りるねー。すぐ返すから」

ハクアは男の子にそう言った。ハクアの日本語が通じたとも思えないが、男の子は何も答えず、驚いた表情のまま黙った。もしかして　とタツヤは思ったが、男の子は野球帽を深くかぶっていて、

おでこはよく見えなかった。

そこからは、信じられないというか、本当に不思議な時間だった。ハクアはいきなりサラサラと英語をしゃべり出し、お母さんとおばあさんに対し、道案内をしはじめたのだ。お母さんはすぐほっとした顔つきに変わり、流れるようにハクアと会話をしている。タツヤはもちろん全然分らない。希も由果もあ然としたまま、ただ眺めている。ただ、栗色の髪をしたハクアは本当に外国人になったみたいで、道の方向を指差したり、身ぶり手ぶりを加えて説明したりして、お母さんは何度も「オーケー、オーケー」と大きくうなずいていた。そのそばで、男の子はずっと黙ってお母さんを見上げていた。道が分かったみたいで、お母さんは大きな笑顔を浮かべ、ハクアにお礼を言った。すると、ハクアはいきなりタツヤのほうに振り向き、「一本残ってる？」と言ってタツヤの持つコンビ二袋に手を突っこんだ。さつきまでずっと英語を話していたのに、急に日本語を話したのでタツヤは「えっ？」と短い声を出し、あわててうなずいた。ハクアは最後の一本のうまい棒を取り出すと、男の子に手渡した。

お母さんはうまい棒を指差し、ハクアに何か聞いた。ハクアはにこにこ英語で説明する。タツヤの耳にもスナックという単語だけは何となく聞こえた。そして、ハクアは男の子の口に左手の指先を当て、最後に野球帽をポンポンと軽く叩いた。

「これ、お礼だよ。それじゃ、ボウズ、元気でな！」

そう日本語で言った。

外国人家族が歩きはじめ、タツヤたちは何となくそれを見送る感じだった。男の子が何度か不思議そうな顔でチラチラと振り返ったが、お母さんにぐいっと手を引かれ、そのまま道を曲がって行った。タツヤも希もこれがどういうことだったか、見当がついていた。分からないのは由果だけだ。

「ねえねえ、ハクアおねえちゃん、今のって英語？」

「おう、英語だよー」

「ハクアおねえちゃん、すごいね。外国の人とおしゃべりできるの？」

「ん？　　そうだなあ、あれくらい五年生まで習ったら余裕、余裕」

ハクアはそう言った。タツヤは、ハクアが由果に本当のことを言わないつもりなのだと感じた。

「そうなの？　お兄ちゃん」

「えっ……？　えっ？」

由果にいきなり聞かれて返事につまった。

「ハハハ、たつつんは大事なときにダメなんだよ。あがり症だから」

「お兄ちゃん、アガリシヨウなの？」

「　　英語はね」

もう何と答えていいか分からなくて、適当にごまかした。

「よしっ、今日もいいことしてお腹も減ったし、帰ろうぜ！」

ハクアは、満面の笑みでタツヤの肩をバンバンと手で叩いた。このときは、なぜかハクアの手に触れることに不安を感じなかった。歩きはじめて、希とも目が合った。希もまたすっきりした笑顔で、「ねっ、わたしのも入れて」と、うまい棒の空き袋をタツヤの持つコンビ二袋に入れてきた。

湯船に入りながら、タツヤは今日のことを思い返す。

ハクアは自分勝手な性格だ。ただ、人が困っているとき、自分の能力を使ってその人を助けられそうなとき、ハクアは迷いなく進み出る。誰かが来るまで待つとか、自分ができないからやらないとか、そういうふうには考えない。あの外国人家族はきつとハクアに感謝していると思う。

ハクアは『レンタルフォース』の能力を使ったと思う。ただ、由果に超能力のことは話さなかった。だから、タツヤも希も、ハクア

の超能力のことは口に出さなかった。

人に話さなくても人に役立つことがある 今日、それを見た。

本当なら、ハクアがそのつもりなら、タツヤや希に打ち明けなくても良かったのかもしれない。ハクアの本当の気持ちはよく分からない。だけど、自分のことをよく知っていて、いつも近くにいて、謝れば許してくれる友達がいるのは、ハクアでなくても、タツヤだつてうれしいことだ。

そう考えて、タツヤは湯船で大きく伸びをして、ひとつ深いため息をついた。

部屋に入ると、携帯がチカチカしていて、希からメールが届いていた。ベッドに寝転び、メールを開ける。届いたのは十分前だった。
『コーンポタージュ味 あんなのあるんだね』
ちよつと意外なメールだった。

『どうしたの?』

『はまっちゃったかも』

タツヤは声を出して笑った。そんなことをメールしてくる希が面白かった。

『明日もあつたら少しあげるよ』

『ハクちゃん 覚えてるかな』

『もう忘れてそうだね それに授業のはハクアが悪いわけじゃないんだ』

『そうなの?』

『僕がプリントを見れば良かったんだ ハクアもそう言ってたのを思い出した』

希から返事が来るのには少し間があった。二人の黒板前のやりとりが希にうまく伝わるはずもない。でも、タツヤはつい送ってしまった。希にはなぜか隠したくないのだ。

『そっか あせったんだね しっかり!』

短いメールの向こうに、希はどんな表情をしているのかタツヤは

考えた。

『落ちこんでゴメン』

『うっん 朱鳥くん やさしいね』

最後におやすみのあいさつをメールで交わし、携帯を静かに机に置いた。

第3話 『花瓶の欠片とキープタブレット』 1 / 2

七月に入り、天気が良くてとにかく暑い毎が続いている。日差しはどんどん強くなり、セミは力いっぱい鳴きはじめ、洗濯物も干したらずく乾くようになった。朱鳥タツヤは日曜の昼、リビングで妹の由果と一緒にそうめんをすすりながら、ぼんやりとテレビを眺めていた。父親の廉太郎はスポーツジムに出勤している。

家では、妹の由果がエアコンの冷氣に弱くて、風に当たるとすぐ具合が悪くなるので、あまりエアコンをつけないようにしている。廉太郎は家の中が暑いのも寒いのも全然平気らしく、「筋肉のおかげだ」と言っている。だから、夏に料理をすると、キッチンはどうでもない灼熱地獄になる。つらいのはタツヤだけだ。

気分だけでも涼しくなろうと、そうめんに大根おろしと刻みネギをたっぷり入れる。タツヤは辛い薬味が好きだった。由果が真似するように大根おろしを欲しがったので、少し分けたが、この辛さは全然ダメだったようで、涙目で舌を出していた。大根おろしをタツヤの器に戻すので、テーブルにぼたぼたとこぼれて大変なことになった。

「お兄ちゃんの鬼い……！」

「知らないよ。由果が欲しいって言ったんだから」

「あとで牛乳プリン」

「わかったよ」

そうめんを食べ終わった後、自転車に乗りスーパーに牛乳プリンを買いに行く。この銀色の自転車は三年生のときに買い換えてもらったもので、もう二年以上乗っている。後ろにシートがついていて、たまに由果を乗せることもあるが、背中にくっつく暑いで由果は家に置いてきた。

スーパーではソーセージの特売をやっていて、山盛りのワゴンの前でふと足を止めた。もちろん買うつもりはない。ただ、寺野ハク

アと月本希が泊まりに来た日のことを少し思い出す。家族以外の人のために料理を作ったのは初めてで、しかもあんなに何度もおかわりしてくるハクアの姿が何だか面白かった。

廉太郎から「あの子たちはまたうちに来ないのか？」と何度か聞かれたが、タツヤはハクアにからかわれた恥ずかしさが胸に戻ってきて、首を横に振った。それと、タツヤはあの後、廉太郎の部屋にあったヤクザのマンガをまた手に取って見たが、やはり面白いとは感じなかった。逆に、ハクアは風呂で使ったトニックシャンプーがかなり気に入ったらしく、家のシャンプーを早速それに変えたとはしゃいでいた。

もう毎日スーパーパートニックバスタイムだよ！ あれを作った人はすごいね！

あまりハクアが楽しそうに騒ぐから、その晩、タツヤもトニックシャンプーを使って見たが、一日でいつも使っているシャンプーに戻した。マンガの好みもシャンプーの好みも全然違うし、家庭科や英語の授業でもひどい目にあったが、それでもハクアと話すと楽しいし、ハクアがちょっととした気になること、困ったことがあるとよくタツヤに話してくるのでよく聞いてあげている。そういうことが毎日何かしらあるのだ。

タツヤは自転車に乗り、真夏の白く焼けた道をすいすいと走った。家に着き、買ってきた牛乳プリンを由果に渡そうとすると、由果はリビングで寝転がり、すやすやと寝息を立てていた。誰も見ていないテレビを消し、牛乳プリンとソーセージを冷蔵庫に入れ、大根おろしで汚れたテーブルをきれいにふき、カーテンを閉じ、扇風機をつけた。

額から流れ落ちる汗がずっと冷えていく。

たつつんは席が近いし、頭いいから、勉強も教えてもらってます。

タツヤ、お前、女の子にやさしい男だな！ いいぞ！

きつと、ハクアが頼ってくるからだ。タツヤはゆっくり首を振る

扇風機をぼつと見つめ、目が乾くとまぶたを閉じた。

ある朝、学校に着くと、廊下で学級委員の十和田霧枝に会った。

水道で花瓶の水を換えてきたみたいだ。教室に飾ってある花で、晴海先生が持ってきたものだ。花瓶は陶器の細長いもの。霧枝は背が小さいので、花瓶が大きく見える。タツヤがおはようと挨拶すると、一瞬驚いたように鋭い視線を向けたが、すぐにっこりと笑った。

「あつ、聞いたよ」

「何を？」

「ツツキーとテリーが家に泊まりに行っただんでしょ？」

霧枝は希のことをツツキー、ハクアのことをテリーといつも呼んでいる。

「ああ、うん」

「ふーん、仲いいなあ。で、ツツキーと同じ布団で寝たんでしょ？」
霧枝は何でそんな細かいことまで知っているのか。タツヤは心臓がビクリとなった。

「えっ？！……それ、月本さんから聞いたの？」

「ううん、テリーから」

ハクアはタツヤが起こしに行ったので、タツヤが希の布団で寝ていたのを見てないと思ったが、もしかして夜中に部屋に戻って来て、あの姿を見たのだろうか。考えてもよく分からなかった。

霧枝は花瓶を抱えて教室に入ろうとした。ところがそのとき、教室から男の子が飛び出して来て、激しくぶつかった。霧枝の手から花瓶がすべり落ちる。そばにいたタツヤは慌てて手を伸ばした。花瓶の上のほうをつかんだ感触はあったけれど、花瓶の底は床にぶつかって、パキッと割れる音がした。

「ああっ！！」

霧枝が悲鳴みたいな大声を上げ、クラスのみんなの目を集めた。霧枝にぶつかったのは同じクラスの丘野アランだ。アランは、日本

人の父親とアメリカ人の母親のハーフで、髪はオレンジっぽい色で、体の線は細く、茶色い目をしている。

アランはもとも社長の息子で、東京の都心の高級マンションに暮らしていたと聞いた。だが、親の会社の経営が急に悪くなり、去年からこの美星町に引っ越してきたのだ。すぐ目立ちたがりで、何かといばる性格で、短気で素直にしていると、ところをタツヤは見たことがない。アランと霧枝はいつも仲が悪いので、タツヤも他のみんなもこれはまずいことになる、という予感を持った。

花瓶はバラバラに壊れていなかったが、二つに割れてしまい、割れた片方が床に転がり、水がビタビタ流れ出していた。

「ちよつと！ 割れちゃったじゃない！」

霧枝がヒステリックな声でアランの腕をつかむ。アランは面倒くさそうな顔で手を振りほどく。

「うるせーな。見えなかつたんだから、しょうがないだろ」

「今すぐ先生に謝りに行って！ これ持って、早く！」

霧枝はそう叫びながら、しゃがみこんで花瓶の破片を拾いはじめる。

「イヤだよ！ なんで俺が謝るんだよ！ お前がしゃべりながら歩いてたからじゃん。よけられないグズなお前が悪い」

「何で私が悪いのよ！」

霧枝は手を止め、顔を真っ赤にして下から睨みつける。アランは渋い顔で舌打ちする。

「うるせーな。お前が花の世話してるんだろ？ 早く先生に言って来いよ」

床に流れた水はかなり広がっていた。これだと誰かがすべって転んでしまう気がする。タツヤはこれ以上霧枝とアランがケンカしていても意味がないと思った。それより早く床をふかないとみんなが困る。教室内にいる希やハクアとも一瞬目が合った。

人の役に立つ 難しい、その言葉がふいに頭に浮かぶ。

「十和田さん、僕がこれ片づけるよ。話しかけたの僕だし」

「えっ……！」

タツヤは教室のロッカーからバケツと雑巾を持って来て、割れた花瓶をバケツに入れ、雑巾で床の水をふいた。水の量はそれほどもなく、すぐに床はきれいになった。怒鳴り合うよりもすぐやったほうがいいや、とタツヤは胸の中で思う。

「十和田さん、バケツはここに置いておくね。後で先生に謝ろうよ」
そう言っただけのロッカーの上に置き、濡れた雑巾を絞るために廊下へ出た。クラスはそれで静かになり、アランも清々した顔で友達と話しながら向こうに行った。

霧枝は小走りにタツヤの後ろを追いかけてきた。タツヤは水道で雑巾を絞っている。「ねえ、ちよつと、何で丘野くんに謝らせないの?！」

「今のは誰も悪くないよ。しょうがないって」

「でも……」

「これでいいって」

タツヤが言うと、霧枝はそれきり黙ってしまった。

朝のホームルームの後、二人で晴海先生の前に行き、割れた花瓶を見せて謝った。

「先生、すいません。不注意で落として割れちゃいました。ごめんなさい」

結局、アランとぶつかったことは言わなかった。タツヤがそれを言わないので、霧枝もあまり騒ぎ立てず、横で静かにしていた。

「まあ、しょうがないわね」

晴海先生は何となくスッキリしない顔を見せながら、許してくれた。

「先生、どうしたらいいですか？ 捨てちゃうのはもったいなくて

……」

霧枝が少し伏し目がちに聞く。

「そうね、もし接着剤とかで直せるようなら直してくれる？ 破片

で手を切らないように気をつけてね」

晴海先生は、学校の物が壊れたとき、「じゃあ、先生がやっつくわ」という言葉はまず言わない。自分たちでどうにかできるかやってみなさい、という答えが返ってくる。晴海先生が美星小学校に来たとき、全校朝礼のときみんなの前で話したことをタツヤはなぜか今でもよく覚えている。

晴海先生は理系大学の出身だが、大学生のとき、エクアドルで一年間ひとりで過ごし、現地の子どもたちの面倒をたくさん見たと言っていた。日本の子どもは、ないなら買う、壊れたら買う、という考え方をするけれど、エクアドルの子どもは、ないなら作る、壊れたら直す、と最初に考えると言う。そのとき先生は将来どんな仕事をしたいか考えていなかったが、エクアドルに行き、日本に帰って小学校の先生になりたいと決心したと言った。

だから、買えないと泣く、壊れたら泣く、というのは幼稚園までで卒業し、小学生になったらねだったり泣いたりする前に自分で考えよう　と、このことにいつも厳しかった。

「接着剤は買わなくても用務員室にあるから、もらって来なさい」
晴海先生の声はやさしかった。

給食が終わった後、二人で用務員室に行き、接着剤を借りてきてタツヤの席で修理をした。花瓶は、真ん中あたりから斜め下に向かってパッキリと割れていたが、破片がぴったり合わさったので接着は大丈夫だった。霧枝もほっとした笑顔になる。

希も心配そうにやって来た。また、アランもいつもならすぐ校庭に遊びに行くのだが、このときはチラリと様子見に来た。ただ、アランから謝りの一言はなかった。霧枝もアランを完全に無視して、タツヤとだけ話していたので、アランはもう関係ないなという顔をして教室を出て行った。一方ハクアは、給食を満腹以上に食べた後、自分の席に座り、修理に夢中になっているタツヤの背中をじっと見ていた。希は、ずっと不機嫌そうにタツヤを睨んでいるハクアの視

線に気づいたが、何となく言い出せなかった。

昼休みは接着作業で終わり、放課後、霧枝と一緒にちやんとくつついたかを確かめた。希は習い事があるので帰った。アランはもう来なかった。ハクアはなぜか腕組みをして席に残り、まだ帰らない。今日は他の女子と遊びに行ったりしないのだろうか。

ともかく、くつついた花瓶を持って水道で水を入れてみると、割れ目に穴が空いた場所があるようで、水が少しずつこぼれ出した。仕方なく、濡れた花瓶を一旦ふいて教室に戻った。霧枝がため息をつく。

「あーあ、どうしよう……」

「紙粘土でふさいでみる？ この前、図工で使ったやつが余ってるんだ」

「あつ、そうだね。いいかも。アッシー、よくそんなこと思いつくね」

霧枝だけは朱鳥タツヤをアッシーと呼ぶ。

「まだうまく行くかわかんないよ。でも、見た目がすごく修理したって感じになるかもね」

「じゃあ、あたしの持つてるビーズで飾ろうよ。明日持つてくるね」そして、明日タツヤは紙粘土を持って来て、霧枝がビーズをたくさん持つてくる約束をした。修理中の花瓶をバケツに入れ、ロツカーの上に置く。教室にはほとんどクラスメイトの姿はなかった。みんな帰ったのだ。そう思っていた。

「あのさ、たつつん」

二人の後ろにハクアが立っていた。明らかに不満げな顔をしている。

「何でたつつんがそれやってるの？」

「えっ……？」

ハクアの口から出たのは、思いも寄らない言葉だった。

「アランはさつさと帰ったじゃん。あいつ、先生にも謝らないし」それはそうだけど、ハクアはなぜ怒っているのか分からない。タ

ツヤが話そうとすると、霧枝がさえぎって前に出た。頭ひとつ低いので、後ろに束ねたポニーテールが荒馬みたいにタツヤの鼻先で跳ね上がる。

「ツッキー、何でアッシーに向かって怒るの？」

「たつつんが悪いからだ」

ハクアは直球でそう言い放った。

「な、なんでだよ」

「ねえ、それはアランに言うことじゃない？」

霧枝がきつい口調で言い返す。アランの呼び方はアランのままだ。「今朝のは、アランと霧枝が二人で謝りに行くものだ。直すのだから二人がやればいい。たつつんが間に入るから変になった」

「別に変なことじゃないって」

タツヤは首を横に振り、ランドセルを担いだ。ハクアの相手をするより、もう早く帰りたい。夕食の支度だつてしなくてはいけないのだ。だが、ハクアは一步も引き下らない。

「いや、変だよ！」

「……そんなことないよ」

「たつつん、見てないのか？ アランは笑って帰ったんだぞ！」
「あのさあ、それなら、テリーがアランを注意すれば良かったじゃない！」

霧枝がさらにヒステリックな声を上げる。タツヤはそのせいで少し気持ちが冷静になった。だが、ハクアはまだ仁王立ちのままだ。「それじゃ、たつつんが変わらない！ あたしはたつつんに怒ってるの！」

もう何に腹を立てているのかよく分からなくなっていた。霧枝の横顔を見る。もしアランと一緒に修理することになっても、仲の悪い二人が絶対にうまくやるはずがない。アランは霧枝と口ゲンカして、霧枝をひとり置いて帰るに違いない。ハクアは何も考えないで、ただ怒っているだけなのだ。ハクアはタツヤに変われと言ったが、タツヤは霧枝を手伝う気持ちを変えたいとは思わない。

「うるさいな」

「なっ……！」

ハクアは言葉を失う。タツヤから突き放したのは初めてかもしれない。

「花瓶はクラスのなんだ。それが壊れちゃったから何とか直してるんだよ。アランにやらせたら絶対に直らない」

霧枝は振り返り、目を丸くした。タツヤはハクアを一直線に見つめている。

「怒鳴るだけなら、構うなよ」

タツヤはハクアに対し、冷たく言い切った。三人しかない教室が一瞬で静まる。ハクアは下唇をきつく噛んだまま、何も言い返して来なかった。タツヤはこれで済んだと思ってそっぽを向き、反対側のドアに歩いて行った。霧枝が慌てて後についてくる。タツヤは早くこの場から離れたかった。そして、希がここにいないくて良かった。前にハクアの応援団になると約束したわけで、こんなところは希に見せたくないと思った。

霧枝はずっと真つ赤な顔をして、昇降口まで黙ってついてくる。校舎内に人が少なかったせいか、何となく距離が近かった。霧枝とは帰る方向が違うので、校門のところで別れた。霧枝の表情はすっかり明るくなっていて、「また明日ね！」と元気に手を振り合う。その後、少し気になって昇降口を振り返ったが、ハクアはまだ校舎から出てこなかった。

夕食はちゃんといつも通り作ったはずだが、味見をしてもいまいちだった。廉太郎と由果は満足げに食べていたが、タツヤはあまり美味しく感じなかった。紙粘土をランドセルに入れて、その夜は早々と寝ることにした。

花瓶は、昼休み、割れ目に沿って木工用ボンドをたっぷり塗りと塗り、その上から紙粘土を少しずつ貼りつけ、はがれないように接着した。そして、やわらかい紙粘土に、霧枝の持ってきたビーズや携帯のデ

コレーションパーツをボンドで次々に貼っていくと、何となく最初からそういう飾り付けがあったように見えてくるから不思議だ。

飾り付けは希も楽しそうに混ざってきたので、タツヤは、この作業は幼稚園からの仲良し二人組に任せて、男友達と校庭へボール遊びをしに行った。アランも一緒だったが、普通に楽しく走り回った。ハクアのことは、ほったらかしのままで。もちろん、希にハクアとロゲンカしたことは言っていない。希からも何も聞いて来なかったので、ハクアも希に話してないと思う。なら、もう済んだのだと思う。

ただ、霧枝とアランの仲の悪さは変わらなかった。放課後になり、紙粘土が乾いたのを確かめて、タツヤと霧枝と希の三人は花瓶を水道へ持っていった。少しずつ水を入れてみると、上まで入れても水は一滴もこぼれ出なかった。

「あー。すごいね。アッシーのおかげだよ！」

霧枝はタツヤの顔を見て、本当にうれしそうに目を輝かせる。普段、クラスメイトに注意することが多い霧枝だが、今回は本当に困っていたのだと思う。

「うん、うまくいったね。これならまた使えると思うよ」

すると、ちょうど水を飲みに来たアランが、水の入った花瓶を横から眺めていった。だが、霧枝もアランも目を合わさず、口もきかず、やっぱりアランから謝りの言葉は出なかった。

アランが教室に戻った後、希が霧枝に話しかける。

「丘野くん、少しは霧枝ちゃんに悪いって思ってるみたいだね……」

「はあ？ 何で？」

霧枝は、希が相手でも遠慮なくきつい言い方をする。

「だって、これ直してるときいつも見に来るでしょ？ 直るか気にしてるんだよ」

「ツッキー……。ダメ、それはやさしすぎ。直らなかったら笑おうと思ってるんだよ、あいつは」

いや、それは厳しすぎだって、とタツヤは横で思った。

ただ、アランが最後まで霧枝に謝りに来ないのは、タツヤも残念な気分だった。ハクアが怒鳴ったのも理由はわかる。だけど、花瓶はこうしてちゃんと直ったし、霧枝とアランの仲が良くなるはずもないし、結局自分が霧枝を手伝って良かったのだ、と思った。

タツヤがランドセルを取りに席へ戻ると、ハクアが深海魚みたいに暗い顔をして机にへばりついていていた。一応、報告というか声をかける。

「花瓶、ちゃんと直ったよ」

「……あっそう」

何だか嫌みのある返事だ。目を合わせようとしめない。

「具合悪いの？」

少し沈黙があった。ハクアは、机に投げ出した両腕に顔を埋め、低くこもった声で答える。

「……やけ食いしたい」

「やけ食い？」

「昨日の夜、何も食べてないんだ」

「バランス悪いなあ。ちゃんと食べたほうがいいよ」

タツヤは、お菓子を食べすぎて夕飯が入らない小さい子を叱るような気分だった。「うるさいな」

まるで昨日の言葉をそのまま言い返してきた感じがした。

「怒鳴るだけなら、構うなよ」

「リピートなんて本当に子どもだ　と思う。」

「別に怒鳴ってないし……」

すると、ハクアは無言でいきなり立ち上がり、振り回すような勢いで赤いランドセルをガバツと背負い、さっさと教室を出て行った。それから、ハクアが何気ない軽い相談を話しかけてくることは急になくなった。

第3話 『花瓶の欠片とキーボードプレート』 2 / 2

水曜日の放課後、七月の「天文新聞」を作るために、図書室で希と話していて、希が少し変わったことを言い出した。

「山都小に落ちた隕石なんだけどね、あれ、もうちょっとハクちゃんに聞きたいの」

七月は夏の大三角形のことを書くことは決まっている。それだけだとタツヤは思っていた。

「え……隕石のこと？」

「うん。なんか『天文新聞』を毎回読んでくれるクラスの子から、あの隕石のこと書いてって言われちゃったの。他の子からも言われて……それで、『うん』って言っちゃって……」

ちよつと希らしくない、もごもごした話し方をする。

「えへへ。どうしょつか」

希は無理に笑っている感じた。タツヤがここ数日ハクアとまったく話していないのを心配しているのだろうか。

「書くのはいいと思うけど……ハクアに聞けばいいの？」

「ううん。今日、ヒマだつて言うからもう呼んじやつた。ちよつと待っててね」

タツヤが何か言う前に、希は図書室の奥に走って行き、ハクアの手を引いて戻ってきた。別にケンカしているわけではない。けれど、むつすり顔のハクアが目の前に座ると、やっぱり気まずかった。

「はい。ハクちゃんが来たよ」

希はどうも変な言い方だ。タツヤはまわりを気にしつつ、小さい声でハクアに聞いた。

「隕石のこと、図書室で話していいの？」

「別に」

やっぱり機嫌が悪い。話していいのか悪いのかよく分からない。「まずいならハクアの家とかに行く？」

「別に」

タツヤはちよつとイライラした。この前、不良に対して強かったハクア、勇気があったハクア、廉太郎や由果とすぐに打ち解けた明るいハクア、外国人に対しても落ち着いていたハクア、良いところはたくさん見たはずなのに、今は少し憎たらしかった。タツヤが話を聞いて、ちゃんと答えてくれるのか不安になり、希の顔を見る。なのに、希はなぜかニコツと笑った。

「ハクちゃん、落ちてきた隕石を見たんだっけ？」

希が聞きはじめる。タツヤは希に任せようと思った。

「ううん、見てないよ。あたしお風呂入って。でも、すごいのが来たのはわかった」

「それって、落下した音が聞こえたの？」

小学校を倒壊させる威力のある隕石だ。衝突音もすごかったと想像できる。

「でつかい音は聞こえたけど、でも、落ちてくる前にわかった」
そんな話を聞くと、ハクアは特別な力を持っていることを考えたくなる。

「恐くなかった？」

「ううん、それは平気。あたし一度隕石の落下で覚醒してるから」

「えっと……」

希の言葉が止まった。前にもハクアから少し聞いた覚えがあるが、超能力に目覚めたのは今回の隕石でなく、何年か前だと言っていた気がする。今日は図書室にいる人はたまたま少ないが、それでもタツヤはもう少し声を落とした。

「なあ、それって、どういうことなの？」

「あれ、訓練学校のこと言わなかったっけ？」

「訓練学校？ ううん、初めて聞いたよ」

すると、ハクアは急に弱った顔になった。

「あ。えーと……ううー……えっとね」

「待って、ハクア」

タツヤは極限に小さく落とした声を出す。

「それはしゃべったらまずいことなのか？ 月本さんや僕が危険になるとか」

「ん？ あ、全然平気だよ」

ハクアは普通の声であっさり言った。

「訓練学校にはね、あたしみたいな子が何人かいるんだよ」

「えっ？ じゃあ、それが山都小の前にいたって言う施設なの？」

「うん、そう。たつつん、ほんとよく覚えてるねー」

当たり前だ、とタツヤは言いかけて止める。こんな重大なこと忘れるほうが不思議だ。

「施設？ ハクちゃん、施設にいたの？」

希は、前に聞いた話をもう忘れていた。ハクアが他の子からおかずに奪っていた、とか言っていた施設だ。そこに同じ年くらいの超能力者がいるような話しぶりだ。ここまで聞くと、もう完全に天文新聞に書ける内容ではない。

「でもね、あたしも覚醒してないときは、のぞみんやたつつんみたいに普通に生活してたんだよ。でも、三年生のとき、近くに隕石が落ちたらしくて、あたしは小さくて気づかなかったんだけど、適性があつてメテオドロップが発見されちゃったの」

メテオドロップ 隕石の落下で目覚める超能力。ハクアは最初にそう説明したのを思い出す。発見されたというのはちよつとイメージがでなかった。ハクアが自分からその施設に入った感じではない。

「発見されたの？」

「うん、訓練学校のリーダーに見つかった。地球の外に衛星が飛んでるみたいなんだ」

「……ねえ、ハクちゃん、エーセーって？」

希が困った顔で聞く。話の範囲が普通の生活を飛び超えすぎていて、かなり手に届かない感じた。

「えーと、何だろう、宇宙船？」

「宇宙船かー。『テロ口軍曹』みたいな感じ？」

とアニメ番組の名前が出てきて、タツヤは絶対に違うと思ったが、うまく説明できなかった。それよりもハクアは超能力者として一度発見されて、特別な施設に入っただのに、どうして普通の山都小に通っていたのだろう。もしかして、山都小は普通の小学校じゃないのかも。それで何かトラブルがあって、隕石がわざと落とされて、消滅したとか？

「テロ口軍曹、面白いよな」

「あれ？ ハクちゃんのうち、テレビあつたっけ？」

「ん？ あー、立ち読み、立ち読み」

「あつ、それはダメだよ」

女の子二人で話が変わる方向に行こうとしていた。二人して声もだんだん大きくなってきている。まわりに気を配っているのはタツヤだけだ。

「あのさ、そんなことより、その訓練学校では何をしてたの？」
声を落とす。

「別に。訓練とか」

急に冷めた口調に戻った。タツヤにはもうハクアの考えが何だかよく分らない。

「訓練とかって……あの能力を何度も使うのか？」

「そうだよ。最初はこんなにラクラクと発動できなかったんだ。ほれっ」

そう言つてハクアはいきなり右手を伸ばし、タツヤの耳をつまもうとする。タツヤは慌ててその手から逃げた。もう音の無い世界は嫌だ。今の不機嫌さだと、左手ですぐ解除してくれるとも思えない。
「よせてー！」

「アハハッ、ごめん、ごめん。たつつん、耳が敏感だったの？」

「そうじゃない！」

「朱鳥くん、声がおつきいよ……図書室だよ」

希が人差し指を唇に立てて注意する。まわりに気を付けていたは

ずなのに、つい少しパニックになってしまった。ハクアは変に意地悪げな目つきで、タツヤをじっとりと眺めていた。イラだちが胸に戻ってくる。ハクアを睨むと、向こうは歯を剥いて返した。本当に子どもだ。

「ふーん、訓練が必要なんだね」

「そうだよ。最初はうまく発動や解除ができないし、寝てる間に勝手に力が暴走したり、使った後、気を失ったりするんだ」

「えっ……ちよつと恐いね」

希が真面目な顔に戻る。

「うん、恐いなんて感じじゃないよ。メテオドロップは、覚醒してすぐのときはだいたい暴走するんだって。だから、訓練学校に入ったら、安全なんだ。もしあの学校に連れて行かれなかったら、あーたし死んでたんじゃないかなあ」

タツヤも希も言葉が出なかった。

死んでいたかもしれない、と普通に話せるのも驚きだったし、死にかけるほどの危険な経験をした子どもが、その学校にはハクア以外に何人かいるらしい。おかずを奪っていたとか聞いたとき、もっと幼稚園みたいにはのぼした施設を想像していた。だけど、聞くほどに、死の危険があるくらいの場所みたいだった。仲が良いも悪いも、みんな精神的に限界ギリギリの生活だったのかもしれない。

ハクアはそれでも笑顔で話す。どういう心臓の強さなんだろう。

「そんな恐い顔しなくても、先生とかお医者さんがいるから大丈夫だよ。ただね、これは使い続けないと、どんどん力が落ちちゃうんだ。で、最後は消えちゃうんだよ」

右手を見つめながら話す。希と比べても、普通の女の子の手だ。体に特別な訓練を受けたという感じはない。死ぬとか消えるとかいう言葉を聞いて、タツヤはだんだん背筋が寒くなってきた。

「その力……使い続けないとダメなんだ」

「うん。どんなつまらないことでも、たまに使わないとダメ。体の具合が悪くなる」

「消えるってどうなるの？」

「先生は、死ぬとか、植物人間化するとか言ってたなあ。植物人間化ってのはよく分かんないんだけど、なんか眠ったままご飯も食べられないらしいの。だから困るんだよね」

これ以上、ハクアから能力の話聞いてもいいのだろうか、とタツヤは思った。希も気分の悪そうな顔をしているし、これくらいでもう今日は帰りたい。完全に天文新聞を書く気持ちではなくなっている。ただ、最後に少し訓練学校から山都小に移った理由だけが気になった。

「でも、そこを出て山都小に行っただろう？ 訓練学校はいつ卒業したの？」

「ん？ 違うよ、あたし脱走したの」

「えっ?!」

タツヤはまた声を出してしまった。希も呆気にとられて目を丸くしている。

「うん。ほんとね、訓練学校を出たら危ないんだ」

「それは 訓練途中だったから？」

「そうじゃないよ。訓練学校で、キープタブレットっていう特別な薬が配られるんだけど、それを飲んだとメテオドロップのいろんな反動とか、まずいことが抑えられるんだ。だから、出たらちょっとヤバイんだよね」

「反動って……？」

「ん？ だから、気を失ったり、記憶が消えたり、感覚がおかしくなったり、とか」

もうタツヤも希も頭が混乱していて、大まかにしか整理できていない。つまり、超能力は使い続けないと危険で、でも力を使っても薬をちゃんと飲んでないと危険で、じゃあ、ハクアはその学校の外に出たら、本当に危ない状態じゃないか。ここには超能力者のことが分かる先生も医者もない。正直こんなに恐い話とは思わなかった。ただ、ちよっと便利な能力を持つただけだと思っていた。

「なあ、ハクア、何で訓練学校を出たんだ？ そんなに……危ないことを知ってて」「それはさあ、もう、あの三段重ねのギガバーガーだよ。あれをテレビで見ちゃってさ、もう食べたくて食べたくて！」

タツヤは脱力した。肉か。結局、肉だった。

「ハクア……」

どうしてハクアはこんな話をずっと黙っていたのだろう。ハクアとクラスメイトになってまだ一ヶ月だし、知らないことがすごく多いことに驚いた。希もかなり沈んだ顔をしているが、きつと同じことを考えていると思う。応援団と言った自分たちの言葉が、また軽々しく感じた。

「脱走って 連れ戻されないのか？」

「うん、平気。たぶんもう見つからないよ」

ハクアは余裕の笑顔を見せた。本当に信じていいのか、正直タツヤには分からない。

今月の天文新聞はまだ隕石のことは書けないね、と希はノートを閉じて、このまま三人で帰ることにした。学校の堀沿いに並ぶ桜やイチヨウの木々からセミの声が暑苦しく降り注ぐ。

タツヤとハクアは図書室であれだけ話したが、仲直りしたわけでもないし、気が重い話だったから、話しているのはずっとハクアと希の二人だった。希は、霧枝から少し分けてもらった携帯のデコリースイッチをハクアに楽しそうに見せていた。

「ハクちゃんも携帯持ったらいいのにね」

「うーん。携帯って、逆探知されてるみたいでさ、なーんかイヤなんだよね」

「そっか、現在地はわかるみたいだしね」

ゆっくり歩くうちに、近くの広い公園の前を通りかかった。クラスメイトの男子が何人か集まりサッカーをして遊んでいた。声をかけようとしたが、アランの姿が目に入って少しためらった。公園に

は他にも下の学年の子たちが何人か遊ぶ姿があった。

「ごめん、水飲んでくる」

そう言ってハクアが公園に入ったので、タツヤと希も公園の中に入った。アランは三人の姿に気づいて、急にこちらへ走ってきた。Ｔシャツと半ズボン姿だが、真っ赤な顔をして汗をびっしょりかいている。アランもまた不機嫌な顔をしていた。

「花瓶……直ったのか？」

「うん、直ったよ」

希は隣りでやっぱりという顔をして見せた。だが、アランの目つきは鋭いままだ。

「お前さ、十和田にいいとこ見せても、いいことなんかないぜ」
「なっ、何だよ、いきなり」

タツヤは驚いた。困っていた霧枝を手伝っただけなのに、ハクアと言いつつ、アランと言いつつ、なぜか突っかかってくるのだ。タツヤは悪いことをしたつもりはない。

「十和田は人のことなんか気にしないから」

アランは霧枝が嫌いなのは知っている。ただ、何か気になる言い方だった。

「ねえ、霧枝ちゃんを変なふうに言わないでよ」

希が我慢できず、横から口を出した。

「あ、ごめんな」

アランは希には素直に謝ると、もう一度タツヤの顔をちらつと見て、サッカーに戻っていった。希は霧枝の悪口を言われたせいで不機嫌になり、タツヤも少し話しかけにくくなった。そこにさっぱり顔のハクアが戻ってくる。希の変化にすぐ気づいた。

「あれ？ あんたら、もめた？」

「……もめてないよ」

「うん。ハクちゃん、大丈夫だよ」

それから、クラスメイトの男子がタツヤにサッカーに入るかと声をかけてきたが、タツヤはそろそろ夕食の支度で帰ろうと思ってい

たので、遠慮した。アランはタツヤの声には振り向かなかった。

「帰ろうよ」

気持ちを变えてタツヤが言うと、ハクアは「うん」と返事をしながらも、視線は少し違つところを見ていた。不機嫌というよりは、緊張したような恐い顔をしている。明らかに様子が变だった。両手の拳を握り締め、公園の外を用心深く睨んでいる。

そつと、希が声をかけた。

「ハクちゃん、どうしたの？」

「あの車の中……」

ハクアが声を低くして、道路を指差す。公園の外側の道路脇に、シルバーの車が一台停まっていた。サングラスをかけた若い男の人が運転席に乗っている。車の中に他にも人が乗っているようだが、公園からはよく見えなかった。確かにサングラスは見た目が少し恐いが、夏ならば別に珍しくない。

「あいつら、ちよつとやばいかも」

ハクアは警戒心を強め、ますます険しい顔つきになる。サングラスの連中だなんて、少年探偵の漫画みたいだけど、そんなことは普通起こらないと思う。どうしたのだろうか。

「……ハクちゃん、知ってる人なの？」

「いや、そうじゃないけど、あたし、もしかして見つかったかな……」

「えっ　？」

タツヤと希はそろつて息を飲みこんだ。

第4話 『二人乗りとクロスウィンド』 1 / 2

公園の外の道路に停まったシルバーの車。運転席には黒いサンダラスの若い男。車の中にも何人か乗っている気配がする。朱鳥タツヤがよく遊びにくるこの公園で、あまり見かけない感じだった。寺野ハクアはすつと横に動き、タツヤの陰に隠れた。

「でも、ちよつと年いつてるかな……？」

よく分らない言葉を口にする。見覚えがあるようでもないが、何となく避けたい感じなのだろうか。

あたし、もしかして見つかったかな……？

そんなふうにハクアが口走ったせいで、月本希も少しそわそわしていた。タツヤだけは心配すぎじゃないかな、と思つて背伸びをする。ただ、ハクアがタツヤの陰から動かないので、帰るのはもう少し待つことにした。

タツヤの同級生の男子たちは、相変わらず公園でサッカーに熱中している。その中で丘野アランは運動神経が良く、オレンジの髪が目立つので、よくボールが回ってくる。タツヤも足は自信があつて、アランとは毎年必ずリレー選手に選ばれているくらいだ。アランは勝負事にはやたらこだわる性格で、勝ったときは何度も自慢するし、負けたときはまったく話題にしない、そんな感じだ。タツヤはそういうアランが嫌いではない。

公園の入口に、自転車に乗った女の人が出て来た。自転車を停めて、公園で遊んでいる小さい学年の男の子たちに向かって声をかける。迎えに来たみたいだ。

「えー、まだー」

と男の子が大きな声でわがままに答えた。母親はふいに携帯が鳴つて、バッグから出して電話をしまじめた。すると、例のシルバーの車がすると動いた。後部座席のドアが開き、若い男が飛び出してくる。黒っぽい帽子をかぶり、顔はよく見えない。男は、電話

中の母親に足音も立てず近寄ると、自転車のカゴに入ったバッグをつかみ取った。

「あつ?!」

最初に気づいたのはタツヤたちだった。男はバッグを脇に抱えた。母親は電話に注意を取られていたが、自転車が揺れたので、バッグを盗られたことに慌てて気づいた。

「えっ?! あつ、ちよつと!」

母親は男を追いかけようとした。ところが男は、自転車を母親のほうに向かって蹴飛ばし、車に逃げた。母親は自転車の下敷きになつて倒れた。公園の入口近く、タツヤたちがいる本当にすぐ目の前の出来事だった。

「ドロボー!」

母親は叫んだ。

「非常事態だ!」

ハクアが叫んだ。

タツヤは一瞬の出来事に目を奪われていたが、ハクアの大声に驚いた。

「あいつらは追跡隊じゃない、泥棒じゃないか! たつっん、何とかするぞ!」

ハクアは拳を握り、野獣のように目をランランと輝かせている。

「おいっ、何だ?!」

アランがそばまで駆け寄ってきた。

「たつっん、ちよつと借りるぞ!」

ハクアはそう言うと、右手でタツヤの足を握り、いきなり力を抜き取った。タツヤは足の力を借りられるのは初めてで、すぐに膝がガクツと来た。この前ハクアに倒された不良たちはこういう感覚だったのか。

それより、足の力を借りてどうする気だ。まさか車を追いかける気なのか。ハクアが鬼気迫る表情で、希の顔を見る。

「月本さんはやめろ!」

タツヤは咄嗟に叫んだ。すると、ハクアは希から視線を外し、アランに向き合う。

「まあいい、援軍が来た！ アラン、お前、足早かったな。借りるぞ！」

「はっ？ 何を？」

「ハクア、待てよ！」

タツヤの声も届かず、ハクアはアランの足に触れて力を奪った。アランはふらふらつとよろめいて地面に尻もちをついた。アランは驚き、言葉を失っている。前髪からのぞくおでこに猫の肉球マークのあざが出ている。これがハクアの超能力『レンタルフォース』で力を借りられた証だ。

「ハクア、追いかけるなんて無理だ！」

「いや、あの自転車を借りる！」

ダメだ。ハクアは本気だ。

「わかった。だったら、車の番号を」

「あたしは視力が悪い。じゃあ、たつつん、後ろに乗れ！」

はいもいいえもなく、ハクアはタツヤの腕を強く引つ張ったまま、母親の自転車を起こしてまたがった。赤いランドセルを前カゴにぶちこむ。そして、タツヤの腕をつかんだまま思いきりペダルを踏み、走り出した。これじゃあ、ハクアが自転車泥棒みたいだ。タツヤは脚力が弱った状態だが、転びたくない一心で後部座席にしがみつき、何とかお尻を乗せてまたがった。

「おばさん、これ借りるね！ バッグは絶対取り返すからね！」

ハクアは振り返りそう言い残すと、前を向いてペダルをさらに強力に踏み込んだ。

「えっ？ えっ？ ちよっと！」

母親がうるたえるのも構わず、ハクアとタツヤの二人乗り自転車はぐんぐん加速していく。犯人の車が逃げた道を、恐ろしいような

スピードで、風を切り、一直線に突き進んでいく。公園で鳴くセミの声があつという間に後ろに遠のいた。

前方を見ると、だいぶ先だが、運良くシルバーの車が最後尾で信号待ちしているのを発見した。だが、信号が赤から青になり、シルバーの車が右に曲がっていく。

「たつつん、あの銀色だよな？」

「うん、そうだと思う！」

「オッケー！ ターゲット、ロックオン！ ファイアー！！！」

ハクアは立ちこぎの前傾姿勢でフルスピードに突入した。

タツヤは振り落とされないように、夢中で後部座席を握りしめる。ももから下に力がまったく入らない異常な感覚。一方、自転車はトップスピードで突っ走り、今にも腰が宙に浮きそうで、声も出せずに体だけが縮こまる。自転車はこんなに速く走れるものだったのか、という驚きにも包まれる。

犯人が右折した交差点は、大きな道路と交わっていた。ハクアはスピードをまったく落とさず、右に曲がり、歩道へと入った。まるで人をひきそうな勢いだ。カーブするとき反動でガードレールにぶつかりそうだったが、ハクアが左足でガードレールを蹴り返し、見事なバランスでスピードを保った。もう無茶苦茶だ。

そして、再び前方にシルバーの車を目で捉える。ハクアの足に力が入る。

「たつつん、のぞみんに説明させといて」

「えっ？」

「携帯持ってるんでしょ？」

「わかった」

何が分かったのか自分でも分からないが、タツヤはポケットから携帯電話を取り出し、希にコールした。希はすぐ出てくれた。

「朱鳥くん？」

「うん、僕だ」

「いまどこなの？」

「ハクアと自転車で追いかけてる」

「ダメだよ！ 危ないよ！」

「わかってる。車の番号を見たらハクアを止める。ごめん、さっきのお母さんに言っておいて」

「えっ？ うん、うん でも」

車が道路をまっすぐ走っているせいで、ハクアも歩道をフルスピードでひたすら直進している。距離は少しずつ縮まっている気がするが、歩道の段差があると、後輪がバウンドして跳ね上がる。タツヤは今にも放り出されそうだったが、片手の力で懸命にこらえた。

「あと、アランにも」

アランはパニックになっていると思う。希に何を説明してもらったらいいのかよく分からない。

「いいの？」

「わかんない！」

タツヤは電話口で悲鳴みたいな声を上げた。

「左に曲がるぞ！ 電話をしまえ！」

ハクアの命令が飛んでくる。タツヤは思わず通話ボタンを切り、携帯をポケットに突っ込んだ。両手で後部座席を握り、顔を伏せた瞬間、体が大きく左に傾いた。Y字の交差点を左へと突き進んでいく。ハクアは他の車があるかと歩行者がいようと、まったくスピードを落とさない。横から来る車にぶつからないように、ギリギリのタイミングでハンドルを操り、一気に道を駆け抜ける。

何の恐れもなく立ちこぎするハクアの日焼けした背中の上に、確かにシルバーの車の姿が見えている。ただ、番号はよく見えない。こんなスピードで番号を見るなんて無理なんじゃないか、と本気で思った。それなら、どうして追い続けているのか。

「ハクア！ もう無理だよ！」

汗ばむハクアの背中に向かって叫ぶ。

「弱音を吐くな。あたしを信じる！」

後ろに振り向きもせず、ただ前方のターゲットだけを見ている。

もしかして、ハクアにいま自分の視力を貸せば、犯人の車の番号が分かるのだろうか、と頭によぎって、その考えをすぐ振り捨てた。タツヤは視力を失い、この猛スピードの自転車に乗っていられるわけがない。

「番号は見えない?!」

「小さい数字は無理だ。大丈夫、車のスピードがさつきより落ちた! あいつら、こっちに気づいてないな。たつん、追いつけるぞ!」

だんだん草の匂が強くなってきた。美星みほし町の中心を流れる大きな川に近づいている。道の先には鉄橋がある。犯人の車はそれを渡ろうとしているかもしれないと思った。

「たつん!」

「なに?!」

「あいつら、橋を渡らないで、河川敷のほうに曲がって行くぞ!」

ハクアの言葉通り、車のスピードが落ちて、横道に入り、河川敷へと昇っていく。二人乗りの自転車も少し安定した速度になり、確実に後ろをついていく。ただ、河川敷の砂利道になると、後輪が躍るように跳ねて、タツヤの体をオモチャみたいに何度も揺さぶった。振り落とされないよう、体を支える両手に力をこめる。

「ハ・ク・アツ、深・追い・するのは・危険だ・よっ!」

砂利の振動で、勝手に声が弾んでしまう。

「たつん、悪いけど、あたしさあ　追跡されるのは大嫌いだけど、追跡するのは大好きなんだ!」

ハクアは息ひとつ乱さない。そして正義のスイッチが入っている。ダメだ。何を言っても通じない。タツヤはどうやって無事に帰るかを考えようと思ったが、砂利道が考えを激しく吹き散らした。

「あいつら停まるぞ。よし、一気に寄せて片付けよう!」

すごい言葉だった。ここまで来たら、もうハクアを　もうこれ以上ケガさせないように、守るしかない。タツヤは覚悟を決めた。

第4話 『二人乗りとクロスウィンド』 2 / 2

ハクアは車が停まってから引ったくり犯人たちに近づくのだと、タツヤは思い込んでいた。この前、不良たちに立ち向かったときのように。

だが、その考えは甘かった。

夕暮れ迫る川の上に、巨大な白い鉄橋が伸び、橋にはたくさんの車が連なっているが、河川敷には人の姿も、鳥の影も見当たらない。見晴らしはいいけれど、風の音もなく、かえって恐くらいだった。

公園からここまで必死に追いかけてきたシルバーの車が、土手の上の道路で停止する。ハクアは自転車から下りず、そのまま走って距離を一気に縮める。後部座席が少し開いて、母親から引ったくり犯人の男が出てくる。手には盗んだバッグを持っている。

「そいつを返せえっ！ クソヤロー！」

叫びながら、ハクアは自転車の前輪から男に突っ込んだ。思わず目をつぶる。自転車全体に大きな衝撃が走る。足が踏ん張れなくて体が左右に揺れた。人が倒れる音がしたが、どうなったのかよく分からない。まさか自転車ごと突っ込むなんて想像もなかった。

キッと自転車のブレーキがかかり、タツヤはガクンとなって目を開けた。

ハクアの背中。自転車の前方に、男の人が大の字に倒れている。男は起き上がらない。

「まず一人目」

ハクアは冷静に自転車のスタンドを起こした。

「たつつんは下りなくていいからね。後はあたしが全部片付けるから」

「ま、待つて……」

全部片付ける。タツヤは背筋が震えた。自転車から下りようにも、足の力はまだハクアに借りられたままだ。気が動転していて、

何かをしようという頭にならなかった。

すると、助手席のドアが開いた。背が高い坊主頭の男が慌てて出てくる。

「おいっ、どうした？ 大丈夫か？」

目の前に、小学生二人と、倒れた自転車と、仰向けになって気を失った仲間。男は一瞬で表情が険しくなり、重々しい足音で草を踏みながら近づいてくる。ハクアは体格がいい男が出てきたのにも全然ひるみなく、一歩前に進み出でぐつと睨み返す。

「おい、人にぶつかつたいて謝りもしないのか、クソガキが！」

坊主頭の男はすごい剣幕で怒鳴った。ハクアが自転車で公園から追いかけてきたことは本当に知らないようだ。だが、いくら大男がすこもうとも、ハクアは視線をまっすぐ外さない。

「ふざけるな！ 人様のものを盗むようなお前らに謝る義理はない！」

「なっ、なに？！ お前、何言ってんだ？」

男は急に様子が変わった。ハクアは不敵な笑みを浮かべる。

「こいつ強そうだし、一応、借りところかな」

そして、足下で大の字に伸びた男の足を、右手で持ち上げる。力を借りると、用済みという感じでポイと離れた。これで大小合わせで三人分の脚力がハクアの足にプラスされた。

ハクアもゆっくり草を踏み、坊主頭の大男に近づいて行く。男がハクアの体を捕まえようと手を伸ばしたが、一瞬の素早いダッシュで横へ回り込み、思いきりふくらはぎをキックした。

「ああっ……！！」

男は悲痛なうめき声を上げ、前のめりに草の上へ倒れた。ハクアはさっさと男の足をつかみ、手を離れた。坊主頭の広いおでこに肉球マークのあざが現れる。これで四人分の脚力。男は急いで体勢を立て直そうとしたが、足の力が入らず、上半身がねじれて、そのまま仰向けに寝転がった。草のつぶれる音だけが空しく響く。

クマのような大男が、今は小学生のハクアに完全に見下ろされていた。河川敷の上を、ぬるい川風がざわざわと通り過ぎていく。栗色のショートヘアが夕焼けの気配に少し染まり、きれいな飴色に変わって見えた。

「二人目か。　　ねえ、あと何人いるの？」

「なつ、なんだ、これ……起きられねえ……ちゅ、中国拳法か？」

男はすっかり戦意喪失し、腕をバタバタさせている。裏返った力メのようだ。「まあ、そんな感じだ。お前、やっぱりすごい脚力だな。ものすごい力が入ってきた」

ハクアは男を悠々と見下ろし、満足げな笑顔を見せる。その強気な目を見て、タツヤは背筋がゾツとする。だが、自転車の上からは金縛りにあったように一步も動けない。

そのとき、車の運転席のドアが開いた。サングラスをかけた細身の男が姿を見せる。仲間が二人とも少女に倒されている様子を見て、舌打ちをした。

「おい、起きろバカ！　ガキなんかどうでもいいだろ！　早く行くぞ！」

サングラスの男は、坊主頭の大男に向かって怒鳴った。

「いや！　それが、変な中国拳法で、起き上がれねえんだ！」

「つたく、面倒くせえヤツだな！　そんな拳法あるかよ」

「ほんとなんだよお！　起こしてくれよ！」

すると、サングラスの男はすつと冷静になった。

「　　まあいい。何にしろ、そのガキにはここで恩返ししないとな」

男は気だるそうに笑い、地面につばを吐く。ハクアは正面から向き合った。

「……恩返し？　そんなくだらないもんよりも、さつき公園で盗ったおばさんの金を返せよ。どうせこのバッグは空なんだろう？」

ハクアは草の上に転がったバッグを指差した。

「なに言ってるこのガキ……」

「言ってるのは、真実だ。悪党め、少しは人の役に立つことをしろ

！

人の役に立つ　ハクアの口からたまに出てくる言葉。これをぶつけると、サングラスの男の口元が激しく歪んだ。

「説教くせえガキだな！　ガキだから許してやるかと思ったが、本気で叩きつぶしてやるからな」

「そいつ、つかまれると変な拳法使うぞ！」

坊主頭の男が叫ぶ。

「へーえ。それじゃあ、これかな」

車の後部座席のドアを開け、金属バットを取り出した。タツヤは息を飲む。あんなもの使われたらハクアは男に近づけない。キックで返しても、金属バットの硬さは危険だ。

男はサングラスを外し、シャツのポケットに差した。

「金も思ったより少なかったし。あーあ、不況ってやだね。いま、すっげえむかついてるからさ、お友達と一緒にボッコボコにしてやるよ！」

そしてバットを構えて踏み出し、一気にハクアの頭上に迫った。

ハクアは金属バットを警戒したが、足下の砂利で滑って、バランスを崩す。だが、咄嗟に横に跳んだおかげで、振り下ろされたバットは紙一重で避けられた。

ハクアは体勢を直してキックを当てようとするが、細身の男も素早くハクアの姿を捉え、バットを水平に振り抜いた。ハクアは驚きしゃがんでかわす。ハクアの背がもう少し高ければ確実に当たっていた。

男は人に向かってバットを振ることに全然迷いが無い。ハクアが挑発したせい、男が子ども相手でも容赦ないのか。ハクアが反撃しようとする、男も後ろにジャンプして距離を取り、すかさずバットをスウィングした。ハクアは慌てて地面に転がり、危険な一撃からは何とか逃げた。だが、さらに金属バットが、男の体の一部みにハクアを打ちのめそうと何度も追い回してくる。

ハクアは近づくこともできず、一旦思い切って距離を取った。か

なり息が上がっている。

「ちっ、金属バットか……」

「手足の短けえガキが大人にケンカ売ってくるんじゃないか！ 超えられない壁がわかったかあ！」

男はバットをこん棒のように構えて再びハクアに突進する。

「ハクア、砂利をぶつける！」

タツヤは叫んでいた。逃げろ、どうして言わなかったのか。タツヤは混乱し興奮し熱狂していた。自分が逃げられないからか。ハクアが勝たないと自分があの金属バットで殴られるかもしれない。そんな恐怖が全身に走ったからか。タツヤはハクアが強盗の男に勝つことだけを一心に祈っていた。

「うんっ！」

ハクアは両手で地面の砂利をすくい、突っ込んでくる男の顔や体にぶつけた。男の足が一瞬止まる。バットを振り上げた男は、胸がガラ空きだった。ハクアが一気に踏み切り、詰め寄って、すかさずキックの体勢に入る。だが、タツヤはまた大声で叫んだ。

「腹は蹴るな！ お尻だ！」

その声が届いたか、ハクアはさらに加速して男の脇の下を潜るように通り抜け、ひるんだ男の背後につき、尻に強烈な回転キックを叩きこんだ。すさまじい音が鳴り、男の体が浮いて、砂利道に突っ伏した。タツヤはさらに叫ぶ。

「バットを蹴っ飛ばせ！」

ハクアは確かにその声を聞き、男の手からこぼれたバットを土手の下のほうへ思い切り蹴り出した。サッカー選手のフリーキックみたいに見事なキック。とんでもない飛距離だった。バットは草の上を跳ね、河原の石にぶつかって、甲高い金属音を鳴り散らした後、草むらに吸い込まれた。

静かな川風が流れる土手　悲鳴を上げて苦しむ細身の男の横で、決着を確信したハクアだけがひとり立っていた。呼吸をひとつ整え

ると落ち着いた表情になり、右手で男の足首をつかみ、脚力を取り上げた。

続いて、ハクアは車の中の様子を確かめる。もう誰も仲間はいなかった。

ハクアはほっとした顔に戻り、ちょこんと自転車にまたがるタツヤと目を合わせた。

「たつつん、悪い、携帯で警察に電話してくれ」

「う、うん。わかった」

タツヤは興奮のやまない手でポケットの携帯を握る。ハクアが勝った。ハクアが勝ったのだ。ハクアが強盗たちに勝ったのだ。

そのハクアがタツヤにゆっくり近づいてくる。栗色の髪がゆったりの風になびく。

「たつつん」

「なっ、なに？」

「助かったよ。ありがとう」

ハクアの熱い左手が、タツヤの足の肌に触れる。ドクン、と胸が波打った。「返すね」というハクアの声とともに、脚力が足に戻ってきた。不思議だが、返してもらったというより、ハクアに与えられたような感覚だった。

タツヤは携帯で110番に電話して、現在地を伝えた。警察への電話は初めてのことで、説明もしどろもどろだったが、すぐに近くの交番からパトカーが来てくれることになった。

それから、希の携帯にもかけて、引ったくり犯を捕まえたことを話した。希は電話口で、「えっ？ えっ？ 車の番号を見に行ったんじゃないの？」と混乱気味だった。タツヤは言われて思い出した。そうだった、どこかでそれを忘れてしまった、とため息をつく。車が停まり、出てきた男に自転車で突っ込んだあたりから、もう後はハクアが犯人たちを倒すことだけを考えていた気がする。

「うん、大丈夫。今回はケガしてないよ」

「ほんと？ 良かった……」

「心配かけてごめんね」

「すぐ帰ってこれるの？ 自転車を返さないと……」

「もうすぐ警察が来るから、そしたら帰れるよ」

「うん。あ、ちよつと待って、丘野くんが」

そう言っていると、希の電話にアランが出た。慌てて替わった感じだった。

「おい」

声は明らかに怒っている。アランと電話で話すのは初めてだった。「これさ、何なんだよ。……俺、どうなったんだ？ もう歩けないの？」

声が少し震えている。分かったのは、希はアランにまだ話していなかったことだ。ハクアとタツヤの帰りを待っているのだと思う。

「いや、大丈夫だよ。ちゃんと元に戻るから」

「そうなんだ。タツヤ、お前、知ってるんだな？」

「えっ……？」

「これって絶対普通じゃないよな」

アランは鋭く言い切った。だが、タツヤは答えに困って「いや……」と返した。

少しの間、沈黙が続く。やがて、アランは「ふーっ」と大きなため息をついて、「わかった。待ってる」と言い、希に電話を戻した。希に少し言葉をかけて、電話は一旦切った。

数分後、河川敷にパトカーが一台到着し、若い警察官が二人駆けつけてくれた。二人とも背が高く、肩幅が大きく、顔は恐いくらい真剣そのもので、タツヤは完全に委縮してしまった。一方、ハクアは堂々と状況を説明している。

まず、公園で引ったくり犯を目撃したこと。そして、自転車でこ

ここまで来たこと。ハクアは追いかけてきたとは言わず、探しにきたら偶然見つけた、と言った。それから道に落ちたバッグを指差した。「取り返したいと思って自転車でぶつかったんだ」

ハクアはそう話した。警察官はバッグを拾い上げ、財布の中身を確かめる。タツヤには見えないが、たぶん中は空っぽだろうと思う。犯人たちは道に倒れたまま、観念したように静かにしていた。

やがてパトカーがもう二台到着し、警察官の人数も増え、引ったくり犯は三人とも抱き起こされ、パトカーのほうに連れて行かれた。「こいつらみんな腰抜かしてるな」とぼやくのが聞こえた。

ハクアと話していた若い警察官は、他の警察官から何か報告を受けると、明るい顔で向き直り、ポンポンと二人の小さな肩を叩いた。「どうもありがとう。これから犯人を警察署に連れて行くよ。だけど、犯人を追ったり探したりするのは危険だから、もう絶対にしないようにね。相手は大人だから、危ない目に会うことがあるよ。わかった？」

「はい」

二人して頷く。

「それと、自転車で人にぶつかるのは絶対に良くないよ。相手をケガさせてしまうし、転んだら自分がケガするからね。お兄さんと約束できるか？」

「はい」

二人して頷く。

「それじゃあ、君たちはこれで帰っていいよ。家族の人に連絡しようか？」

タツヤは、ハクアの顔を見た。

「ううん、自転車で帰れるよ。公園で友達が待つてるし」
ハクアは笑顔で返した。

「それと、二人乗りで探しに来たんだよね？ 二人乗りは危ないから、もう絶対するんじゃないぞ。わかったね？」

警察官が少し厳しい顔をする。

「はい」

ハクアはまた素直に返事をした。そしてタツヤの腕をぐいと引っ張り、すたすたと駆け足で歩いた。横顔を見ると、急いで公園に帰りたいというより、早くこの場を離れたい、という雰囲気だった。倒れた自転車を起こすと、日もだいぶ落ちてきていた。

ハクアは若い警察官の視界から外れると、颯爽とサドルにまたがり、タツヤに後部座席に座るよう言った。

「いや、さっき警察の人から二人乗りはダメだって……」

「たつつん」

「え？」

「さびしいこと言うな。二人で戦ったじゃないか。一緒に帰ろうよ」
タツヤはなぜか気持ちが軽くなった。おとなしく後部座席にまたがる。ハクアの日焼けした背中が、こうして見ると大きいようで意外と小さかった。サラサラした栗色の髪が目の前にあり、町の景色がゆっくり流れて行き、ようやく心が落ち着きを取り戻した。

「なあ、たつつん？」

ハクアが自転車をこぎながら聞いてくる。いつもより少しやわらかい声に聞こえた。「どうしたの？」

「あのとき、何で腹を蹴るな、って言ったの？」

「ああ……いや、あのパワーアップしたキック力でもし腹を蹴ったら、内臓がつぶれちゃうかもしれないだろ。悪いやつでも大ケガをさせたら、ほんとに大変だと思うよ」

「あー、そつか。そんなこと考えたことなかったなあ」

「それはダメだよ。腹は危ないって、ハクアがうちで読んだ漫画にもあっただろ？」

自転車をこぐ背中に、少し沈黙があった。ちよつと思ひ出せないのかもしれない。

「……へへっ。たつつんは、ほんと、よく覚えてるんだね」

「でも、あのときハクアがちゃんと聞いてくれてさ、ほつとしたよ」

「うん。たつつんの声はね　ちゃんと聞いてるんだよ」

赤信号で停まった。ハクアが後ろに振り向く。

「そうだ、途中にザウルスあるよね。アランと希にシェイク買って行こうよ。いいよね？」

「ああ、うん」

要はバーガーザウルスに寄って、ギガバーガーを買いたいんだろ
うな、と思った。

公園に着くと、入口近くのベンチに希とアランが座っていた。引
つたくりにあった母親とその子どもの姿はない。二人乗りの自転車
を見ると、希が立ち上がり、飛び跳ねるように大きく手を振った。

「あつ、朱鳥くん、ハクちゃん！」

「のぞみん、心配させてごめんね」

自転車を公園の中に停め、ベンチのほうに行く。

「あれ？　バッグのお母さんは？」

「あ、うん、あのね、近くの交番に行ってるの。電話してって言わ
れてるから、ちょっと待ってて」

希はそう言って携帯で電話をかけはじめた。

一方、ベンチに座っていたアランは、持っていたペットボトルの
ジュースを置いて、不機嫌そうに立ち上がった。もう普通に立てる
ようになっている。アランのおでこを見ると、猫の肉球マークのア
ザが消えている。ハクア的能力発動から三十分過ぎて、自然と戻っ
たのかもしれない。

「　おい」

タツヤをきつく睨みつける。

「寄り道してるヒマがあつたら、まっすぐ帰って来いよ。こっちは
待ってたんだよ！」

アランに厳しく言われて、確かにザウルスバーガーに寄るのは後
でも良かったと気づいた。せっかくシェイクを買ってきたのに、す

ごく渡しにくくなってしまった。

だが、ハクアはそんな険悪な空気も関係なく、キョトンとした顔で間に入ってくる。

「あれ？ アラン、もう立てるのか？」

「……今さっき、急に足が元に戻ったんだ。もう、どうなってんだよっ！」

アランは血管が浮き出すほど激怒していたが、目が真っ赤で、少し涙目にも見えた。歩く力を奪われ、胸の中で巨大な不安が噴き上がっていたのだと思う。

「いや……ごめん……」

「たつつん、だからそれは違う。すまない アラン、悪かった」

ハクアはいきなりアランに深く頭を下げた。

「本当に、悪かった。全部あたしの思いつきでやったんだ。お前の足のことも、犯人を追ったのも、寄り道も。だから、たつつんにはもう怒鳴らないでくれ。頼む」

アランは黙った。深々と頭を下げられて驚いたのもあるが、学校でもほとんど話したことがないハクアに向かって、これ以上責めることは気持ちの上でブレーキがかかった。

すると、希が横から小さな声で三人の間に入ってきた。

「あの……バッグのお母さんんだけど、うまく説明できなくて、

朱鳥くんかハクちゃんに、電話代わってほしいんだけど 大丈夫

？」

「うん、あたしが出る」

ハクアが携帯を受け取る。希はちらりとタツヤの顔を見た。タツヤもアランに何か言わなくてはいけない。だが、希も打ち明けなかったハクアの秘密を自分が最初に言い出すことはできない。言葉を迷っているうちに、アランは少し冷やかな目をタツヤに向けた。

「お前はいつも人に守ってもらうんだな。自分が怒られればいいと思ってるんだろ。本当は全部知ってるくせに」

「いや、違う　僕は」

「もういいよ。お前の性格はわかってる。俺も何か巻き込まれたけどさ、いいことしたんだろ？」

アランは鮮やかな茶色の瞳で、タツヤの心の内側にぐつと強く踏み込んでくる。

「でも、こつちもさ、お前らが追いかけてった後、月本さんがすごい大変だったんだよ。あのお母さんの連絡先を聞いたり、歩けない俺をベンチに座らせてくれたり。ありがとう、の一言くらい言えよ」アランにまっすぐそう言われ、タツヤは胸を撃ち抜かれたような気持ちだった。

「丘野くん、そんなのいいよ。みんな困ってたんだもん」

「月本さん、ごめん」

タツヤは希の目を見る。それでも『ありがとう』より先に『ごめん』が出てしまった。何だかひどく恥ずかしくなった。

「朱鳥くんはがんばったんだと思うよ。ハクちゃんひとりだと心配だもんね」

当のハクアは、希の携帯で母親に説明している。アランはふいに下を向き、ポケットに手をつ込んだ。携帯がマナーモードで光っていた。

「ふう。親から何回も着信来てるから、もう帰るよ。明日ちゃんと説明してくれ」

アランがイライラしていた原因はこれもあったようで、小走りに公園を出て行った。

後ろ姿を見送ると、希は横を向いてタツヤの顔を覗き込んだ。希のやさしい瞳が何となくタツヤを見上げる感じなのは、身長差がまだ少し広がったからだろうか。

「ねえ。朱鳥くん、新聞とか載るのかな？」

「わかんない。でも、絶対載らないほうがいいよ」

「えー、そうかな。もし載ったら、わたしずっと取っておくね」

希がクスクス笑うと、ハクアの電話も終わった。希に携帯を返す。
「よし、自転車を交番に返しに行こうじゃないかっ！ あれ
？ アランは？」

タツヤは、アランが先に帰ったことを話した。ハクアはちよつとつまらなさそうに、まあ、いいか、という顔をした。それよりも、自転車のカゴに入ったバーガーザウルスの袋から、ずっと肉と油の臭いがしているのが我慢できないのだ。

「あ、これ冷めちゃうから歩きながら食べてもいいよな？」

「ギガバーガー食べるのはハクアだけだろ？」

言う間に、早速ハクアは袋から一個目を取り出し、肉三段重ねのサイズをあつという間にほおって幸せそうな笑顔を見せた。

ハクアはちよつと足が痛いというので、タツヤが自転車を押して、交番に向かって歩き出した。希も帰り道だったので、一緒についてきた。

タツヤは歩きながら、アランに『レンタルフォース』のことを説明するのか、とハクアに聞いた。ハクアは少し悩む様子をしてから、一晩考える、という答えを返してきた。それは少し意外だった。

だが、あまりはつきりと説明するのは心配なのだろう、と思う。今回は引たくり犯だったが、ハクアが口走った「追跡隊」という言葉が、タツヤの脳裏に戻ってきて、しばらく引つかかっていた。

交番に貼ってある指名手配　みたいなものとは違うだろうが、訓練学校から脱走した超能力者を放置しておくものかな、と思う。

「なあ、ハクア、交番とかに行くのは大丈夫なのか？　もし発見されたら連れ戻されたりするんじゃないの？」

「ん？」

「いや、もしそうなら、僕が自転車届けるよ。なんか、足も痛そうだし」

ハクアは左手でトントンとやさしく背中を叩いてきた。

「たっつん、その気持ちだけでうれしいよ。平気平気。訓練学校と

警察はつながってないんだ。まあ、それに」

「それに？」

五個目 最後のギガバーガーを袋から取り出す。交番は遠くないが、このスピードで食べ切るとは思わなかった。ちゃんと噛んでいるのか心配だ。

「この肉汁のある生活を、あたしは何があっても失いたくないんだ！」

希がフフッと笑い、ハイテンションで調子を合わせる。

「大丈夫、ハクちゃん応援団がいる限り、ハクちゃんの自由は不滅だよ！」

よく分からないが、肉の臭いに包まれ、タツヤも空腹をかなり感じていた。やがて前方に交番の赤いランプと親子の姿が見えて、タツヤは今日の夕食はすぐできるものにしよう、と思った。

第5話 『四人の約束とアメリカンチェリー』 1 / 2

引ったくり犯を倒した次の日、朱鳥タツヤと月本希と丘野アランは普通に登校したが、寺野ハクアが学校を休んだ。タツヤには意外だった。ハクアは転校日以来、学校を休んだことがなくて、昨日交番の前で別れたときも、あれだけギガバーガーを食べたくらい普通に元気だったのだ。ただ、少し足が痛いと言ったのを思い出した。

朝のホームルームで暮田晴海先生が出席を確認しながら、タツヤの後ろ　ハクアの席がぽつんと空いているのに気づいた。

「あれ？　寺野さんはお休み？」

クラスが少しざわざわする。晴海先生に連絡が来ていないようだ。希もアランも驚いた顔をしてタツヤのほうを見た。晴海先生はクラスを見渡す。

「誰か寺野さんから聞いてない？　十和田さん、月本さん、どう？」

「あたしはわかりません」

十和田霧枝がそっけなく答える。

「私も聞いてません……」

希も続いた。

「わかりました。先生からちょっとおうちに電話してみます」

晴海先生はホームルームを終えると、足早に教室を出て行った。

先生が廊下に出てすぐに、アランが席を立ち、タツヤにいきなり詰め寄ってきた。

「おい、あいつ今日休みなのか？」

「えっ？　寺野さんのこと？」

「そうだよ！　今日話してくれるって約束だろ？」

昨日、引ったくり犯を追跡するとき、ハクアは『レンタルフォー』という超能力でアランの脚力まで借りてしまった。解決して公園に戻ったとき、アランは明らかに普通じゃないことに巻き込まれ

たのに気づいていたが、まだ詳しくは知らない。今日ハクアから話すことになっていた。その肝心のハクアが学校に来ないのだ。

「そうだけど、寺野さんが休むなんて思わなかったんだ」

「お前、本当に休んだ理由を聞いてないのか？ あいつ俺を避けるんじゃないよな」

「ハクアはそんな性格じゃないと思うよ」

タツヤは思わずハクアと呼んでしまったが、アランは気に留めず、怪しむような目つきでタツヤの顔を覗き込んでくる。

「……お前の言葉は、何かあいつをかばってる感じに聞こえるんだよな」

何となく答えにくい。別にかばっているわけではないが、ハクアの超能力のことをハクアのいない場所で勝手に話すのはダメだ。その日、ハクアが学校に来るまで黙っていようと考えたが、結局いつまで経ってもハクアは来なかった。

休み時間、晴海先生に聞いてみると、家の電話にかけてもまったく出ないらしい。晴海先生は「夏風邪でも引いちやったのかしら」と首をひねっていたが、タツヤはそうは思わなかった。席に戻るとまたアランが来て、「あいつやっぱり休みなのか？」と聞いてきたが、タツヤは重い口で「たぶんそう」と答えただけだった。

ハクアが来ないまま放課後になり、帰りのホームルームが終わった後、霧枝が晴海先生に呼ばれていた。

「十和田さん、放課後って何か用事ある？」

「いえ、ないです」

「あのね、誰かに寺野さんの様子見て来てほしいんだけど、十和田さん、家は知ってる？」

霧枝は首を横に振った。ポニーテールがふわふわ揺れる。

「寺野さんのうちは行ったことないです」

「うーん。じゃあ、誰か知ってる人、わからない？」

「あの……先生、私行ったことあります」

霧枝の後ろから声を上げたのは希だった。霧枝は驚いて振り返る。

晴海先生はほつとした様子で希の顔を見た。

「あ、ほんと？ 月本さん、今日は用事ある？」

「ないです。私、寺野さんのうちに行ってみます」

「じゃあ、月本さんをお願いするね。風邪かどうかかわからないけど、もし大変そうだったら病院に行くように行つてね」

「はい」

希はランドセルを背負い、すたすたとまっすぐタツヤの席に来た。タツヤもランドセルを背負い目を合わせる。

「先生にハクちゃんちにお見舞い行くよう言われたよ。ねえ、朱鳥くんも行くでしょ？」

「うん。あと、アランにも話そう」

「そうだね」

体を溶かすような暑い日差しで、逃げ場もなく照らされた白い道。風が少しもない歩道を三人並んで歩いていく。アランは暑い暑いとぼやいていたが、タツヤも希も口数少なく歩いていたので、アランも静かになった。どこへ行ってもセミの鳴き声が途切れることがない。道に落ちて裏返り、干からびているのもいた。

タツヤは先頭を歩きつつ、信号で立ち止まる度にアランの様子を見た。アランは肌が白くてまったく日焼けしておらず、赤くなっている。体はやせているが、すごく汗かきで、顔いっぱい汗が流れて、少し機嫌の悪そうな顔をしていた。

お前はいつも人に守ってもらうんだな。

自分が怒られればいいと思ってるんだろ。

昨日、公園に戻ったときアランに投げつけられた言葉が、タツヤに胸に深く残っていた。親に守ってもらうとか、そういう意味ではないのはわかる。男なのに女の子にかばってもらって情けない、と言いたかったわけでもないと思う。

誰かを守るとか、そういうことを今まで意識したことはなかった。

それは、絶対にハクアと一緒に行動するようになったからだ。ハクアといると自分も何かしたくなるのだ。

それならもつとはつきり違うと言い返せば良かった、とタツヤは後悔した。強引に巻き込んでしまったアランと向き合うと、また最初に「ごめん」が出てきそうで、あまり顔を向けていられなかった。歩きながら、アランが口を開く。

「あれから俺も考えたんだけどさ、足の力が抜けてまた戻ったってことは、何かの中国拳法とかなの？」

「え？」

「寺野さん、そういうの習ってるの？ 駅前に何とか流っている看板あるけどさ」

「うーん……えっと」

偶然か、昨日倒した引ったくり犯の大男とアランは同じ発想だった。タツヤは中国拳法とかの映画も見たことはないが、そういうのがあるのだろうかと思ひぬる。希も不思議そうな顔で様子を見ている。それよりも、アランの話し方が明るいのが意外だった。

「寺野さんならあるかな、と思ってさ。いつも給食すごい食べてるし」

タツヤが何と言おうか戸惑っていると、希が前の交差点を指差した。

「あ、ここを曲がったとこだよ」

「あつ、そうなんだ。そんなに遠くないね」

アランは希に対しては明るい声を向ける。タツヤは無表情に徹した。

「あのさ、実は僕らもよく説明できないんだ。寺野さんが自分で話すって言うてたから」

「ふーん。……つか、入れんのかな。鍵かかってんじゃないの？
なあ」

タツヤには厳しい顔を見せる。何となくむなしい気分だ。
「ピンポン押してみるよ」

ドアの前で『寺野』という表札を確かめ、タツヤがインターフォンを押す。寝てるか、起きてるか、外出してるか　昨日あったばかりなのに、一日学校で会わないとどんな感じになってるか気になった。少しして、ドアの向こうでゴトゴトと物音がした。

『はい！　こちら、ハクアです！』

インターフォンから声が出て、いきなり名前を言ったので驚いたが、間違いなくハクアだった。晴海先生は風邪を心配していたが、どうも思い切り元気そうだった。

「タツヤです。今日はお見舞いに来ました」

後ろで希がふふつと笑う。言い方が変だっただろうか。

『おーっ！　たつつん？！　あたしのために？！』

「そつだよ。月本さんと丘野くんも一緒です。いま入れる？」

後ろでアランが「何で月本さんのほうが先なんだ」とぼやいた。

正直順番とかはどうでも良かった。逆に、部屋の中からは一瞬沈黙があった。

『……あー、そっか、昨日あれがあったもんね。ごめんごめん。すぐ開けるよ』

するとガチャツと音声が切れて、部屋の中でまた物音がした。だが、すぐ開けると言ったわりに、二、三分くらい暑いドアの前でじっと待たされた。アランはイライラした顔つきで「おい、倒れたんじゃないか？」と言ったが、希が「きつと部屋を少しきれいにしてるんだよ」と言うので、三人で顔に汗をにじませながらじっと待っていた。

ようやくドアが開く。ハクアはなぜか満面の笑みだったが、髪はいつもよりボサボサで、服はパジャマでなく普通の服だった。着替えたのかなと思ったが、よく見ると、確かな記憶とは言えないが、昨日着ていた服のままのような気がした。

「……体は大丈夫なの？」

「うん、もうだいぶ動けるようになったよ」

「えっ？　そんなに大変だったの？」

「まあ、部屋で話すよ。たつつん、それよりさあ、寝起きの炭酸がなくて困ってたんだ。コーラとか持ってない？」

そんなもの、持ってるわけがない。

押んでくるハクアの頼みを聞き、結局タツヤが自転車を借りて近いコンビニまでコーラの大きなペットボトルを買いに行くことになった。バナナみたいに強烈な黄色の自転車だった。

ハクアの部屋に入ると、希とアランがテーブルのそばに座っている。ハクアの姿がないと思ったら、ハクアは浴室からさつきと違う服に着替えて出てきた。

きれいに日焼けした肌に、爽やかな明るいオレンジのタンクトップを着て、ショートパンツからスラッとした健康的な脚が伸びている。目が合うと、ハクアが嬉しそうに駆け寄ってきて、手に持ったコンビ二袋からコーラを抜き取っていった。タツヤはため息を吐き、空っぽの袋をゴミ箱に入れ、冷房の効いた部屋に入った。

ハクアはアランにどう説明するのだろうか。タツヤはお使いに行っている間もそれを考えていた。もしかしたら、ごまかすかもしれない。この前、学校帰りにタツヤの妹の由果ゆかもいる前で『レンタルフォース』を使って外国人と話したときは、由香に対してごまかした。だから、ハクアの超能力を知るのはこの美星町ではまだタツヤと希だけだ。

ハクアはコーラをコップで三杯続けて飲む。その間にアランもコーラを飲み、一緒に出されたベビーサラミの袋からひとつ取り、一口かじった。タツヤと希はサラミには手を出す気分にならなかった。第一声、ハクアは嬉しそうに言った。

「なんかさ、悪いね。お誕生パーティみたいだなあ」

「え？」

「最初は寂しかったけど、このうちに来る人がどんどん増えてくね。本気で心配してくれる友達がいると、寝込むのもたまにはいいね」

ハクアの言葉に対し、どう答えていいかタツヤは戸惑った。アランも困った顔をする。

「寺野さん……急に来て悪かった。起きてて大丈夫なのか？」

「ハクアでいいよ。あたしもアランと呼ぶから」

「あ、ああ。わかった」

「アラン、昨日はごめんな。これは超能力の反動なんだ。今から説明するね」

いきなり超能力と言った。

「はっ？ 超能力？」

「うん、そう。あたし超能力が使えるんだ。たつつんとのぞみんはもう知ってるんだけど、アランにもきちんと言すよ。でも、絶対に秘密な」

「えっ？ あのテレビでやってるような……？」

「違う。そんなのじゃなく、これはもつと危険な能力なんだ」

「それって……あの昨日のやつだよな？」

「いいか、絶対に秘密だ。約束できるか？ まず、それを聞きたい」

ハクアは手を伸ばし、アランの両肩をぐつとつかんだ。眼差しは真剣そのものだ。

「まあ、それはいいけど……」

「はつきり答えろ。どうする、アラン」

アランは落ちて着いた顔になり、しゃきつと背筋を伸ばした。

「わかった。絶対に秘密にする。これでいいか」

「よし。ありがとう。ほら、サラミもつと食べていいぞ」

ハクアは満足げにベビーサラミを三、四個つかみ、アランの右手に握らせた。アランも嫌いでないようで、またひとつ口に放り込むそばで見ていると、犬がしつけをされているみたいな不思議な光景だった。しかし、ハクアが正直に超能力を言ったのは確かだった。希が少しほつとした表情になり、やつと口を開く。

「そっか。じゃあ、丘野くんもハクちゃん応援団の仲間入りだね」

「何だそれ？」

「ハクちゃんを応援する会だよ。私が一号、朱鳥くんが二号、丘野くんが三号だね」

そうか、希が一号なんだ、とタツヤは胸のうちに思った。

「のぞみん」ハクアが手で止める。

「ごめん、ハクちゃんの話が先だったね」

プシュー、と部屋のエアコンが一息ついた。

ハクアは、タツヤと希が初めてこの部屋に来たときのように、超能力『レンタルフォース』のことをアランに説明した。隕石が近くに落ちた影響で三年前に覚醒したこと、相手の力を右手で借り、左手で返すこと、脚力だけでなく触る場所によっていろいろな力を借りられること、三十分くらいで自動的に元に戻ることに、おでこに出る猫の肉球マークのあざ、覚醒してすぐ訓練学校に入れられたこと、ギガバーガーが食べたくて脱走したこと、超能力を使い続けないと植物人間になること、超能力を使うと体に反動があること、それを抑える錠剤キープタブレットがあるが、訓練学校でしか手に入らないこと、あとは、両親は失踪していて今は養父が生活費を出してくれていること、その養父にはまだ会ったことがないこと。これだけの話を連続で浴びて、アランは途中からだいぶ放心状態になっていた気がする。

「どう、アラン。だいたいわかった？」

ゆっくり、こくとアランは頷いた。難しそうな顔をして唇は硬く閉じている。タツヤが初めて説明を聞いたときは、試しで聴覚を借りられる実験があったが、ハクアはアランにはそれをやらなかった。それは昨日脚力を借りたとき、アランが自分からおかしなことが起きたと言ったからだと思う。

ハクアは五個目のベビーサラミの包みをむいていた。干し肉の匂いが部屋中に漂っている。タツヤはさすがに胸が悪くなりそうだった。仕方なくコーラの炭酸をのどに流す。

「アラン、聞きたいことがあつたら遠慮なく言ってくれ」

「……要するに、三十分間、人の力を借りることができるんだな？」
「まとめると、そうだな」

「訓練学校つてことは、そんな超能力を持ってるやつがたくさんいたのか？」

「いや、実は」

すると、そこでハクアは一呼吸置いた。タツヤと希も注意を向ける。ハクアは続けた。

「隕石で覚醒する超能力は一種類だけじゃないんだ。他にもいくつかあるけど、あたしはフォース系の学生棟だった。そこは『レンタルフォース』の超能力者ばかり集まってた」

「え？ 何種類もあるの？」

タツヤは思わず口を挟む。アランは応援団二号のタツヤが入ってきたので、少し身を引き様子を見る感じになった。

「うん……まあ、メテオドロップが全部で何種類あるかは知らないんだけどね。開発中とか未発見の系統もあるって聞いたし。でも、他の学生棟とは完全に分けられてたから、会ったことないんだよ。名前だけちらつと聞いたのは、エリア系と、モーション系と、ロックス系……くらいだったかな」

「それってどんな能力なの？」

「ごめんな、たつつん、他の能力は一度も見たことがないんだ。まあ、名前だけ聞いてもよくわからないよね。あたしのフォース系だつてそうだしさ」

ふと、部屋が静かになった。ハクアがゴミ箱に投げたサラムの包みの音だけが小さく響く。希はまた不安げな顔をしていた。ハクアから訓練学校のことや超能力の反動の話を聞くとやはり気持ちが悪くなる。

静けさを破って、アランがつぶやいた。

「まあ……名前だけだと、フォース系つてのが一番強そうだな」
すると、ハクアは首を横に振る。

「そんなことはないよ。訓練学校に入った最初の日、校長に言われたんだけど、どの系統も使い方次第でかなりの威力になるって言うてた」

「そんな力を小学生に訓練させるなんて、おっかない校長だな」
アランは吐き捨てるように言った。そして、また四人とも黙る。

校長と言えば、美星小の校長先生は白髪頭で話し方もものんびりしていて和やかな感じだ。タツヤはその校長と比べると、訓練学校の校長というのは、前に一度体験入会した空手道場の先生のように迫力がある恐ろしい人だろうか、と想像した。あるいは、自分の父親はスポーツジムのインストラクターをしているが、そういう筋肉質な先生がいるのだろうかと考えると、そこから逃げたい気持ちになった。

「ハクちゃん」

希が声をかける。

「今日は学校休んじやったけど、体の反動はひどかったの？」

「いやー、メンボクない。みんな心配かけてごめんね。実は、昨日うちに帰ったらそのまま体が動かなくなっちゃって」

「えっ?!」

「まあ、キープタブレットがないから仕方ないんだけど、服のまんま床に倒れて、あー、ダメだ、動かないなーと思ってとりあえず寝たんだ。朝は一応目が覚めたんだけど、やっぱり体がまだ動かなくて、昼間まで寝てたんだよ」

「それって……体が痛いのか？」希が恐る恐る聞く。

「大丈夫、痛みはないよ。体が固まったみたいに動かなくなるだけ。何だかすごい話だ。タツヤは思わず割って入る。

「でもさ、ハクア、昨日足が痛いつて言ってたよね」

「たつつんはほんとによく聞いているし、よく覚えてるね。やっぱり頭がいいわけだ」

「そんなことどうでもいいよ」

「ごめんね。足の痛みはこれだよ」

そう言ってハクアはハイソックスの片方を脱いで見せた。包帯が巻いてあり、それを解くと、血豆がつぶれていた。インターフォンが切れてからドアを開けるまで時間がかかったのは部屋の片付けだけでなく、足の裏を傷めていたせいもある気がした。

「これは痛そうだね……」

「まあね。『レンタルフォース』は便利なんだけど、今の体で自転車をあれだけのパワーでこいたら、こんなになっちゃうみたいだね」

「ハクちゃん、ちゃんと傷薬はぬった？」

「うん、ぬったぬった。スーツとして気持ちいいよね！」

「それより、せっかくだし包帯を取り替えてあげるね」

「のぞみん、よろしく頼む！」

希は、救急箱の置き場所を覚えていて、傷薬と包帯をすぐ取り出した。ハクアは楽しそうに鼻歌混じりでもう一方の靴下も脱ぎ、希の前にデンと両足を差し出した。アランは包帯巻きが始まるとトイレに立ち、タツヤは何となく部屋の時計を見た。

引ったくり犯の車を自転車で全力で追いかける。そして、三人の男を打ち倒す。あれだけの激しい運動をした結果、ハクアは半日以上、時間、まったく起き上がれなくなってしまうた。

こういうことを知れば知るほど、見れば見るほど、この超能力は本当にハクアにとっていいものなのか、考えてしまう。もしかすると希だって同じ思いかもしれない。学校で一緒に過ごしていれば、ハクアは普通の楽しい友達だ。でも、何か大きな出来事があると、ハクアは自分とまったく違う力を持つ人であることを強く思い知る。

アランがトイレから戻ってきて、タツヤと目が合った。タツヤが初めて超能力を説明されたときに比べ、何となくアランは落ち着いている気がする。タツヤは、トイレなんて自分の家に帰ってから思い出したくらいだったのに。

「アランはなんか普通だな……」

「何が？」

アランが座る。包帯巻きに夢中になっている二人をちらりと見ていた。

「いや、何でもないよ」

「お前、ほんとに俺が普通だと思うか？」

「えっ？」

「まあいいけど。これって、十和田は知らないんだな？」

「あ、うん、知らないよ」

「お前ら仲がいいけど、あいつには言うなよ。口が軽いから」

「ハクアのことは、誰にも言わないよ」

タツヤは真剣な目つきではつきりと言い返した。それよりも、霧枝と仲がいいと思われていたのが意外だった。いつも霧枝は男子と口ゲンカしていて、しかも口で負けたのを見たことがないが、その霧枝と普通に話しているのはタツヤくらいかもしれない。けれど、霧枝と学校以外で会うこともないし、希の幼稚園からの友達だから少し身近に感じているくらいだ。もちろん、ハクアの秘密は話していない。

すると、アランは鼻で笑った。

「でもな、ハクアはあの性格じゃあ、もつといろんなやつを巻き込むと思うぞ。俺たち、ずっとそれが守れるかな」

「……」

「守れるよ」

希が言う。包帯を薬箱にしまう手を止め、タツヤたちをまっすぐ見ていた。

「そうだ。守ってくれよ」

ハクアが言った。顔は明るかったが、言葉は少し重くて強かった。

「……ごめん、そうだな。俺は口が堅いから安心して」

「アラン、ありがとう」

「でも、いきなりは止めてくれよな」

「まあ、昨日みたいにさ、大変なときはたっつんが助けてくれるから平気平気！」

ハクアは軽い調子で笑い、サラミをひとつ宙に投げ、うまく口でキャッチした。希も薬箱を戻し、アランも背伸びをして、何となく落ち着いた雰囲気になった。タツヤはその間、ハクアのことをじっと見ていた。

「僕はいつもハクアのそばにいるわけじゃない」

四人の間の雰囲気が一気に冷たくなる。

「……朱鳥くん」

希が何か言おうとしたが、タツヤはハクアから目を離さない。ハ

クアは少し緊張した顔で、正面から向き合った。

「まあ、確かにね。さっきのはあたしの甘えだね」

「そうじゃない。僕もハクアといるのは楽しい。ハクアは人を助けるすごい力を持つてる。そんな友達是他にないよ」

「うん」

「でも、無茶はしないでほしいんだ。ハクアに本当に助けてほしいとき、倒れてたら困るんだよ」

「わかった。あたしも約束するよ」

昨日、あの公園に戻るとき、自転車をこいでいたハクアの背中を思い出す。

たつつんの声はね、ちゃんと聞いているんだよ。

タツヤはあのとときの言葉を信じた。本当に聞いているのなら、どうしてこういうことを言うか、ちゃんと考えてほしいと思った。ハクアが特別な力を持っていたとしても持っていなくても本当は関係ない。ハクアがちゃんと学校に来て、元気に話しかけてくれることが大事なのだ。

すると、少しの沈黙があつて、ハクアがいきなりぼろぼろと大粒の涙をこぼして泣きはじめた。アランと希が驚いて口を開く。

「えっ？ どうした？」

「ハクちゃん？！」

タツヤも戸惑って何とかなだめようと思い、ハクアの肩に手を伸ばそうとした。すると、ハクアは泣きじやくった顔を起こし、目の前にあるタツヤの顔を見定めた。ハクアの体がいきなりタツヤの胸に飛び込んでくる。タツヤは思わず抱き止めたが、どうしていいかまったくわからなかった。ハクアの髪や日焼けした肌から温かい太陽の匂いがした。心臓の鼓動が急激に速くなる。

ハクアは涙で濡れた真っ赤な顔をタツヤの首筋に押しつけながら、次から次に涙が出てくるのをこらえ切れずにいる。

「たつつんの言葉は、ちゃんと聞いてるんだよ！」

「え？ う、うん」

「あたしね、たつつんの言葉は、ちゃんと聞いてるの！」

「わかってる」

「……ほんとにわかってる？」

「うん わかってるよ」

タツヤは、顔をうずめたハクアの耳にも聞こえるように、同じ言葉をはつきりとくり返した。いきなり泣き出すなんて思わなかったけれど、いつも大きなことを言うハクアがこんなに心をむき出しにして、頼りにしてくれているのを体温で感じ、タツヤは胸が急に切なくなった。

「あたし、動けないときもたつつんのこと考えてたんだよ。昨日みんなに心配かけて、早く会いたくて……。でも、起きられなくて……学校行けなくて……。いっぱい悲しくて……。さびしくて……」

「だから会いに来たよ」

「うん……そうだね……ほんと、ありがとう」

「もう大丈夫か？」

タツヤはふと、母親がなくなってしまった妹の由果の心が不安定になったときを思い出した。学校から帰ると、何度も由果が泣きながら抱きついてきた。由果がどうしようもなく頼ってきたから、タツヤは自分の悲しみを胸の奥に押さえ、そのうちに、どんなことにも我慢強くなっていた。

タツヤは自分の心を静めながら、あのときみたいに、ハクアの髪や肩をポンポンと撫でてあげると、ハクアは少し落ち着いて、ようやく身を起こした。アランも希も同じ部屋にいるけれど、まるでいないかのように、じっと息をひそめている。

ハクアはもうタツヤの顔しか見ていなかった。グスグス言って手で涙をふこうとするので、タツヤはティッシュを渡そうとした。けれども、ぼうつとしているので、タツヤは仕方なくティッシュでハクアの濡れた目元をふいてあげた。

「あたし…… たつつんの言葉はちゃんと聞いてるよ？」

「大丈夫、わかってるよ」

ハクアのこんなに女の子らしい一面は初めて見た。ただ明るく楽しいクラスメイトでなく、勝手に人の力を借りるときの強引さ、不良や強盗を追いかけるときの勇敢さ、すべて倒して敗者を見下ろすときの威圧感、どれもみんなハクアの間違った姿で、動けない状態からようやく戻った不安定なハクアも、全部タツヤの目の前にいるのだ。

「平気平気ってすぐ言うなよ」

タツヤはやさしい声で諭す。

「うん、そうだね。来てくれて、ありがとう」

ハクアはやつと泣きやんで、どこか無理した笑顔でなく、夏に咲き誇るひまわりみたいな笑顔に戻った。

アランが横から少し意地悪な顔を見せる。

「ハハッ、お前が言うのかよ」

「僕だって……直すよ」

「オッケー、オッケー。ハクアの前じゃ、そう言うしかないよな」
わかった顔をするアランが何となく憎たらしかったが、ハクアの前では心も言葉も強くなるのはその通りだった。思えば、ハクアは一人でもかなり心が強いはずなのに、どうして自分を頼ってくるのか不思議だが、それがハクアのために自分にできることならばと思うと、何だか少し嬉しくもなった。

三人が帰ろうと玄関に向かうと、ハクアがタツヤを後ろから呼び止めた。

「たつつん、ごめんね。あたし泣いて服を汚しちゃったね。お風呂入ってく？」

「はっ、入らないよ！」

慌てて返すと、ハクアがきよとした目をする。

「そんなおつきい声出さなくても」

「あ……ごめんな。うち帰って夕飯作らないと」

「じゃあさ、あたしにあのハンバーグを作ってから帰ってよ！」

「何でだよ！」

「体が全然動かなくてさ」

「うそつけよ！ 動くだろ?!」

フフツツ、と隣りで希が吹き出した。ハクアが泣き出してから希はずっと静かだったが、心配性な希にもだいぶん明るさが戻った感じがした。希はきゅっと下唇を噛み、ひとつ深呼吸をした。

「ハクちゃん、もつとみんな一緒にいたいなら、ハクちゃんも『天文係』に入らない？」

すると、いきなり希がタツヤの腕に手を回し、ぐっと体を引き寄せた。驚いて振り向くと、大きな瞳で下から見上げている。これは何を言われても断れない流れだ。

「朱鳥くんもイヤって言わないよね？」

「あ、うん」

「みんな一緒か。夏っぽいなあ」

ハクアは心から嬉しそうな顔をする。

「それ、アランも入ってるのか？」

「俺は入ってないよ。何かキラキラしたかわいい新聞作ってるやつだろ？ 俺、漢字苦手だし。星よりは野球とかサッカーだな」

あまり意識していなかったが、キラキラしたかわいい新聞と言われると、タツヤは少し恥ずかしかった。天文新聞は、字はタツヤが担当で、イラストやシールなどの飾りつけは希が担当なので当然そんな感じになるが、アランだけでなく、クラスの他の男子からどんなふうに思われているのか、ちょっと不安になった。

「ハクちゃん、あのね、次の土曜日の夜、お弁当持って天体観測に行くんだよ。予定は空いてる？」

「よし、行く行く！」

「じゃあ、明日学校でまた話すね。楽しみにしててね」

ハクアは希に対し張りきって頷くと、続いてタツヤの顔を見た。

「なあ、お弁当はたつつんが全部作ってくれるのか？」

「いや、自分で持つてくるの！」

「なんだ……そうなのか。まあ、そういう決まりなら仕方ない。用意していくよ」

冷蔵庫にコーラの大きなペットボトルしか見たことがないハクアが、ちゃんと弁当を作る様子が想像できなかった。

「どうせギガバーガーだろ？」

「違う、それはお弁当じゃない。一応、お弁当箱に何か思いついたものを詰めていくよ」

どんな弁当になるかよく分からなかったが、月に一度、丘の上の公園に天体観測へ行く水曜日が来るのがまた楽しみになった。

灰色のコンクリートの廊下に、ペタペタとひとり小走りする足音が鳴り響く。赤茶色の長い髪をカールさせた少女が、明らかに焦りとイライラをあらわにした歩調で進んでいく。

トレーニングルームと会議ルームを結ぶ、トンネルのように長くカーブしている廊下。内側の壁に大小さまざまなクリスタルキューブが無数に貼り付けられていて、天の河のようにキラキラと輝いている。クリスタルキューブには鏡が入っていて、黒いトレーニングウェアを着た少女の横顔がひとつずつに小さく映し出され、緊張感を駆り立てる。

廊下の突き当たりには、数字を入力するパネルによって制御された厳重なドアがある。まず、首からさげたＩＤカードを当て、続いてパネルに番号を入れる。エンターキーを押そうとした指先に、どこからか迷い込んでいた小さな羽虫が近づいた。手で払うと、素早く逃げて姿を見失った。羽音を聞くと蚊のようだ。

「ちっ！」

少女はいまいまして舌打ちする。こいつは、少女の二の腕に赤い斑点を作った張本人か、知り合いか、ただの同類か。

「ったく。この先はエリートだけに許された厳粛な会議ルームなのよ。お前のような下級生物が、生きて通れると思うなよ」

巻き髪の少女はその場にしゃがみ、床を右手で触った。すると、宙を飛んでいた蚊は、急に下から糸で引つ張られたかのようにまっすぐ床に落下して、少女の足下にへばりついた。

「次は、もっと大きな上級生物に生まれ変わるのね」

網タイツをはいた少女の足が、動けない蚊をためらいなく踏みつぶした。

数字パネルのあるドアを開け、ガラス張りの会議室がいくつも並び会議棟に入る。これらガラス張りの会議室は、中からスイッチを押すと、一瞬で曇りガラスになり、廊下から何も見えなくなるようになっていく。曇りガラスの色は所属によって変化し、少女の所属する組織の色は、アメリカンチェリーのような濃い赤だった。

スマートフォンに届いた緊急招集メールに書いてあった会議室をめざすと、ガラスがアメリカンチェリーの色に染まった会議室を見つけた。間違いない。中に入っている人数が表示されている。1・5だ。少女はほっと胸を撫で下ろした。

アメリカンチェリー色のドアを開けると、

「お兄様？」

ツインテールのチビガキが顔を上げた。イスの背もたれには、いつもの黒くて大きなジャングル生まれの九官鳥が横向きに乗っている。巻き髪の少女の姿を見て、チビガキは一転して不機嫌な顔をした。

「……なんだ、こだまじゃないの。遅いわよ」

こだまと呼ばれた少女のイライラは三倍に跳ね上がる。生意気なチビだ。

「うるさいわね。トレーニングルームから来たの。あんたみたいに

ヒマじゃないのよ」

「あたし、ヒマじゃないわよ！」

すぐムキになる。冷静で動じない兄にはないヒステリックさを、きつと全部こいつが親から受け継いだのだ。うるさければすぐにどこかに沈めることはできるけど、さすがにそれは上級生としてみっともない。こだまは冷ややかな瞳でチビガキを見る。

「ねえ、^{べにか}紅花」

「なによ」

「さぶろく？」

「……………うつ……………！」

「口答えするなら、九九を覚えてからにしてね」

すると、紅花は絵に描いたようなふくれっ面をした。

「それより、あんた一番に来たんでしょ？ つばさはまだ見てないの？」

「あの女はどうせまたお兄様と一緒にでしょ？」

姑みたいだな、とこだまは苦笑する。だが、たぶん今日もそうなので、それはそれで腹が立つ。紅花は話を変え、妙に期待に満ちた笑みを見せた。

「ねえねえ、検体が見つかった可能性が高いのよね？ あたしもついに初仕事かな？」

「さあて。これまでの検体探知レポートは九三パーセント空振りだしね。もつと精度は上がらないの？ って話よ」

「こだま……………あんた悪口が多いわね」

「ごめんだけど、あんたに言われたくないわ」

紅花がまたふくれっ面をすると同時に、後ろのドアが開く音がした。こだまは気を引き締めて、きりつとした笑顔で振り返る。

「さくらんぼ隊、集まっているか？！」

こだまより二歳上の天童将王^{まてお}が、きつちりアメリカンチェリー色の隊服に着替えて入ってきた。だから遅かったのか。すぐ後ろに薩摩つばさが続いて、こちらもきつちり隊服を着ている。外はねのシ

ヨートヘアに、隊服と同じ色のメッシュが少し入っている。メガネのフレームまで同じ色だ。何という忠誠心。一方、紅花のフリルだらけのかわいい幼児服はともかく、こだまは地味なトレーニング用のハーフパンツと縁起担ぎの網タイツだった。緊急招集とは言え、どうしてこうなった。

天童は極めてすみやかに議長席に立ち、高々と手を掲げる。

「さくらんぼ隊、点呼するぞ！ 一番、薩摩つばさ！」

「はい！」

それよりも天童隊長に問いたい。その幼稚園みたいな隊名は何とかならないだろうか。こだまは秘かにため息をつく。だが、天童は外国語が大嫌いなのだ。そして、それはともかく、天童の声変期を迎えた悩ましい声に「二番、羽島^{はしま}こだま！」と呼ばれて、すかさず「はい！」と威勢よく答えた。

妹の紅花と、九官鳥のデンロクが点呼に答えると、天童は極めてすみやかに会議室のディスプレイに新しい検体探知レポートを映し出した。力強く右の拳を握り締める。

「諸君、あの悪名高き『オカズ泥棒』の名を覚えているか？」

第5話 『四人の約束とアメリカンチェリー』 2 / 2 (後書き)

次回更新は8月下旬の予定です。どうぞお楽しみ。

第6話 『天体観測とスペシャルギガ弁当』 1 / 2

天文係はこれまで朱鳥タツヤと月本希の二人だけだった。月に一度、水曜日の夜にバスに乗って天体観測に行く。二人で星を見て、星の話をするだけの小さなピクニック。行き先はこの美星町で一番見晴らしがいい郊外の公園。そして、そこは二ヶ月前、寺野ハクアの転校のきっかけとなった隕石落下を、タツヤと希が目撃した思い出の場所だった。

先週、超能力を使って無茶をして、力を使い過ぎた反動で丸一日も体が動かなくなったハクア。学校に行けず誰にも会えなかったことを、タツヤの胸にしがみつき、涙を流しながらさびしいと叫んだハクア。

ただ、時間を置いてみると、どうしてハクアはあんなに一人を恐がったのか少し不思議だった。タツヤも風邪で一日や二日学校を休んだことはあるが、そんなに激しい悲しさにはならない。女の子はだいたいそうなんだろうか……。タツヤには分からない。

もつとみんな一緒にいたいなら、ハクちゃんも『天文係』に入らない？

ともかく、そんな希の誘いで本当にハクアは天文係に入るようになった。次の日、晴海先生に話したらすごいいいよと言ってもらえてハクアはすごく喜んでいた。

朱鳥くんもイヤって言わないよね？

タツヤはあのととき希に頷いたが、希はどうしてあんなふうに聞いたのだろうか。希がハクアを誘ったことに、タツヤがイヤと言うわけがない。

ハクアはもう大切な友達なのだ。

夏休みに入る直前の水曜日、約束通り、タツヤ、希、ハクアの三人で郊外の公園に行くことになった。ちなみに、もう一人ハクア応

援団に入ることになった丘野アランは、希がもう一度学校で聞いてみたが、やはり「入らない、行かない」という返事だった。

「ハクちゃん応援団なのに？」

と希が少し残念そうな声を出すと、アランは一瞬ためらう顔を見せたが、

「……ごめんな。俺、サッカーの試合をテレビで見たいんだ」

そう言っただけで断った。テレビなら録画できるのに、とタツヤは内心思ったが、興味が無いのを押しつけるのも良くないと思って口に出さなかった。

水曜日になる前に、ハクアがこれまで作った天文新聞を見たい、というので、希が五月、六月、七月の三枚を学校に持って来て、図書室で広げて見せた。ハクアは、タツヤが星座図鑑やネットで調べた星座にまつわる神話を読みはじめ、「おおっ」とか「それやつちやったかー」とか変な声を上げて面白そうに読んでいた。図書室なので静かにしたほうがいいと思ったが、自分たちで作った新聞をこんなに一生懸命読んでくれるハクアを、何となくそのままにしていた。

三枚全部読み終わり、ハクアはニヤツと笑顔を見せた。満足してくれたのだろうか。

「ハクちゃん、星座のことが少しわかってきた？」

「うん、バツチリ頭に入った！」

自信満々に親指でグーを作る。理科のテストで僕の力を勝手に借りたハクアが、本当に覚えられたのかあやしいが。

「これ、次はいつ作るんだ？」

「うーん、八月は学校がお休みだから、次は九月だよ。せつかく二ヶ月あるし、ちょっと新聞の枚数を多くしたいなあ、て思ってるの」

希はタツヤとハクアの顔を見つめながら話す。

「字はたっつんが書くのか？」

「まあ、そうだけど……少しはハクアが書いてもいいんだよ？」

「ん？ あたし、字は下手だから無理。じゃあ、食べ物のこと調べるよ」

「いや、星のこと調べろって」

「カニ座とかって食べ物じゃないのか？」

希は声を出して笑った。タツヤはため息をつく。本当にハクアは天文係に向いているのだろうか。希は目を輝かせてハクアの手を握る。

「うん、それなら、星型の食べ物のことでいいよ」

「おおっ、ヒトデとか？」

と二人してよく分からないことを言っていた。

そして 天体観測のあの夜が来た。

いつも街中のバス停を集合場所に行っているのだが、ハクアがどのバス停か分からないと言うので、希がハクアの家まで迎えに行くことになった。タツヤは家に帰り、家族の夕食と自分の弁当を作った。キッチンを覗きに来た妹の由果に、ハクアも天文係に入ったと話すと、なぜか由果もすごく喜んだが、ふとタツヤの手元を見て「そのお弁当の量で足りるの……？」と心配された。

ハクアは一応「自分で弁当を作ってくる！」と自信たっぷりに宣言していたのだが、由果の言葉もそうだなと思ったので、タツヤはおかずを多めに作ってタツパに詰めた。おかげでリュックが弁当だけでかなりふくらんでしまったが、ハクアが星を見ずにずっと物欲しそうな顔をするを思えば、これくらいでいいだろう。

日もすっかり暮れた集合時間にバス停に着くと、停留所のベンチに希とハクアが並んで座っていた。信号待ちをしていると、希が立ち上がって手を振った。希はもっとおっとり落ち着いた性格だったが、最近はハクアと一緒にいるせいか、やけに元気がいい感じがする。ハクアはじっと目を凝らす。そう言えば、視力があまり良くないと言っていた。

停留所には他にも人がいて、ベンチに空きはなく、タツヤは立って待った。バスが来るまでまだ時間がある。ハクアはいつもの派手な色のタンクトップとショートパンツ、ハイソックス、スニーカーという格好だが、意外なのは希の格好だった。だいたい半袖の服と長いスカートが多いのだが、なぜか今日はピンクのＴシャツと黒のショートパンツで、ぱっと見てまるで印象が違った。髪もいつもと違って、星の髪飾りで二つにくくり、両脇から自然に下ろしていた。今日、学校でこんな服や髪型をしていただろうか。

「ふふっ、驚いた？ これ、ハクちゃんの服だよ」

希が楽しそうに言う。靴下は足首までなので、足がすごく長く見える。しかもハクアと違って、希の足はほとんど日焼けしていないので、夜の暗さでも二人並ぶとかなり希の白い肌が目立った。

「あ……そうなんだ」

言われると、その服はハクアが着ているのを見たことがある気がした。

「ちっ、なんだ、あんまり驚かないなあ」

ハクアがつまらなさそうに舌打ちした。ひざの上に迷彩柄のリュックを載せている。ちゃんと弁当を持って来ただろうか。不意に、希がいきなりタツヤの片方の手首を握った。

「ねえ、あんまり 似合わない？」

希がさびしそうな瞳でタツヤを見上げる。タツヤは慌てて首を横に振った。

「そっ、そんなことないよ。なんか、そんなのも、たまにはいいと思うよ」

「ほんと？ほんとに？」

タツヤは希の満面の笑みを見て、顔が真っ赤になった。自分でも何を言っているか混乱している。希は何で急にハクアの服を着たいと思ったのか。女の子の気持ちはよく分からない。

「あたしは毎日そんなのだけどねー」

ハクアは不満げにほほをふくらませる。希は手を離れた。タツヤ

は少しほつとする。

「今後、逆をやってみる？」

「のぞみんの服をあたしが？ いや、のぞみんのはみんな可愛いから似合わないって」

「朱鳥くんは見たい？」

「えっ、えっ？ 何を？」

聞き返すと、髪を二つくりにした希とまた目が合った。なぜか恥ずかしくて目を逸らしたいが、それでもつい見てしまう。

「たつつんさあ、のぞみんの顔ばかり見てないで、話聞けよー」

「いや、聞いているよ」

「……じゃあ、答えろよ！」

ハクアはちよつと機嫌が悪かった。タツヤがぼうつとしていたからだと思うが、何と言ったら機嫌が直るのが分からない。

「まあ……見てもいいけど、その……」

「ねえ、見たいって！ ハクちゃん、どうする？」

希は脇にある赤いリュックを叩いた。その中に希の着替えた服が入っているようだ。

「たつつんが乗り気じゃないならいいや。まあ……今度にするよ」

「じゃあ、わたしが持つてる一番かわいい服を貸してあげるね！

霧枝ちゃんとか由果ちゃんにも見せようよ！」

すると、ハクアはきつい視線でタツヤをにらんだ。

「別に、見たくないなら見たくないって言えばいいからな。あたしの前で心を偽るなよ？ まあ、仕方ないから、今度たつつんのうちで着てやるけど」

「あ、うん……」

今度つていつだよ とタツヤが胸のうちでつぶやいた。自分が着たいんじゃないのかな。それを僕との約束っぽくするなんて……とタツヤは浮かんだ言葉を全部飲みこんだ。ただ、心は偽っていない。少し、見てみたかった。由果もきつと喜ぶだろうと思った。

郊外の公園行きのバスに乗り込むと、いきなり弁当の話になった。希と二人ならここで星座の話をいろいろするのだが、ハクアが突然リュックから弁当を取り出したのだ。バスの中は空いていて、三人は後方の二人がけ座席に向かい、ハクアと希が並び、タツヤは一人でそのすぐ前の列に座った。いつもだとタツヤと希は並んで座るのだが、今日の夏らしい希の姿を間近で見るのがまだ慣れなくて、タツヤは黙って一人になった。

「のぞみん、見てくれっ！　これが『ハクア・スペシャルギガ弁当』だっ！」

ハクアが大声とともに弁当箱を開けると、一気に肉と油の臭いが広がった。タツヤはこの臭いを知っている。間違いなくギガバーガの臭いだ。振り返ると、やはりそうだった。

「ハクア、バスの中でお弁当を食べるなよ」

「えっ？　何で？」

「何でって……他の人も乗ってるだろ？」

「でも、他の人は前のほうだぞ？」

後方の席には乗客の姿がなくて、前方には大人や高校生が何人か静かに乗っていた。

「ダメだ。マナーだよ」

「……じゃあ、食べない。見るだけ！　ちょっと見るだけ！　それで我慢する！」

そう言うハクアの手元には、大人でもあまり使わないような巨大なアルミ製の弁当箱があった。仕切りで二つに分かれていて、片方に平べったいハンバーガーが何枚も重ねて押し込められている。そして、もう片方は、たぶん元はハンバーガーのパンだと思うが、大きなソーセージが挟んであった。

ハンバーガーを分解して詰めたまでは良いとして、まさかパンをホットドッグにするとは。恐るべき肉だらけのスペシャルギガ弁当だ。ちなみに野菜はゼロだ。

「あれ？　ハクちゃん、ポテトは？　帰りにセットで買ってたよね

？」

希が聞く。学校帰りに一緒に行ったみたいだ。

「ポテト？ あ、作ってる間に食べた」

これを作ったとは言わせたくない。それはともかく、希は目を丸くした。

「えっ、全部？」

「うん、全部」

「……もう、いいからしまえて。肉の臭いが……すごいから」

タツヤが言うと、ハクアは弁当にふたをして、なぜか挑戦的な笑みを見せた。

「たつつん、あとでじっくり見ていいからな！ ギガバーガーの味にもちよつと飽きてきたし、半分くらい取り換えっこしてもいいぞ！」

「いや……」

「たつつん、ちゃんと水筒も持ってきたんだ！ すごいぞ！ コーラ満タンだ！」

水筒にコーラを入れてくるのまでは予想できなかった。もう笑うのを飛び越して、嘔き出すことが心配だ。服が汚れないといいけれど。

「……わかった、公園でゆっくり見るよ」

タツヤは興奮するハクアを静め、席に座り直した。あれだけ食べていてちよつと飽きたくらいと言うハクアもハクアだが、タツヤはだいぶギガバーガーの臭いやコーラの味に飽きていた。

そして、しばらくして ハクアは静かになった。

タツヤが気になって後ろの席をまた見ると、希と目が合った。希は小声で答える。

「ふふっ、ハクちゃん、寝ちゃった」

ハクアは窓側に座っているが、希の肩に頭をことんと置いてよく寝ていた。バスが出発してからまだ五分くらいしか経っていない。

ハクアの手の力が抜けて、リュックが希のひざに半分載っている。

「月本さん、重くない？」

タツヤは小声で聞くと、希はきよとした顔をして、それからにつこりほほ笑んだ。

「……朱鳥くん、ほんとやさしいね」

「いや、その、ちょっと気になっただけだよ」

何となく今日の希の笑顔は特別だった。いつもなら希と並んで話すのに、今日は隣りが空いているのも少し残念だった。だからつい後ろを見てしまう。もちろん、そんな気持ちはここで言い出せない。希は初めて天体観測に来てくれたハクアときつとたくさん話したいのだ。肝心のハクアは寝てしまったけれど。

「朱鳥くん、退屈なの？」

だけど、希に正面からそう聞かれると、タツヤはごまかせなかった。

「あはは……まあ、ちょっとだけね。うん。大丈夫なら、いいんだけど」

「そうなんだ、ごめんね」

希は顔を曇らせた。タツヤはこれ以上見ていられなくて、また座り直した。そして、希も静かになった。

タツヤは窓の外に夜が流れていくのをぼんやり眺める。今日のために星座図鑑の夏のページをいろいろ読んできたのだ。何となく、やっぱり、希と話したかった。ハクアはもちろん大事な友達だけど、この天体観測は、希とゆつくり話す月に一度きりの大切な時間だったのだ。ハクアと一緒に来たことで、タツヤはかえってそれを強く感じてしまった。

ハクアがいるから学校が楽しいし、誰かを一生懸命助けたり、誰かに助けてもらったり、そんなことが何度か重なって、少しは男らしい勇気もついてきた気もするけれど、さびしいときだけはつい希のことを考えてしまう。

そんなに急に　強くはなれないのだ。タツヤはそれを

「朱鳥くん、奥につめてー」

希がリュックを持って横に立っていた。

「えっ？ ハクアは？」

「えへへ。寝ちゃったから置いてきた。ねえ、座っていい？」

タツヤは真ん中に座っていたので、お尻を窓側にずらした。ついでに立ち上がり、後ろの席を見ると、ハクアは寝顔のまま窓際に頭を傾けていた。多少の揺れでは起きる気配もない。

バスは坂道を登りはじめる。小高い丘にある郊外の公園に少しずつ近づいているのだ。夜、星空が降ってくる、あの静かな公園に。星と過ごす時間がある、あの場所に。

「どうぞ」

希はくすくす笑って、空いた席にちょこんと座った。ハクアみたいにスポーティな格好をしているけれど、ひとつひとつの仕草が間違いない希だった。

「ハクちゃんね、学校帰り、とにかくテンションが高くて大変だったんだよ」

「そうなんだ」

「ほんとに星が好きなんだなあって、うれしくなっちゃって」

「……みたいだね」

タツヤは本心ではそう思わなかった。たぶん弁当を持ってみんなで出かけるというのが楽しみで仕方なかったのだ。星の話なんかひとつもしていない。もちろん、あの公園の広場から星空を見たら感動するだろうけど、それはこれからいいのだ。希もそう感じているかもしれないけれど、タツヤはそれを口にはしなかった。

「朱鳥くん、一人にしちゃってごめんね」

思いがけない言葉だった。でも、それは違う。タツヤが二人の席の横に行けば良かったのだ。単に気後れしただけだ。

「いや、僕は」

「やっぱり話したくなっちゃって」

タツヤの声をさえぎって希が言った。タツヤは驚き、息が止まり

そうだった。さっき自分の胸にあった気持ち、希の口から自分に届いた。肩が触れるくらいの距離で話すのはお泊まり会ぶりだろうか。

夜に包まれた丘を進むと、窓明かりの数がだんだん少なくなっていく。バスの中は静かで、話しているのは本当に二人だけだった。

「うん、そうだね、せっかくいろいろ調べてきたし」

「ねえ、聞かせて」

希は少し身を乗り出して、タツヤの瞳の中をじっと見た。タツヤは戸惑う。

「ハクアは起こさなくていい？」

「いいよ……だって気持ちよく寝ちゃってるもん」

「そうだね」

タツヤは『夏の大三角形』の星座について調べてきたことを話した。こと座のベガ、はくちょう座のデネブ、わし座のアルタイルを頂点にして結んだ三角形。こと座は愛する妻を生き返らそうとした天才音楽家の神様の形見をゼウスが拾ったとか、はくちょう座はゼウスが王妃に近づくために白鳥に化けたとか、わし座は美少年の王子を召使いにするためにゼウスがワシに化けて連れ去ったとか、調べるとだいたい星座はゼウスが何となく作ったみたいだ。

夏から現れる三角形。でも、中国や日本では、こと座のベガとわし座のアルタイルだけが七夕伝説として織姫と彦星になる。どうしても星の数も大きさも地球から見れば同じなのに、ヨーロッパの人は三つを結びつけ、中国の人は二つを結びつけたのだろうか。考えると思議だ。こと座とはくちょう座のほうが、実は近いのに。

「近いより遠いほうが、燃えるんだよ」

希は言った。

「えっ、モエル？ そうなの？」

「って言うけど、ほんとに近いほうがいいよね」

「うん……僕もそう思うかな」

近いより遠いほうがいいなら、結婚とか変だと思うのだ。

「あ、あとね、こと座も昔は鳥だったんだよ。だから、夏の大三角形はみんな鳥みたいに自由なの」

「えっ、琴も鳥だったの？」

「うん、そうだよ。だからゼウスってすごいんだよ」

いつもの通り、希のつけ足す星座の話はだいたいデタラメだった。

「朱鳥くんも鳥だね！」

「まあ、そうだね」

朱鳥は鳳凰つまり不死鳥のことだ、と父の廉太郎から教わった。だから鳥ではあるけれど、神様というか、想像上の生き物なのだ。

「ハクちゃんは……白鳥？」

いや、ハクアは超肉食だからワシのほうじゃないかな、と思うけれど。池をゆったりと泳ぐ姿がどう見てもハクアに思えなくて、タツヤはこっそり笑った。

「わたしは琴だね。ピアノやってるし！」

「あ、ほんとだ、ぴったりだね」

「ほんとに？ うん、織姫 名前がかわいいよね、織姫ちゃん」

希はウキウキと弾むように笑った。

その少し前、曲がり角でバスがゴトンと揺れて、ハクアが一瞬目を覚ました。隣りにいた希の姿がなくて、前の座席からタツヤと希の楽しそうな話し声が聞こえた。二人はこと座とかゼウスとか星座の話をしているみたいだった。

少し考えたが、ハクアは再び目をつぶった。タツヤはバスに乗ってから機嫌が悪かった。たぶん、希を自分に取られてつまらなかったのだと思う。

あたしの前で心を偽るなよ？

いまさら、ハクアは自分が言った言葉が少し憎らしかった。自分を天体観測に誘ってくれたのは希なのに、何だかタツヤの一言一言がつい気になってしまふ。それは、希にも申し訳ない。

外の景色はだいぶ街中から離れて暗く、ゆるやかに丘を登っていた。とりあえず、もうこれ以上何も考えず、目をつぶった。またゴトンと揺れて、窓ガラスに軽く頭をぶつけたが、ひんやりとしてなぜか心地良かった。

第6話 『天体観測とスペシャルギガ弁当』 2 / 2

「ハクちゃん、もう着くよ」

肩を叩かれ、ハクアは希に起こされた。今度は、希はちゃんと横に座っていた。

タツヤもリュックを持って通路に立っている。もう不機嫌そうな顔はしていない。ゆっくり希と話せて落ち着いたのかなと思う。

「ハクちゃん、起きられる？」

「おう！」

気合を入れて威勢良く起き上がった。よだれの筋が唇の下に乾いてこびりついていた。そんなに長い時間は寝てないと思ったが、バスの時計を見ると、三十分近く乗っていたみたいだ。

「お金ある？」

「おう！」

ハクアはまだ少し寝ぼけていて、それ以外の返事が出なかった。

タツヤと希は一ヶ月ぶりに、郊外の公園前のバス停に下りた。草の匂いがぐつと強くなる。これはいつも同じだ。そして、流星が夜空を走った瞬間を今でもはっきりと思い出せる。続いて、ハクアは少しよろけながらバスを下りた。

タツヤはぐつと背筋を伸ばす。少し歩いたところに団地もあるせいか、他にも何人か下りた。大人だけでなく、高校生や、同じ年くらいの子供の姿もあった。ここは終点ではないので、バスはドアを閉め、次の停留所に向かって去って行った。

バス停のところは外灯が何本も立っていて明るいが、少し離れればだいぶ暗さが濃くなってしまう。公園のまわりは外灯も少なく、公園内部はもっと暗かった。公園の入口は芝生できれいに整備されているが、それでもフェンスに押し寄せる緑の群れはざわざわと何かを呼んでいるかと思わせる不気味さがあった。

タツヤは初めて希と来たとき、恐さで足が一瞬止まったが、四度目の今日はもうだいぶ気持ちも慣れていた。よし、行くか、とタツヤがいつものように希の手を引こうと差し出すと、希は顔を赤らめて首を横に振った。

「うっん、今日はいいよ」

「……そっか」

希は「今日は」と言ったが、もしかするとこれから三人で来ると希の手を握って歩くことはないかもしれない。希が恐くないならそれでいいのだけれど、何だか天体観測の雰囲気が少し変わってしまった。うようで、タツヤはまたさびしい気分になった。

そして、肝心のハクアを見ると、なぜかバス停のベンチに座り込んでいる。

「よし、バツチリ食うか」

明らかにリュックからスペシャルギガ弁当を取り出そうとしていた。希が小走りに止めに行く。タツヤも何か言おうと思ったが、希に任せた。

「ハクちゃん、ここではまだお弁当食べないよ」

「えっ？ まだ？ うーん……」

「でも、お弁当はきれいな星を見ながら食べるとおいしいよ」

「……ここにしようよお」

さっきまで寝ていたせいか、シャキッとせず、少しいらだつようなだだっ子ぶりだ。

「まだだよ、外灯とか電線がたくさんあるからダメ」

「うーん、そっかぁ……」

ハクアは澁々立ち上がる。タツヤは少し離れて見ていて、ハクアは夜に弱いのかな、と思うくらい脱力していた。希に手を引かれて入口まで来ても、まだ「なあ、やっぱり、バス停のベンチに戻らないか？」と何度かばやいていた。

弱音はあまり吐かない性格のハクアだが、いくら空腹でも、希にそこまで食い下がるのは少し様子がおかしい。やはり、先週の超能

力の反動がまだ残っているのか、それとも単に寝ぼけているせいなのか、気になった。けれど、希がとにかくハクアの手を引っ張って公園に入るので、タツヤはおとなしくあとに続いた。

希は先頭になって、大きな円形ベンチがある広場をめざす。そこは大きな外灯があり、それでも最高に見晴らしがよく、星空がすぐきれいに見える場所。つまり、タツヤの希があ流星を見た場所だ。ハクアと会う運命のはじまったところ。

そこに向かっているのに、本当に渋々歩いているハクアの後姿を見ると、何だか気分が悪かった。広場までは、細いけれど舗装された一本道があり、別に歩きにくくはない。けれど、ハクアの足取りが重いのだ。希が心配して手を引きながら声をかける。

「ハクちゃん、暗いのは怖い？」

「いや、全然そうじゃないんだが……」

「おなか空いたのは我慢して。もうちょっとだから」

「まあ、それも我慢できるんだが……」

公園に着いてから中身が変わったのかと思うほど、ハクアは齒切れが悪くなった。ときどき、思い出したように後ろを振り返り、その度にタツヤと目が合う。振り返ったハクアの表情は、見る度に陰しくなっていた。タツヤはさすがに気味が悪くなってきた。せつかく楽しみにしていた天体観測なのに、何でハクアはこんなに調子がおかしいのだろうか。炭酸のコーラでも飲ませたら普通に戻ったりしないか。そんなことを思った。

「ハクちゃん、ほらっ、広場に着いたよ」

希が前方の広々したところを指さす。中心に明るい外灯が立っていて、その下に円形のベンチがあり、芝生が一面に取り囲んでいる。広場の外周は真っ暗な雑木林だった。

そして、見上げるとまさに狙い澄ましたように、美しい真夏の三角形がでっかく浮かび上がっていた。星の光の粒が大きいから、三角形はすぐ分かる。けれど、それを隠すくらい無数の星が広場の空

を覆い尽くしていた。黒い雑木林の端から反対の端まで、少しの間もなく細かやかな星空があり、三人の影を静かにじっくりと包んでいた。

「ハクちゃん」

「……ん？」

「いつもここでお弁当にしてるんだよ。待たせちゃってごめんね」
希が草の上を跳ねるような足取りで手を引く。

明るい円形のベンチのところで、三人ともリュックを下ろす。希はリュックから小型の望遠鏡を取り出し、ヒモで首にさげた。

「あとでハクちゃんにも貸してあげるね」

肉眼でも十分星空の美しさを味わえるが、望遠鏡があるなら視力の良くないハクアもきつと星をじっくり見られるだろう。タツヤは希の気配りに少し感動した。

「まずはお弁当タイムだね」

「いや……ここじゃダメだ……」

あれだけハクアは弁当を食べたがっていたのに、いまは異様に陰しい顔をしていた。外灯のおかげで表情がよく見える。タツヤは背筋がゾツとした。ハクアはなぜか再び希の手を握る。希の顔色が曇るが、ハクアはじりじりとベンチから離れはじめた。

「……ダメだ。やっぱり、明るいところはダメだ」

ハクアの声が一段と低くなる。

「だって、お弁当」

希が言いかけたとき、広場の暗がりのどこかでカチャリという金属音が鳴った。その瞬間、ハクアは今日一番の大声を出した。

「誰がいる！ ライトから離れる！」

叫びながらハクアはすでにそこから走り始めていた。希の腕を強く引き、ベンチからも広場の入口からも離れた方向へと走った。芝生を蹴り、雑木林に向かって突き進む。タツヤもその声を信じて後ろ姿を追った。

ピカツと暗闇の奥から鋭い閃光が見えた。広場の入口の方向だ。

「ハクア！ いま光ったぞ！」

「あたしも見た！ 正体はわからん！」

懸命に走りながら、それだけの短いやりとりを交わす。

「動物か？」

「あの足音は人間だ！ それくらい聞き分けられるぞ？」

そして、外灯から少し距離を取ったところで、ハクアは振り返った。ここはだいぶ暗い。足音が聞こえるから輪郭がつかめるが、表情はまったく見えない。急に走ったせいで、希の息が上がっているのが気配で伝わってきた。外灯までの距離は二十メートルくらいはあると思える。ハクアが言った足音の聞き分けは、タツヤにはよく分からなかった。

「たつつん、やばいぞ……」

ハクアがつぶやく。

三人と外灯を結ぶ直線上の少し明るいところに、奇妙な現象が起きていた。夜の公園には羽虫や蛾がよく飛んでいるが、その場所で大きな蛾が、いきなり芝生の上に急降下した。まるで吸引機に吸いこまれるように。そして、その上から真っ黒いもつと大きなものがバタバタはためきながら地面に落ちた。大きさから、小鳥のように見えた。

いったい何が、何がそこで起きたんだ。

タツヤは恐る恐る後ずさり、ハクアの横に並んだ。希もちゃんといる。

「ちっ、外したか」

暗闇の先で、聞き慣れない女の子の声がした。目を凝らすと、広場の入口方向からひとつの人影がこちらに向かって歩いてくる。その輪郭が見えた。顔までは無理だ。背丈は大きくない。いや、自分たちとそれほど変わらない感じに見えた。

こんな時間に、女の子一人がこんな場所になぜいるのか。

「なんだよ、気持ち悪い。コウモリか」

得体の知れない少女は悪態をつく、また手元でピカツと閃光を放った。すると、風が吹いたわけでもないのに、その場所の芝生がざわめいて、コウモリや蛾などが再び地面から飛び立った。コウモリは明かりの外へすぐ消えた。

外灯は、広場の中心まで歩いてきた少女の姿をゆっくりと照らした。一番目立つのは、真つ赤な服　いや、ガールスカウトみたいな格好というか、あれは映画で見るとような軍服と言うほうがいいような服装。茶色っぽい巻き髪。そしてごつい革靴を履き、右手には何か黒いものを持っている。

姿をこつちによく見せたいのかと思えるほど、明かりの下で仁王立ちした。

「お・待・た・せ、おかずハンターさん」

少女は笑みを浮かべ、ねっとりとした口調で挑発するように言った。

「その呼び方……！」

ハクアはいつもよりずっと声を抑えつつ言い返す。

「悪いけど、あんたとは面識ないんだけどね。薬がないのに、元気してた？」

少女はキープタブレットのことも知っている。間違いない。

「追跡隊！　とうとう来たか！」

ハクアは一声叫ぶと、いつそう警戒心を高め、外灯から一定の距離を取りながら旋回しはじめた。タツヤも歩調を合わせる。とにかく、この状況はハクアに合わせるしかない。相手はほぼ確実に超能力者なのだ。しかも、ハクアと違う種類の能力を持っているように思えた。

巻き髪の少女は、こちらが横歩きする気配を察したらしく、だいたいの位置を目で追ってくる。

「あたし、お仕事はテキパキしたいの。あんまり粘らないでくれる？」

そして、少女も明かりの外に向かって少しずつ歩き出した。

ハクアはさすがにもう何も答えないが、余裕があるようには感じられない。不良や引ったくり犯をまっしぐらに追ったときの勢いとは全然違う。すごく慎重に行動を選んでいる気がする。もしかするとハクアはここで捕まってしまうんじゃないか、と不安ばかりが強く込み上げてくる。

巻き髪の少女の姿は、ついに半分ほど暗闇に溶けた。

「脱走したやつとは訓練の年期が違っんだよ！一般人を二人も連れて逃げられると思うなよ？！」

右手を前方に突き出す。あれは銃だ！

閃光が走った。発砲音は鳴らないが、銃口がピカツと光ったのが見えた。タツヤの体には異変がなく、何も起こらなかったように思えたが、次の瞬間、希が鋭い悲鳴を上げた。

「きやあつ！」

「のぞみん！どうした？！」

「ハクちゃん、足が動かない！」

恐怖のせいで希の声は絶叫に近かった。二人ともそんな大声を出したら、

「あはっ、ラッキイイ！」

巻き髪の少女は歓喜の声を上げ、素早く走って近づき、再び銃口を構えた。

ハクアはその場に止まったままだ。まさか敵の動きが見えてないのか？！

タツヤは慌てて走り出す。

「また撃たれるぞ！」

もうタツヤからハクアに体当たりするような勢いだった。ハクアの体がよろけるのを自分で必死につかみ止める。腕を握った感触と体温があつた。

「お前は希の手を絶対離すな！！」

「うん！ぐっ、のぞみんが重くなってる！」

「ごめんね！ ごめんね！」

「静かに！ とにかく引つ張れ！」

そう言い交わしながら、タツヤは懸命にハクアの腕を引いて暗闇を突っ走った。背後で銃口がまた光ったが、タツヤの体に異変はなかった。この暗さでは、方向感覚は正確とは言えない。けれど、あの少女の射程範囲から離れないと、希の足がどうなったかも確認できない。痛いとは言っていないが、とにかく危険な状況だ。何度か芝生で滑りそうになるが、スニーカーを履いてきて良かった。目の前にいきなり木の幹が迫った。

ガサガサッと落ち葉を踏む音がして、木と木の間に突入した。星がほとんど見えなくなる。星明かりすらも届かない暗闇だ。だが、それでも雑木林に入ったのは、とにかくあの危険な銃撃を防ぐためだった。ここなら木が障害物になってくれると考えた。

しかし、タツヤはこの雑木林は狭く、しかもフェンスに囲まれているのを知っていた。ただ、それより希の足だ。幸い、あの軍服の少女は林の中まで追って来ていない。ハクアを捕まえるつもりでここに来たのだ。この公園の構造を知っているに違いない。

タツヤは深く入らずに立ち止まった。雑木林の中だが、木々の間から広場の外灯が見えるくらいの位置だ。まず、希がいることを小聲で確かめる。

「月本さん、いる？」

「う、うん」

希は息を切らしつつ、タツヤに合わせて小聲で答える。表情がまったく分からないのがすごく不安だ。

「足を撃たれたの？」

「……う、ううん、撃たれたんじゃない、急に左足がすごく重くなったの。いまは大丈夫」

「えっ？ いまは大丈夫なの？」

「うん、大丈夫」

ハクアも呼吸を弾ませながら、小声で入ってきた。

「エリア系だ。あの女はエリア系だ。だけど、何であいつは」

「ハクア、エリア系って何だ？」

「エリア系第一段階、マグネティック・エリア。手に触れた場所の重力を異常に上げて、その場所にしばりつけるんだ。だけど、何であいつは、あいつは」

「落ち着いて。どうしたんだ？」

タツヤはハクアの肩をさすり、手を握った。

「あいつは何で、手で地面に触れてないのに発動するんだ？！それがエリア系の発動条件なんだ。たっつん、これは絶対なんだよ！」

ハクアはひどく動揺している。せつかく小声で聞いても、ハクアの声はすぐ大きくなってしまふ。これではまずい。しかも、ハクアがこんな動揺していると、希もタツヤも最悪の結末をどうしたって考えてしまふ。だけど、ハクアは大切な友達だ。絶対に離れ離れになんたくなんかない。ハクアがいるから自分は。

サクツ、サクツ。雑木林の外で生々しい足音が聞こえた。少女がゆっくり近づいてくる。

「あんた声でかいから、林の外でもだいたい聞こえてるよ」

追跡隊の少女の輪郭がぼんやりと見えた。銃を右手にしっかりと構えている。

「あたし、あんたが不得意なエリア系だよ。地面撃てばおしまいだからね。鬼さん、鬼さん、出ておいで」

またも挑発だ。ハクアは完全に落ち着きを失っている。林のすぐ外で超能力者の銃口が待ち構える。そのプレッシャーに迫られて、三人とも暗闇や無言や恐怖に押しつぶされそうだった。

希が震える声で聞いた。

「ねえ、ハクちゃん、連れ戻されるとどうなるの……？」

「一度脱走したやつは、死ぬまで独房に入れられる決まりだ。それから強制的に実験体になる」

独房、実験体 想像のつかないものに対し、タツヤも希も言葉

が続かなかった。

「ガン首そろえて出ておいでー 楽しい学校に帰りましょっ」
歌いはじめた。背筋が冷たくなる。希がタツヤとハクアに体を寄せてくる。

「ハクちゃん、あの子は知ってるの……？」

「名前はわかんない。けど、絶対に訓練学校の追跡隊だ。脱走した超能力者を連れ戻すのが役目なんだ……！」

それを聞きながら、タツヤは唇を強く噛んだ。

「こだまが翼を折っちゃうよー 楽しい学校に帰りましょっ」

「学校じゃない、もうあたしには牢屋しかない……！ こんなに楽しい生活を知っちゃったんだ。いまさらそんなもの、死ぬよりイヤだっ……！」

ハクアの口からしぼり出される悲痛な叫び。それはきつと、気味の悪い鼻歌を浮かべる追跡隊の少女にも全部聞こえているだろう。

とにかく、ハクアが不得意な相手なら、ここから何とか逃げ出さなければダメだ。いま考えることは、捕まったらどうなるかでなくあのエリア系超能力の有効範囲のことだ。一発目は撃っても当たらなかったわけだし、そのあと希は片足が捕まったのに、ハクアが何とか引つ張って逃げ出し、いま大丈夫なのは、もしかすると有効範囲から離れたからじゃないだろうか。

「ハクア、もう一度、あの能力のことを落ち着いて聞かせて」

「う、うん……」

「銃のことは知らないんだよね？」

「うん、わからない。あんな銃、訓練学校で見たことない」

「そっか。じゃあ、普通なら重力が上がる場所ってどれくらいなの？」

「普通なら……普通なら、半径二メートルくらいだったかな」

ハクアの声が少し落ち着いてきた。

そして、タツヤも自分の心を何とか静めながら、ここまでやられた攻撃を思い返す。半径二メートル。もし、そうだとしたら。

そうだ、言われると、そんなものだったんじゃないだろうか？ 二発目、希の左足がやられたのは、あの少女がだいたい見当をつけて撃ったら、たまたま左足だけ捕まってしまったのかもしれない。あの少女は、撃った場所と声の方向で追い詰めようとしている？

なら、三発目は本当に運良く外れたただだったのか。

だとしたら……。タツヤは少し考えて、意を固める。

「三人で何とかしよう」

ハクアはその言葉に素早く反応した。

「だったら視力を貸して！ あの弾をよけないとやられる！」

「違う、そうじゃない。視力はダメだ。落ち着いて。自分のことだけ考えたらダメだ」

タツヤは押し殺した声で、また浮き足出つハクアを抑えた。

「三人で何とかするんだ。三人の力を合わせて、ここを突破しよう」

漆黒の雑木林に包まれ、タツヤは二人の震える手をもう一度ぎゅっと握り締めた。

第7話 『一般人とトリプルパワーショット』 1 / 2

ハクアを加えて初めて三人で天体観測に来た、郊外の公園。いつもみたいに弁当を食べながら星を見上げるはずだった広場。だが、今夜は状況が一変してしまった。

広場の中心には一本の外灯がスラリと立ち、その光の下に円形ベンチがあり、三人のリュックはまだそこにある。広場を囲む暗い雑木林の中に、小動物のように潜みながら、三人は狩猟者の人影を注意深く見つめていた。

林の外には、赤い色の軍服を着た、巻き髪の少女が一人立つ。ハクアはあれが追跡隊だと言った。少女は、右手に黒い銃を持ち、ずっと銃口を三人が囁き合うところに向けて構えている。学校へ帰りましょ、と鼻歌を浮かべて威圧してくる。だが、ハクアが連れ戻される先は一生出られない牢獄だ、ハクアがそう叫んだ声が脳裏に蘇る。

三人の力を合わせて、ここを突破しよう。

タツヤは怯える二人の気持ちをひとつに合わせるために言ったが、決定的な作戦があるわけではなかった。だが、ここで三人がバラバラに動いても、誰かが少女が使うあのマグネティック・エリアの超能力で捕まるだろうし、それを見捨てて逃げるわけにはいかない。三人ともここから逃げのびなければダメだ。取り残されるなんてことは、絶対にダメだ。絶対にダメだ！

けれど……どこまで逃げればいいんだろうか。本当にハクアの自由は守れるのだろうか。

「ハクア、追跡隊のことをもう少し教えて」

「な、なんだ？」

「ハクアはあいつに発見されちゃったんだ。どうやって逃げるんだ？」

難しい質問だった。タツヤの口から、逃げるのは無理だと言って

いるようなものだ。ハクアもそれを分かっているのか、低く沈んだ声で答える。

「追跡隊は、超能力を知らない人間の前では能力を使わない……はずだ」

「そっか。……それなら、どうして僕らの前では襲ってきたんだろっ？」

タツヤは林の外で歌う人影を見ながら、ハクアに聞いた。

「そんなこと、あたしもわかんないよ」

ハクアはうつむきながら苦しそうに答える。希はそのとき何か言いかけたが、口をつぐんだ。ここで言い合ったら、三人の力を合わせることはできないのだ。

「じゃあ、一般人の前では超能力を使わないってのを 信じるしかないか……」

「うん」

「よし。帰りのバス停なら、大人がいつも何人かいるんだ。何とかそこまで逃げよう」

タツヤは囁き声で、いま考えている作戦を二人に話した。ハクアも希も真剣に聞いて、深くうなずいた。タツヤや希の財布や携帯はリュックの中だ。だから、リュックを取らないといけないし、三人とも無事にバス停まで戻らないといけない。

マグネティック・エリアの射程範囲はだいたい半径二メートルらしい。相手は銃を撃ち、超能力を使ってくる。三人バラバラで林から駆け出せば、相手をたぶん混乱させられると思うけれど、もし捕まったら、さっきの希みたいに自力では抜け出せそうにない。それから、ベンチにあるリュックを取りに行くところを狙われたら危険だし、一人でリュックを三つも持ったら、早く走れるわけがない。すごく危険だ。

それなら、ハクアのレンタルフォースの能力をうまく使うしかない。

作戦を伝えると、希は、首からかけていた小型の望遠鏡をハクアに手渡した。使って欲しい、ということだ。

ハクアは望遠鏡の重みを手に持って確かめる。真っ暗い林の中で、希はハクアの目をじつと見る。いまここに何も使えるものがないと、確かに一番いい道具だった。足元を探せば小石くらいはあるだろうが、小石では大きさと重さが足りないのだ。

「のぞみん、……いいのか？」

「ハクちゃんを守るほうがずっと大事」

希は小声ながら力強く言い切る。ハクアは一瞬無言になったあと、タツヤのほうを向いた。

「たつつん、断られるのをわかってて聞くぞ」

「うん」

「これであいつを直接」

タツヤは即座に首を横に振った。

「そんなのダメだ。追跡隊でも、大ケガさせるのはダメだ。それに、ハクアが捕まったら終わりなんだ。お前も逃げて、僕らも逃げるんだ」

ハクアは少しだけ笑顔を見せ、また険しい顔つきに戻った。そして、タツヤと希二人の腕をぐつとつかむ。

「それじゃ、借りるぞ」

「うん」希はうなずく。

「ちゃんと、返すからな。絶対に、時間切れとかじゃなく、離れ離れとかじゃなく、ちゃんと二人にお礼を言って、あたしの手で返すからな！」

ハクアは少し語気を荒げた。涙声混じりに聞こえたのは気のせいではないかもしれない。

「大丈夫、うまく行くよ」

タツヤは腕の力が体から消えていくのを感じた。いま、ハクアに移ったのだ。

木の葉の間から差すわずかな星明かりの下で、希のおでこに猫の

肉球型のあざが現れたのが見えた。たぶん、タツヤのおでこにも出ているはずだ。このあざが、暗く厳しい状況で、ハクアと絆がつかった証しに思えた。

追跡隊の少女　羽島こだまは、三人が山猫みたいに隠れたまま出てこないで、歌うのに飽きたので止めて、少し肩の力を抜いていた。動けば草を踏む足音がするだろうし、手ぶらの連中に、このリモートガンに対抗できる手段があるとも思えない。

こだまは先日 of 訓練学校での作戦会議で、フォース系超能力者「寺野ハクア」のプロフィールや能力値の記録をだいたい聞いていた。と言っても、たかが第一段階だし、訓練の途中で逃げ出したわけだから、持続力も低いし、しかも直接手で触らないと発動できないのだから、たいした戦力ではないな、と鼻で笑った。

こだまはエリア系なので、フォース系の学生棟だったハクアとは一度も会ったことはない。訓練も完全に別だった。ちなみに、隊長の天童はフォース系なのでハクアのことを知っていたが、天童から聞いていた性格によれば、ケンカっぱやく、とにかく何も考えず突撃してくるだろう、ということだった。反射神経が良くて俊敏なのが厄介だが、慌てず着実に足下へショットして動けないようにすれば問題ない、という指示だった。

ところが、いまはカメカアナグマのように暗い場所に引きこもったまま、ちつとも出てこない。仲間を置いて出られないのか、ハクア自身が臆病風に吹かれているのか、まあ、どちらでもいい。隊長の話とはずいぶん性格が違うが、たぶんリモートガンのことを知らないからだろう。こだまは火を恐れる動物を、じりじりと追い詰めるような気分だった。

こういう機会があるから、追跡隊に抜擢されたことを幸せに思う。エリア系の学生棟でもすごく優秀でかつこいと噂が聞こえていた天童隊長と一緒に仕事ができるのも幸せだが、逃げるウサギを実戦で捕えることができるのが、面白くて仕方ない。

メテオドロップという星空から授かった才能と宿命を受け入れられない軟弱者など、みんなの能力開発の踏み台になればいい。訓練学校では、追跡隊を一部恐れる声もあるが、こだまはそう割り切っている。天童隊長はそこまで言わないが、だが、超能力者が一般人の生活に紛れ込むことを絶対に見逃さないという鉄の意志を持っていた。

理由は簡単だ。数年前、妹の紅花がまだ超能力に目覚める前に、脱走者によって誘拐されたのである。当時の追跡隊と校長自らの出陣によって、脱走者は捕えられたが、それから、天童隊長と紅花は脱走者に対して強い警戒心を持つようになった。当然だな、とこだまは思う。

とにかく、今回は事情があって二人ともここには来られないが、一人でさっさと片付けて、隊長に褒めてもらおうとしよう。林の中の三匹は、追い込んだときに比べて急に静かになったが、位置は動いていないのは分かっている。

口元に笑みを浮かべながら、ぐつと銃を構える。

ハクアは呼吸を整える。望遠鏡を握り締める。そして、脱出作戦決行のために、雑木林の入口まで歩いて行こうとした。そのとき、タツヤは外の様子を見て、「ハクア、少し待って」と小声で制した。ハクアは黙って振り返る。険しい表情だったが、公園に来て嫌な予感に囚われていたときは雰囲気の違い、勇気と覚悟を帯びていた。それは、ハクアの腕に三人の力が注入されたからだと思う。

一方、タツヤは腕の力がガクツと抜けて、不安がこみ上げてきたが、何とか胸の中で抑えていた。ハクアに再び戻してもらうまでの我慢だ。他にいい作戦が思いつかなかった。それでも、ハクアと希が二人も納得してくれたのだから、やるしかない。

あとは決行のタイミングだ。

そのとき、ブルブルルと低い振動音が聞こえた気がした。風もない葉がこすれる音もない夜の広場と雑木林に、少し違和感のある音

だった。

すると、追跡隊の少女は銃口と顔をこちらに向けたまま、左手でポケットから何か取り出した。青く光っている。携帯電話かもしれない、とタツヤは思った。

「はい、天童隊長！　こだまです！」

少女は明るく大きな声で出た。一瞬だけ携帯の画面を見たが、視線をまたこちらに方向に戻す。タツヤは眉をしかめる。この状況で電話に出るのか。隊長と言ったな。増援が来るのだろうかと不安がよぎる。同時に、すぐ背後にいる希が無言でタツヤの背中に身を寄せてきた。同じことを考えたのかもしれない。

ハクアは数歩前で様子を見ていたが、その名前を聞いて変な反応を見せた。

「天童だと……？！」

タツヤはすぐさましつとハクアを黙らせる。ハクアもうなずいて一呼吸した。

追跡隊の少女はこちらを見ながら、携帯電話でそのままべらべら話しはじめた。

「はい、郊外の公園です。ほんと、せっかく夜に外かけたと思ったら、バスなんか乗りやがってねえ。紅花ちゃん、初出陣楽しみにしてたのに、車に弱いすもんね。ねえ、泣いてません？」

クスクスと笑い声を浮かべた。話が長い。それなら話し中に動くか。タツヤは考えた。すると、少女は電撃に撃たれたように、いきなり姿勢を正した。

「あつ、はい、すいません！　気を引き締めます。はい、大丈夫です。フォース系の落ちこぼれくらい、あたし一人で片付きますよ！」

「なんだと……！」

ハクアが低い声でうなる。そうだ、この性格を考えないと。タツヤは答えを出した。

「落ち着いて、ハクア、挑発に乗るな。合図を出すまで待つて」

「うん、オーケー」

囁き合う。そして、電話を切った瞬間に決行すると伝えた。ハクアは力強くうなずき返す。

少女の電話は続いている。

「ええ、まあ、なんかコソコソ抵抗してますけどねえ。籠城中です」
本当によくしゃべる相手だ。タツヤは二三歩進んで、ハクアの横まで歩いて行く。希も合わせてついてきた。当然、追跡者はこちらの足音を聞き、冷酷な視線で明らかに動きを追っている。

「あははっ、油断なんかしませんよ。それでは隊長！ さくらんぼ隊の名誉にかけて！」

電話を切った。少女の視線が携帯に行く。

その瞬間、ハクアとタツヤは待機場所からYの字に走った。同時にスタートを切った。林の中の人影が二つに分かれたことは、当然こだまは察知した。焦らずポケットに携帯をしまい、銃を構える。ウサギが二方向に動いたので、こだまは実戦感覚的に、広場の出口に近いほうへ銃口を向けた。逃げ道に近いほうを押えるのが優先だ。広場の出口方向へ走ったのはタツヤと希の二人だった。先頭を走るタツヤは、雑木林のへりに着くと、立ち止まり、地面に落ちている葉を思いきり蹴り上げた。夏だから落葉の数は多くないが、葉が大きくて敵に派手な動きを見せるには十分だった。

そして必死で転ばぬようにバランスを取って、その場から飛びのいた。腕が脱力しているから運動感覚がおかしいが、何とか体を切り返した。

銃口が一発光り、予想通り、木の葉が舞い上がった場所にマグネティック・エリアが着弾した。こだまは、誰かが走り出てきたと思ったのだ。タツヤの狙いは的中した。そして、二人の目に、舞い上がった葉が地面に吸いつけられて落下する異常な様子が、暗い中でぼんやり見えた。

とにかく、タツヤの足は射程範囲に入っていない。もし万一ここで食らったら、その後の作戦を希に託す予定だったが、この先も自

分が行けると知って、気合いと安堵が同時に噴き上がった。

「あれっ?! かわされたかった?!」

こだまは叫ぶ。タツヤたちの時間稼ぎは十分だった。

ハクアは広場の奥方向で走り、雑木林のへりに着いていた。林からは出ず、視界が広くなつたところで立ち止まり、望遠鏡を持った右手を大きく振りかぶった。満天の星空の下にひとつ大きく輝いている外灯めがけて、全力で投げつける。

「トリプルパワーショット!!」

三人の力。思わず叫んだ。あの高い位置へ投げるには腕力の増強が必要だった。だから、三人分の腕力を集めた。同時にコントロール精度も三人分になつているはずだ。そんなもの、ただの予想だ。根拠なんてない。だが、信じる気持ちも三人分だった。

望遠鏡は高速回転をしながら、目標へ一直線に飛び、外灯の電球に直撃した。

威力は十分だった。コントロールが良かったのか、あるいは運が良かったのか。とにかく、三つ固まった電球のうち、二個を見事に破壊した。全壊にはならなかったが、それだけでも十分あたりの明るさはぐつと減った。

「こつちがハクアかつ!」

こだまは、ハクアが叫んだせいで気づいたようだが、声を出さなくてもこんな破壊能力は普通の子どもでは無理だろう。反射的に、意識を広場の奥に向けた。

「あははっ、まさか全部割るつもりだったか?!」

「これで十分だ! 行くぞ! 本気でぶっ飛ばしてやるからなっ!」

ハクアは大声を出してすごんだ。こだまは、頼りない明かりに不安に覚えながらも、誇りとともに気持ちを奮い立たせ、銃口をしっかり構え、ハクアの襲来に備えた。

だが、しかし、それは来ない。ハクアも挑発に乗りやすい性格だが、こだまも挑発に応じやすい好戦的な性格だと見抜かれていた。ハクアはこのタイミングで駆け出したいのをぐつと我慢した。雑木

林のへりでまだ待機していたのだ。

その作戦を考えたタツヤ自身は、外灯が壊れて、望遠鏡が地面に落下し、立て続けに大きな音が鳴ったすきに、雑木林を颯爽と飛び出し、単独で広場を走っていた。ハクアのように声は上げない。非常に危険だと分かっているながらも、こだまの背後をめがけて必死で突進していく。

このときもし、こだまがハクアに全神経を向けていなければ、さすがに暗くなった広場でも、タツヤが迫る姿を見てすぐ二発目を撃ったかもしれない。だが、こだまは追跡隊という責任感から、ハクアに意識が傾いていた。天童隊長から俊敏だと聞いていたのもひとつの理由だし、超能力者の攻撃を警戒したというのも間違いない。

とにかく、こだまが背後へ迫ってくるタツヤの足音に気づくのが大幅に遅れたのだ。草の上を走る音を聞いて、こだまは慌てて振り返った。暗い。誰かが向かってくる。距離もない。

もう平常心は保てなかった。だが、それでも訓練を受けた隊員として、迫る相手に銃を向ける運動神経は生きていた。

「来るんじゃないっ！」

タツヤは銃口を見て、とっさに叫んだ。防衛本能だった。

「僕は一般人だっ！！ 撃つなああっ！！」

こだまは、その言葉によって心のブレーキを思いきり踏まれ、射撃をためらった。ほんの数秒、体が固まった。よけることも忘れた。それが相手の侵入を許した。

タツヤは全力で身を投げ出して、こだまに体当たりした。正確に言えば、足がもつれて地面を這うタツクルみたいな体勢になりながら、何とか持ちこたえ、こだまの細い両足に体の重みをぶち当てたのだ。

もしかすると、ここでこだまが銃でなく本来の手で迎撃していたら、タツヤの進撃を止められたかもしれない。だが、こだまは前のめりに倒れ、草の上に突っ伏した。これが実戦の結末だ。意識が乱

れ、手から銃が離れた。地面に倒れたタツヤの体に乗りかかり、混乱を極めた。暗さが不自由さを助長する。

こだまはフラフラと上体を起こす。少し時間が過ぎていた。そして、また近くに駆け足の音が迫っているのに気づいた。ハクアのいた方向からだ。こうなると分かって突進してきたのか。

「くそっ！ 来るんじゃないって！」

銃を探す。黒いせいかわすぐ見つからない。時間がない。手のひらを硬い草が刺す。そうだ 手だ。至近距離なら、銃に頼る必要はない。こだまは暗さにぐつと目を凝らし、迫ってくる人影を視界に捉えた。顔が見えた。間違いなくハクアだ。

「来てやったぞ！」

「うるさい！ あんたさえ止めれば、あたしの勝ちだ！」

こだまは右手で地面に触れ、腕に力をこめた。これでマグネティック・エリアを発動できる。半径二メートル圏内は、自分の完全勢力圏になる。こだまは勝利を確信し、自分の足元を見た。つまり、ハクアから目を逸らしたのだ。

ところが発動と同時に、飛びこんで来たハクアの両手がこだまの喉元に届いた。こだまは息が止まった。手が地面から離れる。軍服の襟と右袖がすまじい腕力によって引っ張られた。体が空へ浮き上がる。

「トリプルパワーショット！ その2いいっ！！」

世界が回転する。こだまは恐怖で目をつぶった。

ハクアは、発動しかけた重力場に対し、腕に全力を込めて、こだまの体を空まで担ぎ上げ、鮮やかに一本背負いへ持っていた。引き剥がされ、マグネティック・エリアの発動は不完全に終わった。一瞬おかしくなった重力感覚はすぐ元に戻った。

ドスンと大きな音がした。こだまは背中を地面に強く打って、夜空を仰ぐ。叫びそうになったが、呼気が詰まって声が出なかった。ハクアは軍服の襟と袖を握ったまま、息を切らしつつ、倒した相手をゆっくり見下ろした。

第7話 『一般人とトリプルパワーショット』 2 / 2

全員の動きが止まり、あたりに静寂が戻る。

タツヤは、腕力がなくて起き上がれない状態だったが、ハクアの逆転劇を見て、すかさず気力が復活した。ハクアが前みたいに足の脚力を取ろうとしたところに、声をかけた。

「ハクア、その子からは腕力を取って。そしたら、銃を撃てないよ。腕力を奪われたら腕が上がらない。つまりこの状態だ。銃は構えられないだろう。」

「よし！ 帰るまで借りとくからなっ！」

ハクアは痛みにつめいているこだまの腕から力を抜いた。どんな相手だろうと、おでこに猫の肉球マークが出る。これを見ると、戦いが終わったのだと思う。

「ハクちゃん、朱鳥くん、大丈夫？」

希が、暗がりの中から心配そうな顔でやってきた。こんな感じだとタツヤの代わりに希がこだまに突っ込むなんてのはまったく無駄だったかもしれない。あれが失敗していたら、ハクアの追撃は距離を考えても返り討ちに合っていたのかな、と思うと、今回は幸運が重なって何とか手にした勝利だったとタツヤは感じた。

それをハクアはどう考えているか……分らない。

「うん、無事だよー！」

そして、ハクアはすぐにタツヤと希に腕力を戻した。希のおでこからも肉球マークが消える。ようやく体の力のバランスが正常になり、安堵の気持ち湧いてきた。

ちゃんと二人にお礼を言っ、あたしの手で返すからな！

作戦を始める前にハクアが二人に言った言葉はきちんと守られた。離れ離れで力だけ戻ってくるなんて絶対に嫌だと思っていたから、これまで普通だったことが、何だかすごく嬉しかった。タツヤはリユックを持ち、気持ちを切り替える。

「仲間がもつと来るかもしれない。早く逃げよう！」

希は真剣にうなづく。一方、ハクアはきよとした。

「えっ、弁当は?!」

驚いた。

「えっ?! こんな場所で食べられるかよ！」

追跡隊の少女がそこに仰向けで倒れてるんだぞ。ハクアの感覚はおかしいのか? とタツヤは耳を疑った。希も少し顔を曇らせた。とにかく人がいる場所へ帰らなくては。

「ハクちゃん、バスが来ちゃう時間だから。急ごつ！」

希の言う通りだし、タツヤは一刻も早く、この暗く恐ろしい広場から離れたかった。外灯の明るさも減り、円形ベンチの上には白いガラスの破片が落ちて鈍く光っていて、いつも楽しい天体観測の広場とはまるで違う。星空は同じはずなのに、まったく知らない場所に迷い込んだような感覚だった。

タツヤと希は出口をめざす。だが、ハクアはなぜか出口と違う方向へ走った。

「待ってくれ! のぞみんの望遠鏡を探すから」

二人は足を止めた。希は、ハクアの背中に声をかける。

「ハクちゃん、望遠鏡、絶対壊れちゃってるからいいよ! 帰ろうよ！」

「違うんだ」

ハクアは振り向いた。

「あれ、のぞみんの名前のシールが貼ってあったんだ。いたずらしたと思われる」

確かにそうだ。事情はともあれ、外灯を壊したのはこの三人だ。公園の管理しているところから希の家や学校あたりに問い合わせが来るかもしれない。

「ったく、何でこんなに暗いんだ……」

ハクアは自分で外灯を壊しておいて、そうばやいていた。だけど、ハクアは視力が悪いはずだ。タツヤはすぐに駆けつけ、リュックか

ら携帯を取り出し、そのライトであたりを照らした。希もタツヤのあとに続いて、同じように携帯のライトで草を照らした。ライトを使うと、望遠鏡はすぐ見つかった。表面が白っぽくて探しやすいかったせいもある。見ると、名前のシールが貼ってあり、住所と学校名まで書いてあった。これはもし置いて帰ったら確実に電話が来ていた。

そして、一緒に戦ってくれた望遠鏡は、レンズに大きなヒビが走っていて、覗く部分も割れてべこりと曲がっていた。

「コペルニクス……」

希は悲しげに見つめ、溜め息をついた。いま呼んだのは、望遠鏡の愛称だろうか、商品名だろうか。その横で、ハクアは仏壇みたいに手を合わせる。

「よし、帰ったらお墓を作ろっか」

「お墓？」

「うん、コンペイトウミックスの」

タツヤも覚え切れなかったが、たぶんそんな名前じゃなかった。

三人は広場を出て、バス停に戻った。広場に置いてきた追跡隊の少女は、去り際に体を起こしたが、腕の力が抜けているので、うまく起き上がれないだろう。あの暗い中で銃を探すと、きつと時間がかかると思う。携帯電話を使うのもかなり難しいと思う。脚力より腕力を、というのはあの少女から逃げるために正解だった。

タツヤはバス停めざして早足で歩きながら思う。あの子はいまどんな気持ちだろうか。油断したわけではないと思うが、三人が合わせた力がきつとあの子の予想を上回ったのだ。一般人二人がいたってここまで抵抗するなんて想像しなかったと思う。タツヤだって、ハクアの超能力を何度も見ているから、この脱出作戦がうまく行ったのだ。

ふと、自分が体当たりしたとき、一般人を撃つな、と思わず口から出たことを思い出す。たぶんあれで撃たなかったのだから、追跡

隊はハクアの言う「一般人の前で超能力は使わない」というのは合っているのかもしれない、とも思う。

追跡隊は何人くらいいるのだろうか。そういえば、途中で天童隊長というのと電話をしていた。隊長は離れた場所にいるみたいだった。

天童だと……？！

ハクアはその名前に反応していた。訓練学校時代の知り合いだったのだろうか。先頭をすたすた歩くハクアの背中を見たが、この話題をするのは思い止まった。バスに乗るまでは余計なことを考えさせないほうがいい、とタツヤは感じた。

帰りのバス停に着くと、大人が四人並んで待っていた。赤い軍服でなく、普通の服だ。一瞬考えて、タツヤはハクアを呼び止め、小声で聞く。

「なあ、追跡隊ってのは……変装とかするの？」

すると、ハクアも言いたいことが分かったようだ。腕組みをする。「変装はするかどうかわかんないけど、超能力を持っていれば、この距離ならあたしもわかるよ」

「それで？」

「うん、みんな普通の人だ」

普通の人という言葉の響きが、夏の夜なのに、なぜか急に背筋を冷たくする。前回までの天体観測なら、バス停に並ぶ人を疑うことなんてなかった。いや、人が敵かもしれないなんて考えが生まれて初めて感じたものだ。アニメやドラマを見ていて、この人の正体は悪者っぽいな、とか思うこともあるが、その感覚とは全然違う。もしハクアがさっきの問いに「超能力者が混ざってる」と言えば、タツヤと希はどうすればいいのだろうか。ハクアと一緒に逃げるのか。

だけど、自分たちは一般人だ。普通の人だ。力を抜き取ったり、重力を上げたり、そんな異常な能力を持った相手に、普通に戦えるわけがない。ハクアが絶対に勝てる力を持っているわけじゃないことは、いま目の前で見てきた。ハクアは強い、ハクアは勝てる、と

いうことが通じないことがある。タツヤはすり傷だらけでじわつと血がにじんだ自分の右手を見つめた。公園入口の水道で泥は流したが、血はまだ止まっていなかった。

ハクアはあの性格じゃあ、もっというんなやつを巻き込むと思うぞ。

ごめんな。俺、サッカーの試合をテレビで見たいんだ。

アランの言葉がなぜかこのタイミングで脳裏に浮かんでくる。ハクアの秘密を知って、ハクアの涙を見ても、深入りしない態度が少し薄情だと思っていたタツヤだが、手のひらの血を見て、気持ちが揺らいでいた。

希だつて危険だ。作戦の成り行きによっては、希が追跡隊の少女と戦い、返り討ちに合ってたかもしれない。追っ手の影もなく、落ち着いた雰囲気ですバスを待つ二人をちらりと見た。ハクアが空腹を訴えて弁当を開けたがるのを、希が困って止めている。追跡隊のことがなければ、本当に楽しそうな仲のいい友達だ。

だけど、希は戦う力なんかない。追跡隊の超能力を体に受けたのは、希だ。そのあと、口数もすぐ減り、林の中でずっと震えていた。タツヤの後ろについてくるのが精一杯だった。

大切にしていた望遠鏡は、戦いの中で壊れてしまった。あれは、最初の天体観測で持ってきたとき、お父さんに買ってもらったと嬉しそうに話していたものだ。

ハクちゃん、望遠鏡、絶対壊れちゃってるからいいよ！ 帰ろうよ！

希は、それを拾いに行くのも拒絶した。

本当は……希の胸の内側も、タツヤと同じくらい揺れているんじゃないだろうか。タツヤは楽しかった前回までの天体観測を思い出し、胸が痛くなった。

異常に長く感じた五分がようやく経って、帰りのバスが来た。タツヤは乗るときに、ハクアに小声で話しかけた。ハクアはバスの乗

客数名を見渡し、「大丈夫だ」と言った。

タツヤはそれでも他の乗客と離れたいと思って、一番後ろの座席に行き、三人並んで座った。希は、ハクアが弁当箱を開けないように見張ると言って真ん中になった。タツヤは気になって後ろの大きな窓から外の景色をじっと眺めていた。

ドアが閉まり、バスが出発した直後、あの赤い軍服の少女が、公園入口の手前まで走って追ってきた姿がちらりと見えた。腕を両側に力なく垂らし、悔しげな顔をしている。

そして、その場にしゃがみこんだ。腕力三人分の背負い投げのダメージも大きかったのだと思う。バスはあつという間に公園前から離れ、軍服の少女の姿も視界から消えた。ハクアと希は、前を見ていて知らなかった。タツヤも何事もなかったように座り直した。

ハクアの超能力は三十分で自動的に切れる。あの少女からは逃げ切れると思うが、問題はそこではない。いまは何とかなった。けど、ハクアが追跡隊に見えられたのは確かだ。このまま、ハクアは一人で家に帰って大丈夫なのか？ と大きな不安がよぎる。

バス停は出発場所を下りて平気なのか、ハクアを家まで送ったほうがいいのか、交番に行くとかそういうのはダメなのか、父親の廉太郎に打ち明けて相談したほうがいいのか、もしそれで父親に深入りすると言われたらどうすればいいのか などと、タツヤがずっと押し黙って難しい顔をしていたら、希も無言になり、やがてハクアはまた寝てしまった。

希は溜め息をついた。

「ハクちゃん、すぐ寝ちゃったね……」

「うん……」

タツヤは次々と胸に噴き出す不安を隠しながら、うなずいた。

「朱鳥くん、本当にケガはないの？」

「ああ、それは大丈夫」

「嘘はダメだよ」

「うん」

希のほうを向いて、顔をちゃんと見る。タツヤは希の左側に座っていたが、ふと見れば、希の左側の髪を束ねていた星の髪飾りが無い。黒いゴムだけで止めているようだった。

「あれ？ 髪飾りは？」

希は驚いた顔をして、寂しい目を見せた。

「たぶん、広場に落としちゃった。小さいから、絶対に見つからないよね」

「いや……でもさ、今度探しに行こうよ」

希はゆっくりとうなずく。

「……朱鳥くんは、ほんとやさしいよね」

それは希にも返してあげたい言葉だった。せつかく楽しみにしていた天体観測で、望遠鏡も壊れて、星の髪飾りもなくしてしまった。それでも、希はタツヤにケガがないか心配している。ケガはないと言ったが、それ以上どう言えば安心してもらえるか分からない。

困って希の顔を見ていると、希がだんだん目を赤くし、涙ぐんでいるのに気づいた。

「あつ、だ、大丈夫だよ。髪飾り、一緒に探そうよ」

希は首を横に振った。横ではハクアがすやすやと寝息を立てている。

「……違うの」

「え？」

「天体観測、もうできないよね……」

深く突き刺さる重い言葉だった。望遠鏡がどうかではない。ハクアが見つかって、もうあんな場所に行けるわけがない。お互い言えないけれど、心の中ではつきりわかっていた思い。泣き声が漏れ出す。

「……うつ、うつ……天体観測が……もうダメなんだ」

ぼろぼろと大粒の涙が、希のほほを流れていく。

希はいつも明るくて、我慢強くて、みんなのことを考えていて、

泣いたことなんか見たことがない。でも、いまは違った。

壊れてしまったのは、大事な友達との思い出だ。ハクアに星座の話をして、隕石を見た出会いの場所へ連れてきたのに。せつかく新しい思い出ができる夜だったのに。どうしてこうなってしまったのか。

タツヤは唇をきつく噛んだ。もしかすると、あと何日、いや何時間ハクアと一緒にいられるかも分からない。バスに揺られながら、そこまでの大きな大きな不安を、タツヤは口が割けても言い出せなかった。タツヤは何度も迷い、何度も違う言葉を飲み込んだ。

「天文新聞は 続けようよ」

そういう言葉がいまの希が聞きたいものだとは思わない。けれど、本気で心にあることを出せば、応援団と言って三人で笑った日からのことが全部むちゃくちゃになりそうで恐かった。希の泣き声はバスの中に響いて、前のほうの人もちらちら見ている。

「……なんで自由じゃないのかな……」

うめくように吐き出した希の小さな言葉は、ズキリと胸に刺さった。

タツヤは希の顔をよく見る。

「僕は、ハクアを助きたい」

希はハツと顔を向けた。タブレットの話が頭をよぎる。

「僕は ハクアがここにいたい理由は、僕たちがいるからじゃないかな、と思う」

タツヤの言葉を聞きながら、希は心細げな目に涙の粒をたくさん溜めていた。

自由は一人だってたぶん自由だ。けれど、いまここには自分たちの存在がある。ハクアのことを真剣に悩み、力がなくても一緒に戦い、ハクアの行きたい方向へ後押しをする。もちろん、そんな考えはおおげさかもしれない。重すぎるかもしれない。

「なあ、僕たちが、ハクアにこのままで欲しい理由は何なのかな」
「……理由……？」

「今日みたいに、星を見せたいから、とかもあるけど」

「うん」

「でも、理由はもっと大きいと思うんだ。友達をなくしたくない、ってこんなに真剣に考えたことなかった。ハクアだから、なんだ。あいつが勇気を出すから、僕たちは力を合わせることを一生懸命考えたんだよ」

希の泣き顔は少しずつ元の様子に戻っていた。バスが曲がり角でごとんと揺れる。希の体がそのままタツヤに胸に飛びこんできそうだったが、タツヤは手で肩を支えた。

「……朱鳥くんは、本当にハクちゃんのことを大切なんだね」
「うん」

希の言葉は、まさにタツヤの気持ちを言い当てていた。「私もそうだよ」と希は少し明るい表情でつぶやき、リュックから出したハンカチで涙をふいた。

「ううん……」

ハクアは寝返りを打った。希の背中に寄り添う。それがハクアの性格だと思うが、自分が一番大変な状況なのに、どうして赤ちゃんみたいなかわいい笑顔で寝ていられるのか、タツヤは少し不思議だった。

停留所が近くなってきたところで、タツヤはハクアを起こし、この後のことを三人で話し合った。ハクアは一人暮らした。バスを下りた後、停留所までの帰り道で、追跡隊の別の超能力者に狙われるかもしれない。もしかすると、家に直接やってくるかもしれない。タツヤがその危険性を話すと、ハクアはひどく驚いたような顔をした。まったくそこまで考えていなかったのだ。

希はだいぶ落ち着いた顔をして、ひとつの提案をした。

「ハクちゃん、うちに泊まりなよ」

タツヤもいい考えだと思った。追跡隊は一般人の前では超能力を見せないことにしているはずだ。そうすると、希のうちは両親と祖

父母がいて家族が多い。

「……いいのか？」

「うちなら、ハクちゃんを着られる服もあるよ」

「いや、そうじゃなく、いきなり行くわけだし」

「お父さんもお母さんもいいって言うてくれるから大丈夫。お弁当は、私の部屋で食べようね」

ハクアは真顔になり、いきなり一筋の涙をこぼした。希もタツヤも驚き、目を丸くした。分かっていたことだけど、胸に大きな不安を貯めていたのは三人とも同じだったのだ。ハクアはすぐ笑顔になった。

涙は、あのときの流星のように一筋大きく光っただけだった。

「のぞみん、ありがとう」

そして、これからのことは明日学校で話し合うことにして、今日は希の家に泊まることで決まった。

バスの停留所に着くと、タツヤが一步先に下りて周囲の様子を観察した。巻き髪の少女が追いつくことは当然無理だと思うが、追跡隊の仲間がいるような気配もなかった。停留所のあたりは店も多く、人の通りが多いので、郊外の公園のところよりもずっと安全だった。ハクアと希もそろってバスから下りた。

ハクアはまっすぐ希の家に向かうことになった。タツヤも遠回りになるが、一緒に同行した。最初は何となく警戒して慎重に歩き、曲がり角や暗い道はしっかりとあたりを見渡しながら進んだが、拍子抜けするくらい何事もなかった。もしかすると、三人が追跡隊を撃退したことで、追跡隊も一旦退いてくれたのではないか。甘い考えかもしれないが、それでも思わないと、湧き上がる不安を抑えることは難しかった。

無事に希の家に着くと、タツヤも一緒に上がってお弁当を食べようと二人から誘われたが、家に帰る時間を廉太郎に約束していたので、タツヤは一人帰ることにした。

タツヤの家は近い。自分の家に着くと、廉太郎が居間でテレビをつけサッカーを見ていた。妹の由果は風呂だった。ごく当たり前の日常だが、あの激闘から何とか逃げ出してきたことを思うと、深い溜め息がこぼれ出た。

「……転んだのか？」

廉太郎は目ざとく、草で汚れた服と疲れた顔を見て、息子に声をかけた。「大丈夫」

最近これが口ぐせになっていると思う。お前はいつも大丈夫って言うけどな、というアランの言葉は、おおげさでも何でもなく本当に自分の性格を見抜いていると思う。だが、人に言われるほど、気持ちが重くなる。

タツヤはすぐ部屋に入り、まず希に電話をした。とりあえず大丈夫だった。電話口で希はいつも通りの明るい声だった。

「びつくりした」

「え、どうして？」

「うっん。……朱鳥くん、お弁当食べた？」

「いや、まだ」

ふふっ、と笑い声がした。

「食べていいよ」

「うん」

「ハクちゃんと代わる？」

「いや、いいよ。そっちが大丈夫なら、いいんだ」

そして、希との電話を切り、タツヤは持ち帰った弁当を部屋で食べ、ベッドに寄りかかった。窓の外の少しくすんだ夜空を見る。それは水面に映ったようにじわじわと揺れていた。

天体観測は、終わった。そして、帰りのバスで希に伝えた自分の決意を思い出した。

僕は、ハクアを助きたい。

この言葉は、軽くない。それは分かっていた。情けない目元の痕跡をこする。

タツヤは悩む。追跡隊は本当に一般人がいるところでは襲ってこないのか。それなら、どうして僕たちは襲われたのか。銃のこととか、ハクアも知らないことがあった。

ハクアは当然タツヤよりも超能力や訓練学校や追跡隊のことを知っているけれど、途中で脱走したのだ。知らないこともあるだろう。不安だが、とにかくハクアを信じるしかない。それと、ハクア自身も悩みの種だ。ハクアはいまの自由を何とか守りたい気持ちでいっぱいだ。きつと、先のことを考えていない。いつまでも希の家に泊まれるわけもない。

明日の夜から、どうするのか。

それから、ハクアが視力を気にするのも気がかりだった。もしあのとき、ハクアのそばにいなかったら、希はどうなっていたのか。戦いを思い出すと、次々にいろんなことが頭を掻き乱す。服に残る草の臭いがそれを生々しく心に刻みつけてくる。

ざわつく渦の中心　それは、敵に、体当たりをした感触。生身の人間。ハクアは少女を力いっぱいぶん投げた。地面に叩きつける音。あときはそれで助かったと思ったが、弱気の虫が騒ぎだし、心は再び曇っていく。決めたはずなのに。誓ったはずなのに。

言えたのは、あるときハクアが眠っていたからかもしれない。タツヤは、正面からまだ伝えていないのだ。

恐くなって目を閉じると、一階の廉太郎から風呂が空いたと大きな声が届き、タツヤは空っぽの弁当箱を持って、部屋を出た。

第8話 『応援団会議とネクスト・ドア』 1 / 2

いつも通りに目が覚めたが、頭が重い。タツヤは朝ご飯の支度をする前に、気分を入れ替えようと、先に歯を磨いた。

妹の由果も起きてきた。最近、起こしに行かなくても自分で起きるようになったのだ。何となくうれしい気持ちになった。

「お兄ちゃん……目が真っ赤だよ」

歯ブラシをくわえて振り向いたタツヤの顔を見て、由果はおびえるような顔をした。

「おはようは？」

「あ、うん、おはよう」

ぐっすり眠れるわけがない。夜中に何度も目が覚めてしまったのだ。枕元の時計が三時とか五時とかを指していたのをうつすら思い出す。

昨日の天体観測のピクニックで、追跡隊の少女にいきなり襲われて、何とか逃げ出すことはできたが、結局何も解決なんかしていない。追跡隊は、この美星町にハクアが住んでいることは絶対にわかっているだろうし、ハクア一人では手が出ないような超能力や武器を持っている。

あのとき、銃を取っておけば良かったな……と後悔もした。ただ、とにかく逃げることで必死だったのだ。暗くて銃がどこに落ちたかわからなかったせいもある。

そして、ハクア一人では危ないから、昨日の夜は、希の家にハクアも泊まることになった。起きてすぐ希の携帯に『大丈夫？』とメールを送ったが、返信がなかった。すぐ電話もかけたが出なかった。なので、まだ安全が確かめられていない。いいほうに考えれば、寝ているかもしれない。けれど、悪いほうに考えれば。

「お兄ちゃん、由果に……怒ってる？」

パジャマの背にしがみつくように由果はこわごとと聞いてきた。

「えっ、な、何で？」

「……あいさつしなかったから？」

「ん？　いましたる？」

すると由果は首を横に振った。

「だって、なんか恐いんだもん」

「ああ、ごめんな。ちよつと　まあ、通知表が心配で」

適当にごまかした。一応、明日は一学期が終わる日だ。由果はきよんとする。

「お兄ちゃん、あたま悪いの？」

「えっ？！　悪くはないよ！」

うつかり語気を荒げてしまい、言ってから後悔した。由果はまた泣きそうな顔になり、「ごめん」と言つて廊下に逃げた。

ダメだ。ハクアと希の無事な姿を見るまでは、心が無意味にとがってしまふ。ひとまず着替えるために部屋へ戻ると、机の上で携帯のランプが光っていた。新着メールが一件届いている。

希からだった。急いで中身を確認する。

『おはよー！　ハクちゃん、起きませーん！』

枕に抱きついて寝ているハクアの寝顔の写真が添付されていた。すべてを失うかもしれない最悪の危機だと思つているのは自分だけなのだろうか。全身の力がへなへたと抜けた。いま動くのは指先だけ。

『無事でよかった』と返す。すると、

『ハクちゃんが生まれてはじめて撮った写メだよー』

今度は、パジャマ姿の希が、カメラ目線でふんわりピースした笑顔の写真が届いた。かわいいと思つたが、何だか切ない溜め息が出た。

当たり前だけど、ハクアと希は二人そろって登校してきた。ハクアの服がいつもの感じとまるで違う。教室に着くなり、いきなり二

人でタツヤのそばに来た。希はハクアをくるりと回して見せる。

ハクアの服は希から借りたものみたいで、爽やかな水色の可愛いワンピースだった。胸元にきれいな白いレースの刺繍が入っている。ハクアは少し女の子らしい雰囲気で、にこっと微笑む。

「たっつん、おはよう」

「……おはよう。無事でよかった」

一方、希はちょっと地味な半袖ブラウスとスカートだった。

「朱鳥くん、今朝メールありがとね」

「ごめん、心配しすぎだったかな」

「うっん、ありがとう。朱鳥くんからメールが来てうれしかったよ」
希の顔を見ると、朝来たピースの写メを思い出して少し恥ずかしい気持ちになった。それにしても、希は帰りのバスであんなに泣いたのに、朝にはもう笑顔に戻るなんて、ハクアが泊まりに来たことが楽しくて仕方なかったのかな、と思う。

「ねえ、ハクちゃんどう？ 似合ってると思わない？」

すると、ハクアは少し照れ臭そうな表情を見せた。

「すまん。確かたっつんの家で見せるって約束だったけど、まあ、フライングだ。こっちで勝手にやった。後悔はしてないぞ」

ハクアは堂々と胸を張る。

「ああ、うん　かわいい服だと思うよ」

「服はのぞみんだ！」

ハクアは声を荒げた。希の家に泊まったんだから、それは言われなくてもわかる。

「寺本さん、おはよう。へー、そんな服も持ってたんだな」

丘野アランがいつの間にかタツヤの後ろにいて、ハクアの格好をじっくり見ていた。

「アラン！ どうだ？」

「いいんじゃない？ これからそっちにしたら？」

アランはすごく軽い口調で言った。ハーフだから自然にそんなふうに言えるのだろうか。

「うっん、服はのぞみんだっ！」

チャームが鳴り、そろそろ晴海先生が来る時間になって、三人とも自分の席に戻った。とにかく、一般人には手を出さないと思われる追跡隊の再攻撃もなく、希もハクアもいつも通りの元気を取り戻していた。

タツヤは昨日の恐ろしい出来事や、二人の泣き顔を一瞬忘れてしまいそうになったことを疑った。こんなに　平和で、本当に大丈夫なのだろうか。

授業が終わって下校時刻になり、タツヤは少し緊張感を強めた。ランドセルを持ち、すくっと立ち上がる。

ちょうどハクアの席のところに希が立っていて、二人の腕をつかんだ。ハクアが目を丸くする。水色のワンピースのスカートがふわっと揺れた。

「どうした？」

「夏休みの作戦会議だ。アランも呼ぼう」

「宿題の話？」

希はとぼけたことを言う。そんなことじゃない。明日から長い夏休みに入るのだから、ハクアの身の安全をどうやって守るのか、それを考えないといけないと思ったのだ。

「たっつん、アランが帰るぞ？」

ハクアに言われて振り返ると、アランがクラスの友達と廊下に出ようとしていた。タツヤは慌てて捕まえに行く。アランはまずいものを見たような顔でタツヤに向き合った。

「な、なんだ、タツヤ」

「ちよつと残ってほしいんだ」

「ったく……また天文係か？　入らないって言ったはずだけど」

「違う」

「でも、お前が俺に言ってくるのって、遊ぼうとかじゃなくてハクアのことだろ？」

その通りだった。一瞬タツヤは黙りこむ。

「今日はハクアに関係ない用事か？」

「……いや、ハクアのことだ」

「ほら、やっぱりなあ」

アランは本当に面倒くさそうな口調で言った。教室のドアのところで、クラスの友達たちが不思議そうな顔をして待っている。

「とにかく！ 頼む、ちょっと来てほしいんだ」

大変なんだ　　と言いかけて口をつぐんだ。そう言ってしまうと、確実にアランは頼みを振り切って帰るような気がしたのだ。アランは明らかにあまり巻き込むな、という顔をしている。だが、ハクアの超能力を知っているタツヤと希が一緒に追跡隊に襲われたということは、アランだって同じ目に遭うかもしれない。考えすぎならそれでいいが、とにかく昨日の出来事は伝えないといけないと思うのだ。

アランは周囲を気にしながら、声を落として聞いてきた。

「また、何かの力を　貸せって言うのか？」

タツヤは首を横に振った。

「違う。そういうことじゃない。話しておきたいことがあるんだ」
ふん、とアランは腕組みをする。顔つきから険しさが消えた。

「……聞いたら帰るぞ。俺、サッカーしたいからな。いいなっ」

「うん。ありがとう」

タツヤは三人を連れて、いそいそと廊下を進み、誰もいない空き教室に入った。この空き教室は、たまに委員会活動などで使われているが、今日は何もなかった。長机がいくつも並べてある。締め切った教室なので、暑い空気がこもっていた。

ドアを閉める。

「星はどうだった？　よく見えた？」

アランが軽い感じで、ハクアと希に話しかける。ハクアは「まあな」と一言答えたが、希は暗くうつむいてしまった。アランは戸惑

いの色を浮かべる。

「あれ？　まずいこと聞いた？」

「　　僕から話すよ」

「は？　星のこと？」

「ううん、ハクアのことだ」

アランは両手を広げ、意味がわからないというジェスチャーをした。確かにそうだと思う。四人は何となくイスに座った。

タツヤはひとつ深呼吸をしてから、アランに対し、昨日あったことを説明した。ハクア以外の超能力者が追跡隊としてこの町に現れたこと、ハクアを狙っていること、ハクアでも苦戦したこと　アランは最初驚きを声にしたが、その後はずっと恐い表情でじっと話を聞いていた。希の家に泊まったことまでの話が終わり、一息ついた。

アランはなぜか落ち着いた目をしていた。

「……それで？」

「このままだとハクアが連れ戻されちゃうんだ。何とかしないと」
タツヤは不安を噛みつぶしながら言う。

「それって　仕方ないよな」

予想もしない冷たい言い方だった。その瞬間、普段はおとなしいタツヤの頭にも、噴き出すような熱い血が昇った。思わず大きな声を張り上げた。

「仕方ないって何だよ！！」

ハクアと希が驚くのがわかった。エアコンのない教室にこもった熱気が、一段と息苦しくなった気がする。一瞬、二人とも何か言おうとする気配があったが、先にアランが答えた。

「お前、転校するやつを止められるのか？」

「なに言ってるんだ！　全然そんなのと違うだろ！！」

「変わんねえよ。お前らがただ嫌がっても、連れて行かれるのは仕方ない」

「丘野くん……ハクちゃん、大変なんだよ」

希が目を赤くしながらつぶやいた。アランは「わかるよ」と言い、ハクアの顔を見た。

だが、そのとき、ハクアは押し黙ったままだった。どうしても言わないのか。今日は女の子らしい服を着ているせいか、あまり威勢がないように見えた。本当は、友達から見捨てられたような言葉を目の前で向けられたはずなのに。

どうして何も言わないのか。

まさか、ハクア自身もあきらめてるんじゃないだろうか。一番恐い想像がタツヤの頭を捕える。それを振り切るように、必死で腹から声を出した。

「僕たちはハクアを助けたいんだよ！」

そして 不気味な暑い静けさが教室の四人を包む。

「わかるよ」

同じ言葉を繰り返すアラン。タツヤは、アランのことを単なる同級生でなく、仲間だと思っていた。ハクアの超能力を知り、ハクアの応援団に入った仲間だと思っていた。いつもは関わりを面倒くさがるけれど、それに天文係は趣味じゃなさそうで断られたけれど、いざというとき正直に想いを打ち明ければきっと協力してくれる、そう思っていた。

けれど、その答えは恐いほどに冷たかった。

「俺だって寺野さんが何か悩んでるんなら聞くよ」

「ハクアでいい」

この教室ではじめてハクアの口から出た言葉。思わぬタイミングだったので、タツヤはなぜか背筋がゾクツとした。ハクアの撃った小さな刺は、怒りからか、悲しみからか、それもよくつかめない。

「ああ、ごめん。いや、俺だってハクアは大変だと思う。だけどさ」
「うん」

タツヤは神妙に頷いた。

「追跡隊に対抗できるのか？ 敵は超能力者なんだろう？ ハクアで

すら手も出せなかったレベルだろ？」

「いや、だからみんな協力したいんだ」

「お前、その考えは甘いんだよ！ 全員やられるぞ！」

アランは荒っぽい声を吐き出した。その覇気は、タツヤの胸を貫く。そう、確かにその通りだ。そんなのは昨日の夜から十分感じている。何日かハクアをかばったとしても、何も解決できない悔しさが苦しいくらいに込みあげてくる。

「でも、ハクちゃんが連れてかれちゃったら……」

希は悲痛な声を漏らした。帰りのバスするときよりも激しく泣き出す一歩手前だった。

「あのさ、ごめんごめん」

突然、ハクアは言った。他の三人はまた息を飲む。その声に絶望感はなかった。

「たつつん、のぞみん、ありがとう。アラン、お前は正しい」

「ハクア……」

タツヤはそれ以上続けなかった。ハクアは凜々しい顔になる。

「一応な、昨日だって対抗はできたんだ。勝ったんだ。向こうが銃を持っててかなりパニックになったけど、あの銃が何なのかかわかれば、絶対に一人でも対抗できる」

ハクアは自信に満ちた眼差しで言い切った。

「ハクちゃん……」

「のぞみん、大丈夫だから。あたしはみんながいる限り、この町にずっといるから」

そして、タツヤのほうを向く。

「たつつん、あたしが一番不安なことを、誰より早く気づいてくれて、みんなを強引に集めてくれて、ほんとにありがとう。これだけ励まされたら、次はあたしがどうするか、ちゃんと考える番だ」

ハクアはぐいっと身を乗り出した。

「ほんとごめんな。こんなときが来るとわかってて、ずっと考えるのから逃げてた。あの後から、のぞみんの泣き顔を見たくなくて、

とりあえず明るくしてた。でも、それがたつつんを傷つけたんだな」
「うん」

少し目頭が熱くなった。やっぱり、あのときハクアは起きていたのかもしれない。

「たぶん、たつつんが一番聞きたいのは『あきらめてない』ってことだよな？」

まっすぐな問い。

「うん、そうだよ」

まっすぐな答え。

「だったら、あたしは『あきらめてない』。それを約束するよ」
最後にアランのほうを向いた。

「アラン、心の重荷を勝手に分けてしまってますまない」

「……そんなのはいいんだよ。俺だって応援団なんだろ。ハクアがいきなり消えるほうがショックがでかい」

「アラン」

「力が必要なときは貸すよ。だけど、全員がやられるのは絶対にダメだ。お前には家族がいないけど、俺たちはいる。それを甘く考えないでくれ」

アランはこれ以上ないくらいはつきりと考えを言った。タツヤは隣りのイスに座る同級生をじっと見た。ハクアに家族がいないのはハクアのせいではない。アランもそれは知っている。だが、この危機の主人公はハクアだ。これからのことは、その決意ひとつだ。ただ一心にハクアを助けたいと願う自分よりも、ずっと深くまで考えていた。

ハクアは溜め息をつく。

「あたしの考えだって甘い。実は知らないこともあるんだ」
「わかるよ」

三度目の言葉。だが、少し優しい伝え方だった。

「だけど、本当に自分のことを守れるのか？」

「自信はあるが、不安もあるのが正直なところだ」

それがハクアの包み隠さない本心だと、タツヤも肌で感じる。アランはその告白に対してはそれ以上責めなかった。希もじつと息を飲み、ハクアのことを見つめている。

タツヤは考える。追跡隊はいつどこで襲って来るかわからない。そこを悩んでも仕方がない。問題はあの銃だと思う。あれがハクアの苦戦した大きな理由だった。

「銃のこと……何とかならないかな」

「そうだな。あれがつかった」

「さつき銃のことがわかれれば、って言ってたけど、わかるの？」

「あてはある。もしかすると養父なら　　と思ってる」
すると、アランが勢い込んで口を挟んだ。

「じゃあ、ここで話してないで、早く行ったらいいじゃないか」

「直接は会えないんだ。弁護士に会いに行く」

前にハクアから、生活費をすべて出してくれている養父がいて、お金やいろいろな手続きは弁護士に任せていると聞いたことがある。その弁護士のことだと思う。

希も入った。

「ハクちゃん、弁護士さんは近くに住んでるの？」

「そんなに遠くない。今日、会いに行こうかと思ってた」

ハクアは行動力はあるけれど、実は大事なことを言いそうでちっとも言わない性格だ。向き合って聞かないとわからないことが多い。一緒にいてそれを強く感じる。だが、それでもタツヤは、ハクアの面倒を見てくれる大人がいて何だかほっとした。どんなにハクア応援団が頑張っても子供の力では限界がある。

ただ、弁護士はハクアの超能力のことを知っているのか気になった。もし知らなかったら、ハクアはこの状況をどう説明するんだろうか。

「ハクア、一人で大丈夫か？」

ところが、アランが横から口を出す。

「お前、余計なやさしさを見せるな。一緒に行ってどうなるんだよ」

タツヤはむつとする。

「ハクアのことが心配なんだ」

「それは俺も心配だけど、誰にでもベラベラ話せる内容じゃないだろ。友達がついてきたら、その人が困るだろ。考えろよ」

正しい。アランは悔しいくらい正しい。ちゃんと考えている。けれど、その冷たい言い方は何とかならないかなと思う。

「よしっ！」

ハクアは掛け声を上げた。

「アランの言う通りだ。自分で弁護士にすぐ連絡するよ。たつつん、あとで力を貸してくれ」

「えっ？ どの力を？」

戸惑った。

「ごめん、携帯のことだよ」

ハクアは舌を出して笑った。からかわれたのだ、と気づく。ハクアはもうまわりをごまかす形だけの笑顔でなく、だいぶすつきりした本来の笑顔に戻っていた。

第8話 『応援団会議とネクスト・ドア』 2 / 2

四人で廊下に出る。階段に向かって歩いていく途中、自分たちの教室のドアが開いた。出てきたのは十和田霧枝だった。ランドセルを背負っているのだから帰るところだろう。

「あんたたち、こんな時間に何してんの？」

「あ、えっと」

目が合ったタツヤは少し慌てた。

「天文係だよ」

希が横からあっさり適当なことを言う。この二人は幼稚園からの友達だ。

「霧枝ちゃんも遅いね」

「うん、ちよつとしゃべってた」

教室の中ではまだ何人かクラスの女の子がおしゃべりをしていた。霧枝はドアを閉めた後、顔ぶれを見て意外そうな顔をした。

「あれっ？ アランがいる。どうしたの？ 入ったの？ ああいうの好きだっけ？」

「知るか」

「あれ？ それとも、星じゃなくてどっちかが好きなの？」

霧枝はアランの顔を覗き込んでニヤニヤとした。

「うるせえ、誘われたけど断ったとこだ。いいからお前は黙って帰れよ」

手で追いつかうような仕草をして、冷たく言い返す。

「ツッキー、アランを誘うなんてセンスないよ。こいつ頭も口も悪いし、字も絵もヘタクソだから。てか、黙って帰っててなんなの？ あんた何様っ？！」

背の高いアランと背の低い霧枝が向かい合う。どっちが先に噛みついて不思議でない雰囲気だった。

「あー、もう、ちっこいのがキヤーキヤーうるせえな！」

「ちょっと、ちつこいの言うな！　ほんと性格悪いなあ！」

「お前に言われたくねえよ！　これ以上言うと泣かすぞ！」

いきなり言い争いをはじめた二人。お互いの悪口を次から次に並べていく。みんな下校して、廊下には五人以外の姿は少ない。お腹も少し減ってきた。

タツヤは振り返り、ハクアと希に「帰ろう」と言った。ハクアは面白そうな感じで大小二人の口ゲンカを眺めていたが、唇をとがらせてうんうんと頷いた。

「アラン、ごめん、俺たち帰るよ」

「いや、待て、俺も帰るよ！」

アランは食いつくように言った。早くこの場から離れたいみたいだ。

「霧枝ちゃんも一緒に帰る？」

どうしていまの二人の口ゲンカを見て、希はあつさりそんな誘いを言えるのだろうか。

「うん、あたしも帰る」

霧枝もあつさりついてくる。よくわからない。タツヤはアランを気にした。

「アラン、どうする？」

「帰るよ。言いたいことは言い切った」

それもよくわからない。とりあえずアランと霧枝は両端になり、五人で廊下を歩く。すると、霧枝が突然大きな声を上げた。

「あつ、テリー！　晴海先生が探してたよ。職員室に行ったほうがいいかも」

ハクアは首をかしげた。

「ん、何で？」

「わかんない。何か聞きたいことがあるんだって」

「あたし？」

「うん」

そのまま五人で職員室に行くことになった。さすがにアランが帰りがつたが、希と一緒に帰ろうと引き止めたので、渋々ついてきた。タツヤが言っても帰っただろうが、希の言葉はわりと素直に聞くような気がする。

「ねえねえ、天体観測ってどんなことするの？」

と霧枝は無邪気に聞いてくるが、希はその話題になると落ちこむので、タツヤが代わりに説明した。郊外の公園にバスで行くこと、星空をじっくり見渡せる広場のこと、そこで流星を見たこと。もちろん超能力を知らない霧枝に対し、追跡隊のことは一切話さなかった。それと、いつも二人並んでお弁当を食べたことも言わなかった。絶対に冷やかされると思ったのだ。アランは本当に興味がないに横を向いているが、霧枝は流星の話にすごく目を輝かせた。

「流星なんて見たんだ、すごいね！ あたしも見たい！」

天体観測がたぶんもう出来ないことは、希の前でタツヤの口から言えなかった。正直、希の沈んだ顔を見ると、この話題も早く終わらせたかった。けれど、霧枝がしつこく聞いてくる。どうも星ではなく、タツヤと希が二人で出かけたことに興味があるみたいだ。

一方、ハクアは別のことを考えているようで、話に混ざらなかった。晴海先生に呼ばれたことを気になるのか。それとも、弁護士や養父のことだろうか。

話好きな霧枝にタツヤが困っていると、アランが割って入った。

「タツヤ、よせ、こいつが関わるとろくなことがない。全部仕切ろうとするぞ」

「はあ？ そんなわけないでしょ？ 何言ってるの？」

「ほら、口答えするとこれだぜ」

霧枝はアランを睨んだ。

「……あんた、先に帰っててもいいよ」

アランは苦笑いを浮かべて返す。

「あのなあ、俺はお前のお友達に引き止められたんだぞ」

希が霧枝の目を見る。

「霧枝ちゃん、機嫌直して」

「だって、あたしもさっき帰れって言われたもん！」

「仕返しはダメだよ。どっちか心の大きいほうが飲みこむの」

希は上手な止め方をするなあ、とタツヤは横で聞いていた。そんなふうと言ったら、霧枝の性格だと、もう言い争いを続けられない。希がアランを引き止めたのも、これが言いたかったからなのかな、とタツヤは勝手に想像した。

職員室の前に着く。五人は足を止めた。ハクアは落ち着いた顔をしている。

「みんな、先に帰るか？」

「いや、ここで待ってるよ」

タツヤが言うと、他の三人も頷いた。タツヤの内心は、友達だからという理由だけではない。追跡隊のことを考えると、昼間とは言ってもハクアを一人で下校させるのは不安だった。タツヤがいたところで、たいした護衛になるとは思えないが、

ハクアがいきなり消えるほうがショックがでかい。

さっきのアランの言葉が耳に残っている。いつの間にかハクアがいなくなる、それが一番恐かった。

ハクアが職員室に入って数分が過ぎた。すぐ終わると思っていたが、なかなか出てこない。

「なんか時間かかりそうだね。テリー、悪いことでもしたのかなあ。先生のお説教なら長いよね」

霧枝がつぶやく。タツヤもそんな予感がした。

希は困った顔をしながら、廊下の時計を見た。タツヤのそばに来て耳打ちしてくる。何となく霧枝とアランの視線を感じた。

「おけいこ、そろそろ行かないとお母さんにしかられるんだ……」

ハクちゃんが出てきたら、今夜も泊めていいって言ってくれる？」

「わかった、ハクアを月本さんちに送るよ」

「うちの晩ご飯は大丈夫？」

「少し遅れても平気だよ」

希は安心した顔になり、帰る挨拶をした。

「あつ、あたしも一緒に帰る」

霧枝もついていく。もともと仲良しだからそうなるなと思い、二人に手を振って別れた。

職員室の前にはアランと二人きりになった。他のクラスの先生が出たり入ったりするので、自然とドアから少し距離を置いた。

「お前、ハクアのためにどこまで頑張る気だ？」

アランはタツヤにしか聞こえない小さな声で話しかけてくる。

「……どういう意味だよ」

「本音を言うからな」

「うん」

「相手はハクアみたいに異常な力を持つてるんだ。しかも脱走者を追うてことは、超能力のことを隠そうとしてるんだろ？ もし捕まったらお前も何をされるかわからない。ハクアがお前を守るかもわからない。自分のことが心配にならないのか？」

タツヤは、ハクアの友達として精一杯の覚悟を決めたつもりだったが、あらためて言われると、その決心がまた強く揺さぶられる。父親や妹の顔も浮かんでくる。さっき、空き教室でアランがハクアに向けた言葉は、タツヤの胸にも突き刺さっていたのだ。

「……全部予想じゃないか」

「予想が当たったら終わりだぜ。俺たちは普通の人間だ。ハクアに力を貸したら、その分、弱くなるんだ。逃げのびる自信があるか？ ずっとだぞ？ ずっと戦うんだぞ？」

少し怒りが込み上げてくる。タツヤは肩を震わせ、小さな拳を握り締めた。

「だからって、見放すことはできないだろ」

ハクアのことを何も知らないならそれもできたと思う。けれど、

超能力のことを知り、訓練学校や体のことを知り、連れ戻された後のことを聞き、追跡隊の強さを体感した以上、ここで逃げ出すことなんかできない。何とかしてハクアを守る方法を探し、協力するつもりだった。だが、アランの考えは変わらない。

「悪い、俺はお前ほど身を投げ出せないよ。これはちゃんと言っておくからな」

「そんな……アラン、お前……本気か？」

「本音を言うと言っただろ。俺だってハクアが嫌いなわけじゃない。いい友達だと思う。だけど、俺も親と弟がいるんだ」

わかってる。アランの表情は真剣そのものだ。

「お前、さっき、必要なときは力を貸すってあいつに言ったじゃないか！」

タツヤは最後の気力を振りしぼって抵抗した。それでも答えは想像できている。

アランはやはり首を横に振った。

「いいや、力を貸すのと、あいつの盾になるのは別だ。なあ、違うか？俺は間違ったことを言ってるか？」

「でも！」

「ハクアに言い直せって言っなら、それでもいい」

だったら、なぜここで僕に言うんだ、とタツヤは瞬間的に怒りを乗り越してつらい気持ちになった。アランの言葉は、何から何まで全部自分の胸のうちにあるものと同じだったのだ。それを素直に貫くアランと、心に戸を立てて必死で捻じ曲げたタツヤ。つまり、この差だった。

「霧枝を見ただろ。あれだって友達だ。あれと同じじゃ、ダメなのか？」

「わかるよ」

さっき言われた言葉をそっくり突き返す。

「危ないことはしたくない。これから学校では仲良くするよ。だけど、戦う相手のことをよく考える。俺は、お前が心配なんだ」

「わかるよ！」

思わず大声を上げてしまった。廊下の先で振り返った先生や生徒がいた。アランは熱く深い溜め息をつく。

「タツヤ、もし俺と絶交だったらそれでも仕方ない。無茶はするな。言いたいことがあったら言ってこい」

最後にそう告げて、アランは帰った。

何様だ！ 何様なんだ！ タツヤは一人になった廊下で、ひたすら自分の心の弱さを憎んだ。ハクアの宿命に巻き込まれそんな自分のことを本気で心配するアランの考えの正しさを、タツヤはよく理解している。だからこそ、いま、これだけ心が痛いのだ。

アランが帰った数分後、ハクアが出てきた。ここには、タツヤしかいない。

ハクアは最初やつと帰れるという安堵の表情をしていたが、タツヤ一人がぼつんと立っているのを見て、ずっと沈んだ顔色になった。「ごめん、月本さんは習い事に間に合わないからって帰ったよ。それより、何だったの？」

それで合ってるのに、なぜかごまかすように早口で言った。

「あはは。いやー、昨日、あたし掃除当番だったんだ。帰っちゃったから、それを先生に怒られた」

背負う宿命の大きさに対し、本当に小さな叱られ事だった。ハクアはまた舌を出して明るく笑った。きつと照れくさいのだ。それにしても、実は当番だったのをタツヤと希に黙っていたほど、天体観測を楽しみにしていたのか。

「それは……晴海先生、そういうの厳しいから」

「たつつんだけか？」

話しながらハクアが歩いてきた。

「ごめん、月本さんは習い事で帰ったけど、今夜も泊まっていって言うてたから大丈夫。十和田さんは一緒に帰ったよ。アランは

たまたま通った友達がサッカーを誘っちゃってね。ごめん、言ってた」

胸が苦しい。希や霧枝はいいとして、自分の口からアランの本音は絶対に言えない。

「そっか」

「……うん」

「まあ、のぞみんの家にあまり泊まったら悪いと思ってたけど、事情が事情だしな。今夜も甘えよっかなあ。ほんと、風呂が超でかいんだぜ！」

ハクアはまぶしいほどに明るかった。

「楽しそうだな。ほら、一緒に帰ろう」

二人並んで歩き出す。階段をもう一階下りると、すぐ昇降口だ。ハクアはしばらく希の家の大きさや料理の美味しさを感動的に語っていたが、靴を取り出したところで、ふと声の感じを変えた。

「……たつつん、これから時間あるか？」

「ん？」

「晩ご飯の用意とかあるか？」

「まあ、何とかなるけど……何で？」

お腹が空いたからバーガーザウルスに寄りたいと言っのかと思った。でも、何か食べたそうな物欲しげな感じではなく、もっと思いつめた目をしていた。

「あ、携帯電話か？」

学校を出ないと電話はできない。校則で禁止されているのだ。

「ああ。うん、早く電話がしたい。貸してくれるか？」

「いいよ」

「それと」

ハクアが不意にタツヤの腕をゆっくり取って握ってきた。手のひらが熱い。

「これからどうするか、ちゃんと考えたんだ」

正面に向き合う。顔が近い。まっすぐに見つめられる。

一番苦しんでいるのはハクアだ。楽しい生活も、友達も、自由も、全部なくなってしまうかもしれない。

こんなときが来るとわかってて、ずっと考えるのから逃げた。

違う。そんなもの、楽しいときに考えられるものか。美味しいご飯を食べていて、もし食べられなくなったらどうしよう、なんて考えたりしない。面白いテレビを見ていて、もし目が見えなくなったらどうしよう、なんて考えたりしない。それが普通だ。

本当に何とか立ち向かわないといけない状況になって、自分で解決方法が見つからなくて、頼れる人にも限界があつて、本当の願いに気づく。それが普通だと思う。

大丈夫だから。あたしはみんながいる限り、この町にずっといるから。

みんながいる限り。

どうしてそこをいま思い出すのだろう。ハクアはぎゅっと掴んだ手を離さない。手はじっとり汗ばんでいたが、タツヤはそこから強い意志が流れ込んでくるのを直に感じるようだった。

「いまから、弁護士に会いに行く。あたしは自分でどうやって身を守ったらいいか、聞きに行く」

ハクアは真剣な顔だった。

「だから、一緒に来てくれ。いま、たつつんと離れたくない」

その瞬間、すべての痛みや迷いが吹き飛んだ。

「わかった」

やっと出た、それがお互いの本心だった。

第9話 『共同訓練とシューマウンテン』 1 / 2

脱走者・寺野ハクアと追跡隊・羽島こだまの交戦は、訓練学校内にも報告された。追跡隊の隊長である天童将王は、隊員の薩摩つばさと妹の紅花を連れて、硬い表情のまま廊下を歩いていった。校長室や作戦会議室に向かうわけではない、まずは医務室である。

医務室の白いベッドでは、こだまが上体を起こし、沈んだ顔でぼうつとしていた。体を動かすと背中がズキッと痛みが走る。

昨日のことを思い返す。こだまは、ハクアたちの乗ったバスが出てしまった後、力を抜かれた腕で何とか携帯を取り出し、草むらに隠れ、天童にコールした。携帯を握っていられないので、草の上で、寝ながら電話をするみじめな格好になった。

こだまは悔しさを噛みつぶしながら、ハクアを取り逃がしたことを報告した。天童の答えはシンプルである。

「わかった。次のバスで街に帰ってくるんだ。訓練学校に戻るう」

当然の判断だ。溜め息をつき、通話を切ろうとする。そのとき天童が少し言い足した。

「バスは乗れるか？」

「はい……大丈夫です」

こだまは早く隊長に会いたかった。

次のバスが来たときには敗北感も収まり、頭も冷静になった。バスに乗ると、やがて腕力も自然に戻り、ハクアの超能力が十分くらいしか持続しないことも、天童に追加報告した。

バスから降りると、天童に肩を支えられて、車に乗せられた。訓練学校から迎えに来た緊急用のワゴン車である。運転手は訓練学校と守秘契約を結んでいる一般人だ。

こだまは、天童の手によって後部座席に寝かされた。

「俺も紅花たちと一緒に学校へ戻る。明日見舞いに行くからな」

紅花は車酔いが激しいので車に乗れないのだ。

「はい、待ってます」

「痛いのは少し我慢するんだ。いいな？」

「はい……隊長」

天童の声を聞き、落ち着いて目をつぶると、そのまま車は走り出した。天童はテールランプを見送り、拳を握りしめる。

フォース系の落ちこぼれくらい、あたし一人で片付きますよ！

医務室に向かって廊下を歩く天童の脳裏に、こだまの声が浮かんでくる。天童は判断が甘かったと反省する。落ちこぼれとは言え、追いつめられた相手が反撃してくることは、過去の教訓で十分わかっていたはずだ。紅花の初出陣、ハクアの性格を知っている余裕、バスによる隊の分断……いろいろな要素が重なった。

ただ、予想外の流れになったところで、思い止まり立て直すべきだった。勝気なこだまの単独行動を許したのがまずかったのだ。

「隊長、通り過ぎますよ」

後ろからつばさが呼び止める。赤い隊服、褐色の肌と規律正しいメガネ。

医務室の三番と聞いていた。天童は足を止める。そこが三番だった。つばさの肩で、南国九官鳥のデンロクも首を傾げてクルクルとのを鳴らしている。

「お兄さま、こだまを怒らないでね」

紅花も少し責任を感じていることが顔に現れていた。頭を撫でる。「いや……ああ、そうだな。怒るつもりはないよ」

天童はひと呼吸して、ドアを開けた。

こだまは、天童たち三人が入ってきて、くしゃつとなった巻き髪を少し直した。

「大丈夫か？」

天童の声だけでも心が癒される。約束通り来てくれたのだ。

「いえ……ただの打ち身です。心配をかけてすみません」

「ただの　　と言っても、医務官には二、三日は様子を見るよう言われたぞ」

天童は真面目だ。医務官がそう言ったとしても、そんな大ごとではない。こだまは慌てて首を横に振る。

「大丈夫です。追跡隊の名に泥を塗ってしまったし、早く挽回したいんです！」

「泥を塗ったとか、そんなこと俺はまったく思っていない」

「……はい、すみません」

天童の言葉は励ましているつもりでも、語気が強いので怒っているように聞こえてしまう。ドアの前で言った通り、怒るつもりは本当にないのだ。それはみんな分かっている。

「とにかく、医務官の命は守らせる。ちゃんと休めよ」

「はい」

こだまは掛け布団をぎゅっとつかむ。

天童はベッドに腰かけ、ずっと顔を近づけた。こだまは目を丸くする。すぐにも立ち上がりそうなこだまを安静にさせるために、この距離でゆっくり語りかける。

「大事にならないで良かった。向こうも必死だ。深追いはするな」

「……はい」

「ただし、やるときは手を抜かない。ちゃんと力になってくれ」

こくん、と頷く。

「返事は？　　いいな？」

「はい」

悔しさ、恥ずかしさ、背中痛みが混ぜこぜになり、こだまは赤い顔でうつむいた。

天童はこだまの頭を撫でて、立ち上がる。振り返り、つばさの目を見た。

「つばさ、あとでハクアの位置を再探知して報告してくれ」

「はい」

「それと、こだまに何か元気が出るものを頼む」

「はい」

「紅花、校長室に行くぞ」

「うん」

天童はこの件を報告するために校長室へ向かった。紅花も兄の後ろについていく。医務室に残されたのは少女二人と鳥一羽だった。

しかし、天童が出て行った瞬間、ベッドから起きて着替えはじめてこだまに少し驚いた。つばさは医務室のイスに座りその様子を見ていたが、顔色からも無理をしているのはよく分かる。

こだまはトレーニングウェアに着替えると、つばさの前を素通りして、すたすたと廊下に出た。校長室とは逆方向へ行く。会議棟でなくトレーニング棟だ。つばさも続いた。

「どこで休むつもり？」

「うるさい」

二人は廊下を並んで歩き、医務棟とトレーニング棟の間にあるリフレッシュルームに出た。売店があり、おばさんに声をかけられる。つばさは思わず足を止めた。

「こだま、元気が出るもの買ってあげる」

「……は？」

売店には三種類の二色ソフトクリームがある。バニラとパインの月見ソフト、紫いもと抹茶のあじさいソフト、あずきとざくろのデ―モンソフト。どれがいいか聞くと、何も言わないので、自分が好きなあじさいソフトを二つ買ってひとつを渡した。

こだまは迷惑そうな顔をする。

「……朝から？」

「別にいいじゃん。もう買っちゃったし」

二人は肩を並べてベンチに座った。窓から今日も暑そうな陽の光が差し込んでいる。その向こうに校庭が乾いて見えていた。

なんだかんだ言って、こだまは甘いものが好きだった。天童に頼

まれた意味は分かっている。パクパク食べるこだまの様子を横目に見ながら、つばさは気さくに話しかけた。

「あせらなくても良かったのに。相手がフォース系なら、隊長がいつときじゃないと」

「うるさい」

「隊長には頼りたくないの？」

「うるさいって」

「みんなでかかれば楽勝だよ」

「負けたのが悔しいんじゃないって」

つばさは息をつき、今回の落ちこみは手強いなと感じた。実は、つばさにはこだまがいら立つ本心が少し見えていなかった。

天童を隊長とする追跡隊は、結成されて約一年くらいだ。その間に、つばさは逃走した超能力者を一人で捕まえたことがある。その間に、つばさは昇格審査をパスし、エリア系の第二段階の使用が許可された。昇格した超能力は慣れないうちは反動があると聞いていたが、つばさは平気で使いこなしている。校長の直系である天童を除けば、つばさはとにかく成長の早いエリートだった。

つばさは銃の扱いも上手くて、シューティングの教官たちにも好かれている。当然、天童からの信頼もつばさのほうがずっと厚い。負けたのが悔しいわけじゃない。こだまは一人でやったのを天童に認めてもらう絶好のチャンスだったのだ。それくらい自分もできるところを見せたかった。

けれど 失敗した。

追いこまれた超能力者の逆襲に警戒する天童の性格から、もうこだまの単独行動は許されないだろう。つばさを見返すチャンスを失ったのだ。

暗い顔で早々とあじさいソフト食べ終えたこだまを見て、つばさは聞いた。

「違うやつがよかった？」

「……何でもいい」

こだまは肩を並べて座るエリートに、一人で捕まえたときどうやったのか聞いたかったが、プライドが邪魔して聞けなかった。

「あたし、リモートガンの練習してくる」

「教えようか？」

「いいよ。人に見られると集中力が落ちるんだ」

「実践向きじゃないなあ」

つばさの無邪気な一言一言が、こだまの胸をズキズキと刺す。体にはまだ痛みがあるし、天童には休めと言われた。けれど、誰でもいいから、自分ひとりの力で誰かを倒さない限り、このモヤモヤはずっと晴れないままなのだ。

こだまは包み紙をくしゃっと丸め、立ち上がり、トレーニング棟の中にあるシューティングルームに行くことにした。銃はいま持っていないが、そこには練習用がある。

つばさは、シューティングルームに向かうこだまの後ろ姿を見送った。すると、タイミングを計ったように、天童から電話が来た。

「こだまは？」

シンプルな質問。医務室でじっとしていないことが分かっていたのだと思う。

「銃の練習です」

素直に答えると、一瞬の間があった。

「邪魔してきてくれ。こだまを休ませてほしい。頼むぞ」

つばさは電話を切り、立ち上がる。

「んじゃ、邪魔してくる……か」

灰色の壁と天井しかない空っぽの広い部屋で、シミュレーションゴーグルをかけたこだまは、手に持ったりモコンで立体映像のセツトアップをする。シーンを何度かチェンジし、ハクアとの接触が一番多そうなシーンを考える。

そして、逃亡者が町の狭い路地に逃げ込んだ、という設定を選ん

だ。路地にはポリバケツやゴミ袋や空き缶や、放置された自転車などいろいろなものがある。

時間帯は夜。ローディング。

ゴーグルを通した視界の明度が一気に落ちる。体のたるさが一段と増す気がした。敵の能力を設定する。レンタルフォースで脚力を十倍に強化したターゲットにした。とりあえず最強レベルを倒せば何事にも対応できるというのがこだまの基本的な考え方だ。シューティングの教官には三倍くらいを何度もこなすよう教えられたが、戦力として出遅れているのだから、追いつくためにはこれくらいの難易度でやるべきだと思う。

性別は男。仲間はゼロ。ローディング。

これで、黒い服を着た顔なしの少年が逃亡者としてセツトアップされたはずだ。スタートの段階では、路地の中に潜んでいるので姿は見えない。だが、超能力者の体から発する微弱な周波数によって何となく敵の位置がわかる。

路地の奥、曲がり角の先に いる。

早速、敵が動き出す気配。こだまは先手必勝とばかり、曲がり角の地面にマグネティックエリアのマーキング弾を撃った。だが、ちよつとコントロールが悪く、手前のポリバケツに当たってしまった。標的は一瞬ひるんだが、再び動き出している。

急いでもう一発を装填する。脳内イメージは、体内のエネルギーを手のひらに集め、銃のグリップに移動させる感じ。これが少しかかるのでスピーディに連続で撃つことができない。とにかく集中する。

ここで自分の体内エネルギーの流れに集中する分、相手の動きを追いかけるのが少しおろそかになる。その間に、レンタルフォースを使う顔なし少年が正面の視野に躍り出て、こちらを向いた。増強した脚力を使って、足元に転がった空き缶を蹴ってくる。一気に鼻先に迫る。予想以上にものすごいスピードだった。

こだまは集中を瞬間的に解き、間一髪でそれをかわす。危なかつ

た。脚力強化によってコントロールも完璧になっている。草むらと違って、まわりに物が多い場所では、レンタルフォースは近接戦闘型と言っても手強い。

だが、こだまも発射準備ができていた。今度こそ命中させると意気込み、照準を絞る。すると、顔なし少年はその場で飛びあがり、横壁にある窓枠に足をかけ、思いきりこちらに向かってジャンプした。

十人分の脚力での跳躍は、想像をはるかに超えたスピードで距離を縮め、上空から襲いかかってくる。実は、ターゲットの『抵抗レベル』も最高値に設定してある。マグネティックエリアなどベシツクな超能力は熟知していて、対応策を必ずやってくる　という設定だ。これを持ち越えないといけない。確実に撃破しないといけない。こだまは迫りくる標的の体に向かって、二発目のリモートガンの引き金を引いた。

銃口から、超能力を有形化した小さな弾丸状の破片が射出される。少女の体内から絞り出された能力の結晶体。当たれば、敵の体は数倍の重力を持ち、すぐさま地面に落下するはずだ。

だが、敵にも対策があった。手に持ったカバンを投げてそれを防いだのだ。一瞬のタイミングだった。超重量になったカバンが地面に落下する。

こだまは焦った。こう来るとは思わなかった。距離がない。後ろに下がり、再び体を狙う。あるいは地面か。どっちへ撃つべきか。

そのとき、顔なし少年は空中で動きを変えた。横壁を片足で蹴り、反対側の壁に跳んだ。三角飛びで前方へ加速する。一気に鼻先まで迫ってきた。動揺し、うまく照準が定まらない。顔のない少年。背筋が凍る。指が固まる。ハクアの突進が蘇る。

「こだまちゃん、やられちゃうよ！」

両側の壁に向かって、後方から弾が飛んだ。着弾し、半径二メートル以上の効果範囲が壁にマーキングされる。顔なし少年の体は、空中でグラグラッと揺れて加速が止まり、近いほうの壁へ横向きに

吸い寄せられて激突した。痛そうな大きい音が路地に鳴り響く。

「すばやい相手は体じゃなくて、壁に撃って」

振り向くと、両手にリモートガンを構えたつばさが立っている。

ゴーグルをかけ、その下に見える余裕の笑顔。肩にはデンロク。こいつも特製ゴーグルをかけている。

つばさは、すかさず真下の地面にマーキング弾を撃ち、新しい重力場を作った。それが済むと、スイッチを左に変え、両壁の重力場に対してキャンセル弾を撃った。

リモートガンは超能力の発動と解除両方を撃つことができる。発射前にスイッチによって、発動と解除どちらの能力を弾丸化するかを設定するのだ。スイッチを右に向ければマーキング、左に向ければキャンセルになる仕組みだ。

キャンセル弾が壁に当たり、顔なし少年は横向きの重力から解放される。そして、たちまち下の地面に急降下し、地面に貼りつけ状態になった。もはやまったく動けない。

つばさは、右手の銃だけスイッチを右に向け、さらにポリバケツを撃つ。顔なし少年がひれ伏す重力場にポリバケツが飛んできて、体の上にのしかかった。まるで漬物石のような感じ。サルカ二合戦で言えば、とどめのウスだ。

これは、マーキングポイントに物体を高速移動させる高次元の能力。当然、物体はその重力場で重量が増す。これがエリア系第二段階で使えるようになるもの。エリアデバイス。こだまがいくら望んでも学校から適格でないと判定される、まだ手の届かない能力だった。つばさはそれをすでに使いこなしていた。

「こだまちゃん、手錠持ってる？」

「……え？」

呆然としていて咄嗟に答えられなかった。

「ない？　じゃあ、デンロク、手伝ってあげて」

肩に乗るデンロクがつばさの声に応えて鳴き声を上げた。羽ばたこうとする。

「待て！ 手錠は持つてる！ それより、何で割り込んでくるんだ！」

こだまは声を荒げた。デンロクは躍起になったこだまの様子に押されて、羽をたたむ。つばさはやっぱりという困り顔をして、両手の銃を両足のガンホルダーに収めた。

「……隊長から共同訓練しろって言われたの。ごめんね」

こだまはそれを聞いて急に悲しくなった。つばさが嘘をつくわけがない。天童の指示なのだと知った。自分が一人でトレーニングに入ったから、後からつばさに追わたのか。こだまの単独訓練に意味はないと言っているのか。しかし、それではこだまが誉められる日はいつやってくるか分からない。同じ系統の、上位レベルと同じ隊にいて、これだけ捕獲能力の差を見せられて、いつ追いつけばいいのか。

「隊長は、何で最初からそう言ってくれないんだ」

気がすつきりそがれたこだまが虚空につぶやく。手錠を持っていると言ったが、それを捕獲した標的のかけに行くつもりはないようだ。つばさは腕を組み、冷静に尋ねた。

「共同訓練……もつと続ける？」

「疲れた。部屋で休む」

そして、つばさはシュミレーションルームから出て行くこだまの後ろ姿を見届けて、訓練終了のスイッチを押し、静かにゴーグルを外した。胸ポケットからメガネを出し、かけ直す。デンロクが豆を要求したので、つばさはデンロクの運動がてら、ひょいと天井に投げた。

ハクアとタツヤは並んで自転車に乗っていた。

弁護士事務所が少し遠いので、学校を出た後、ハクアの家とタツヤの家を順番に回り、自転車を持ってきたのだ。二人ずつと一緒に行動している。自転車と言えば、前に引ったくり犯を追ったとき二人乗りをしたことを思い出す。今日は二人乗りとは違うが、何かしなくちゃいけないという緊迫感と、仲間であるという安心感が、ハクアとタツヤの気持ちにつながりを与えていることは同じだった。ハクアは、希に借りた水色のワンピースを着たままだったので、自転車は少しこぎにくそうだったが、「スカートがそんなに長くないから平気だ」と笑っていた。いつものショートパンツと感じが違うと言っていた。

やがて、明るい感じで振り向き、目的の場所に着いたことをタツヤに伝えた。人や車の通りも結構あるところだ。二人は歩道に自転車を止め、白くてひよろりとしたテナントビルを見上げた。ビルにある看板のなかで弁護士っぽいのは、

『笹ヶ瀬 姻戚関係相談所』

というものくらいだが、学校で習ったことのない字が多くて自信がない。タツヤは漫画やアニメで見た探偵みたいな感じをちよっと思い出した。

ハクアは自転車に鍵をかけ、すたすたとビルに入っていく。タツヤもあとに続いた。あまり人がたくさんいる感じがしない。二人は自動ドアをくぐり、エレベーターで三階に向かう。タツヤはエレベーターにあまり乗らないから少し緊張したが、乗るときも下りるときも誰にも会わなかった。

それはそれで安心したが、ビルに入ってからハクアが全然しゃべらないのが気になった。緊張しているのだろうか。

「ハクア」

「……ん？ どうした。トイレか？」

「ち、違うよ」

ハクアに声をかければ、いつもと雰囲気は変わらない。拍子抜けするが、一緒に方法を探すというのは楽しくもあった。いま、誰かに頼らなければハクアの自由を守ることは無理だ。けれど、もう気持ちは少しも曇っていなかった。

「きつと何とかなるからさ。元気出せよ」

すると、ハクアは嬉しそうに笑った。空気が明るくなる。

「うん、ありがとう」

廊下を曲がると、つきあたりのドアに『笹ヶ瀬 姻戚関係相談所』のプレートが貼られていた。やはりここだった。

「これ、なんて読むの？」

「たつつん、頭いいのに、あたしに聞く？」

「いや、ハクアは知ってるんだろ？」

「うん、知ってる」

「じゃあ、教えてよ」

「えへへ」

ハクアは看板を読んだ。『ささがせ いんせきかんけい そうだんじょ』。笹ヶ瀬が弁護士の名前なのだという。ハクアはゆっくりドアを開けた。

弁護士ってどんな人だろう、いきなり目が合ったらどうしようと一瞬考えたが、ドアの向こうは受付で、人はいなかった。受付の先に擦りガラスの入ったドアがある。

ハクアは受付にある電話で内線をコールした。すぐに人が出た。

「あつ、ハクアです！ 来たよ！」

何か軽いな。

「うん、そうそう。見つけた。オッケー、了解！」

いまさらつと『見つけた』と言ったが、それはともかく、相手がずいぶん仲の良さそうな人でほっとした。何度か会ってるのだろ

う。すぐに中のドアの鍵が開く音がした。ハクアが駆け寄る。

ドアを開けて現れたのは、紺色の着物に身を包んだ年上の女性だった。タツヤは驚いた。まさかこんな和風の人が出てくるなんて。着物には流れるような銀色の笹の葉が刺繍してあり、キラキラ光っていた。

「ハクタロー、学校楽しい？」

「さとりん、あたし、もうそれどころじゃないって！」

「ん、話は中で聞こうか。あ、この子がお友達？」

「たつつんだよ」

いきなり紹介されて、タツヤは体が固まった。

「こ、こんにちは……あつがせ・さとい朱鳥タツヤです」

「はじめまして、笹ヶ瀬聡里です。ハクタローのお世話してる弁護士です」

「あ、はい……」

ハクタロー。犬みたいだ。

「ん？ ほら、バッジあるでしょ。テレビで見たことある？」

紺色の着物の襟に、金色の弁護士バッジが輝いていた。この人が弁護士なのか。弁護士はもっとおじさんっぽい人をタツヤは勝手に想像していた。年齢は暮田先生と同じくらいの二十代後半に見えた。細身で、ずっと笑顔だ。

「入って」

聡里は二人を室内に入れてくれた。事務所の中は別に和風でなく、事務机があったり、パソコンがあったり、本棚があったりと普通だった。ただ、室内に巨大なだるまや招き猫やたぬきの置き物があり、白フクロウの剥製があり、何種類もの天狗の面や提灯が壁にかかっていた。聡里はとりあえず二人にソファに座るよう言うと、部屋の奥へ行き、大きなものを手に持ってすぐ戻ってきた。

「はい、これでもつまんで」

タツヤは目を丸くする。巨大な容器に、お菓子のプチシューが百個くらい山のように積み上げられたものがテーブルに置かれたのだ。

うつかり下を取ったら崩れそうなくらい山盛りになっている。

「すげー！」

ハクアはソファの弾力を面白がってポンポン跳ねた後、プチシューを遠慮なくひよいパクひよいパクと食べた。あつという間に五六個が口に吸い込まれた。タツヤは一応ひとつ手に取った。カスタード味の普通のプチシューだ。

「それとも、今日は時間があるから、お茶たてよっか？ 氷で冷まして美味しいのよ」

「あたし、苦いやつは無理だ。それより早く聞いて」

「……せつかくいいもの仕入れたのに、つれない子ね」

麦茶をコップに注いで持ってきて、聡里は二人の前に座った。口の中がカスタードで甘かったから、タツヤはすぐ飲んだ。冷たいものがのどを気持ちよく流れていく。体の汗も少し引いた。プチシューの山を挟んで、二人は聡里に向き合った。

「で、今日は何？ 次のお客さんの予約があるから、面会時間は三十分よ。よろしくね」

聡里もプチシューをパクパクつまむ。何だかイメージしていた弁護士への相談ではなく、正月に着物姿の親戚のお姉さんとちよつと話しているような感じた。その変な雰囲気は頭がいつて、今回のことをどんなふうに話すのか考えていなかった。

「追跡隊に見つかった」

ハクアはいきなりそう言った。聡里の目の色がサツと変わる。

「本当の話？」

聡里はそう聞き返した。つまり、この人はハクアのことを全部知っているのだ。

「うん、そうだ。昨日、追跡隊のやつと戦ったんだ」

戦いの感触や傷跡がまだタツヤの体や手にも残っている。聡里はすっと眉をひそめて、ハクアの熱っぽい眼差しをじっと見た。

「で、一応無事だったわけね？」

「このたつつんのおかげだ」

聡里と目が合う。

「タツヤくんもハクタローのことはだいたい知ってるのね？ 私の
こと、説明は要る？」

「あ、あの……」

「恐がらなくて大丈夫。私はハクタローの味方だし」

タツヤは頷く。聡里は続けた。

「看板にも書いてるけど、普段は男女の姻戚に関する相談を受けて
るの。それが普通のお客さん。で、すぐくたまに空から降ってく
る隕石に関する相談も受けるの。要するにメテオドロップよ。これ
は知ってるんでしょ？」

「はい、知ってます」

「じゃあ、問題はここから先ね」

聡里は胸元から扇子を取り出し、バツと広げた。銀色のきれいな
波や水しぶきが描かれていて、着物の柄と合っている。ただ、室内
は冷房が効いていて、うちわみたいにあおぐほどではない。聡里は
着物の襟元を少し開けて、扇子で風を送り込む。胸元が少し暑い
だろうか。

ふうと息をつき、聡里は再びハクアと向き合った。

「捕まれば一生独房なんだよね。絶対に嫌でしょ？ あの人もきつ
とそれは許さないし」

あの人とは、二人の話ぶりからしてハクアの養父みたいだった。
ハクアは会ったことがないと言っているが、聡里さんは会ったこと
があるのだろうか、とタツヤは様子を見る。

その隣りで、ハクアが大きく息を吸い込んだ。

「引っ越したくはないんだ。あたし、このままがいいんだ」
すると、聡里は神妙な顔つきで扇子をたたみ、パンツ！とテーブ
ルを叩いた。

事務所の空気が一瞬重くなる。

「ハクタロー、あなたもバカじゃないでしょ。居場所が特定された

のよ。逃げたいなら動くのは仕方ないわ」

仕方ない　その言葉でアランの最初の反応をタツヤは思い出した。無理なのはみんな分かっている。それでも何とかしたいのだ。ハクアは必死にすぎりつく。

「頼むっ！　なあ、さとりん、それ以外の方法はないかつ？！」

だが、聡里は素直に何とかしようとは言ってくれなかった。

「いい？　子供だから言わなかったけどね、無理を望むなら、代償は必要なのよ」

その瞬間、タツヤは頭に血が昇って立ち上がった。

「ハクアがこのまま生きるのが無理だって言うの？！」

言い放った後、心臓の急速な鼓動が追いかけてくる。背筋がザワザワと熱く震えた。

「たつつん　」

驚いたのはむしろハクアだったかもしれない。聡里は少年少女二人の顔を見比べた後、プチシューをひょいと口に運んだ。麦茶でのを潤す。

時間が少しゆっくりになった。

「……でもね、私もそう何度も家探しするのは面倒なのよ」

「どういう意味？」

ハクアは身を乗り出す。

「本気なのはよく分かったわ。もったいぶってごめんなさい。なら、私もちよつと覚悟を決めたいの。それくらい時間はもらえる？」

相談者二人は揃って頷いた。聡里は苦笑いを浮かべ、腕組みをする。

「追跡隊を相手にしたら、逃げては見つかり、逃げては見つかりの繰り返し。だったら、こう思わない？　追跡隊を再起不能にしてしまえばいい　と」

再起不能。その言葉が事務所の空気をさらに重いものにする。タツヤにも意味は分かる。おそらくハクアにも。黙り込む二人を前に

して、聡里は続けた。

「あそこは最後にしようと思ってたけど、たった二ヶ月で終着駅とは……不幸ね。ハクタローにちよっと同情しちゃうわ」

そして、聡里は立ち上がった。壁にかかった天狗の面に向かって話しかける。

「シユタイン、どう？」

タツヤは目を疑った。間違いなく、天狗の面だ。

『聡里さん。厄介事は困る』

天狗の面が男の声でしゃべった。若い声だった。いや、けれど、それは間違いなく天狗の面なのだ。

「えっ？ あれっ？」

ハクアも激しく動揺した。聡里は「ちよっと黙ってて」とハクアたちを制止し、天狗とまた話し合った。

「確かに少し手狭になるかもしれないけれど、大目に見てよ」

『そんなことは小さな問題だ』

「この子は、戦力よ」

聡里はハクアを指差し、天狗の面に主張する。

『……どうだか』

「頑固ね。スポンサーの意向と言ったほうが飲んでくれる？」
すると、天狗の面の声は黙った。

「こっちで契約確認していいかしら？」

『勝手にしろ』

いまでの話が終わったようで、聡里はソファに座り直した。ポカ
ンと口を開けたままのハクアとタツヤにとりあえずプチシユを勧
めた。麦茶のおかわりを聞いてくる。ハクアは両方もらったが、タ
ツヤは両方遠慮した。そんなことよりも、天狗の面といま何の話を
したのか、早く話して欲しかった。

聡里はくすくすと笑う。

「驚かせて悪かったわね」

いや、絶対にそのつもりだったはずだ。

「いまのはね、さっきのやりとりを全部パスチェッカーで聞いてもらってたの」

「パス……？」

「シュタインが使える、ネットワーク系の超能力。たぶんハクタロも知らないでしょ？」

フォース系、エリア系以外の系統の話だった。シュタインというのは外国人の名前だと思うが、普通に日本語だった。タツヤは混乱し、もう何が何だか分からない。とにかくハクアの身が安全になるほうに話が向かっているならそれでいい。

見れば、ハクアも首を傾げている。

「ネットワーク系……？」

「遠くにいる人の会話を盗み聞きできる超能力よ。あんなふうに声を出すこともできるわ。メテオドロップはまだ未解明な部分がたくさんあるのよ」

「なるほど」

ハクアは納得したようだが、タツヤは念のため聞いた。

「シュタインさんも超能力者なんですか？」

「そうよ」

「あの……ちなみに、聡里さんですか？」

「ううん、私は一般人」

話は一旦途切れた。

「じゃあ、問題はここから先ね」

さっきも同じ言い方だった気がするが、聡里があえて区切りをつけたのは本当に大事なことをハクアに問うためだった。

「独房の実験体と、防空壕の掃除係、どっちがいい？」

防空壕。聡里の口からそのとき初めて出た言葉だった。さっきの天狗男に関係あるのだろうと感じる。

「どっちへ行っても能力開発と観察はされるわ。そして、戦いからは逃げられない」

聡里はハクアに決断を迫る。

「違いは、肉が与えられた分だけか、いくらでもあるくらいよ。あと友達」

「多いほうだ！」

ハクアは大声で言い切った。聡里は目を丸くする。どうせなら肉の量の段階で答えて欲しくなかったが、肉も多くて友達も多いほうと答えるはずだ、とタツヤは思い、苦笑いがこぼれた。

聡里は納得した表情で深く頷いた。

「よろしい。契約成立ってことね。それじゃあ、ハクタローには明日から『ブレイクチェイサー』という組織に入ってもらいます」

「組織？ 訓練学校みたいな……？」

ハクアの声がちよつと小さくなった。どうにも束縛や規律が苦手みたいだ。

「ううん、大げさに考えなくていいわ。共同生活よ。契約書はないけれど、私も聞いたし、彼も聞いたわ」

「彼？」

聡里は壁を指差す。

「あそこ。何でもお見通しの天狗様、よ」

『くだらん』

天狗の面がまたしゃべった。タツヤはさっき聞いたはずなのに、まだ心臓がビクツとする。壁にかかった面がしゃべるのは気持ち悪い。だが、ハクアは興味津々に面を眺めている。

「なあ、さとりん 天狗は中から出てこないのか？」

聡里とタツヤはきよんとする。

「……パステエツカーの説明、もう一回する？」

『聡里さん、悪いが戦力外だ』

「ちよつと！ あきらめないでよ！」

天狗としゃべる聡里の表情は何となく楽しそうだった。

少し学校生活や天体観測の話をして、約束の三十分が近づき、聡

里はビニール袋いっぱいプチシューをおみやげに渡してくれた。ハクアは手離しにテンションが上がっていたが、タツヤはもう胸焼けがして食べられない。希や由果は喜ぶだろうか。

帰り際、聡里とハクアは約束をする。

「とにかく。今日はどこか安全な場所に泊まって、明日この地図の場所へ行きなさい」

「うん、さとりん、ありがとう！」

元気いっぱい笑顔を見ると、本当に何とか自由を守ってあげたくなる。願いを叶えてあげたくなる。聡里はハクアの頭を撫でて、きゅっと軽く抱き寄せた。

事務所を出る直前に、ハクアがトイレに行ったとき、聡里はタツヤにも声をかけた。口数は少ないけれど、問題はここから先と言うと、ハクア本人よりも真剣な顔で向き合ってくる。この子は、状況をよく分かっている。だから、無理を望むなら代償が必要と言ったとき、真っ先に強い声を上げたのだ。

シュタインや他の連中とは全然違う、やさしい性格。けれど、それが大きな危険をもたらすこともある。

「タツヤくん、あの子の面倒見るのは大変よ。親切心ならいいけれど、それ以外の気持ちなら、覚悟を決める時間をいつか持ちなさい」
「……はい」

タツヤはゆっくり頷いた。この子だけがついてきたのも、本当はたまたまそうになったわけではないのかもしれない。

たった三十分で、いまの言葉はどれだけ信用されただろうか。聡里は、ハクアの身の隠し場所は責任もって確保した。ただ、このやさしい性格の少年がこれからどうするか、少し見通す自信がなかった。

ハクアは希の家に泊まり、希にひと通り話した。そして翌朝、弁護士の大蔵に指定された集合時間と場所に三人で行くことにした。

朝になり、タツヤが希の家に自転車で行って来て、三人とも自転車に乗り、大蔵の書いた地図をもとに向かった。場所は住宅街ではなく河川敷の上流のあたりだった。自転車でも十分以上かかりそうなどころだ。前に引ったくり犯を倒した場所よりもっと上流だった。コンビニや公園などの目印をひとつずつクリアし、地図で指示された場所に着くと、土手の上に一台の車が停まっていた。高そうな大型の赤いスポーツカーだ。三人が自転車ですばに行くと、サンダラをかけた着物の女性が運転席から下りてきた。昨日と違う白っぽい着物だが、間違いなく大蔵だ。

「おつ、ちゃんと来たねー。おはよう！」

「おはようございます」

着物にサンダラというのも何だか不思議な感じだし、着物で運転は大変じゃないのかな、とタツヤは少し思う。とにかく、大蔵は楽しそうに手を振って三人を迎えた。今日もちやんと着物の襟に金バッジをつけている。和物のハンカチで顔の汗をふき、銀色の扇子で胸元をパタパタ仰いでいた。初対面の希は挨拶をする。

「はじめまして、寺野さんと同じクラスの月本希です」

「希ちゃんね。どうも、弁護士の笹ヶ瀬大蔵です。へー、ハクタローみたいに日焼けしてないんだね。運動が苦手？」

「えっ、あの……苦手ではないんですが、私、あんまり日焼けしないんです……。バレエとかを習ってます」

「じゃあ、白いほうがいいよねー」

「はい。あと、シュークリームありがとうございます。美味しかったです」

「あつ、食べてくれたんだ！ いやーうれしいなあ。また今度作っ

てあげるね！」

あれは聡里の手作りだったのか。そして聡里は一呼吸置くと、サングラスを外してまぶしそうな顔をした。

「さて、問題はここから先ね」

扇子をパシッと気持ちよく鳴らして閉じ、真剣な顔でハクアと向き合った。

「ハクタローは決心したのね？」

「ああ」

力強く頷く。

「　　よろしい」

聡里は笑顔になり、ハクアの頭を撫でる。この人に相談してからハクアのこと何とかなりそうで、表情も明るいし、タツヤは本当にうれしかった。

希は恐る恐る質問する。

「あの……こんな場所にハクちゃんを助けてくれる人がいるんですか？」

「そうよ。簡単に言うとな、追跡隊と戦える連中のアジトがあるの」

「アジト……？」

希は首を傾げた。タツヤは意味がわかる。

「まだ学校で習ってない？　ごめんね、秘密基地よ。とにかくそこに案内するから」

「　　そんなのがあるのか」

ハクアが言う。やはりハクアも知らないことが多い。

「おとうさんがこの町に引っ越させた理由がわかった？」

養父のことを言っているとタツヤは思った。ハクアは深く頷く。

「じゃ、ついてきて」

聡里はまわりを確認する。河川敷には誰もいない。すると、手さげの巾着袋から新しい白い軍手を取り出し、河川敷に三枚並ぶ立て看板に向かって歩き出した。

聡里が車を停めた近くに、遊泳禁止、花火禁止、バーベキュー禁止と書かれた三枚の立て看板があった。一枚に書けばいいのにとタツヤは思うが、それぞれにイラストが描いてあるので、別々に立てられたのかもしれない。

とりあえず聡里はその前に立つと、腕まくりして、軍手をはめ、遊泳禁止の看板をつかんだ。「ほっ」と言って上へ持ちあげると、看板が少し動いた。さらに浮かせたまま看板を半周以上回した。三人とも驚いてじっと見つめる。

「違うの、怪力じゃないのよー」

聡里が笑いながら言う。遊泳禁止の看板の向きを変えると、一旦、巾着袋から携帯を取り出し、画面をチェックした。そして次に、花火禁止の看板を同じように動かし向きを変える。遊泳禁止とは違う角度だ。最後に、バーベキュー禁止の看板を持ちあげ、逆方向へ回した。地面からカチツと金属音が鳴ったのが聞こえた。

「よし、これで開いたはず」

聡里は笑顔で振り返る。ハクアもきょんとしていた。

「え……何が？」

「ん？ あれよ」

そう言って聡里が歩いて行ったのは、三枚の看板の近くにある石のベンチだった。両手でベンチをつかむ。

「これはちよつと重いよね」

ベンチのふたと言ったら良いのか分からないが、とにかく座る部分が横にゴリゴリと動いた。そばに駆け寄ると、ベンチの中に穴があった。とても暗いが、穴の底にぼんやりとコンクリートっぽい床が見える。

「一瞬恐いけど、浅いから大丈夫よ。順番に入って。ふたは下から閉められるから」

聡里は着物の裾をつまみ、ひょいっとジャンプして穴の中に降りた。すぐに着地する音がした。上から覗くと聡里の頭が見える。浅

いと言っても、大人の体がすっぽり入るくらい深いのだが、ハクアはさつさと石に腰かけ、すぐに飛び降りたので続くしかなかった。確かに、秘密の入口の前でじっとしているわけにもいかない。希が少し恐がったので、タツヤは手を持って支えながら降りるのを手伝った。そして、最後にタツヤが飛び降りた。

穴の底は、床も壁もコンクリートだった。思ったより埃っぽくないが、かなり蒸し暑くて、草と土とコンクリートと臭いが混ざり、異世界にやって来たような錯覚を感じた。穴の底は何人が立てるほどの広さしかなく、鉄のドアがあり、数字錠みたいなものがついている。

ハクアと希は聡里にびったりとくっついていた。聡里は暑そうに扇子を広げ、胸元を少し開き、パタパタと風を送り込んでいる。

「じゃ、閉めるね」

聡里は、壁に取り付けられたハンドルを握り、グルグルと回した。ふたがゴリゴリと動き、上から入る陽の光が減っていく。ハンドルはそれほど重そうでもなく、何周か回すと完全に締まった。一旦、真っ暗になる。

聡里が携帯の明かりで壁を照らすと、ハンドルの横に青いボタンがあった。ボタンにはROCKという字がある。それを押すと、ガチャッと大きな金属音が穴の中に鳴り響いた。ベンチのふたがまたロックされたのだとタツヤは思った。

「ハクタロー、覚えた？」

「えっ？ あ、うん」

「まあ、連中からまた聞いて。あと、あなた携帯持ってないから、百均でペンライトを買うといいわ」

「うん、そうする」

ハクアは素直に頷いた。何となくさつきから、聡里はハクアだけに言っている言葉が混じる。もちろんハクアの問題だから当然だと思いが、聡里がタツヤと希を少し別扱いしている感じを覚えた。

「じゃあ、問題はここからね。ここを開ける数字は毎日変わるの」
「難しいな……」

ハクアが小さな声でつぶやく。

「大丈夫、慣れよ。数字はシュタインが毎日設定するの」

「面倒だなあ」

「だから、絶対に逆らわないでね」

聡里はクスクスと笑ったが、少し恐い言い方だった。数字を入力すると、ピピツと電子音がしてロックの開く音がした。

シュタインは組織のリーダーだと聡里は昨日言っていた。遠隔で聞いたり話したりできる超能力者のようだ。外国の名前だが、日本語をしゃべった。ちなみに、ハクアが希の家に帰り、例の天狗の面がしゃべったことを希に話したら、面白い人だねとすぐ笑ったらしい。タツヤはあのととき不気味さを強く感じたのだが、希は先に超能力だと聞いたから印象が違ったのだろうか。

聡里がドアを押し開ける。降りる階段があり、天井に薄暗いライトがついている。蒸し暑さと息苦しさは変わらない。階段は何度か折り返しがあり、感覚的に地下二階分くらいの長さがあった。聡里を先頭にしてゆっくり降りる。すると、終着点にまた数字錠のついたドアがあった。

「またか……」

ハクアが面倒くさそうに溜め息をつく。

「うふふ、ここは上と同じ番号よ」

聡里が数字錠を解き、ドアを引くと、階段よりずっと明るいライトで照らされた広い部屋が見えた。

「うおー！　ここは涼しいっ！」

「ほんとだねー！」

ハクアや希が気持ち良さそうに目を輝かせる。確かに冷房が効いていて驚いた。秘密基地と言っていたから、タツヤはかなり狭苦しい場所を想像していたが、まったく違った。普通の家みたいに天井が高く、壁や床も清潔だった。

テーブルに男女二人の子供が座っていた。ただ、二人とも年齢はタツヤたちよりも少し年上に見える。

「お客さん、来たわね」

ティーカップを置き、黒いドレスを着た少女が振り向いた。肌は人形みたいに真っ白だ。

「聡里さん、久しぶり！」

青と白のラガーシャツを着た背の高い少年が、聡里にっこりと笑顔を向けた。

「元気そうね」

聡里は三人の小さな客人を背に従えて、リラックスした笑みを返した。

まず、黒ドレスの少女が立ち上がり、聡里に丁寧なおじぎをした。腰まである黒く長いストレートヘアに白バラのカチューシャをつけ、黒いキャミソールとふわりとした黒いレースのスカートに、黒い皮のブーツを履いている。ブーツの丈はひざの上までである。

聡里は握手しようと手を差し出す。

「おはよう、マリネ。今日は早起きなのね」

早起きと言っても十時だ。

「正直、激しく眠かったけど、気づけのレモンティを飲んだの」

マリネという名の少女は黒い網編みの手袋を外し、握手に応えた。追跡隊と戦うのはどんな人なんだろう、とタツヤはそつと少女の姿を見た。冷房が効いているけれど、真夏に長いブーツは珍しい。だが、それより目についたのは少女が腰に差した二本の傘である。白と黒の一本ずつ。ベルトにくくりつけてあり、まるで二刀流のようだ。

「日傘よ」

はっとして顔を上げると、マリネの冷やかな視線とぶつかった。確かに刀のさやみたいに見えたのは傘を入れるレースの袋のようだ。日傘は母親も持っていたので知っているが、こんなふうに腰に二本

もさげているのは初めて見た。

「文句ある？」

「えっ、あ……その……」

タツヤは動揺して口ごもった。

「マリネさん、恐がらせるなよ」

笑いながら口を挟んだのはラガーシャツの少年だった。そのままスクツと立ち上がる。タツヤよりもずっと背が高い。声変わりもしている。

「ごめんな、俺は敷浄司^{やなぎじやうじ}。年は中学一年だ。ここではみんなにブツシュって呼ばれてるから、ブツシュで頼む。よろしくな！」

「……ちよつと、あんた本名言っていいわけ？」

「今日から仲間なんだから問題ないだろ？」

ブツシュという中学生の少年は、目が細くて、ずつとにこやかな表情だった。笑うと目がもつと細くなる。タツヤは明るい感じの人がいて安心したが、『仲間』という言葉が胸の中に小さな重りのように残った。

「私の本名は、まあ忘れていいけれど……黒木摩利音^{くろぎ・まりね}」

「寺野ハクア、五年生だ！」

ハクアはまるで緊張していない感じで、元気よく言った。続いて、タツヤと希も順番に名乗った。ハクアの同級生であることも話す。聡里は一步引いたところで子供たちの様子を興味深そうに見ていたが、自己紹介が終わるとまた前に出た。

「シュタインは？ 十時に来るって連絡したはずだけど」

「うん、聞してる。シュタインなら奥の部屋だよ」

ブツシュが答えた。その横でマリネは眉をひそめる。

「ねえ、聡里さん、どの子が脱走者なの？ 私、あんまり人の名前覚えられなくて」

「あたしが脱走者だ！ 寺野ハクアだ！」

聡里が言う前に、ハクア自身が堂々と大きな声で答えた。再度、聡里に聞く。

「……へえ。他の子はなんなの？」

「付き添いよ。一般人の子たち」

「派手にばれてるのね」

「仕方ないわ。シユタインには説明してあるわよ」

「……なら、いいんだけれど」

そう言うともリネは席に戻った。ふああつとあくびをして、レモンティを一口含む。もう関心はなくなったという感じた。引き継ぐように、ブツシュが奥の部屋へ行く廊下に四人を案内してくれた。

廊下の左右にはドアがいくつも並んでいた。ドアにはハート、スピード、ダイア、スピードなどトランプのマークが描かれたプレートがつけてある。何もないドアもあった。

「これは俺たちの寝室。ハクアちゃんには、あとで説明するよ」

「うん、よろしく頼む！ ティツシュ先輩」

「あはははっ、ブツシュだよ。すっごい間違え方だなあ。面白いな」

そして、突き当たりのドアには天狗の顔が書いてあった。

「これがリーダーの部屋」

三度目の数字錠がある。シユタインは本当に警戒心が強いというか、しつこいくらいだ。

「この番号は入口と同じか？」

ハクアが質問すると、ブツシュは数字を入力する手を止め、首を横に振った。

「違うよ。ここはいま十五桁」

「うっ そんなに？」

ブツシュは目を細めて苦笑いする。

「ここの数字はまだ教えられない。全員が戦い続けるための『結束の証し』なんだ」

はつきりした声で、そう答えた。

ドアが開くと、大きな事務机が見えて、正面に若い大人の男性が

座っていた。白衣を着て、頬杖をつき無言で来客たちの姿を観察している。やせ型で神経質そうな顔だが、ふさふさのパーマ頭が異様に目立つ。イスの後ろには真っ赤な巨大な天狗の面が壁に立てかけてあった。

近づく、瞳の色が青いのに気づいた。

「カラーコンタクトだ」

それが最初に発した言葉。天狗の面で聞き覚えがある、シュタインの声に間違いない。外国人ではなく日本人だった。

「問題でも？」

誰に言ったのかわからず、しかも巨大な天狗の面に圧倒されて、タツやはきよろきよろしていると、「久しぶりね、シュタイン。最近はその色なのね」と聡里が気さくに話しかけた。

「オレンジは飽きた」

シュタインが渋い顔で答えると、ぎい、と後ろで音が鳴った。ブツシュが部屋に入らず廊下に残ってドアを閉めていた。ドアの陰から笑顔で手を振っている。まったねー、と口パクで言っていた感じだった。

ドアが閉まると、自動的にロックがかかる音がした。

「聡里さん、その短い髪の少女が脱走者だな？」

シュタインはイスに座ったまま言った。年齢は聡里と近いが、少し下くらいだろうか。だが、表情を見ると、初対面からかなりイライラしている。

「おいっ とりあえず、体から拡散波長が出てる。早くこれを飲め！」

そう言って、シュタインは錠剤の入ったビニール袋を荒っぽく投げてよこした。

「えっ？」

ハクアはそれを両手でキャッチし、驚いて目を丸くする。

「キープタブレット……！ なんで?!」

「いいから早く飲め！ ここが特定されるだろうが、クソガキ！」

シュタインの怒声が飛ぶ。ハクアは急いで錠剤を飲もうとしたが、口の中が渴いてパサついていたせいで、錠剤が飲めずにむせてしまった。手で口を押え、苦しそうに咳き込む。

「ハクちゃん、大丈夫？」

希が心配して背中をさすった。

「　　ったく！　カボチ、水持ってこい！」

シュタインが隣の小部屋に向かって叫ぶ。

「えっ。あ、いま麦茶入れてるんですが……」

女の子の声が返ってきた。

「何でもいい！　早く一個持ってこい！」

すると、隣の小部屋から、麦茶の入ったコップを持った少女が飛び出して、むせているハクアに駆け寄った。少女は内側にカールしたショートボブで、腰にエプロンをしている。年齢はたぶん同じくらいだ。とにかく、ハクアは麦茶をもらい錠剤をすぐに飲み込んだ。

「あ……ありがとう……」

落ち着きを取り戻し、少女にコップを返す。少女は屈託のない笑顔で空っぽのコップを受け取った。

「えへへ、こんにちはー。あなたが新入りさん？　フォー스系なんだよね？」

「う、うん」

「あたし、加保千晶^{かほ・ちあき}って言うの。六年生だよ。カボチでいいからね！」

「　　カボチ、メンバー間の話はあとだ。どのみち、これからそれを確かめる」

シュタインが後ろから冷たく制止した。

「あ、はい………すいません」

カボチという少女は頭を下げ、そそくさと隣の小部屋に引込んだ。ハクアは少女の背中を見送り、あらためてシュタインの顔を見た。だが、白衣のシュタインは険しい顔で腕組みをしながら、聡

里をじっと睨みつけている。

「聡里さん」

「なに？」

「俺はこういう騒々しいのが大嫌いなんだ」

シュタインの一言で、ハクアは口をつぐんだ。顔に緊張の色が走る。

「知ってるわ」

聡里が返すと、シュタインはパーマ頭をぐしゃぐしゃと掻き毟った。

「だが、俺は一度ここに入れた同朋を見殺しにしたことはない」

「それも知ってる」

聡里は余裕のある笑みを浮かべて、じつくりとその言葉を聞いている。

「キープタブレットは希少品だ。それを分け与える食いぶちが増えてしまった。これは深刻な問題だ」

「承知してるわ」

「この代償は大きいぞ。俺にもそれなりの覚悟がある。そう、

バックに伝えてくれ」

「もちろんよ」

しん、とする。張りつめた空気が部屋中を包む。

そこに、トレーに人数分の麦茶を載せたカボチが、カチャカチャと音を鳴らしつつ入ってきた。トレーに集中しているが、歩き方が少し危なっかしい感じた。

「カボチ」

シュタインが呼び止める。

「はっ、はい！」

「今夜は豪勢な飯が作れるか？」

「えっ？　あ、はい！　大丈夫です！」

すると、シュタインはイスから立ち、ハクアの前まで歩み出た。

「寺野ハクア、俺の本名は秀多院相夢だ。しゅうたいん・あいむこの女との契約が続く限

り、お前を追跡隊から守ってやる」

ハクアの肩に手を置く。タツヤと希はその様子をじっと見つめていた。ハクアは、シュタインの鬼気迫る鋭い眼差しに対し、両拳を握り締め、闘志に満ちた笑顔で返した。

「うん！ あたしも戦うから！」

だが、シュタインは眉をひそめ、首をゆっくり横に振った。

「まずは力試しだ。フォース系のパフォーマンスをよく見ておきたい」

タツヤは、なぜかその言い方に少し冷たい響きを感じ取った。

シュタインの部屋の奥に別のドアがあり、また下りの階段があったが、それほど長くはない。このドアは数字錠もなく、ノブを回すとすぐに開いた。ただ、聡里、タツヤ、希の一般人三人は立ち入りを禁じられた。シュタインがリビングと呼ぶ最初の部屋に戻るよう命じたのだ。

タツヤと希がハクアについていきたいと言うと、シュタインは鬼のような形相で立ちふさがった。当然逆らえるわけもなく、意気消沈してリビングに戻っていくと、廊下の向こうからマリネとブッシュがやって来てすれ違った。タツヤは思わずブッシュを引き止めて聞いた。一番聞きやすそうだったからだ。

「あの……何をするんですか？」

ブッシュはすごく困った顔をする。

「えっと、うーん、話していいのかな？」

隣りのマリネに聞く。

「えっ、私に聞くの？ ダメじゃないの？」

「そうだよなあ」

ブッシュは頷くと、スッキリした笑顔でタツヤの肩を叩いた。

「というわけで、ごめんね！ 秘密！」

「えっ、あっ……」

組織メンバーの二人は足早にシュタインの部屋へ入って行った。

タツヤは少しでも何とか聞きたいと思ったが、聡里もこれは仕方ないという感じで溜め息をつき、タツヤの背中をぐいっと押した。

リビングに着くと、テーブルには三人分の麦茶と水ようかんが置いてあった。カボチが持って来てくれたのだ。だが、カボチもそれを終えると、軽やかに手を振って、シュタインの部屋へ小走りに向かってしまった。

「じゃ、『ゆっくりー』」

おそらく同じ理由だと思った。シュタインの部屋のロックが下りる音が小さく聞こえる。あの白衣姿を思い出すと、まるでこれからハクアの手術が始まるかのように感じて、タツヤの胸に不安と寂しさが湧き出し、止まらなくなっていた。

ハクアを連れてさらなる地下室に来たシュタインは、階段の終着にある鉄のドアを押し開けた。真つ暗な空間だった。そこから流れてくるひんやりした空気がゆるやかに体を包む。シュタインは右手で壁を触った。

「光れ」

暗闇に声が反響した。そして、その触れたところから壁がパアツと光を放ちはじめ、光る部分はどんどん広がって、目の前に岩肌のような天然ドームが見えてきた。やがて、岩の壁全体と地面全体が光り、空洞の広さがよく分かるようになった。ハクアの知っている広さで言えば、学校の体育館の半分くらいだ。

ハクアはシュタインの右手を観察する。触れている岩壁には電気のスィッチのようなものは見当たらない。

「あれ？ いま、電気つけたのか？」

「ここまで電線は引いてない。気にするな。あとで説明してやる」
シュタインは右手を壁に触れたまま、今度は壁に向かって話しかけた。

「おい、マリネ、もう着くか？」

壁が返事をするわけがない。ハクアは後ろにぼうつと立って不思議そうに見ていた。

「なるほど、そうか」

シュタインが壁と会話している。ハクアは天然ドームの天井を見上げた。

ここは鍾乳洞というほどではないものの、天井には岩のでっぱりがたくさんある。ただ、天井のでっぱりを削ったような痕跡もいくつかあった。一方、地面は平らで見通しはいい。

「ハクア、防空壕つてのを知ってるか？」

「ボウクウゴウ？」

「そうだ。戦争中に避難するために使われた場所だ。たぶんここはそれだ。だから地面が座りやすいように土で固めて平らにしてある」
「戦争……」

シュタインは一旦黙り、壁のそばから離れ、岩石ドームの中央に向かって歩いた。ハクアも後ろについて行く。足下は多少ごつごつするが、確かに歩きにくい。

「さつき、お前は『自分も戦う』と言ったな」

「うん！ そのつもりなんだ！」

シュタインは立ち止まる。白衣の後ろ姿を見ると、少し恐怖を覚えた。

「いいか、ハクア。もしそれを俺に誓うなら、最後の最後までやるつもりで言え」

ハクアはこの組織に入る覚悟を試されているのだと直感した。急に悔しさが込み上げて、歯を食いしばる。

「当たり前だ！ あたしだってさとりんから聞いている！ 最初からそのつもりだ！」

すると、シュタインは高笑いして振り向き、冷酷な笑みをにんまりと浮かべた。

「よく言った。じゃあ、それを貫く厳しさを思い知らせてやろう」

ドアが開き、ブツシュとマリネが揃って岩石ドームに入ってきた。シュタインはドームの中央に立ち、その到着を待っていた。そばには緊張した顔つきのハクアがいる。

「マリネ、持ってきたか？」

シュタインの声がドーム内に反響する。

「んもっ、心配性ねえ。何年の付き合い？」

「……お前はまだ二年も経ってないだろ」
シュタインは無表情で答えた。

「うー、ちょっとカワイイ台詞を言ってみただけよ」

「カワイイ台詞か？」

横からブツシュが笑って口を出す。マリネは無視して、ドームの中央まで歩み出た。

ブツシュは壁際に残ったままだ。背後でガチャツとドアが開き、少し息を切らせたカボチが顔を出した。階段を転びそうになりながら走って降りてきたのだ。

「始まる？」

「おう、始まるぞ」

カボチはブツシュの隣りに並んで呼吸を整えた。

マリネはハクアと正面から向き合うように立った。シュタインは少し離れて立つ。

「さて、これからハクアの『力試し』をする。相手はマリネにやつてもらおう」

「よろしくね、ハクア」

「ハイツ、よろしくお願いします！」

軽い雰囲気のマリネと、いきなり腰を落として構えるハクアが好対照だ。

「ルールだが、この空間にあるものは何でも使っていい。ただし、審判の俺は手を貸さない。あと、審判の俺が『勝負あり』と言ったら終わりだ」

シュタインは、ハクアとマリネの顔を交互に見た。両者とも気合い十分の顔つきだ。

「以上。では、はじめてくれ」

マリネは相手が近接戦闘型だと知っているので、まずは後ろに下がった。

一方、ハクアは追いかけて周囲を見渡した。何でも使っていいと言っても、地面に落ちている石くらいしかない。それに、マリネの超能力もわからない。最初から距離を取ったということは苦手なエ

リア系か　と警戒し、少し考えてみたが、作戦は何も思い浮かばなかった。やはり突撃するしかない、と意を決めて踏み出した。

マリネは腰に差す二本の日傘をさっと抜いた。右手に黒い傘、左手に白い傘という戦闘のスタイルだ。黒傘はやや重く、白傘は軽い。やはりハクアは無策でスタートを切ってきた。足は速い。マリネはハクアの走ってくる軌道を迎え撃つべく傘を構えた。

ハクアは白くて見えやすい傘の側から迫った。マリネは予想通り白傘を振ってハクアの足止めを狙ってきた。持ち前の反射神経でかわす。体の横を白傘の影が流れると、ハクアは一気に背後に回り、低いタツクルで脚力を奪いにかかった。

だが、マリネは黒傘で地面に突き立て、それを軸にしてひょいっと跳び上がった。跳んだというよりは、ハクアを踏み台にしたと言うべきか。ハクアは後頭部にスコンと軽いキックを受け、思い切りつんのめる。だが、ハクアもここは踏ん張った。

急いで切り返すと、いきなり目の前が白くなった。敵が白傘を開いたのだ。それがどうした！　と傘を左手でなぎ払ってふところに右手を伸ばそうとした。だが、そこにもうマリネの姿はない。白傘も宙へ逃げる。一瞬、混乱する。

マリネはくりりと弧を描いてハクアの頭上を跳んでいた。黒傘でハクアの背中をひと突きする。傘の先端には両方とも『力試し』用の丸いゴムキャップが付いていた。先程シュタインに持ってきたかと聞かれたのはこれだった。ピンポン玉ほどの大きさで、鋭さはないが、ハクアの体に十分な衝撃を与えた。

ズザアッと地面に突っ伏すハクア。背中の中を突かれて、一瞬、呼吸が止まった。

マリネは、すかさずハクアの足首をつかみ、「踊りなさい」と命じた。そして、また後ろに下がり距離を取る。白傘を閉じるマリネの顔に、フツと勝ち誇った笑みが浮かんだ。

壁際ではカボチとブッシュが観戦している。

「なんか闘牛士みたい……」

「マリネさん、楽しそうだなあ」

シユタインは難しい顔つきで、ハクアの動きをじっと観察していた。

一方、肝心のハクアは地面から起き上がれずにいた。さっき足首を触られ、マリネが超能力を発動したのは分かった。けれど、何をされたのか把握できない。ひとつ言えるのは、体が思うように動かせないのだ。起きようすると体はもっと伏せてしまう。指を開こうとすると拳を握ってしまう。体の動きが意志とまったく逆になっってしまうのだ。

ハクアは生まれたての仔馬みたいに動きが鈍くなった。おでこにはクラブのマークが出ている。明らかに超能力を受けたのだ。マリネはそれを見て、白黒二本の傘を重ねて槍状に構えた。ぐつと腰を落とす。

そのとき、ハクアの上体がようやく起きてきた。やっと仕組みに気づいたらしい。だが、もはやマリネにとって格好の的ではなかった。

「キャップつきに感謝しなさい！」

二本の日傘が高速で突き出され、一閃でハクアの左肩を直撃する。強烈な一撃を食らい、ハクアは後ろに吹っ飛んだ。

ハクアの背中中は土まみれになった。頭がグルグルする。痛みをこらえながら必死で考える。意志と逆に体が動くなら、後ろに寝ようとすれば起きられるはず。後ろに寝ようとする。寝ようとする。視界が変化する。目の前によくやくマリネの姿を見つけた。

「……うぐぐぐ……ぐううっ」

「あら、ちよつと順応してきたのね？ さっきも胸を狙ったのに外したわ」

ハクアは錆びたロボットみたいに何とか起き上がる。ただ、やっぱり思うように動けない。体の動きは要領をつかんできたが、歩こうとすると足の意識があべこべで、フラフラとよろけた。

「うふふっ、糸の切れた人形ね」

マリネは左手の白傘を前後逆に持ち替え、フックを前に向けた。軽快に踏み込み、白傘のフックでハクアの上着の襟を引っかけ、前後に体を揺さぶる。ハクアは抵抗しようとしても頭の処理が追いつかず、完全にパニック状態になった。

ふらついたところに、マリネは右手の黒傘を引いて構えた。

「黒ちゃんは重いわよ！ お腹に力入れてー！」

力を入れようとすると、抜けてしまった。当たり前だった。言葉に踊らされたのだ。

襟を引っ張られたまま、ズドツと黒傘の重い一撃が繰り出され、ハクアの脇腹をかすめた。マリネもさすがに鬼ではない。これはもうわざと外したのだ。

「……バカね。ダメよ、そこは力を抜かないと」

マリネは白傘のフックで、ハクアを地面に引き倒した。ハクアは再度地面に転がった。

「勝負ありだ」

シユタインは高らかに終わりを告げた。

マリネは息をついて、張りつめた神経を一気にほぐした。同時に、ブッシュとカボチも息をついた。シユタインは首のこりをほぐしつつ、戦った二人に向かって歩いていく。

終わった感覚がないのはハクアだけだった。

「……うごっ……ぐっぐうっ！」

マリネは、足元でハクアが悔しさのあまり泣き出したのかと思った。だが、そうではなかった。ハクアの目は野獣のように爛々と燃え、まだ闘志むき出したのだ。必死で自分の体に動けと念じているのだ。

「うごげ うご、うがつ、うがあああっっ！！」

服も泥だらけになり、まるで亡霊みたいに右手が這い寄ってきた。ハクアはパニック状態の中、明らかにこの足を狙っている。まさか脚力を奪う気か。マリネは収めかけた日傘を構え、ハクアの右手に

突き立てた。力を入れず、動きを止めるだけだ。残酷だとは思うが、これはもう仕方ない。

「むぐっ！ あはあっっ！」

ハクアは苦しそうに叫んだ。右手を止められると、今度は左手が懸命に這い寄ってきた。今日から仲間になるよしみと思っただ、こうなるとただのお荷物にしか見えない。頭が瞬間的に沸騰した。

「しつこいわよ！」

蹴ろうとする。

「マリネ、止める！」

シュタインが叫んだ。はっと我に返る。頭に血が昇り、危うく最悪なことをするとこだった。

マリネは冷静になり、回り込んで左手でハクアの体に触れ、発動させたパルス系超能力『フル・ダンス』を解除した。これは、ハクアが戦いの中で感づいた通り、動かそうとする意志と逆方向に体を動かしてしまう能力である。単純な肉弾戦闘派ほどこの超能力は相性がいい。

元に戻すと、シュタインと目が合った。

「手こずったら第二段階で仕留めようと思ったけど、第一段階で十分だったわね」

マリネは日傘の汚れを払い、レースの袋に直した。ここからはリーダーに任せることにした。

その間に、ハクアは通常の運動感覚になったことに気づき、やっとなパニック状態から覚めた。だが、すぐには立ち上がらず、地面にしゃがみこみ、ぜいぜいと荒い呼吸を漏らしていた。疲れやダメージよりも、まったく歯が立たなかったショックが大きいのは誰の目にも明らかだった。

シュタインは少し残念そうにハクアを見つめた。

「まあ、適応能力がいい　　くらいか。何も考えず突進するようではダメだ」

「……はあ、はあ……」

正直、ハクアは自分の戦い方を振り返る余裕もなかった。

「この空間にあるものを使っている、というのも通じなかったみたいだな」

「確かになあ。俺はてっきりこっちに走ってくると思ってたよ」

そう言ってブッシュが苦笑いしながら歩いてくる。カボチも一緒だった。

カボチは手にハンカチを持っている。失意に沈むハクアのそばに駆け寄ると、ハンカチで服の泥を払った。

「マリねえは迎撃が得意なんだもの。こんなに汚れてかわいそう。お風呂入れてあげないと……」

「そうね」

マリネは、ハクアの経験不足が勝因みたいに言われたのが不満で唇をとがらせた。

「レンタルフォースってこんなもんなのね。ちょっと拍子抜けだけど、可愛いからいいか」

だが、シュタインは険しい顔をした。

「これで力を測るな。本当に厄介なのは、銃を持ったフォース系だ」
忠告を伝えながら、ハクアを抱き起こすカボチを見た。

シュタインは冷静に、ハクアを含めた顔ぶれを見渡して考える。
追跡隊に見えられたハクアをかくまうということは、タブレットで拡散波長を抑えたところで、いつかここは攻撃を受ける可能性が高い。自分自身を含めて、もともと性格が好戦的でもなく、破壊力のある能力を全員が持っているわけではない。

だが、何としてもハクアを守らなければ、シュタインは重要な後ろ盾を失うことになる。ハクア的能力はわかった。問題はこの猪突猛進の性格だ。うまく転ぶときもあるが、極めて危険な場合もある。運や相性次第というのは論理的なシュタインが最も嫌うことだった。
「シュタインさん、お願いです」

慣れない声に呼ばれて下を向く。ハクアだ。そのまっすぐな眼差しには胸を締めつけるほどの執念が宿っていた。

ハクアはいきなりシュタインの白衣をつかみ、顔を埋めた。

「シュタインさん、お願いです、あたし、強くなりたい……」

体が小刻みに震えている。これは泣いているのではない。悔しくて顔が上げられないのだ。おそらく、このままの気持ちでは友人たちのもとへ笑顔で戻ることもできないだろう。自分も戦力になるといった言葉を、絶対に取り下げたくないのだろう。

シュタインは本当に強情で一本気な少女を見て、一瞬、過去の残酷な思い出が蘇ったが、鉄の理性でそれを抑えつけた。

「お前をかくまうのは契約だが、鍛えるのは契約外だ」

白衣にしがみつくハクアの両手に異様なほど強い力がこもった。シュタインは困って目を閉じた。

「と、言いたいところだが、あとで相談に乗ってやる」

ハクアがバツと顔を上げる。目がギラギラと輝いて、いま言ったことを早速後悔したい気分になった。まわりの三人も意外そうな顔をしている。これまでの接し方と比べれば、それも当然だろう。

「まあ、やさしいこと」

マリネはじとつとした流し目でシュタインをひやかした。

「俺もそれなりの覚悟をした、と言っただろ」

懸命な願いに折れたことは否定しない。だが、これからの戦いに向けて、やはりフォース系のパフォーマンスは徹底的に研究しておきたい、と考えたのもまた事実だった。

シュタインの部屋から、『ブレイクチェイサー』の面々が出てきた。白衣のシュタインを先頭にして、ラガーシャツのブツシュ、ゴシック服のマリネ、エプロン姿のカボチと続く。最後にハクアが出てきたが、希に借りている水色ワンピースは泥だらけに汚れていた。ハクアの表情は元気を失い、少し目を赤くしている。

聡里、タツヤ、希の待つリビングに入ってくると、急に狭苦しい感じになった。タツヤは真っ先に立ち上がる。

「ハクア！」

駆け寄ろうとすると、シュタインの白衣がさえぎった。

「騒がしいな。要件が済むまで静かにしている」

タツヤは一瞬立ち止まったが、構わず駆け出し、ハクアのそばに行った。

「ハクア、どうしてこんなに汚れてるんだ！」

「ああ、うん……あんな」

すると、今度はマリネがハクアの前に立ちふさがった。不機嫌な猫のような冷めた視線を向ける。

「お掃除よ、お掃除」

「えっ うそだ！」

タツヤが感情的になって叫ぶと、横からブツシュが肩をポンポンと叩いた。何も言わなかったが、肩をつかむ手と、高いところから見下ろす細い目には少し威圧感が込められていた。タツヤはぐっと息を飲む。

聡里も立ち上がり、用意してきた封筒から契約書を取り出した。

「シュタイン、これに署名をくれる？」

「これで 四人目か」

そう言って契約書を受け取ると、さっと一読した。

「おそらくキーブタブレットはこの人数が限界だ。これが最後だ」

「……そんなに、いないわよ。もう」

「まあ、そうだな」

シュタインは深い溜め息を漏らした。何が言いたかったのか、『ブレイクチェイサー』のメンバーと聡里は察したが、タツヤと希は戸惑うような表情をしていた。

「さとりん」

突然、ハクアが一步前に出る。

「どうしたの？」

「本当にこれで　心配ないんだな？」

「ええ、約束するわ」

聡里はそばに寄り、小さな妹を落ち着かせるような感じで髪を撫でた。だが、ハクアは浮かない顔のままだった。そして懇願するように聡里の目を見る。

「二人とは、話せるようにならないか？」

すると、聡里はハツという表情を見せ、振り返った。

「それは……シュタイン、どうするの？」

「悪いが、ここに電話はない。一般回線を使うわけにはいかない」

「別の方法はないの？　また何か条件提示が必要？」

「いや　それは要求しない。そうだな。明日から、俺のパスチェッカーを使って午後五時ちょうど一日五分間ハクアとしゃべれるようにしてやる。これを持って帰れ」

シュタインはそう言うて壁にかかっていた小さな天狗の面をひとつ外してテーブルに置いた。聡里は唇をとがらせる。

「五分か……」

「うるさいな、それなら十分だ。それ以上は勘弁してくれ」

「じゃあ、それでこちらはOKよ」

そして、シュタインはテーブルに契約書を置くと、末尾の署名欄にサインをした。ニックネームでなく本名の秀多院相夢の名を書き、聡里に返す。

「これで済んだな。あとはこっちの問題だ」

聡里は受け取り、サインを確かめた。

「じゃあ、タツヤくん、希ちゃん、私たちは帰りましょう」

そのとき、タツヤはハクアの手をつかんで、じっと目を見た。

「ハクアはこれからどうなるんだ？」

「たつつん……」

ハクアは答えに詰まった。それをかばうように、聡里が穏やかな口調で話しかけた。

「タツヤくん、私から話すわ。ハクタローも十分わかってないしね。今日からハクタローは『ブレイクチェイサー』の一員になるの。つまり、シュタインが保護者になるわけ。ここなら追跡隊に突然襲われる可能性も低いし、メテオドロップの拡散波長を抑えるキープタレットもあるからね」

「ハクアは、今日からここに住むの？」

「要するに　そうね。ハクタローがあの家に住みつづけて安全だと思う？」

「……思わないけど」

「そういうこと。荷物は私が車で運ぶわ」

「僕たちは？」

「　もうここには来られないわ」

タツヤはこの言葉によって胸の中にある何かが爆発した。

「えっ?!　ねえ、何で?!」

「……あれだけ大変な入り方を見たでしょ?　ここは秘密の場所なのよ」

聡里はひるんだ。予想では素直に理解して帰ると思っていたが、まったく違った。ハクアが何とか話せるように、と懇願してきた理由がわかった。そして、ハクアをこの組織に預けるところに立ち会わせてあげようと思ったことを少し後悔した。

シュタインが横から割って入る。他のメンバーはじっと様子を見ている。

「聡里さん、半端な言い方は意味がない。いいか、少年、ここは俺たちのアジトだ。ここには俺のルールがある。はつきり言うぞ。お前たち一般人は出入り禁止だ。お前らが帰ったら、河川敷の看板の解錠方法も変える」

だが、タツヤは食い下がった。シュタインの白衣に飛びつく。

「僕だって守りたいんだ！ ハクアと約束したんだ！」

しかし、その一言が今度はシュタインの逆鱗に触れた。タツヤの襟をつかみ、ぐいっと強く引き上げる。

「ここが安全でないとでも思うのか？！ この人数を誰が守っているかわかってるのか？！ お前に追跡隊を倒す力があるか？！」

「僕らはハクアの応援団なんだ！ 会えないなんておかしいよ！」
襟を締められ息が苦しくて、がむしゃらに相手の腕を振りほどこうとする。けれども、シュタインの腕は太く頑丈で、ビクともしなかった。

「ちよつと、落ち着きなさい！」

「朱鳥くん！ やめて！」

聡里と希はタツヤを慌ててなだめに入った。だが、シュタインは聡里を押しつけ、タツヤの体を片手で持ち上げ、壁際まで力いっぱい投げ飛ばした。

「ふざけるな！ 本気で同じ生き方が望めると思つか？！ 俺たちがどんな思いで安全と自由を手に行けるかわかるか？！ 甘く見るな、クソガキが！」

目の前でタツヤが突き飛ばされるのを、ハクアは呆然と見つめていた。一般人の友達と同じ生き方なんか望めない。シュタインが放った一言が、覚悟を決めた心にハンマーみたいに重い一撃を与えた。安全も自由も失いたくはない。そして追跡隊に勝つための力も仲間も欲しい。友達の二人を巻き込みたくない。二人の安全と自由も、自分がここに入れば大丈夫だと考えた。きっとそれは間違っていない。けれども、タツヤは床に転び、それでも立ち上がるうとしていた。 「ハクちゃん！ どうして黙ってるの！」

希が叫ぶ。ハクアは揺れていた意識が一気に冴えた。希が悲鳴のように続ける。

「朱鳥くんは、誰のために、あんなこと言ってるの?!」

タツヤが自分に会いたいと、これほど強く願っている。止めなくてはならないけれど、嬉しくて嬉しくて体中が震えて動かなかった。胸の奥から温かい何かがこみ上げてくる。それが目元にじわじわと溜まりはじめたのがわかる。

だけど、ここは他の誰でもないハクアが自分で制するべき場面だった。幸せな気持ちを噛み殺し、気を奮い立たせる。

「たつつん! 待って!」

タツヤは振り向いた。

「あたしの考えを言うから、待って」

「ハクタロー、あなた、責任があるのよ」

即座に、聡里が毅然とした態度で釘を刺した。強い眼差し。

子供だから言わなかったけど、無理を望むなら、代償は必要なのよ。

あのときと同じ。聡里がハクアに甘いことを言ったことなんか一度もない。自分でできるから、大丈夫だから、そう言っているいろいろな安全策を断ってきたのはハクア自身なのだ。でも、だからこそタツヤと希に会えたし、大切な約束を交わすことができた。

自由を与えてくれた二人への感謝の思いはあふれて止まらない。

けれど、もう正直に言わないとダメなのだ。

「たつつん、これは約束を破ったことにならないよ。あたし、この町に残れるだけでも嬉しいんだ。たつつんと話せる距離で暮らせるだけでも嬉しいんだ」

だが、当然タツヤはまったく納得のいかない顔を見せた。

「……お前、なに言ってるんだ。こんなの全然違うじゃないか……」

「そうじゃない。あたしはここで追跡隊を迎え撃つ」

「意味がわかんないよ。応援団は、僕らじゃないのか?」

「あたしが一番つらいのは、二人の前からいきなり消えてしまうこ

となんだ。あたしは、ここにいる。間違はなく、ここにいる。近くで、安全な場所にいれば　ちゃんと話もできる」

つまり、それは事実上の解散宣告だった。

聡里は三人の子供たちの様子を見つめる。事情は全部ハクアから聞いていた。希が作るうと言った小さな輪。それは、ハクアにとって唯一本音を打ち明けられた小さな世界。訓練学校の輪から一度逃げ出したハクアからすれば、新しい未来はここから生まれると思えたことだろう。何でも隠さず話していいなんて、絶対に秘密を守ってくれるなんて、嘘みたいな驚きと感動だったに違いない。

同じ場所と、近い場所　隔たりのないことと、隔たりのあること　子供にとって、これは決定的な差だ。だが、いまハクアは自分で苦渋の選択をした。自力で抗うことへのこだわりを捨て、覆いくる暗闇を打ち払う一筋の光明に頼ったのだ。

ハクアだけを見れば大きな成長だが、三人の友情にとっては大きな区切りだった。

タツヤは少し静かになった。希もすっかり呆然としてしまっている。

聡里は、これ以上ハクアに話し続けさせるのは残酷だと感じた。

「……そうなの。この町にハクアを住ませたのは、この組織があるから。いざというとき頼れるからよ」

ハクアをかばう空気を察して、『ブレイクチェイサー』のメンバーも口を挟んだ。最初に口を開いたのは、三人と年齢が一番近いカボチだ。

「そうそう、毎日しゃべれるならいいじゃない。シュタインさんが一日十分ってすごい大サービスだよ！」

それから、マリネがハクアに腕をからませ、薄ら笑みを浮かべる。

「ハクア、あたしがあの少年を忘れさせてあげよっか」
横からブッシュが言いとがめる。

「マリネ、余計なことを言うな。相手は思春期だぞ」

「ちよつとお。あたしもよ」

マリネがふくれっ面をすると、カボチも一緒にクスクスと笑った。場の雰囲気は何となく歪んだ感じにゆるんだ。ハクアは、とりあえずマリネの腕のからみをほどいて、目元を少し指先でぬぐうと、まっすぐタツヤに向き合った。

「大丈夫、全部終わったら帰るよ」

それは　曇りのない声だった。

「……ということだ」

シュタインが素早くまとめに入る。怒りは少し収まっていた。

「マリネ、カボチ、ハクアを風呂に入れてやれ」

「はい」

二人が揃って愛らしく答える。シュタインが普段そんな気遣いをするわけがない。要するにもう騒がしいからハクアを奥へ引っ込めろ、というシュタインの命令だと受け取り、マリネはハクアの手を引き、カボチは背中を押し、バスルームへ連れて行こうとした。

ハクアも鈍感ではない。幕を下ろしたのは自分だ。このまま別れの顔を見せないほうが心は苦しくない。下唇を噛むハクアの顔を、マリネが愛おしげに覗き込む。

「ねえ、ハクア、一緒に入る？」

「マリねえ、三人は狭いよお」

「はっ？　じゃあ、あんたは外だわ」

ハクアは、タツヤの家に泊まり、希や由果と入った楽しい風呂を思い出す。それだけじゃない、次々と頭にたくさんの思い出が湧き出してくる。初めてメテオドロップのことを打ち明けた日の夕焼け。二人乗り自転車で必死に追いかけたこと。一緒に乗った夜のバス。広場から見上げた最高の星空。何とか押さえつけようと、拳を握りしめた。

「ハクア！　全部終わるのっていつだよ！」

タツヤの声が背中に届いた。ハクアは固く目をつぶる。振り返ったらダメだ。

「いつ終わるかだと　？　さつきから聞いてると、少年、君は物事を暗く考えすぎだ。世界に、永遠の別れというのは命の終わり以外にないだろう？　離れて終わりなら、それは君の精神力の問題だ」シュタインが妙なことを言う。ブツシュは不穏な気配を嗅ぎ取った。一旦収まっていたシュタインの顔がまた修羅のように険しくなっていく。だが、タツヤは臆さず言い返した。

「僕は何もおかしいことを言っていない！　暗いのは　ハクア、お前の顔だよっ！」

タツヤは廊下の奥まで届くよう力強く叫んだ。脱衣所のドアノブを持つマリネの手が一瞬止まる。ハクアは表情を隠した。マリネは溜め息をつき、脱衣所の中に押し込んだ。

一方、リビングではシュタインがタツヤの前に立ち、肩に右手を置いた。

「少年……仕方ない、これも教育だ。もっと世界を明るく見えるようにしてやるう」

「はっ？」

タツヤは顔を上げる。

「待て、シュタイン！」

咄嗟にブツシュがシュタインの背後に飛びつき、右手を引き離れた。

その勢いでタツヤは後ろによるめいた。ブツシュはすかさずタツヤの腕を取り、引っ張ってドアまで走った。タツヤは足がもつれながらわめき散らす。

「引っ張るなよ！　やめてよ！」

「うるせえな、お前が意地を張れば、あの子もお前もみんな犠牲になるんだよ！」

ブツシュは大声で叱りつけた。

「やめてよ！　やめてったら！」

「歯向かう相手を間違えるな、バカ野郎ッ！」

そのままドアを開け、階段へと放り出した。すぐにドアを閉める。

数字錠でオートロックされる音が鳴った。

「朱鳥くん！」

希がドアのそばに駆け寄った。内側から開けたいと思ったのだろう。そこにブツシュが立ちふさがる。中学生の大きな体は頑として動かなかった。ドアの外ではタツヤが必死にドアを叩き、「開けてよ！開けてよ！」と叫びはじめた。

「ブツシュ、さつき止めてくれて助かった。猛烈に気分が悪い。すまない、あとは任せた」

シュタインは白衣を翻し、自分の部屋のほうへ消えた。数字錠のドアの外からは、聡里に番号を聞くタツヤの声が続いている。

「お願い、入れてあげて……」

希は氣力が尽きて、その場にへたりこんだ。

「聡里さん」

ブツシュは鋭い声で聡里を呼んだ。

「これさ、俺の能力を使ったら全部片付けけど、そんなことしたくない。この二人をちゃんと連れて帰ってくれ」

「あ、えっ」

聡里は気圧される。ブツシュは大人への怒りをあらわにした。

「連れてきたあんたの責任だ！」

「そうね。ごめんなさい」

聡里は頷き、希を抱き起こした。希は感情をむき出しにして、首を横に振る。ハクア応援団はハクア自らが幕を下ろし、頼みのタツヤは隔たりの外へ追い出されたのだ。もはや何を訴えようにも希だけでは無力だった。聡里は希の肩を抱きながら、息を整える。

「朱鳥くん、希ちゃん、帰りましょう。ハクタローの言葉を信じられないの？」

ドアを叩く手が止まる。

「お願い、私の忠告を聞いて。これ以上ワガママ言えば、シュタインはあなたたちとの関係を断つわ。話すこともできなくなるわよ。一番悲しむのは誰？あなたたちとの再会を待つあの子じゃないの

？」

そして、リビングはようやく静かになった。

地上に出ると、聡里は裾の汚れを払った。タツヤもそうだが、希はもつとひどく意気消沈してしまい、階段を上がる足取りも重く、タツヤは手をつないで地上まで戻ってきた。天狗の面は希が胸に抱えて持ってきた。

河川敷には、聡里の車と三人の自転車がある。秘密の地下世界から追い出されたわけだが、もう二度と入れないと思うと、ハクアを残してきたことへの強い後悔の思いがタツヤの心を霧のように覆った。それなのに、聡里は母親みたいに二人の頭をやさしく撫でる。「あなたたちも危険なのはわかるでしょ？ いまはハクタローとあなたたちを離れさせるしかないの」

希はこくと頷いた。タツヤも一応合わせた。

「じゃあ、私は仕事があるから帰るね。帰り道、気をつけてね」

「……ハクアの自転車は？」

「心配ないわ。ちゃんと保管しておくから」

聡里はにこやかに手を振り、車に乗って去った。

残された二人は、とりあえず自転車を押しながら、河川敷の夏草を揺らす川風に吹かれて歩いていった。すぐ自転車に乗る気分にはなれなかったのだ。歩こうと言ったのはタツヤのほうだった。

「月本さん、これでいいと思う……？」

「私もさびしいよ」

「そうだよな！ 頑張って頼めば何とかかなると思うんだ。聡里さんをお願いしようよ」

だが、希は沈んだ顔のまま、首を横に振った。

「でも、大人に頼ろうと言ったのは私たちだもん……ハクちゃんが言ったのは間違ってるよ」

タツヤは希の答えに驚いた。

たつつん、これは約束を破ったことにならないよ。

あの言葉はもちろん嘘じゃない。だけど、タツヤは言葉じゃなく顔をじっと見たのだ。さびしさを我慢している、あの悲しい目。ハクアは約束を破ったと内心は思っている。タツヤはそれがわかった。本当は離れられない、自分たちがそばにいるからハクアは楽しい生活を送ることができる。そう信じるだけの思い出や誓いがあるはずだった。

一方、希の態度は、隔たりができた瞬間からあきらめに傾き、それをタツヤにも納得してもらおうとしているように見えた。ブッシュが最後に投げかけた、意地を張ればみんな犠牲になる、という説得は確実に希の心に影を落としていたのである。あれはタツヤにも聞こえていたわけだが、ブッシュの迫力と真剣さを肌で感じてしまった。つまり、ドアの中と外の違いでもあった。

タツヤは希の態度に腹が立ち、その場で足を止めた。希も止まる。

「あれがハクアの本心なわけないよ！」

「そんな……ハクちゃんは私たちに嘘なんかつかないよ……」

希の顔には明らかにタツヤへの怯えが浮かんでいた。歯向かう相手が違う。ブッシュの言ったことが再び希の胸をとらえる。希がいままでずっと頼りにしていたタツヤのことを疑ってしまったのはこれが初めてだった。

「そうだよ！ ハクアもあいつらもみんな正しいよ。間違ってるのは僕なんだ！」

「うつん……そんなこと言っていないって」

「月本さんまで僕をハクアから離そうとするんだな」

「やめてよ！ 違うったら！」

タツヤは自転車のカゴに入れた天狗の面を見ると、ふつふつと悔しさや憎らしさが込みあげてきた。

「これ、あげるよ。声なんか聞いたら、我慢できなくなる」

天狗の面を渡す。それは希だって同じだ。話したら会いたくなるに決まってる。けれど、ハクアが話したがっているのに嫌がるなん

て絶対できるわけない。ハクアのためにと思ってたって持ってきたのに、どうしてそれを渡すのか。希もハンドルを握る手が震えた。

「待ってよ！ ハクちゃんが聞きたいのは朱鳥くんの声じゃないの？！」

だが、そのとき逆にあきらめ顔をしたのはタツヤのほうだった。

「……僕も暗く考えないようにするよ。それを持ってるよ、とにかくつらいんだ」

それはタツヤの隠せない本心だった。

「なに言ってるの？！ ふざけないでよ、応援団じゃないの？！」

ただ、希もさっきまで同じ顔をしていたわけで、一方が弱音を吐けば一方が怒りつける、どうにもならない状態だった。そして、タツヤにもまた譲りたくない意地があった。

「全部終わるまで大丈夫って言ったのはハクアだ！ そんな応援団に意味があるのかな？ 月本さんはハクアを正しいって言ったけど、ほんとにそう？ ちゃんと本音を言えよ！ 僕はこんなの許せないよ！」

「……うっ、うっ、うわあああ……！」

ずっと堪えていた涙がいきなりあふれ出し、希はとうとう声を上げて泣き出した。

希を泣かせたのは、タツヤはこれが初めてだった。高ぶった感情のせいでこれ以上言葉が出てこない。小さい頃から仲が良くて、希が何かで涙を浮かべる度に、いつも味方になってなだめてきたタツヤだが、自分が責めたことでこうなると完全に困惑してしまい、いても立つてもいられなくなった。

「泣いたって仕方ないじゃないか！ 我慢しろよ！」

真っ赤な顔で言い捨てると、天狗の面を希のカゴに入れ、力いっぱい自転車漕ぎ出した。追いかけてくるかと思っすぐ振り返ったが、希はその場で泣いていた。けれど、もう戻ることはできなかった。もう何が何だかわからなくて、とにかく身を裂かれそうな苦しさから逃げ出したかった。

それを、天狗の面を通じてパスチェッカーで聞いていたのはシュタインだった。自分の部屋でイスに座り、沈痛な面持ちでコーヒーを飲んでいる。シュタインは夏でもホットコーヒーである。ブラックでしか飲まない。

部屋にはブツシュだけがいた。ただ、パスチェッカーで話が聞こえるのは能力者のシュタインの耳だけだ。ブツシュは追い出した後味の悪さを紛らわすために、シュタインの部屋に来ていた。

シュタインは向こう側に声が出ないように、パスチェッカーの能力を解除した。

「まあ　とりあえず、ヒーロー気取りは帰ったようだ」
目を閉じたまま、低い声でつぶやく。ブツシュは腕組みをして溜め息をついた。

「少し……　かわいそうだな」

ここに集まったメンバーには、みんなあれだけ心配してくれる友達がいなかった。ブツシュも能力が覚醒したあとは、ずっと普通の友達には秘密にしていたことを思い返す。ここにかくまわれるまでの話だ。本当の意味で運命を理解し、一緒に生き方を考えてくれる仲間、ここで初めて会ったのだ。

だから、ハクアを必死に引き止めようとしたタツヤたちに対して、冷たく、あるいは厳しく言ったのはどこか底知れない羨ましさがあったのは否定できない。

「そう思うか？」

しかし、シュタインは顔色ひとつ変えていなかった。

「お前は　甘さで消息を絶った同朋にそれが言えるか？」

その通りだった。リーダーの非情さがあるからこそ、この安全が守られているのだ。いや、それでも多少は同情する気持ちがあつたから天狗の面を渡したのだと思うが、そうさせたのは二人を連れてきた聡里の思いやりだろう。こういうとき、ブツシュはシュタ

インの真意が見えなかった。

「ははは、同意を求められても……つらいな」

「いや、お前は副リーダーなんだ。いざと言うときは判断してくれよ」

「恐いこと言っなよ」

ブッシュは苦笑いしたが、シュタインは複雑な顔つきで宙を見つめるだけだった。

バスルームから少女三人が出てくると、リビングは一気に賑やかになった。カボチは鼻歌を歌いながら冷蔵庫のジュースを取りに行き、マリネはついでにアイスレモンティを頼んだ。真ん中にいるハクアはリビングに誰もいないのを見て、ひどく残念そうな顔をした。「あ、たつつんとのぞみんはもう帰ったのか……」

「みたいね」

マリネはにこやかに答えた。バスルームではシャワーの音であまりリビングの物音は聞こえなかった。たぶん、あの様子だとハクアの友達たちは帰り際に粘っただろう。駄々をこねて暴れたかもしれない。ただ、最終的には聡里が説得して連れて帰ったと想像できた。それと、もうひとつ対応策があった。シュタインから、ネットワーク系第二段階のジャミング・バードという能力をバスルームに発動しておいたから、合図をしたら連れて行けと命令されていたのだ。ジャミング・バードは、発動した空間において外部からの音声や通信をすべて遮断する能力だ。だから、リビングの声や物音は何ひとつバスルームに届いていなかったのである。

あらためて合理的で非情な人だ、とマリネは思うが、あのときリビングでハクアが動揺し大騒ぎになっていたらと思うと、常に早く物事が進む方法を選択する人だと敬服する。もちろん、これはハクアには話せない。

「しばらく会えないんだな……もうちょっと話しておけばよかったな」

ハクアは純粹な心でしょんぼりとしてテーブルに着いた。着替えの服はカボチのシャツを借りていた。マリネもそばに座る。ハクアに自分のゴシック服をいろいろ着せてみたいが、それは明日からにしようとは心に決めていた。

冷蔵庫の前でカボチが元気いっぱい振り返った。

「もう、なに暗い顔してんの？ 毎日話せるじゃない！ それよりハクアは炭酸がいいかなあ？ さつきコーラが好きって言ってたよね。ごめーん、サイダーでもいい？」

「あ、うん。ありがとう」

カボチは話を変えてしまう天才だった。

タツヤは部屋のベッドにごろんと横になり、希からの返信を待っていた。携帯に電話をかけたし、メールも送ったが応答はなかった。ちゃんと家に帰ったか心配だったのだ。あんなふう泣かせてしまい、ひどいのは自分だとわかっていた。だから、きちんと謝りたかった。実は、途中で一度引き返したのだが、そのときはもう河川敷に希の姿はなかった。すれ違ってしまったのだ。仕方なく一人で帰宅した。

父の廉太郎が、昼はみんなで外食に行こうと誘ってくれたが、タツヤはお腹の調子が悪いと言って部屋に入った。それで、廉太郎は妹の由果と二人で出かけて行った。

本当に、何も食べる気にならなかった。いまごろハクアはあのアジトで超能力者たちと仲良く昼ご飯を食べているかと思うと、起き上がる気力も湧かなかった。

しばらくして、ようやく希から返信が来た。メールだった。

『心配してくれてありがとう 帰ったよ 今日はまだ大丈夫』

それだけだった。

こっちも『もう大丈夫』か。いまなら出ると思って電話をかけたが、希は出なかった。苛立ちが増して、携帯を床の上に放り投げた。どうすればいいのか、本当にこのままでいいのか、誰に向かってぶつかったらいいのか、頭の中が煮え返り、冷静さを失っているのはタツヤも自分でわかっている。

本気で同じ生き方を望むのか？

お願い、私の忠告を聞いて。一番悲しむのは誰？

そんなもの、全部大人の理屈じゃないか！ 会えないことにどんな理由をつけられたって、会いたい気持ちが抑えられるわけじゃないか。応援団会議のあと、みんなが帰ってしまったとき、ハクアは何て言ったんだ。

いま、たつつんと離れたくない。

「僕は、あの言葉を信じたんだ！ ハクア、僕だってお前と離れたくないんだよ！ 守りたいのに、守りたいのに……！ ふざけるなっ！」

枕をつかんで思い切り壁に投げつける。

そのとき、床に落ちた携帯が新しいメールを受け取る音が鳴った。拾うと、意外にもそれはアランだった。

『ごめん、月本さんから事情を聞いた。応援団は終わりじゃない。お前に言いたいことがある。明日、話そう』

応援団は終わりじゃない、という文字を見て、ふうと熱い息がこぼれ落ち、タツヤは目をつぶった。

ハクアは硬い表情をなかなか崩せず、口数も少ないままだったが、まわりはお構いなしという感じでテキパキと動いていた。カボチが夕食は豪勢にするから、ということとで昼はごく簡単に済んだ。そして午後は、部屋にこもったシュタインを除くみんなで物置を片づけ、ハクアの寝室を新しく用意してもらった。

最初、マリネは面倒だからハクアとルームシェアでもいいよと申し出たが、ブッシュがマリネに「お前、思春期なんだろ。危険すぎる」と言って却下した。がっかりするマリネを見て、カボチはこころ笑い転げた。

ハクアは一人しばらく浮かない顔をしていたが、みんなと一緒に体を動かしていると、だんだんこの地下アジトの雰囲気にも馴染んできて、自分からまわりに話しかけはじめた。しかも、タツヤや希のことを気に病む度に、カボチが次から次にテンポ良く話を変えて

しまい、ハクアを沈ませることはなかった。ブッシュも、マリネも、カボチも、新しい仲間が増えたことを心から喜んでいた。そして、絶対に離したくなかったのである。

たっぷり体を動かしたので、夕食はいつもより早めの時間になった。カボチは精一杯腕をふるい、マリネも適当に手伝って、テーブルの隅から隅まで料理を並べた。ハクアの好物のハンバーグをはじめ、山盛りの唐揚げ、バンバンジーの野菜サラダ、ビーフシチュー、ソーセージピザ、特大焼豚チャーハンまでの見事な肉祭りである。

これだけ出されて、最後にお得意のカボチャケーキが登場したときは、ハクア以外はちよつと食傷気味に苦笑いした。シュタインも普段は食糧の備えに口うるさい性格なのだが、今日に限っては何も言わなかった。

「ハクア、ほんとよく食べるわね」

マリネが食後の紅茶を飲みながら、ハクアの手をいじりつつ、とろんとした目で見つめた。

「うん、肉が大好きなんだ。なんか、こんなに食べてみんなに悪かったかな」

「遠慮しないでいいよ！ わたし、すっごい嬉しいの！」

カボチは、シュタインにコーヒーのおかわりを出して、イスに座った。シュタインはいつもだと食事が終われば部屋に入ってしまったのだが、今日は珍しくずっとリビングに残っている。ハクアとメンバーがうまくやっていけるか観察しているようにも見えたが、それよりは穏やかな表情であった。

ハクアは自分のケーキが食べ終わり、マリネが一口だけ食べて残したケーキをもらった。

「なあ、マリネはダンス系って言ってたよね？ カボチとブッシュはどんな能力なの？」

カボチはシュタインの顔をちらつと窺った。シュタインは特に何も口を挟まない。

「えつとねえ、ライン系という名前よ」

「ライン系？ そんなの訓練学校で一度も聞かなかったなあ。ダンス系もここで初めて知ったし」

「えへへっ、最近のやつなの。フォースとかより可愛い名前でしょ？」

「ふーん、そうかな。で、どんな力なの？」

「あ、それは内緒なの。ごめんねっ」

カボチは舌を出して笑った。ハクアは仲間なのにどうして内緒なのか不思議だったが、いつか岩石ドームでトレーニングをすれば教えてもらえるのかな、と何となく思った。続いてブッシュのほうを向く。

「ん、俺か？ 俺はハート系だ」

「ハート系か。ふーん……それも初めて聞いたなあ。で、どんな力なの？」

「いや、うん、それは内緒なの。ごめんねっ」

ブッシュも舌を出して照れ笑いした。作った気持ち悪い声色だ。

カボチがいきなり噴き出し、お腹を抱えて笑った。

「おいっ、なんじゃそりゃああつ！ 似てねーし！ ハート系、超可愛い名前だし！」

真似されたのを怒るかに見えたが、むしろ足をバタつかせて喜んでいる。どうも変なツボに入ったようだった。ヒーハー言っているカボチの弾ける笑顔を見ていると、ハクアも何だかすごく楽しい気分になった。

「そうだ。あのさ、二人とも第二段階なの？」

そう聞くと、またカボチはシュタインの様子を窺った。能力のことになるとだいたいこの反応なのだ。超能力を持つ仲間同士なのに、どうしてずっと話してくれないのか変に感じる。とりあえず、シュタインが答えてくれた。

「全員第二段階だ。ここに来てそこまで行った」

「そっか……じゃあ、第一段階はあたしだけか。シュタインさん、

どうかお願いします」

ハクアは頭を下げた。

「まあ 明日、メテオドロップの原理を話してやる」

シュタインはそう言い残して部屋へ戻った。

リビングの雰囲気は、シュタインがいるときといたないときでは少し違う。カボチは常に細かく機嫌を見ているように思えるし、ブッシュは一步引いて様子を見守っている感じがする。態度が同じなのはマリネくらいだ。

「……ハクア、あんたさあ」

横からマリネが猫なで声を出した。手は触ったままだ。カボチとブッシュはキッチンで皿洗いをしている。今日は二人が当番らしい。その目が届かないところで、マリネがじりつとハクアに身を寄せてくる。

「自分が能力を持つてて、幸せだと思ったことはある？」

「あるよ！ そんなの、いっぱいあるよ！」

ハクアは自信たっぷりに答えた。最近だけでも、不良を倒したり、引ったくり犯を倒してたり、道案内をしたり、追跡隊から身を守ったり、そして何より信頼できる友達ができた。指を折りはじめたハクアの手を、マリネは優しく握りつぶして止めた。

「へえ……」

瞳の奥に、力試しで向き合ったときよりもっと冷淡な色が浮かんでいた。

「あたしは一度もない。なければよかったと思ってる」

「えっ、どうして？」

「一生ずっとお薬を飲むんだよ。存在を、消す、薬を ね」

噛んで含めるようにゆっくりと言った。

同じ日の夜、訓練学校の作戦会議室に、天童の率いるアメリカンチェリー隊が集められた。緊急の集合だった。羽島こだまも、体調は万全ではないものの、医務室から出ることは許された。ただ、外出許可はまだ出ていない状態である。

天童の妹、紅花もこだまの具合をしきりに心配したが、薩摩つばさが来ると、天童は会議室の明かりを落とした。緊張感が一気に高まる。つばさは報告書をスライドで投影した。ハクアの拡散波長を計測したグラフだった。不規則な波形が映し出される。超能力を使っている証拠だ。二週間前に限界近くまで使った形跡があり、拡散波長が最も高く放出されており、そこからゆるやかに下降していたが、先日また高い数値を出していた。これが、こだまと交戦した日である。

ところが、今日は極小値まで一気に下がっていた。場所の特定がかなり難しいレベルである。こうした状況をつばさは淡々と説明した。

「報告、終わりです」

つばさは席に着いた。

「作戦を伝える」

続いて、天童が口を開く。

「可能性は、いまのところ三つ考えられる。一番考えられるのは、寺野ハクアが遠くに移動したことだ」

隊員の三人と一羽は黙って聞いている。

「二つ目は、かなり可能性は低いが、拡散波長が抑えられたこと」

「えっ、そんなことが？」

こだまは思わず声を上げた。

「三つ目は、その両方だ。いずれにしても、身柄確保よりも情報収集が先になった。もし仮に追跡阻止の支援者が現れたとしたら、こちらの戦力としても、こだまの回復を待つ必要がある。実戦は数日置いて行いたい」

「……ご迷惑をかけて、申し訳ありません」

こだまは深く頭を下げる。天童は困ったような優しい笑顔を見せた。

「謝るな。隊長の俺が悪かった。とにかく、何か対策を打たれたのは明らかだ。まず、一緒にいた少年少女から情報を聞き出そう。これは面の割れてないつばさと紅花に頼みたい」

「はい」

「はいっ！」

二人とも威勢のいい返事をし、お互い顔を見た。紅花は兄の天童に、つばさと同等に扱われたことが嬉しかった。紅花もまた、前回の作戦が失敗した原因のひとつだったと自覚している。意気込む二人に、天童は声をかける。

「一般人にはできるだけ接触したくないが、このままハクアを逃すわけにはいかない」

次に、こだまの表情を確認する。

「こだまは基本的に待機、つまり休養だ。ただし、銃撃の精度を上げてほしい。一日三時間のシミュレーション練習をしてくれ」

「は、はいっ！」

そして、天童は隊服の襟を少し直した。慎重に伝えたい言葉が控えていたのだ。

「それから、俺から校長に頼み、一般訓練生へのキープタブレットの配布を明日からしばらく停止してもらうことにした。校内は、能力訓練は禁止し、体力訓練のみとなる」

三人の顔色がサツと曇る。南国九官鳥のデンロクも緊張が伝わりバサツと羽を広げた。

「安心しろ、君たちの分は内密に確保してある」

「それは……？」

こだまは不安げな目で天童に問い返す。

「まだ推測の域だ。だが、火のないところに煙は立たないと思わないか？」

「そうですね」

つばさは神妙に頷いた。

「横穴があるならば、圧力をかけて あぶり出しにかかるまでだ」
そして、天童は緊急会議の終了を告げた。

第12話 『新戦力とフロースンドリンク』 1 / 2

アジトでの一日目が過ぎ、ハクアは早起してリビングで一人待っていた。

服や靴といった身の回りのものは、昨晚いつの間にか届いていて、ハクアらしい普段のスポーティな服装に戻った。家の合鍵を持っているのは聡里だけなので、きつと聡里が運んでくれたのだろう。ただ、アジトの中には顔を見せなかった。タツヤも希もそうだが、しばらく別れる挨拶ができなかったことが、ハクアには寂しかった。カボチが朝食を作るために起きてきて、ハクアと顔を合わせて驚いた。

「ハクアは早起きなんだね」

「いや、シュタインがメテオドロップのことを教えてくれると言ったから」

「えへへっ、シュタインは顔は怖いけど、優しいんだよ」

カボチはエプロンを着ける。朝起きて、家族 じゃないけれど、仲間がいる生活が始まったことがハクアの胸を静かに捉えた。何だか温かい。何も隠す必要がない。キッチンからふんふんと弾む鼻歌が聞こえ出す。これが、守られているという安心感なのだろうか。

「ん？ そうかな。あたしは顔が怖いとは思わないけどなあ」

「それは、ハクアを気に入ってるんだよ」

「気に入ってる？」

「そう。ちよつとズルイくらいにね」

カボチはハクアに背中を向けながらそう答えた。

シュタインはコーヒーを飲み終わると、ハクアを連れて最下層の岩石ドームへ向かった。銀縁メガネはそのままだが、今日は白衣ではなく、真っ白いジャージを着ていた。

リビングでは、ブツシュが眠たそうな顔でトーストをもぐもぐしながら見送ってくれた。目が細いせいもあるが、完全に寝ているようにしか見えない。カボチは向かいで漫画を読んでいる。それと、マリネは起きてこなかった。これはいつものことらしい。二度寝か、三度寝をしないと起きられないと昨日の夕食後に自慢げに言っていた。

シュタインは岩石ドームに入ると、壁に触れて全体を明るく照らした。

「すごい便利だなあ」

「そう言えば話してなかったな。これはルクス系だ。第一段階で暗くする。第二段階で明るくできる」

「あ、暗くすることもできるんだ。なあ、それって人の体に触れたらどうなるの？」

ハクアの質問に、シュタインは一瞬ためらった。昨日、友人たちを追い出した騒ぎを思い返したが、あのときハクアは風呂場に連れて行った後だったはずだ。話して問題ないと判断する。

「第一段階の『カミング・ダーク』は一時的に視界が少し暗くなる。第二段階の『ホワイト・アウト』は本気でやれば失明する」

「失明って……見えなくなるのか？ あたしが視力を借りるみたいな感じで？」

「お前の場合は時間が経てば戻るだろう。俺の力は視神経を破壊する。違いが分かるか？」

ハクアは黙った。その場に硬直し、なぜそんな恐いことを平気で言うのか、という顔をしている。当然だろう。

「メテオドロップの原理を教えてやる。世界はどう創られているか知っているか？」

首を横に振った。

「世界は、全体のバランスが一定に保たれるように創られている。研究者の間ではトータル・クリエイトと言うが、まあ、それは覚えてなくていい」

ハクアの顔は曇ったままだが、シュタインは構わず続ける。

「レンタルフォースは人間の力量を移動させる。お前が強くなれば、相手は弱くなる。この原理は、エリア系だってそう同じだ。『マグネティック・エリア』は体験済みだろう？ あれは発動したところに円形の重力場を作るが、実はその周辺の広範囲でわずかに重力が軽くなっている。まあ、体感できるレベルではないが」

シュタインは一呼吸置いた。

「……難しいか？」

「大丈夫です」

「つまり、世界全体のバランスが変わらないから、誰かが強くなれば、誰かが弱くなる。どこかが変化すれば、別のどこかが逆向きの変化をする。そういう原理になっている。メテオドロップはその単なる調整弁に過ぎない」

ハクアは複雑な顔つきで首を傾げた。

「お前は、勝つためにどうすればいいか？ 答えは簡単だ。相手を無力化すればいい」

「それはやってる！ でも、追跡隊にもマリネにも勝てなかった！ 触れなかった！」

確かにハクアはレンタルフォースの戦い方を知っていた。シュタインはマリネとの力試ししか見ていないのだ。ただ、ハクアは、レンタルフォースを使いこなせないのではなく、この能力を知らない一般人ばかりを相手にしてきた。言わば、これまでは奇襲だけで勝ってきたのだ。ハクアはその自覚がなかった。

シュタインは釈然としないが、一応ハクアの言葉を信用することにした。

「だったら、落ち着いて考える。どうして触れなかった？」

「それは……追跡隊は銃を持ってたし、マリネは動きが早かったし」「そのときまわりに何があった？ 誰がいた？」

郊外の公園ではタツヤと希がいて、岩石ドームではシュタイン、ブッシュ、カボチがいた。ハクアはそのまま答えたが、曇った表情

は変わらない。それが何だったのか、と言いたげに唇をとがらせている。

「ハクア、お前の弱点は 視野の狭さと、自分への過信だ」

「かしん……？」

「難しかったか、すまないな。お前はレンタルフォースで戦おうと思っているようだが、それが読まれている相手もいる。レンタルフォースに頼りすぎなんだ」

「でも、あたしは」

「いいか、絶対に勝つための三カ条を教える。リーダーである俺に約束しろ。一つ、突進するな。二つ、敵の行動範囲に入るな。三つ、右手は確実に捉えたときに使え」

シュタインは言い切った。内心これはハクアの戦闘スタイルを全否定するものだろう。いくら約束しろと言ったところで、一朝一夕で何年も培ってきた性格が矯正できるとは思わなかった。案の定、ハクアは野生動物のように猜疑心に満ちた眼光で睨み返してくる。

「そんなので本当に勝てるのか？」

「じゃあ、逆に聞こう。なぜ勝てないと思う？」

「だって、すぐく弱腰じゃないか！ 後ろに友達がいて、あたしが何とかしなきゃいけないとき、先手も打たない、相手に近づかない、この右手を武器にしない、そんなので何ができるんだ！」

ハクアはこれまで自分を救ってきた右の拳を力いっぱい握り締める。

その言い分はよく理解できる。シュタインは不意に、自分の果敢な少年時代を少し思い出した。大切な家族を背にして、シュタインは手に持った物体に渾身の力で『ホワイト・アウト』を注入し、強烈な閃光弾に変えて投げつけた。それで逃げられるはずだった。だが、能力はすでに把握されていたのだ。シュタインは苦々しい過去を胸にしまい、冷静な気持ちで少女に説いた。

「もうひとつ聞こうか。お前が戦ったマリネは弱腰だったか？」

「……いや、そんなことはない」

「なら、正しいのは俺のほうだ。マリネはさっきの三カ条を徹底している。突進せず、お前の行動範囲を避け、右手は確実に捉えたとき使ったはずだ。違うか？」

ハクアは沈黙する。拳に込めた力は徐々に抜けかけていた。

「もう一度聞く、あれは弱腰か？」

「マリネの戦い方は 本来に正しいのか？」

シュタインは、ハクアが口にした正しさの意味がよく理解できなかった。目的がまったく違う。敵よりも圧倒的優位に立って倒すことでなく、自分が不利な状況を回避してこそ勝利だ。メテオドロップは力比べの格闘技ではない。ほとんどが一撃必殺でやられたら終わりなのだ。状況は覆らない。それはマリネのフル・ダンスをくらって身に染みたはずではないのか。

思えば、あのタツヤという少年も繰り返し『どっちが正しいか』を感情的に叫んでいたが、もしかして正しさというものに一番こだわりの、結果的に周囲の犠牲を生み出しているのはハクアではないだろうか。あの少年はその影響を知らずに受けているのではないかとシュタインは感じる。だったら、なおさらその考えを放置はできない。甘く接するわけにはいかない。

「強くなりたいとすがりついてきたのはお前だ。予想以上に頑固だから、もう一度言っておく。右手は確実に捉えたときに使え。能力者同士の戦闘は、先に手のひらを見せたほうが負けるんだ」

「……わかった」

本当にわかったとは考えにくい、渋い返事だった。だが、今はそれでいい。シュタインは話すぎて、のどがそろそろホットコーヒーを欲していた。

「一週間後、マリネと再戦させてやる。それまでに勝つ方法をよく考えるんだ」

ハクアの目つきが変わった。

「もう負けない」

「ふん、言葉だけはいつも立派だな」

「あたしだってみんなの力になりたいんだ」

青臭くて笑えてくる。過去の自分を本当に映したようにまっすぐで剛毅だ。ただ、こんなに面白い野獣はなかなかいない。思い通り火の輪をくぐるまで徹底的に鍛えたいという意欲がどんどん湧いてくるから不思議だった。

「まあいい。俺の能力はだいたい三時間は持つ。ここで好きなだけ体を動かしていい。暗くなったら出て来い。そしたら昼飯だ。肉を多めに調達しておいた」

シユタインはそう告げて、ハクアを一人残して岩石ドームを出た。

タツヤは妹と一緒に昼食を取った後、自転車に乗って一人で出かけた。行先は、市立図書館の裏にある大きな公園である。アランの住むマンションがその近くにあるのは知っていたが、家は弟がいて嫌だということで、外で会うことになった。

応援団は終わりじゃない。お前に言いたいことがある。

公園に入って自転車から降りて歩く。昨日アランが送ってきた携帯メールを読み返し、ポケットに入れた。タツヤは、昨日感情が高ぶり希を怒鳴って泣かせてしまったことをアランに叱られると思っていた。反省したつもりだったが、あれから希とはメール交換をしていない。今日の午後五時、おそらくハクアと天狗の面で話すのだろうが、タツヤは行かないつもりだった。用事があるのではない、希に合わす顔がないのだ。

園内を探すと、アランは先に来ていた。大きな木陰のベンチでぼんやり空を眺めている。自転車がないから歩いて来たのだろう。青いＴシャツに白い半ズボンという夏らしい格好だった。

「暑いなあ。アイスでも食うか？」

最初に叱られると身構えたが、意外にもアランは気さくに話しかけてきた。少し離れたところに売店が見える。

「……アイス？」

「要らないか。じゃあ、俺だけ買ってくるよ」

「いや、僕も食べる」

「同じのにしよぜ」

アランはなぜか笑顔だった。そして、二人ともソーダ味のフロースンドリンクを買い、またさっきの木陰のベンチに戻った。タツヤは冷たいものともかく、甘いものを食べたい気分ではなかったが、同じのという響きにちよつと心が動かされた。

ベンチに並んで食べはじめると、希のことを責められると思っていた警戒心はすっかり解けてしまい、変な言い方をすれば拍子抜けだった。最近アランとロゲンカばかりだったから、こんなに明るく接してくるのは驚きだった。

「ハクアが脱走者の仲間になったんだってな」

アランが小声で切り出した。木陰だが、夏の空気はずっとそこに止まっている。汗だけが額や首筋にしみ出した。

「うん。まあ、もともと脱走者だけど、同じ人たちと住みはじめた」お互い超能力者という言葉は使わない。この炎天下にまわりに人がいるわけではないが、口に出してしまうと、まるで次元の違う存在に思えてしまうのが嫌だった。ストローでいじる指が重い。だが、アランはズルズルと青いフロースンドリンクを吸っていた。ふーっ、大げさな仕草でこめかみを押さえる。タツヤはその明るさをじつと隣りで耐えていた。

「何か少しでも通信できるらしいけど、これからもう会えないみたいだな」

「……何だよその言い方。アランだって応援団だよな？」

「ん？ ああ、応援団だよ」

即答だった。そこまできれいに返されると、タツヤは完全に言葉を失った。

「言いたいことって何だよ。はつきり言えって！ そのために呼んだんだろ？」

アランは振り向く。

「いや、だって　言われることはわかってるって顔してるからさ」
一瞬にして目の前から笑顔が消えていた。そうだ、こっちがいつもアランの顔つきだ。タツヤの思うことを全部見透かしている。それをあえて言ってくる。何か言い返そうとすると、アランはそれを容赦なくさえぎる。

「言いたいことを言う」

「だから、言えよ」

「月本さんはさ、いま、お前のほうが心配なんだよ」

ふっと時がまどろむ。少し理解しにくい言い回しだった。

「僕のほうが、って……ハクアよりも？」

「話せばわかるだろ」

こいつは何を言ってるんだ　タツヤは一瞬そう思ったが、すぐにアランの真意を理解した。確かにハクアは安全な場所に移ることができた。聡里とシユタインはそれを約束してくれた。それが事実。安全になって良かったじゃないかとアランは言いたいのだ。

けれど、ひとり心が荒れているのは自分だ。希を怒鳴りつけ、アランの明るさに啞然とし、ひどく頭に来ている。我慢したいが無理だ。声は低く煮え立ったままだ。

「そうか。言いたいことはそれだけか？」

「もう少しある」

「だから、言えって！　全部言えって！」

アランは少し寂しげな目をした。

「　月本さんを大事にしるよ」

思考が停まる。迷って言い返そうとしたが、またアランが先に覆いかぶせてきた。

「ハクアは頼れる仲間ができたんだ。お前が下手に張り切る必要なんかないだろ？　それより、月本さんの心は傷ついたままだろ。ハクアに裏切られ、お前にも距離を置かれたら、誰があの子のつらさをわかってやるんだ」

河川敷で希が流した涙を思い出すと、タツヤはただ黙るしかなかった。食べる気も失せたフローズンドリンクのカップはびっしょりと汗をかき、右手を冷たく濡らしている。

アランはふつと不思議な笑顔を見せた。

「……俺はお前を心底すごいと思う」

「何だよ、嫌味か？」

するといきなり肩をつかまれた。アランの語気がさらに強くなる。「俺は、お前みたいな優しさがうらやましいよ！　いつもみんなお前を頼ってんじゃないか！　正しいことを言えばみんなが信じてくれるわけじゃない。お前が必死で歯向かうから、お前が一緒に悩むから、二人とも信じてくれるんじゃないか」

アランの顔は真っ赤だった。怒りも興奮もすべて混ぜこぜになった感じだった。

「だったらお前が」

「うるせえ、お前なんだよ！　わかんねえのかっ！」

怒声が木陰に散った。しんと静まり返る。

パラソルの立つ売店の前から数羽のスズメが音もなく飛び立った。話し合いは終わった。もう、そういう雰囲気だった。タツヤは液体になった冷たいソーダを一気に飲み、アランの空きカップと重ねてゴミ箱に捨てた。自転車のスタンドを上げると、アランが目の前に立った。

「今日の五時に月本さんの家に行くぞ。迎えにいくからな」

「……僕の気持ちは関係なしか」

「お前は、本当にむかつくやつだな。俺は月本さんの家を知らないんだからな！」

いつも迷いなく責めてくるアランが、そのときだけは少し決まりが悪そうにタツヤを頼った。

「アラン。僕は、いまは我慢する。だけど、ハクアにもし何かあったら、そのときは絶対に守る。その気持ちは変わらない」

「それは　俺だけが聞いておく」

「わかったよ」

さっきまで座っていた木陰のベンチは斜めに日差しが入り、表面が白く照りはじめた。

少年二人が別方向に別れた後、ベンチの後ろに立つ大木の裏に二人の少女が身を隠していた。いくら少年たちが小声で話しても、この静かな公園で木を一本隔てた距離ならば話は筒抜けだった。それに後半はお互い熱くなって声も大きくなっていた。

薩摩つばさと天童紅花は、赤い隊服でなく普通の服を着てそこに座っていた。腰の高さまでの植木があり隠れるには十分だったが、一応幹からはみ出さないようにつばさは紅花を抱えていた。少年たちの姿が完全に見えなくなると、ようやくつばさが口を開いた。

「ハクアが、脱走者たちと暮らしはじめた」と

こだまの戦闘報告から、郊外の公園に一緒に行った少年はアス力という名前だと特定していた。天童の命令を受けて、朝からつばさと紅花は無人の美星小学校に入り、五年生の教室を回り、掲示物から寺野ハクアの名を発見した。そして、同じクラスに朱鳥タツヤの名があるのも見つけた。この朱鳥は珍しい名字だ。交番で聞くとすぐ分かった。迷子とってくれたようだ。子供には何とも警戒心が薄くてありがたい。

昼が過ぎ、朱鳥タツヤと思われる少年を尾行すると、こんな場所で友人と待ち合わせだ。そして早速、ハクアの情報がこぼれ出た。天童隊長の狙いは正確無比だった。

「ねえねえ、つばさ。これって『エビでタイ』ってやつ？」

妹みたいに愛らしく振り返り、紅花が上目遣いに聞いてきた。実に嬉しそうだ。追跡隊として初めての実戦任務に入り、ハクアだけでなく、さらに数名のターゲット情報を得たのだ。訓練学校で待機中のこだまには少し申し訳ないが、任務遂行に運というのではない。絶対に勝つためには、突進してはいけない、敵の行動範囲に入らな

い、能力は確実に捉えるまで使わない、なのだ。これは追跡隊に昔から代々伝わるという教訓だ。

「うん、やったね。隊長に褒められるよ」

「でも、脱走者のいる場所まではわかんなかったね」

紅花はふくれっ面をして見せた。年齢はまだ小学一年生なのに、目的までの進み具合を把握する頭の良さには恐れ入る。やはり統率者として君臨する天童家の血筋だろうか。こんなに小さい体をしているが、経験を積みめさらに強力な存在になるに違いないと思う。つばさは紅花を降ろし、立ち上がった。

「ツキモトさんて子の家で、ハクアと通信できるみたいね」

「通信ってどういうことなの？ 電話？」

「わからない……でも、電話だったらどこでもできるはず。隊長に報告する」

メテオドロップの種類はまだあまり解明されていない。それに、能力者たちとの接点だ。それが能力である可能性もある。さらに、ツキモトという子の家に仲間の護衛がいるとも限らない。安易に深入りしては危険だ。

「今日はツキモトさんて子の家まで確認しようか」

「尾行するのね？」

紅花はワクワクした笑顔で見つめ返した。

夕方、タツヤは外出した。約束通りアランが迎えに来た。正直、希に会うのはすぐ気まずかったし、もう少し落ち着くまでハクアの声を聞くのは避けたかったが、アランの強い誘いに負けた。まさか分裂しかかった応援団を、一番面倒くさがっていたアランが積極的につなぎ止めてくれるとは思わなかった。

応援団はきつと、希がハクアともっと一緒にいたいという気持ちと、ハクアがすべて話せる友達が欲しいという願いで出来ていた。だから、ハクアと分離され、ハクアに新しい仲間ができたとき、つながる理由が消えかかったのだ。ハクアがいけないのに、それを続ける意味。そんなもの　もう、悩むのは止めた。

「月本さんちつてデカインだろ？　俺、緊張するなあ」

アランがやたら明るいので何だかバカバカしくなったのだ。

玄関に迎え出てくれたのは希だった。二人の顔を見るなり嬉しそうに顔を輝かせ、タツヤの手を取り、自分の部屋まで引つ張っていた。玄関は広くて花屋みたいにいい香りがして、廊下も長いし、天井も高いし、壁には立派な額縁に入った絵画がたくさん飾られていた。アランもきよろきよろしながら、楽しそうについてくる。

希とは幼なじみだが、部屋に入るのは今日が初めてだ。白やピンクの色合いが多くて、女の子らしいふんわりとした雰囲気だ。ハクアはここに泊まったのかな、と考えながら見渡す。ハクアの部屋みたいに何もないと違っし、妹の部屋みたいに書道が飾ってあるのとも全然違う。お菓子みたいに甘い匂いがする。

「お菓子が置いてあるの？」

「うっん、ないよ？　いま、お母さんが持ってきてくれるから」

希はすっかり機嫌が直っているようだった。アランは写真立てに興味を持っている。

そしてお菓子とジュースを持ってきた母親が部屋を出ると、希は

バッグから真つ赤な天狗の面を取り出し、かわいい丸テーブルの上に置いた。聡里の事務所やシュタインの部屋も不気味だったが、希の部屋ではもつと異様な感じだった。三人はジュースを飲みながらシュタインからの通信を待つ。

五時になった。いきなり、希の枕元の目覚まし時計が鳴る。タツヤは腰が浮くほど驚いた。すると、希の携帯のアラームが鳴った。「あ、あのっ、あのっ……消すからっ！ ごめんね！」

希が慌てて目覚ましや携帯のアラームを止めようとするが、手に収まらない。なぜかアラームも落ち着かずにおたおたしている。本や漫画の入った棚の前から、そそくさとテーブルに戻った。

「時間は守る。うるさいから止める」

天狗の面がしゃべった。実に不機嫌そうな声の調子だ。

「すいませんっ……」

希は天狗の面に頭を下げている。目覚ましを急いで叩き、抱き込むように携帯の音も止めた。

「のぞみん！ いるの?!」

ハクアの声だった。

「うん、いるよ！ ずっと待ってたよ！」

「たつつんは？」

「ちゃんというよ」

心は苦しかったが、無理して明るめの声を絞り出した。

「アランは？」

「いるよ。全部聞いてるから大丈夫」

まるで応援団がちゃんと揃っているかの点呼みたいだった。タツヤは唇を噛んだ。アランが無理に呼んだ理由がよく分かる。本当に優しいのはアランだ、と胸の中で感謝する。

ハクアは、あの後こっちがどれだけつらい思いをしたかも知らないで、どこへ行っても何をしてもみんなが自分を信じてくれると思っているのだ。それがその通りなのが悔しくて、そんなハクアに直接想いを言えないのがひどく寂しかった。

『十分な。言つとくが俺はここにいるからな』

「シュタインさん、ありがとうございます」

希が律義に頭を下げる。テーブルに置かれた天狗の面はなぜか気まずそうに見えた。

そこからはハクアの独壇場だった。歓迎パーティのこと、カボチの料理が美味しいこと、自分の部屋を作ってもらったこと、地下に大きな岩石ドームがあること　ハクアの説明がうまいわけもなく肉がたくさん出たことはやたら繰り返した。希は「すごいね！いいなあ」と無邪気なことを言っていたが、向こう側にいるシュタインはどんな顔色になっているのか何だか恐かった。

『十分だ。今日はこれで終わりだ』

シュタインの声が割って入った。機嫌は悪そうではなかった。

「あつ……はい」

希はしゅんとしおれる。ちなみに、タツヤとアランはそこにいたが、結局ほとんど何も話せなかった。

『明日もつなぐが、君たちはいるか？　外出とかで必要ないときは言ってくれ。これから毎回確認する』

「明日もいます。明後日もいます。えっと、その後は……」

希はバッグから手帳を取り出した。

『明日だけでいい。切るぞ』

『みんな、またねー！』

通信が切れた。確かに応援団は終わっていない。ちゃんと続いていきそうだ。けれど、何とも言えない空しさが残った。

タツヤは少し気の抜けた表情で、希の顔を見た。希は、星のキラキラシールがたくさん貼られた手帳を閉じ、ふうつと溜め息をついた。何だかその仕草は珍しかった。

「シュタインさん、結構いい人だね。ちゃんとハクちゃんのこと考えてくれてるね」

「うん……」

パチツと頬を打たれた。一瞬、何が起こったか理解できなかった。だが、目が覚めた。そこに希のまっすぐな強い視線があった。こんな表情を見たのは初めてだった。

「朱鳥くん、みんなのことをもつと考えてよ」

胸をきつく締めつけられるような言葉。

「丘野くんが言ってくれなきゃ、本当に来ないつもりだった？」

アランは腕組みをして黙っている。希はタツヤの手を取った。汗ばんでいる。

「ねえ、本当だった？ 答えて」

タツヤは頷く。

「ごめん。言いたいことを全部言うよ。僕は、ハクアと離れることがつらかった」

希は手を握ったまま聞いている。タツヤは覚悟を決めた。本音はアランだけに留めるつもりだったが、この状況は逃げられない。アランも口は出して来ない。

「ハクアは真面目だ。ハクアはバカだ。ハクアは危なっかしい。そんなあいつを何度も見て、僕は力になりたいと言った。そしたら、ハクアは僕と離れたくないと言った。そのとき、希も、アランもいなかった。学校で、応援団で話し合って、二人が先に帰った……あの後だよ。希にもアランにも都合や考えがあったのはわかる。僕だってそういうのを言ってるんじゃない」

タツヤは一息置いて続ける。希の潤んだ瞳を見続けることはつらかった。少し目を逸らした。けれど、やっぱりその瞳はもう一度見るしかなかった。

「あいつは、何でみんながいるときに言わなかったんだろう。何で僕だけに言っただろう。あいつ、あのときどう思っただろう。それをずっと悩んだ。あいつあの性格だから、ほんとは何も考えてないかもしれない。あいつバカだもん。けどさ、僕は本気で言っただ。力になりたいって」

「そんなの……全部わかってるよ」

希は少し涙ぐんでいるように見えた。タツヤは何度この子を泣かせば済むのだろう、と胸が痛んだ。

「全部？」

「だって、朱鳥くんだもん。いいかげんな気持ちじゃ、そんなこと言わないもん。言ったら、最後まで、やってくれるもん。わたし……知ってるもん」

もう完全に涙声だ。こんなに信頼してくれる希を、どうして泣かすことしかできないのだろうか。タツヤは希の手を強く握り返す。希の体温がどんどん流れ込んでくる。

「確かにあそこは安全だと思う。でも、僕たちはあいつとはつきり区別されたんだ。これからあいつに何が起こつても、僕たちにはもう何も知らされないかもしれない。困ったとき力になれない友達って何なのかな？ 僕はいま自分の立てた誓いに必死でしがみついているんだ！ これが 砕けちゃったらダメなんだ！」

タツヤは顔を真っ赤にして言い放った。希の体温を受け止め、全身が熱くなっていた。

「いまは我慢する。だけど、ハクアに何かあったら、僕はあの場所に何としてでも行く」

それは自分にも言い聞かせる言葉だ。

「俺も、タツヤの考えに賛成だな」

アランだ。

「約束を破ったのはハクアだ。でも、ハクアが嫌いになったわけじゃないし、無理に何とかしようってわけじゃない」

まさかそんなふうに言うとは思わなかった。アランは天狗の面を見た。

「けど、向こうが通信をやめたりしたら 俺はタツヤに力を貸す」最後に希は手の力をふつと緩めた。ぐしゃぐしゃの顔に、涙混じりの笑みが浮かぶ。

「えへへ……。二人が決めたことを、わたしがダメって言えるわけないよ……」

すると、アランが優しく希の肩に手を置いた。

「違うって。三人で決めようよ」

「ごめん、そうだね。ごめんね……うん、わたしも同じ気持ちだよ」
「なっ。同じなんだから、もう泣くなって」

アランのかけた言葉は、希と分離しそうになっていたタツヤの心にも嬉しかった。

それから六日間が過ぎた。幸い、何事もなかった。

ハクアはいつも通り、ひたすら食べ物の話ばかりした。でも、それが元氣な証拠であり、ハクアが何も変わらない安心の印だった。希が習い事のある日は、タツヤが天狗の面を持ち帰り、一人で受け答えをしたが、アランもサッカーの練習がないときにはタツヤの家に来てくれた。十分間の通話が終わった後は、適当にリビングでゲームをしたり、漫画を読んだりして帰った。

二度目に来たときは、タツヤの誘いで夕食まで一緒にいて、内気な妹とも少し仲良くなった。それと、タツヤの作った麻婆豆腐が美味しくて驚いたが、それ以上に、母親がいないのに家事をきちんとやるタツヤが少し頼もしいような気持ちになった。

正直、アランにとっては、あれだけタツヤと希の二人がケンカするほど切羽詰まっていたのだから、すぐ異変が起きるんじゃないかと心配したのだが、何だか空振りに終わった感もあった。ただ、秘密基地を作るほどだから、追跡隊への警戒心はかなりあることは頭の中に置いておいた。

また、希から一度だけ通信中に「週に一回でも、会える日を作れませんか？」「と提案してみたのだが、ハクアはやたら乗り気だったものの、シュタインは即座に却下した。三人は、もしかしたらハクアがシュタインに食い下がるかと期待したが、「全部終わるまでおあずけだな」と大人しく引いたのを聞き、通信が切れた後、自然に溜め息が出た。

七日目にマリネと再戦をする約束をしたハクアは、朝早くからリビングで待っていた。カボチとシュタインとブツシュはいつも通りの順番で、いつも通りの時間に起きてきたが、マリネはさらに一時間遅く起きてきた。もう昼前だ。シュタインも、ハクアのはやる気持ちは伝わってきたが、昼食後に岩石ドームへ全員を集めることにした。

マリネは腰に白黒二本の傘を差している。入口近くの壁際にブツシュとカボチが立ち、シュタインが審判として中央に立つ。そこまでは前回と同じ。だが、ハクアは岩石ドームの隅にいた。

「ハクア、そこでいいのか？」

シュタインが声をかける。

「はいっ！」

威勢よく答えるので、そのまま始めの合図を出した。

ハクアはそこからまったく動かない。マリネはお手上げという仕事をした。

「ねえ、シュタイン……何か入れ知恵したの？」

「三カ条は話したが」

「ふうん、それね。まっ、それなら、こっちから行ってあげようかしら」

マリネはぐつと背伸びして、一気に駆け出す。ハクアはまだ動かない。距離はどんどん詰まっていくが、一步も動かない。逃げるつもりもないらしい。マリネは不愉快に感じながら、それでもハクアが前回見せた初速スピードを想定し、適度な間合いで止まり、様子を見た。

「ハクア、あんたこのまま睨み合いっこするつもり？」

「今日はあたしが絶対に勝つ」

「私、勝負事は身内だろうと本気なの。つまらない策を出す前につぶしちゃうわよ」

挑発に乗って突っ込んでくるかと思ったが、そこは学習したよう

だ。マリネは冷静に周囲を観察する。ここは壁際。てっきり、レンタルフォースでブッシュやカボチの脚力でも借りに行くかと考えたが、二人とも距離があるからその気配もない。自分の力でやり返したいというつまらない意地でもあるのだろうか。だったら、レンタルフォースの使い手としては最悪だ。

「ごめんね、今日はお昼寝したいから早く終わらすわ」

「えっ、まだ寝足りないの？」

「うるさいね。行くわよ」

ハクアはおそらく右手で攻撃してくる。だから体の左側は防御しにくいはずだ。マリネは右前方に素早く駆け込み、右の白傘を突き出した。

パンッ！

甲高い音とともに、白傘の先っぽが宙に跳ね上がる。傘を蹴られたのだ。マリネの右脇が大きく開いた。だったら　とすかさず左の黒傘を構える。突進してきたところを突く。マリネは標的の動きをよく見る。それだけのことだ。

ところがハクアは、マリネの開いた右脇を眺めるように、横向きに走った。それでも関係ない。白傘を振り下ろす。これで追い打ちすればいい。しかしその瞬間、ハクアは全力で加速した。

確かに右手を縦に下ろせば、右後方は見にくくなる。左腕も咄嗟には動かしにくい。ハクアの狙いはわかったが、マリネの経験値は甘くない。下がった白傘を水平になぎ払いつつ、その勢いで体をハクアの正面に向ける。まるで回転斬りの要領だ。

だが、ハクアがいない。もっと先へ走ったのか。どこだ。

背中に何かが迫る。さすがに間合いを取るべきだ。黒傘を地面に立て、ジャンプする。視界が広がった。だが、それでもハクアがいないのだ。何が起きた。

いきなり下から左足を掴まれる。

「マリねえ、借りるよ！」

ハクアの声と同時に、がくんと脚力が抜かれる感覚が襲ってきた。

黒傘で地面を突いた地点の裏からハクアの茶色い髪が見えた。背後に回り込んだ直後、ジャンプしたマリネの真下を通ったのだ。そうでないと、視界から消えるわけがない。

「きゃんっ！」

マリネは着地した足の踏ん張りがまったく効かず、その場に倒れ込んだ。けれども、両手の力はまだ残っている。近くにいるハクアの足に触ってフル・ダンスを発動すれば、形勢は五分かそれ以上だ。急いで上体を起こす。

しかし、ハクアの立つ場所とは二メートルくらい離れていた。手で触るどころではない。

「ごめん、手で少し投げちゃった」

「なっ、投げんな！」

これは投げただけではない。脚力を奪ったあと、ハクアはさらに後ろに跳んで距離を作ったのだ。動物的な直感で、仕留めた獲物が動かないことを、少し距離を置いて様子見たのだ。シュタインはその驚異的な俊敏性や切り返しを目撃し、確信した。

ハクアの攻めの行動原理に、敵の行動範囲から徹底的に回避することがインプットされたことで、おそらくマリネの腕の長さも傘の長さも軌道ですらも全部見切っていたように見えた。相手の筋肉の動きや呼吸の流れをすべて感じ取っているのではないか、というくらい正確な動きだ。そして、マリネが黒傘でジャンプすることを、あそこで予測できるものだろうか。瞬間的に予測できなければ、低姿勢で真下をくぐるなんて出来るわけがない。

「やめっ！」

シュタインは終了の合図を発した。それは、勝負にほぼ決着がついたこともあるが、まさにハクアの力試しの終了という感覚だった。ハクアが振り返る。

「ん？ あれでいいのか？」

「勝負ありだ。マリネに力を戻してやれ」

ハクアが左手を差し出したとき、マリネは悔しげに噛みつきそう

な感じだった。さすがに足の力が抜けては氣勢も削がれ、大人しく解除された後は、スカートの汚れを念入りに払っていた。そばに来たカボチとブッシュに、黒傘ジャンプのタイミングがまずかったと聞いていたが、二人とも困った顔をしていた。

カボチは初戦を思い出し、ポンつと手を打つ。

「この前ハクアはワンピースだったしね。動きが悪かったんだよ」

「……待つてよ、私はこれよりミニにしたらまるっきりショーガールじゃないの」

「思春期なんだから、変な格好でうろつくなよ」

ブッシュが笑う。その輪の外で、シュタインはハクアに話しかけた。

「ハクア、お前、何であの位置まで離れた」

「ああ、マリネの動きをよく見るためだ」

ハクアは満面の笑顔だった。おそらくマリネも、標的としてハクアの動きはしっかり見ていただろう。近接戦闘ではその経験値が重要だが、ハクアの場合は、マリネの生き物としての動きをよく見ていたようにシュタインは感じる。

「……そう言えば、追跡隊に苦戦したとき真っ暗だったと言ってたか？」

「うん、星を見に行った場所だしね」

「暗いと戦うのは大変か？」

「目線の動きが見づらいから、やりにくいんだ」

「周囲に人がたくさんいると気が散るか？」

「うーん。戦う相手ならたくさんいても平気だけど、友達がいると困る」

追跡隊の襲撃は、ハクアにとって大いに苦手な状況だったということか。シュタインはハクアを追う側の指揮官に対して、いま初めて少し脅威を覚えた。リモートガンという有利な武器を持っていないが、確実な勝ち方を考えてくる。もしこの基地がすでに特定されていたとすれば、今は向こう側にとって目的達成までのリードタイ

ムだ。本当に全員を守り切れるか、もう少し防衛策を練る必要があるかもしれない。シュタインは眉間に深いしわを寄せた。

……と、そこで思考が沈む。カフェインが足りない。

「カボチ、コーヒーを淹れてくれ」

「あー、私はアイスレモンテイ」

「あたしもコーラが欲しいっ！」

「俺、イチゴ牛乳」

「なんじゃあ、最後のかわいいなあっ！」

カボチは嘖き出し笑った。

そして、今日をもつて間違いなく『ブレイクチェイサー』の新戦力となったハクアは、夕方五時の友人との通話で、嬉々としてマリネとの再戦勝利を報告するあたり、何とも言えない期待と不安が複雑に入り混じっていた。通話を認めたのはシュタイン自身だが、ハクアが戦闘要員として着実に訓練されていく様子を、おそらく少女たちは感じ取るだろう。もっとも、強くなりたいと望んだのはハクアだ。

シュタインは、ハクアが弾むようにして部屋から出た後、キープタブレットの新しい箱を開けた。だが、そこには予想外にも三分の一の量しか入っていなかった。さらに、青色のマジックペンで『x』と書いてある。シュタインは顔をゆがめて、思い切りデスクの奥を蹴った。

パスチェツカーでブツシュを呼ぶ。

「兵糧攻めだ、すぐ来い」

『わかった』

能力を解除し、手元のコーヒーカップを持ったが、乾いた黒い粉が底に円くこびりついているだけだった。

第13話 『過去の答えとチェリータルト』 1/2 (前書き)

キャラクター紹介はこちらにあります。漫画つばいイラストが大丈夫な方はぜひ。

<http://www.geocities.jp/sleepdog550/novel/hakua/hakua|chara.html>

次回は3/27(日)更新予定です。

最後に起きてきたマリネが身支度を整えたのを待つて、シュタインはリビングで全員に説明した。キープタブレットの入手が困難になったことである。タブレットのケースに書かれていた青い×印は、その伝達信号だった。

「ねえ、何があつたの？」

マリネが真つ先に聞く。隣りでカボチもまた同じ驚きの顔をしている。

「調査中だ」

シュタインは冷たく答えた。マリネとカボチはタブレットの入手経路を知らない。知っているのは口の堅いブツシュだけだ。新入りのハクアにも明かしていない。マリネは気つけのアイスレモンティを一口飲み、腕組みをする。

「前から気になってたんだけど、タブレットはどこで手に入れてるの？」

「それは言えないと言つたはずだ」

「あつ、そう……」

マリネが大人しく引き下がると、カボチも一緒に静まった。ブツシュは渋い表情ですつと黙っている。その中で、ハクアだけがあまり緊張感がなかった。事態がよく飲み込めていないのだろうかとシュタインは考えながら続ける。

「そういうわけで、今日から超能力の発動は禁止だ」

「えっ?!」

今度はハクアが激しく反応した。やはりキープタブレットや拡散波長のことが十分理解できていないのだろう。

「ハクア、このあと俺の部屋に來い。話がある」

「なあ たつたんたちともう話せないのか？」

勘だけは鋭いのがハクアだった。

「俺だけ好き勝手に能力を使うわけにはいかないだろう」

「好き勝手じゃない！ みんなとの約束だろ？！」

「……だから話そう。これはお前を守るためでもある」

シュタインはハクアの手を引き、二人してリビングを出て行った。残された三人は苦い雰囲気で見合わせる。マリネは溜め息をつき、レモンテイの底に沈んだシロップをストローでかき混ぜた。氷がぶつかり合う音だけがリビングに鳴っていた。

その日の夕方五時、今日は三人とも希の部屋に揃っていた。希の母親は、夏休みになって急に男の子二人がよく遊びに来るのを不思議がったが、希は天文係と一緒に自由研究をしていると説明していた。言いにくいことは学校の勉強を理由にするのが一番だった。

時間になり、希が引き出しから天狗の面を取り出す。さすがに天狗の面をこの可愛い部屋に飾るつもりはないみたいだ。

コンコン

天狗の面からノックの音がする。シュタインがお面を叩いているのだ。パステッカーによる通信開始の合図だった。

「はい、います。今日はみんなです」

希が答える。

『のぞみん……』

いきなりハクアが口を開いた。いつもならシュタインが話して良いと言っのが先なのだ。

「ハクちゃん？ どうしたの？」

『ああ、すまない。実は君たちに言わないといけない大事なことがある。通信は明日からしばらくできなくなる』

「えっ、どうしてですか？！」

希が聞き返す。タツヤも驚き、天狗の面に飛びつこうとしたが、ぐっと我慢した。慌ててはいけない。アランにもそう言われたはずだ。

『理由は、申し訳ないが説明できない。ハクアにも納得してもらった』

『そんな……』

『それじゃ、約束が違つよ!』

ハクアを盾にされると弱い希に代わつて、アランがいつになく強い態度で食い下がった。会えなくても応援団は終わりじゃない自分でそう言つてタツヤや希を励ました責任を感じていた。だが、シュタインは極めて冷静に対処する。

『こちらにも事情がある。状況が変わつたんだ。二度と通信しないと言つたわけではない。わかつてほしい』

シュタインは、相手は子供だが、慎重に言葉を選んで話していた。外部の友達を刺激したくないのもあつたが、一番警戒していたのは自分の隣りにいるハクアだった。直情的で妥協の通じないハクアは、内部崩壊を招きかねない危険分子でもあるのだ。

一方、アランもどう言えばハクアと通信が続けられるか自信がなかった。話が急すぎて混乱したのもあつた。

『そうだけど……じゃあ、いつ再開するの?』

『何とも言えないが、こちらも、そんなに長引かなければいいと思つてる』

どうにも言い返しにくい答え方だった。アランは氣勢をそがれたここで黙つたら今日で通話が終わってしまう、希の落ち込む顔が目に見え、アランはあせつたが、どうしても言葉が出なかった。何も変えられなくて、ただ、呆然とした。

最後にタツヤが身を乗り出した。

『シュタインさん、アジトの場所は変わらないよね?』

『……ああ、そうだ』

『だけど、それが本当か　僕たちはわからないです』

タツヤはシュタインのことを完全に信用したわけではなかったが、これがハクアの安全に関わることだと感じた。そうでなければハクアが納得するわけがない。ハクアの声が聞きたい。そうすれば自分

「私たちは待つことができる。」

『たつつん、ここから移らないのは本当だ！ あたしを信じて！』
まるで心の願いが通じたように、ハクアが言った。

「ハクア、僕たちはいつだってハクアの言葉を信じてる。お前がおかしいと思ったら、ここに帰って来ればいいからな」

『たつつん……うん、わかった』

シュタインはこのやりとりを横で聞いて、これ以上話すのは危険だと察知した。ハクアに同胞との連帯意識を天秤にかけさせてはいけない。運命共同体の中で生きていく上で、安全性は必要だが、選択肢は必要ではないのだ。

『そういうわけで、悪いがこれで』

「ダメツ！ 十分の約束はお願いします。……まだたくさん残ってるもん！」

希が声を荒げてさえぎった。たくさんと言ってもあと五分しかなかったが、その五分がどれほどの宝物かわかっていて、希はどうしてもそれを捨てたくなかったのだ。

『シュタイン、あたしからも頼む。決めたことは曲げないから』

『……わかった。時間まで話していいぞ』

ハクアは与えられた残り時間で一生懸命たくさん話した。カボチからたくさん漫画を借りたこと、風呂掃除をしたらすごくピカピカになって気持ち良かったこと、コーラにアイスクリームを入れたら意外に美味しかったこと。まるで明日から通信がないことを忘れてしまふくらい普通に明るいハクアだった。そして最後にこう言った。

『のぞみん、たつつん、アラン、今日は三人ともいてほんと良かった。あたしが毎日楽しいのはみんなのおかげだよ。でも、あたしの住む場所があるのはシュタインたちのおかげ。だから、あたしはどっちとも約束を守る！』

そう言われると、まわりはもう頷くしかなかった。タツヤは代表して天狗の面をつかんだ。

「ハクア　僕たちは必ずお前の力になるからな！」

『うん、わかった！』

そうして、パステッカーでの通信時間は終わった。

訓練学校でキープタブレットの配布が止められてから一週間以上が経っていた。校内にそれほど動揺はなかったが、何かしらの作戦が進行中なのかもしれないという気配は漂っていた。だが、こうしたものは校長の決定事項なので、誰も教官に詳しく聞こうという者もいなかった。

実際、教官たちも何の目的で配布中止になったか聞かされていないかったのだ。ただ、メテオドロップを使った訓練は全面禁止になり、もし体に異変が起きた生徒がいれば、担当教官が医務室に連れて行き、体調回復のために最小限の数をその場で飲む、というルールが出ただけだった。キープタブレットの配布中止など滅多にある話ではない。一週間くらいなら何も起こらないだろうが、さらに一週間も経ったら体調が崩れる生徒も出てくるのでは、と予想していた。

シミュレーションルームのドアが開き、羽島こだまが練習を終えて出てきた。この部屋はリモートガンの練習専用の部屋なので、ドアを開けるにはリモートガンのシリアルナンバーを入力すること必要だった。当然、追跡隊に属していない生徒はそんなものを持っていない。

だが、二時間集中して射撃訓練をしたこだまが、もふもふタオルを首にかけて、巻き髪の毛先を整えながら出てくると、廊下に一人の少年が立っていた。見慣れない顔である。もっとも、他の能力系統の生徒とはまず顔を合わす機会がないから、まれに知らない顔とすれ違うことはある。少年はサラサラの髪で、背は低くないが体の線が細く、まるで女の子みたいな雰囲気を持ち主だった。気配が薄い。廊下にいたので話しかけてくるかと思ったが、そんなつもりでもないようだ。

こだまは背を向け、自分の部屋に向かって歩き出す。

「あ、あの……」

後ろから呼び止められた。声は少年からだった。他には誰もいない。

「羽島こだまさんですか？」

「そうですけど、何か？」

「あの、実はちょっと相談したいことがあって……」

少年がそばに近寄ってくる。やわらかい物腰で、少しおどおどしているが嫌みはない。年齢は同じくらいか、もしかすると少し上にも見えた。

「は？ 相談？」

「はい、えっと あっ！」

いきなり少年は何もないところでつまずいて、こだまの胸に飛び込んだ。咄嗟に支えようと思ったが、バランスを崩して足がもつれる。少年はすいませんと言って、さっとこだまの腕をつかんだ。体を動かして火照った腕に、ひんやりした少年の生白くて長い指先がからみつく。

「ごめんなさい、なびいてください」

それが発動の言葉だった。こだまは尻もちをつく。少年も覆いかぶさるように重なった。こだまはきょとんとした顔をして、少年の顔を見て少し照れ臭そうにはにかんだ。くるりとした前髪の間からのぞく小さなおでこにちゃんとスピードのマークが出ている。少年はうまく行つて、よしよしとこだまの髪を撫でた。

「はうっ……！」

こだまは小動物みたいに首をくすめて、顔を赤らめた。倒れて重なったままもまずいので、少年が手を取って起こそうとすると、こだまは首を横に振って断り、いきなり両手を少年の首の後ろに回して瞳を閉じた。ふるりとした唇を近づけていく。少年はあせって手で押えて離れた。

「ちよっ、ちよっ……顔が近いけどそれは早いよ」

「えっ？ えっ、なんで？」

こだまがきゅっと体に抱きつき、すがりついてくる。この近さで見ると本当にいじわるしたいくらいに可愛いが、少年はそういう目的で超能力を使ったわけじゃない。

「なんでじゃないって。とりあえずシミュレーションルームに戻るうか。監視カメラってある？」

「ないよ」

「じゃあ、入れて、番号」

「う……うん。入れる」

ちゃんと立たせると、こだまは素直にドアの数字錠にシリアルナンバーを入れた。少年が左右を確かめて中に入る。念のため天井を見渡すが、監視カメラは見当たらない。当然、こだまも後ろにピツタリ貼りついて来た。ドアが閉まると、こだまがすぐ身を寄せてきて、につこり笑って瞳を閉じるので、少年は距離を置いて落ち着くように命じた。

「この子、大丈夫かな。欲求不満ってやつかなあ」

「ねえ……こつち来てくれないの？」

不満そうに口をとがらせる。部屋の壁に背を預け、ぽんぽんと股のあたりを叩く。

「ごめんね、たぶんそばに行ったら会話にならないよ。僕の『フラグ・セッター』は確実なんだけど、きみの効き目は特にすごいなあ。まあ、仕事がやりやすいからいいか」

「うーん、そこでお話するの？ そっかあ……」

少年はこだまの異様な甘えっぷりを無視して、次々と質問をしていく。

「えっと、きみはハクアを追ってる追跡隊だよな。いま、どんな作戦を立ててるの？」

「ん……あのね、一般生徒にキーパタブレットを配らないようにしたの。隊長がね、外に渡ってる可能性があるって言ってたあ」

「そうか、そこまで読んでるんだ。体調不良になったら医務室へ行
けてことは長期戦にするつもりだね？」

「うん、そうだよお」

「ハクアのいる場所は特定できてる？」

「うーん……まだなの」

こだまは指をくわえてしおれた顔をする。少年は少し安堵し、尋
問を続ける。

「キープタブレットはいつ配布を再開するの？」

「んふふ、そんなの決まってるじゃないよ。ハクアを捕まえたらじゃない
？ 今度こそあたしが捕まえてやるんだからっ！」

こだまは上気した顔で、拳を握りしめてほっぺをふくらませた。

が、少年にまっすぐ見つめられると体の芯がすぐふにやふにや
になってしまう。

「きみはキープタブレットをもらってる？ いま持ってる？」

「うん、もらってるし、持ってるよ」

「見せて」

「ん……えっと、ちょっと待ってねえ」

こだまは隊服のポケットに手を入れ、錠剤が何個も入ったケース
を取り出して見せた。

「それ、もらっよ？」

「うん、いいよ。はいっ、どうぞ」

あっさりタブレットを渡す。

「今日、僕に会ったこと、キープタブレットを渡したことは誰にも
言わないでね。思い出さないでね」

「はい」

「ありがと。じゃあ、イスに座って。お礼に解除してあげるよ」

こだまは言う通りにイスに腰かけた。少年は左手で体に触れ、フ
ラグ・セッターの超能力を解除する。こだまは気を失い、ぐったり
とその場に倒れ込んだ。少年は体を支えてイスの背もたれに託すと、
足早に部屋を出て行った。

少年は廊下に出るなり、人影に注意しながら気配を抑えて歩いた。こだまに使った超能力はマインド系第一段階のフラグ・セッターだった。相手を言いなりにするほどの強い好意を一時的に抱かせるものだ。発動中とその前後の記憶は、解除したときに曖昧になっってしまう。つまり、キープタブレットを持っていた記憶も、渡してしまった記憶もぼんやりする。しかし、ここで命じたことはしばらく記憶に植えつけられるので、念押しで命じておくことは重要だった。とにかく、キープタブレットは手に入った。少年はいつまでこの厳しい状況をしのげるか不安を抱えながら、せわしない気持ちで廊下の突き当たりまで進み、通常のIDカードキーでドアを通った。

トレーニング棟とは隔絶された指令棟のモニター室で、天童将王と薩摩つばさは青白く光る画面を並んで見つめていた。確かにシミュレーションルームに監視カメラは取りつけられていない。だが、部屋に置かれた機器に超小型の隠しカメラを埋め込んであった。キープタブレットの配布を禁止した前日に、天童が校長に承認を得ていたものだった。

「まさか内通者が……このIDはロック系一般生徒の湯田玲ゆた・れいです。

湯田が　コンバインという記録はありません」

つばさはIDの照合結果を確認し報告した。コンバインとは複数能力適格者のことで、二系統以上のメテオドロップを使うことができる者と呼ぶ。天童の知る範囲では、一部の教官と、校長くらいだった。過去には追跡隊にも何人がいたらしいが、いまはいない。天童将王も校長に憧れ、コンバインに憧れたが、それが覚醒するタイミングは年齢的に逃してしまったと思われる。天童は顔を曇らせた。「しかし、湯田がコンバインなのはたぶん間違いないよ。どういう系統か心当たりがない。あとで調べてほしい」

「はい。それにしても、人を言いなりにさせるなんて……トータル・クリエイトの概念では考えにくい、得体の知れない超能力ですね」

「校長が、少しそういう方向に何か心当たりがあると言ってた。あとで相談に行くよ。問題は、湯田はこだまから聞き出した作戦を誰に伝えるか、だ」

「寺野ハクア……とは考えにくいですね」

「きみの報告では、敵グループには何の通信回線も使わず、遠隔で話す能力を持っているやつがいるんだったな。たぶんそいつがリーダー格だろう。湯田は校内の状況を報告してたんだ。こだまがシミュレーションルームに出入りしているのを見れば、当然、俺の部隊は内密にキープタブレットをもらっていると考えるだろうな」

「隠しカメラをあの部屋に取りつけもらって正解でしたね」

つばさは天童の先見性に感動する。

「こだまと紅花にはこのことは伏せておく。まだ向こうに『バレてない』と思わせたい」

天童は一層険しい顔つきになった。仲間内でも情報を出し分けすることは時に必要だ。こだまをおとりに使ったのは事実だが、こだまがそのまま知ると落胆するのは間違いなくて、さすがにそれはつらかった。

「それと、湯田とは常に距離を取るように。きみから情報が漏れたら大変だ。きみはいろいろ知っている。ハクアの友人の家まで特定しているのもバレるとまずい」

「はい、もちろんです」

つばさは深く頷く。いくら超能力のせいとは言え、あんなあられもない恥ずかしい姿を天童に見せるわけにはいかない。

「抜け穴が特定できただけでも大きな収穫だ。こだまに感謝だな。本人に言えないのが残念だけど、ちゃんと仇は討たせてやるぞ」

天童は隠しカメラのモニター越しに、ようやく気を取り戻した少女へ言葉を送った。

第13話 『過去の答えとチエリータルト』 2/2 (前書き)

キャラクター紹介はこちらにあります。漫画つばいイラストが大丈夫な方はぜひ。

<http://www.geocities.jp/sleepdog550/novel/hakua/hakua|chara.html>

次回は3/27(日)更新予定です。

第13話 『過去の答えとチェリータルト』 2 / 2

校長室の前で、天童将王はひとつ深呼吸をした。隊服の襟をきちんと正す。いつも身なりは整えているが、ここに来ると一段と気が引き締まる。IDカードをかざし、網膜認証も行い、ロックを解いた。

ドアを開けると、女性秘書が二人座っている。「天童くん、こんにちはあ」とにこやかに微笑みかけてくれるが、今日は笑顔を返す心境ではなかった。内通者発見のこと、作戦変更のこと、頭の中は困惑と疑心で満ちていた。こういうとき、校長と隊長という立場を超えて、一番信頼できる人に会いに来るしかなかった。

「入ります」

「はい、どうぞ」

女性秘書の一人が手元のスイッチを押すと、横のドアが開いた。もう一人の女性秘書が声をかけてくる。

「ケーキは何がいい？」

「……じゃあ、さくらんぼのを」

「天童くん、それ好きよね」

「お願いします」

天童は二人の秘書に頭を下げ、校長室の中に入った。天井がものすごく高く、奥行きも相当ある巨大な扇状の部屋である。扇の要の部分に玉座があり、校長が威風堂々と座っている。校長室は、西洋の城にある謁見の間をイメージして作られたと聞いたことがある。廊下と受付を通ってここに出ると、世界が一気に広がった感覚を受ける。

玉座まではゆるやかな階段があり、天童は一步一步落ち着いて向かっていく。校長は肩肘をつきながら、巨大スクリーンに映る将棋番組を見ていた。若い棋士二人の対戦を、美人女流棋士が解説している。

「どうした？ あれは順調か？」

「……重要な報告があります」

「ほう、物々しいな」

てんどう・げんべえ

校長の名は天童源兵衛と言う。校長は将王の血縁、つまり祖父であった。源兵衛は上等な紺の羽織袴を着て、見事なほどに気品ある象牙色の髪で、老齢にもかかわらず背中までの長さがあり、あごひげも同じ色で絹糸のように長くまっすぐ伸びている。玉座の左手にオシドリというカモの飾りが取りつけられており、その丸い頭を手のひらで撫でながら話するのが長年の習性だった。

源兵衛が手元のリモコンを操作すると、目の前の床が左右に開き、きらびやかな西洋装飾の美しいテーブルとイスが下からせり上がってきた。真珠のように輝くシルクのテーブルクロスがかかっており、まるでここで国際条約でも結ばれるかのような荘厳な雰囲気だ。そして、スクリーンに映る将棋番組をリモコンで消し、将王との話に集中することにした。

将王はイスに座り、源兵衛の眼差しを一身に浴びた。源兵衛は玉座からは動かない。女性秘書が熱いほうじ茶二つとチェリータルトを持ってきて、お茶の一つは源兵衛の脇に、もう一つはチェリータルトと一緒に将王の前に置き、静かに部屋を出て行った。

源兵衛は熱い茶をすする。

「お前はさくらんぼの洋菓子が好きだな」

「母がよく作ってくれたので。これとは……少し味が違います」

将王も熱い茶に口をつけた。気持ち安らぐ。

源兵衛は祖父だが、一緒に暮らしてはいない。肉親と言っても、訓練学校の最高責任者と寝食をともにすることはできないのだ。しかも、将王は身近に両親がいなかった。源兵衛の子供は娘一人しかいなかった。それが将王の母である。訓練学校の優秀な教官の男性と結婚し、将王と紅花が生まれた。

メテオドロップの覚醒は実際のところ血縁とは関係ない。一般人

の子供が突然変異みたいに適性を持つのが普通で、逆に適格者の子供がみんな適格者になるかと言うと、それはほとんどない。ただし、必ずメテオドロップ適格者を生む家系があった。それが天童家である。ちなみに将王の母は、違う系統のメテオドロップを持っていた。

だが、二年前、天童家は思いもしない悲惨な事件に見舞われた。ある超能力者が紅花を人質にして学校から脱走したことが始まりだった。両親は紅花を奪還すべく追跡したが、反撃に遭って捕虜となり、両手を拘束されメテオドロップを使えない状態で監禁されたため、植物状態に陥った。仲間によって救出されたときは、もう完全に手遅れだったのだ。紅花もあと一步のところで同じようになるところだったが、状態変化に個人差があり、ギリギリ間に合ったらしい。

逃亡者は捕まったが、両親は専門病院でいまでも治療を受けている。治るめどは立っていない。メテオドロップを長期間発動しないことによる植物状態化もまだよく解明されていないのである。治療を指示したのは当然、源兵衛であった。

たった二年前のことだ。超能力者を追跡することはそれだけの危険を伴う。相手がメテオドロップのことを知っていれば、より必然的な手を打ってくるのだ。

だが、将王は悲嘆を跳ねのけるような鉄の意志と覚悟を持ち、追跡隊への入隊を志願した。妹の紅花も兄の背中を追うように願い出た。それを承認したのも当然、源兵衛である。副校長や、父親の同僚である教官たちは反対はしたが、源兵衛の考えはまったく揺らがなかったと聞いている。

いま、将王と紅花は一般生徒よりも少し広い部屋が与えられ、給仕の女性が生活を面倒見ている。もっとも、将王は朝早くから訓練学校で模範生のように勉強やトレーニングに励み、この二年のうちに新しく開発されたりモートガンも早々に習得した。紅花も使いたがったが、これは手首に衝撃を受けるので、紅花の年齢ではまだ許可されていない。

将王はリモートガンを初めて使ったとき、これからは近接戦闘でなく、一定距離を置いた戦闘になると強く感じた。そして、リモートガンが扱える者を校内から選び抜き、自分の追跡隊を結成した。それが、薩摩つばさと羽島こだまであった。それを報告に行ったとき、源兵衛にその人数でいいのかと聞かれたが、将王は胸を張って答えた。

少数でいい。得るものは少しずつでも、失うものは少ないほうがいいと。

源兵衛は湯飲みを置き、愛する孫の深刻な顔つきを見やった。将王からの報告を聞き終わったのだ。

「なるほど、やはり内通者がいたか」

「……校長の予測は当たりました。両方同時に捕えなければいけないと思っています」

二人の間に少しの沈黙があった。

それから、先に口を開いたのは源兵衛であった。

「天童隊長、もう一度、昔と同じことを聞くが、得ようとするものが大きいときでも、やはり少数にこだわるのか？」

源兵衛は将王のことを天童隊長と呼ぶ。いまはその言葉が重かった。

「一度にすべてを失ったら終わりです。何かあったら、救援をお願いします」

将王は深々と頭を下げた。源兵衛は息を飲む。

これは、将王からの出征の挨拶なのだ。

「そうか、お前は歴史が好きだったな。だから、過去によく学ぶ。しかし、すべての答えが過去にあるとは限らんぞ」

源兵衛は少し声を大きくした。脅すつもりはなかったが、それでも自分の孫を戦地へ送り出すことは、心臓を神の手のひらに載せるようなものだった。神はこれをどう扱うか、いかなる知恵で最善の計略を巡らしても、望む結果と望まない結果はおそらく紙一重であ

ろう。

将王もそれは十分予期している。輪郭を捕えた相手は、もはやただ一人の脱走少女でなく、大きな潜伏組織なのだ。二年前のことは何度も悪夢のように蘇る。迷いを断ち切るように、リモートガンホルダーから抜いて、テーブルの上に置いた。

「この銃が作られて、戦い方は過去と同じでなくなっただと思います。そして、この左手の使い方も」

そこで言葉が詰まった。うつむいて唇を噛む。校長室に来るまでに固めたはずの決意に不安の波が押し寄せ、ぐらぐらと入り混じり、思考が止まってしまう。出直そうか。いや、ここで躊躇ったら同じことだ。両親の事件は過去だが、いまは過去を塗り替えるべきときだ。

源兵衛はその様子を見て玉座から立ち上がった。年輪のようにしわが刻まれて血管の浮きたった肉厚の右手を差し伸べる。

「過去に答えがなくなるとも、ここに家族がある」

将王はハッと顔を上げる。

「いいか、絶対に無事に帰ってこい、将王」

「はいっ！」

温かい肉親の手を握り締める。

「作戦を変えたいと言ったな。よからう。では、わしの考えを伝えよう。そいつを食べながら聞きなさい」

源兵衛に言われて、将王はチェリータルトを見つめた。楽しそうにキッチンに立っていた母の面影をまた少し思い出すと、自分がこの戦いで取り戻そうとしているものをようやく知った気がした。

湯田は自室に入り、机の上から青いペンを取ると、すぐベッドに潜り込み布団をかぶった。部屋天井には防犯カメラが必ず一台取りつけてあるのだ。布団で身を隠した状態で、キーパブレットのケースから二粒取り出し、つばで飲み込んだ。熱い溜め息が漏れる。

ケースの裏に青いペンで×印を書く。入手困難な状況は続いているが、自分の正体は誰も疑っていない。そう伝えるシユタインへの暗号だ。布団の下から封筒を取り出し、宛名を書いた。インクの臭いが布団にこもるので、湯田はキャップを閉めた。

夕方まで静かに部屋で待ち、訓練生がみんな食堂へ向かう時刻になったところで、湯田は部屋を出た。廊下を歩く数名の訓練生はさすがにみんな表情が暗くなっている。キープタブレットの配布を止められているから、体調が良くないのだ。生徒から不満が出ないのは、校長の決定だからである。だが、限界が来る生徒がどんどん増えるだろう。校長はいずれこれを解くに違いない、と湯田を含めてみんな考えていた。

湯田は食堂の前を通り過ぎ、食糧貯蔵室の前にこっそり来た。ここには外部の食糧配達センターのトラックが週に一回、特別に入ってくる場所だ。もちろん、訓練学校とは守秘契約を交わしているはずだ。

貯蔵庫のドアに鍵はかかっているが、湯田はロック系第一段階の超能力「クイック・オープン」を発動し、あっさりとドアを開けた。ここを通ると、その先のトラック搬入口まで人目に触れずに通り抜けられるのだ。足音を立てないように注意し、ひんやりした貯蔵庫を慎重に進み、配達トラックを発見する。トラック運転手が荷物を下ろしはじめたところだ。湯田は柵の後ろに潜んで様子を見る。

運転手が両手で台車を押しながらやってくる。湯田の隠れた場所を通り過ぎる。低姿勢でさつと背後に回り、運転手の背に右手を当てる。

「ごめんなさい、今日もなびいてください」

一瞬で発動すると、運転手は悲鳴もあげることなく、くるりと振り向いた。おでこにスピードのマークが出ている。大丈夫だ、今日も抜かりはない。湯田はポケットに入れてきた封筒を渡した。

これは二重の封筒になっている。外側は配達センターが業務用に使う封筒を何枚ももらったうちの一枚だ。以前、この能力で運転手

を言いなりにして手に入れた。そして、内側に入っている小さな封筒には笹ヶ瀬姻戚相談所の住所が書いてあり、切手も貼ってある。この中に、こだまから奪ったキープレートを入れてあった。

「えっ、この手紙は　なになに、なんなの？　俺に？」

運転手は決まってこの反応をする。体格のいい作業着のおじさんだ。配達センターの帽子的下はにこやかで、湯田を見つめる目はトロンとしている。

「ごめんなさい。帰る途中で、外側の封筒を開けて、中の封筒を開けずにポストに入れてください。お願いします」

湯田は要件を言っすぐその場を離れようとしたが、いつものように手をつかまれた。バレたわけではない。向こうが名残惜しいのだ。運転手は容赦なく間を詰めてくる。

「うんっ。おじさん、ちゃんと言うこと聞くからね！」

あごひげが伝染しそうなほど頬ずりしたがるのを懸命に食い止める。毎度のことだ。

「ちよっ、ちよっ……顔が近い！　汗臭いって。早く仕事に戻ってよお」

戻ってくれないと学校の警備員が怪しむのだ。命じると、素直に運転手は仕事に戻ってくれた。湯田はほっと息をつく。

本当は早く貯蔵庫を出たいところだが、湯田は念のため配達トラックが外へ出ていくのを見届けた。シャッターが完全に閉まる。緊張を解き、一安心した。

「とりあえず、これで一ヶ月は持つかなあ。その前に学校が配布を解禁するはずだ」

タツヤたちとの通信が断たれて、一週間以上が経ち、ハクアは部屋にこもりがちになった。口数も、食事の量も一気に減ってしまった。カボチたちは口を揃えて心配したが、シュタインは「構うな」と一言メンバーに伝え、それ以上何もしなかった。

ハクアはベッドに寝転がり、退屈で不安な時間をひたすら過ごした。本当にこのままずっと通信がないままなのか。シュタインはタツヤたちとの関係に賛成でなかった。一般人の友達に超能力のことを話したことも、面倒くさそうに言っていた。そのうち再開するというシュタインの言葉を信じていいのか。考えれば考えるほど、タツヤたちと話したい気持ちが増え重くなった。

超能力の訓練を禁止されていることも、ハクアにとっては大きなストレスだった。精神的に苦しいものもあるが、やはり能力を使わないと体の調子がどんどん悪くなるのだ。すでに指先が麻痺してきている。訓練学校で能力禁止がどれくらい持つかテストされたことがあったが、ハクアは他の生徒よりも体調悪化がずっと早かった。ただ、その結果は教官がカルテをつけるだけで、ハクアがそう知らされたわけではなかった。

だから、同じく能力禁止されているメンバーが平然としているのが、ハクアには不思議で仕方なかった。逆に、メンバーはそんなに早くハクアに体調変化が出たとも想像していなかった。

ハクアは苛立ちが高まり、何度も勝手に能力を発動しようかとも考えた。だが、フォーエス系はエリア系などと違って、相手がいないと発動できないのだ。相手はメンバーしかいないが、内緒で発動できるわけもない。それと、最初はタブレットが三粒もらえたのに、今週は一粒だけになった。シュタインの説明では、能力を使った後の拡散波長を抑えるのは、一粒では足りないらしい。だから、能力発動は禁止だ、と。

とにかく、何かおかしい。そうハクアは全身でそう感じていた。自分は騙されているのではないか。ハクア自身も無意識のうちに、そつという結論に達してしまっていた。

翌朝、ハクアはシュタインの部屋の前で待ち、出てきたばかりのシュタインに詰め寄った。

「頼む、能力を使わせて！ これ以上は限界だ！」

シュタインは虚を突かれて、質問の意図を取り違えた。ハクアがパスチェッカーを使って友達と話したいと懇願したのかと思った。ただ、すぐに別の意味も考えたが、ハクアがウズウズして訓練しなくなった程度に思った。一週間でこんな禁断症状が出るなど頭になかった。

「ダメだ。まだ我慢しろ」

シュタインはハクアを押しつけて廊下に出ようとする。その瞬間、ハクアのヒューズが飛んだ。咄嗟にハクアは狂った野犬のように飛びかかり、レンタルフォースを発動し、脚力を奪い、空いたままのドアをくぐって部屋の中へ飛び込んだ。部屋の中にタブレットがあると考えたのだ。

「ぐあっ！」

意表を突かれてその場にしゃがみ込んだシュタインは、必死で手を伸ばしたが、ハクアにあと少し届かなかった。そのハクアはすごい形相で机の上の物を引っかかり回している。

「ごめん、本当につらいんだ！」

タブレットを探していると理解した。すぐ見つかる場所には入れてないが、勝手に荒らされるわけにはいかない。だが、足にはまるで力が入らない。これがマリネも食らったレンタルフォースか。シュタインはリビングに向かって大声で叫んだ。

「誰かハクアを止める！ 薬を奪われる！」

ハクアは机の上にないとわかって、本棚を片っ端から漁りはじめていた。きれいに整理した本や書類が無残に床へ落ちていく。シュタインは床に力いっぱい拳を打ちつけた。

「シュタイン！ どうしたの？！」

廊下からカボチとブッシュが駆け寄ってくる。戸口に倒れたシュタインの姿を見て、二人は騒々しい室内を見た。ハクアが半狂乱で棚の中身を次々と床にまき散らしていた。

カボチがハクアの名を叫ぶと、動物みたいに振り返った。だが、ハクアの血走った視線はシュタインを見ていた。その瞬間、シュタ

インはこの事態を收拾する方法を考えついた。

「おい、ハクア！ タブレットは俺の白衣のポケットだ！」

もちろん嘘だった。だが、ハクアはその言葉を単純に信じて突進してくる。

「悪いが、二人ともあれを止めてくれ。能力を許可する！」

ブッシュは苦渋の表情で戦闘スタイルに身構えた。と、その数歩前にカボチが躍り出た。

「ここは私が止めるわ。馬鹿ハクア」

カボチは身をかめ、右手を床につけた。

「もう、これ以上かばいきれないよ！ 戻って！」

発動条件の言葉だった。ハクアはカボチを障害物みたいに飛び越えようとする。ところが、ハクアの体は空中で一瞬だけ静止し、元来た方向へ吹き飛んだ。棚に背中を強打する。大きく棚が揺れて、中身がいくつかにばれ落ちた。

「初めて見せるよね。これがライン系第一段階『ブーメラン・ストリーム』。こっちに向かってきたものを、全部逆方向に跳ね返すの」

ハクアは身を起こす。カボチの話を聞いていたか、いなかったか。パニック状態のまま、足元に落ちていた厚い本や重いファイルをいくつかに投げつけた。カボチは血相を変えた。

「ハクア、抵抗するんじゃないよ！ あんたにぶつけないんだって！」

カボチは能力を第二段階へ切り換える。投げられた本やファイルは、カボチの発動範囲に入ると、天井へ打ち上がった。ライン系第二段階『ボンフライ』は当たったものをすべて猛スピードで上方へ吹き飛ばすものだった。天井に当たった物がボトボトと床に落下する。

このとき、カボチは能力を見せつけられれば、ハクアは静かになると考えていた。だが、それは甘かった。ハクアは投げた物をおとりとして、同時に走り出していた。しかも、第一段階のときに自分の体が逆方向へ戻されたことで、カボチの能力を瞬時に理解し、投げた

物が跳ね返っても当たらぬように少し弧を描いて、カボチの横を一気に通り過ぎようとした。シュタインだけをまっしぐらに目指していたのだ。

「鳴り響け！」

ブツシュは発動条件を言い放つ。カボチの背後から現れ、右腕を突き出した。カボチもシュタインも咄嗟に耳をふさぐ。ブツシュの右手から凄まじい爆音が全方位に放出される。無防備なハクアは耳鳴りに急襲された。我慢できず足が止まる。ブツシュはさらに追い打ちで、よろけたハクアの腕をつかみ、腕から爆音を一気に送り込んだ。ハクアのおでこにハートマークのあざが浮き出る。

「うあああつ！ ああ、あああつ！！」

ブツシュのハート系能力第一段階『パラノイズ』は周囲数キロの騒音を微量ずつ吸い寄せ、右手に集中させて放出するものだった。なぜ騒音をハート系と言うかはブツシュ自身もよく知らないが、アザのマークがそうなのだ。そして、騒音の結集した右手で敵の体に触れれば、相手の頭のなかに騒音が鳴り響く。逆に周囲は静かになる。

室内の音が止み、ハクアが耳を押えて苦しみ続けている。ブツシュが体に直接攻撃したので、足止めでなく本気でハクアを失神させようとしているとシュタインは察知した。

「ブツシュ、もうよせ！」

シュタインの声で我に返ったブツシュは、慌てて左手で解除した。ぐったりとしたハクアは、力なくその場に崩れ落ちた。衝撃に耐えきれず、気を失ってしまったようだ。ブツシュは顔にひどく汗をかき、苦悶の顔つきをしていた。仲間に関心したことは一度もなかったのだ。

倒れたハクアにカボチが駆け寄る。

「ハクア、大丈夫？ ねえ、大丈夫っ？！」

カボチは必死で声をかけるが、強烈な制裁をしたブツシュを責めることはしなかった。自分自身がハクアの動きを一瞬見失ったこと

で、ブツシュが手を出さざるを得なかったのだ。シュタインが能力発動を許可したことで、ハクアがこういう形で止められることは予想できていた。ハクアの突進でなく、この結果を防ぐつもりだったのに、カボチはハクアをゆっくり抱きかかえ、胸のうちに謝罪した。

ブツシュはシュタインに肩を貸す。興奮は静まっていた。

「ハクアはこれ以上放っておくと危険だな。……隔離するか？」

温和なブツシュとは思えない冷徹な提案だった。シュタインは、自分が何かあつたら頼むと伝えたことを少し頼もしく、そして恐ろしく思った。いや、もともと強力なメテオドロップを持つブツシュは、攻撃的な性質を奥底に隠していただけなのかもしれない。ともあれ、リーダーに牙を向いたハクアの処遇を決めなければいけなかった。

「いや……ハクアも能力を使ったから少し落ち着くだろう。ハクアは“燃費”が悪いのかもしれない。もう少し事情を聞く必要があるな」

「だけど、また暴走するかもしれないぞ。いいのか？」

シュタインの甘さをとがめるように、ブツシュが言い返した。滅茶苦茶に散らばった室内を見渡す。確かに、ハクアは行くときは振り切れるまで行ってしまう。その力が外敵に向かうのならば心強いが、ノイローゼ状態から仲間に向かったときは暴風雨としか表現しようがなかった。やはり、自由を奪わなければならない。シュタインは決断した。

「両手を縛ろう」

カボチが驚きの目で訴えた。

「シュタイン、そんなの止めて！ちゃんと話せばハクアもわかるよ！」

その膝の上でハクアはうわ言を漏らした。

「みんな……たっつん……」

三人は静かに息を飲む。

「……会いたいよ……帰りたいよ……」

カボチは不意に涙ぐむ。なんと言っていていいか分からなかった。きつと外の世界はハクアにとって楽しくて平和な時間だったのだと思う。そして、普通の友達と同じ時間が流れていたのだと思う。ここは時間が止まっている。シュタインのおかげで、不便は何もない。だけど、友達に会うなんていう当たり前のこともできない不自由な場所。

憎むべきは、齒向かったハクアじゃないはずだ。ハクアだって同じ犠牲者だ。普通の世界で、普通に暮らす権利を奪われたのだ。メテオドロップの適格者になって増えた幸せなんか一つもない。幸せを呼ぶ神様はここにいるメンバー全員を船から投げ捨てたのだ。何のために。どうして。自分たちが。

「わかった、縛ろう。シュタインは俺たちのリーダーだ」

ブッシュが同意した。であれば、この地下組織では決定事項だ。カボチは肩を揺らして涙をこぼした。悔しくて声も出なかった。

戸口で足音がする。

「……あのさあ。遅れちゃってごめんなさい」

ひらひらしたネグリジェ姿のマリネが眠たそうにドアのそばに立っていた。二本の傘は持たず、見事に手ぶらだった。

「マリネ、これは」

シュタインが説明しようとする。足の力が抜け、ブッシュに肩を借りている姿をマリネは見た。リーダーのおでこに肉球マークのあざが浮き出ている。

「ああー。うん、見たら大体わかるよ。さっきのも聞こえたし」

マリネはカボチのそばに歩いてきて、背中からぎゅっと抱き締めた。カボチは真っ赤に腫らした目を閉じる。マリネの胸の中で、嗚咽が少し漏れた。

「でもさ、ハクアという異分子を受け入れた仲間として言わせてよ」
マリネはシュタインの目を直視した。

「こんな小さな世界で、仲間を隔離するとか、手を縛るとか……見苦しいわね。特定されたって戦えばいいじゃない。あなたたち攻められたら勝つ自信がないの？」『ブレイクチェイサー』は名前だけ？ 名前をつけたのは誰？」

すると、カボチは何かに解き放たれたように泣き出した。マリネは微笑み、んーんーよしよし、とやさしく髪を撫でた。シュタインもブツシュも完全に黙り込んでいる。マリネはゆっくり立ち上がる。「あとさ、悪いけど、今週もらった薬、微妙に味が違うわ。確かめようがないけど、偽物の可能性があるわよ」

「なっ なんだと？」

突然シュタインの顔色が変わった。そんな情報はユダから入って来ていない。まさか、あっちも騙されているというのか。

「シュタイン、あなた、もう一度ちゃんと作戦考えなさいよ。飼犬に噛まれて気分が悪いのはわかるけど、中より外を見なさい。わたしたちはいま攻撃を受けているの。ここで仲間をつぶすタイミング？」

眉間にしわを寄せ、シュタインは首を横に振った。

「……悪かった。どの道、タブレットがもし偽物ならここは特定されるな。やつらが踏み込んでくることを想定した戦略に変えよう。ブツシュ、カボチ、異論はないな？」

ブツシュは同意を伝えた。ただ、それ以上の言葉はなかった。

カボチも頷く。膝の上で、ハクアはまだ目覚めないが、乱れた前髪を少し整えてあげると、少しずつ安らかな表情に戻りつつあるのが見えた。

「そうよ、わたしたちは負けないわ。だって、こんな場所だって自由はとっても気持ちいいもの」

マリネは軽やかに弾んで笑った。ネグリジエがふわりと揺れて、キッチンからヤカンの湯が沸騰した音がかすかに聞こえてきた。

第14話 『男の意志とビーフコロッケ』 1 / 2

マリネの言葉によって室内の雰囲気は落ち着いていたが、ハクアは床に倒れたまま、まだ目を覚まさなかった。

ブッシュは足の力が抜けたシュタインの肩を支えつつも、あらためて自分がやってしまったハクアの姿を見ると、青ざめた顔で唇を震わせた。アジトでは、能力を訓練で発動したことはあっても、人に向けたことはほとんどない。いつも穏健なブッシュの変貌ぶりを見ると、シュタインはハクアを本気で止めると命じた自分にも責任を感じた。

「……マリネ、カボチ」

二人を呼び、ハクアを部屋に連れて行ってくれと頼んだ。

その後、シュタインはイスに座り、机の上に白い紙を広げ、キーブタブレットを置いた。ブッシュは憔悴した表情で壁に寄りかかり、それをぼんやり眺めている。マリネもカボチもシュタインの部屋にまた戻ってきてデスクを囲んだ。マリネは説明する。

「表面はいつもの味でコーティングされてるんだけど、中身の味がおかしいの」

シュタインはカッターの刃をタブレットの溝に当て、力を入れて二つに割った。きれいに砕けて、粉末状の欠片がこぼれ散る。シュタインは表面と断面の味を比べてみた。

「確かに 言われるとそんな気もするが、俺には違いがはっきりしない。カボチはどうだ？」

「えっ、あ、うん」

急に指名されたカボチは驚き、小さな指で欠片をつまんで舐める。表面と断面の味は微妙に違う気がする。

「うーん、何か違うかも……。マリねえみたいに舌が敏感じゃないけど」

「ちょっと、どういう意味よ」

マリネはふくれっ面をする。で、いつもならブツシュが横から茶化してくるところだが、今は恐いくらい静かだった。

最終的にシユタインが決断を下した。

「わかった。入手元に確認しよう。少し時間がかかるから、ひとまずみんな部屋を出てくれるか」

「あつ、そう。それじゃあ力ボチ、朝食をお願い」

「え？ た、食べるの？」

「食べるわよ。お腹空いてるんだから」

二人は廊下に出る。後ろから亡霊みたいにブツシュもついてくる。力ボチは困惑して眉をひそめた。

「でも、一時間後にはお昼だよ」

「それも食べるわ」

部屋に一人になったシユタインは、やむを得ずパスチェッカーを使い、ユダのいるところに接続し、コンコンと合図を送った。すぐ出られなければ後にしようと考えていたが、意外にもすぐ『はい、大丈夫です』と小声で返答があった。

「キープタブレットが偽物の可能性がある」

少し沈黙があった。

『……なるほど』

「確かめられるか？」

『すいません、確かめる方法はわかりません。聞き出すのも難しいです……』

そして、ユダは現在の一般生徒配布禁止の状況と、今回どうやって入手したかをシユタインに説明した。なるほど、追跡隊のメンバーから奪ったものなら偽物の可能性が低いだろうと思うのだが、仲間の二人が違うと証言している以上、疑いは捨てられない。確かめる方法がなく、一般配布の再開予定が見えないとなれば、すぐ別の

回避方法に動いたほうが良いとも思えた。

「ありがとう。これで終わる」

『どうかご無事で』

「ああ、そっちも」

通信を終了し、今後のことを考えはじめると、シュタインの足に力が戻った。ハクアの超能力の時間が切れたのだ。

シュタイン、あなた、もう一度ちゃんと作戦考えなさいよ。

マリネの言う通りだ。ふう、と熱く苦しい溜め息を漏らす。

そのとき、廊下側のドアをノックする音がした。開けると、豆のいい香りが立ちこめる。ホットコーヒーをトレイに載せたカボチだった。

「あの、そろそろコーヒーが欲しいかなあ、って。あと……お部屋の片付けに来ました」

部屋はハクアの暴走でメチャクチャになったままだった。カボチの和やかな笑顔を見ると何だか急にほっとする。

「助かるよ。入って」

「はいっ」

カボチはコーヒーをカップに注ぐと、机にトレイを置いた後、床に散らかった本やファイルをせつせと棚に戻しはじめた。シュタインは休んで申し訳ないと思いながら、テキパキと片づける姿をぼんやり眺めていた。視線に気づき、カボチは気恥ずかしそうに振り返る。

「シュタインさん」

「……あ、ごめん、俺もやるよ」

「ううん、いいんです。シュタインさんは一服して、じっくり考えてください」

カボチのやわらかい声が胸の奥まで響いてくる。

「あの　マリねえはあんなふうに言いましたけど、みんなが本気で頼れるのはシュタインさんだけです。お願いです。普通の子とは違う、わたしたちの未来を守ってください」

未来。こんな小さな世界でも、未来という言葉が生まれるのだ。
淹れたての熱いコーヒーをぐっと飲む。体の中が熱くなる。

「ああ、約束する」

「わたし、シユタインさんのコーヒー飲んだところ、好きですよ」
カボチは少しはにかむと、照れ臭そうに目を逸らし、また小さな
手で周りの本を取って重ねた。

タツヤは昼食が終わり、部屋に入って聡里に二度目の電話をかけ
た。一度目は朝だったが、受付の人が出て、「先生はまだ来てませ
んの……」と言われた。それで午後にかけて直したのだ。アジトの
状況を聞きたかった。

電話には聡里が直接出た。タツヤは子供のいたずら電話と思われ
ないようにすぐ名乗った。

「あつ、タツヤくん？ あれ、電話番号教えたっけ？」

驚いているのは無理もない。

「電話帳で調べました」

「そうなんだ。……あなた、ほんと頭いいのね。小学生とは思えな
いわ」

「そんなことより、ハクアに連絡したいことがあるんですが、でき
なくて困ってるんです」

「えっ？ そうなの？」

電話の向こうで戸惑う反応。

「……あの、シユタインさんから聞いてないですか？」

「いや、ハクアのことはあの人に任せてるから」

タツヤはすぐに状況を話した。先週一方的に通信中止を言われた
こと、それから一週間経ったがまだ再開されないこと。昨日は夏休
み中の登校日だったが、ハクアが無断で休み、先生も心配していた
こと。

追跡隊に狙われている状況なので休むのはわかるが、誰も休むと

聞いていなかったのだ。そこで不安が走った。放課後、希とアランに相談して、タツヤが聡里に電話することになったのだ。

「登校日か」

聡里がつぶやいた。その口ぶりは、やはりハクアの状況を多少知っているような感じだった。

「先生が心配してます」

タツヤは強引な言い方をせず、少し聡里をあせらせるように話した。実は、ハクアは前に超能力を使いすぎて体が動かなくなり、勝手に休んだことがあるので、本当は晴海先生もそんなに心配していなかったが、下手な演技をしてでも、聡里から少しでもハクアの情報を聞きたかったのだ。それと、聡里が困って電話を切り上げてしまう前に、これをどうしても確かめておきたかった。

「シュタインさんたちはまだあの場所ですよ」

「ええ、そうよ」

それは迷いなく即答だった。

「先生が心配していたことを伝えてほしいんです」

「……わかった。シュタインに連絡するわ。ごめん、みんなとの通信についてはシュタインからの再開を待つてね」

ごめん という言葉が胸をチクリと差す。何か悪いことがないと口に出さない気がするのだ。とにかく、聡里はこれで話を終わらせようとしている感じだった。

「どこか具合が悪くなったのか、僕たちも心配しています」

「ううん、そんなふうな連絡は来てないよ」

「してないだけでもいいよ」

「……タツヤくん」

聡里の語気が少し陰しくなる。

「すいません。あの、通信再開を待ってます。お願いします」

タツヤは胸に湧き上がる感情を抑え、通話を切った。そして、すぐに聡里との電話内容を希とアランの携帯にメールした。二人ともすぐ返答があった。

『朱鳥くん　ありがとう　聡里さんも知らなかったのは気になるね
…』

『ありがとな。少し安心した。でも、お前の心配はわかる。俺も協力するから』

タツヤは二人に対し「少し考える」と短く返信すると、強張った体を伸ばそうとベッドに寝転んだ。一応、シュタインがあそこにいるのなら、ハクアも一緒のはずだ。

ただ、シュタインが聡里と通信していないのは不思議だった。タツヤは考える。

例えば　もしかして、パステッカーを使えないから通信中止になったとか。アジトに入ったとき、シュタインは超能力を使うと拡散波長が出るからタブレットを飲めとハクアに渡したのを思い出す。だったら、ハクアが来てタブレットが足りなくなったとか、そんな理由で追跡隊にアジトを発見されそうになってるんじゃないだろうか。

ハクアの安全は本当に大丈夫なのか。ハクアと通信できないと確かな理由がわからない。聡里も一方的な通信中止について悩んでいる様子だった。

それと、もうひとつ気づいたことがある。聡里は、学校の先生を理由にされると態度が変わったのだ。もう少し普通にハクアと会える可能性があるのではないか。

胸に溜まったものを吐き出したい。誰かに強く背中を押してもらいたい。力が欲しい。希望の光を自分でつかむ力が欲しかった。

聡里は受話器を置き、壁にかかった天狗の面を見た。朱鳥タツヤの勘の鋭さを少し甘く見ていた。登校日か。夏休みなのに、そんな

のがあったんだな。担任に電話を一本しておくべきだった。

ハクアの保護契約を交わした後、シュタインには「自分たちは一般人とは別物だと認識してくれ、ハクアも同じだ」と強く釘を刺されていた。それを理解したつもりでいた。だが、朱鳥タツヤという少年は、ハクアのことをあそこまで深く考え、これからも行動をとりにしようと思っている。その強い意志が、電話をするほんの短い時間だけでも十分伝わってきた。

してないだけかもしれません。

聡里は脱力し、着物の裾を整えながら、ソファに身を沈めた。

先週シュタインから連絡があったのだ。内容は、キープタブレットの入手に異変が起こり、新しい潜伏先への移動を考えたいから候補を探してくれ。まだ様子見中だが、パステッカーの使用は控える、というものだった。

知らないふりをしたことで、きつとタツヤたちの疑いを深めただろう。だが、知っていると言ったら、あの子たちは自分を敵と見なして、三人で無茶な行動に出ていたかもしれない。味方として留める側にいるにはああ言うしかなかった。

こちらの少女少女たちは何とか説得するしかない。だが、一方でハクアは大人しくシュタインに従うか疑問だ。もはや、すべてがうまくいく道は残されていない。誰も傷つかない、誰も裏切らない解決なんて探しても見つからない。

聡里も悩みに悩んで、答えを出した。

つまりは　ハクアとハクア応援団を分離させることが一番小さい犠牲なのだ。

これは聡里の独断ではない。契約主である養父の承認も得ている。ハクア、タツヤ、お願いもう抵抗しないで……。一生懸命待ち望んでいる未来はもう実現してあげられない。

そのとき、コンコンと天狗の面からノックする音が鳴った。

「はい、大丈夫よ！」

受付を兼ねた事務の女性は少し遅めの昼食に出かけていた。

『聡里さん、状況が変わった』

久しぶりに聞くシュタインの声。

「えっ……どっちに？」

『悪いほうにだ。今から説明する』

本当は聞き返すまでもなかった。シュタインの険しい声がすべてを物語っていた。

午後、訓練学校の会議棟の一室で、天童将王はつばさと極秘会議を行った。こだま、紅花はトレーニング棟の室内プールあたりで泳いでいるはずだ。天童は、こだまの体調はもう問題ないと医務官から報告を受けていた。

つばさは自分だけ呼ばれた意味を察した。ちなみに、つばさの肩にはいつも通り南国九官鳥のデングロクが乗っている。

天童は要件を伝える前に、テーブルに緑黄色まんじゅうという謎の食べ物を置いた。実は、先週から天童が隊員に会う度に、「これ、ビタミンがすごいから！ ビタミンがすごいから！」としつこく勧めてきたものだった。隊長命令なら仕方ないが、極めて変な味だった。こんな重要な会議でもまたそれが出てくるわけだが、そんなに肌荒れしているだろうか、とつばさは心配になる。メガネのせいで血色が悪く見えるのだろうか。いや、そんな……。

「ついにアジトの場所が特定できたんだな？」

「はい、ターゲットの拡散波長を検出しました。さらに、ごく近くに複数の反応が」

つばさはレポートを渡す。天童は素早く目を通し、確信の顔つきになる。

「時間がない。食べながら聞いてくれ」

とせき払いで促しながら天童は言った。つばさは仕方なく袋を開けて、かぶりつく。ペースト状の緑黄色野菜の味と匂いが口の中に充満する。子供のおやつにしては拷問だ。

「ここからのことは校長と相談してある。作戦を変更する。やつらのアジトには俺とお前とデンロクで行く。こだまと紅花は学校に残らせて、湯田というスパイの少年を捕獲させる。二人にはまだ伝えるな」

モグモグしながら、つばさは頷いた。水が欲しい。

「内通者の可能性も校長に言われた。だから、あぶりだし作戦がバれることも想定のうち。向こうは能力の使用を控えるだろうが、それでも体調異変が起きれば、ターゲットが能力を発動すると読んだ」
天童は、ハクアの体調変化の短さを、医務室に保管されていたカルテで把握していた。

「あと、黙っていたが、先週からきみたちに配っていたキープタブレットは偽物だ。本物のタブレットは粉末状にしてこの『緑黄色まんじゅう』に混ぜていた。だから、きみたちの体調変化は起こらない」

これ！　これが状態安定のアイテムだったのか。つばさは目を丸くする。

「実は　使用人に作らせるわけにはいかなくて、俺が作った。急いだせいで味は完璧にはならなかった。それは許してくれ」

つばさは首を横に振る。何を大丈夫と言っているのか自分でもわからなかった。

天童は珍しく興奮ぎみに身を乗り出し、つばさの肩をつかんで揺すった。メガネがずれる。デンロクがパツと飛び上がる。

「アジトの壊滅チャンスは一度きりだ。内通者の始末も同じタイミングでやらなければならない。俺たちは出かける準備をするぞ。決行は明日だ！」

「ハイッ！」

威勢よく返事すると、口からまんじゅうの中身が出そうになった。アジト攻撃に向けた天童の執念に感激しつつ、つばさは水が欲しかった。

タツヤは、気分転換に少し早めに夕食の支度でも始めようかと階段を下りてくると、リビングで廉太郎と目が合った。廉太郎は休みの日で、午前中は洗濯物を干すのを手伝ってくれたが、午後はだらだらとテレビを見ていた。上半身は裸で、缶ビールを二本飲んでいる。

「タツヤ、お前どうした？」

「えっ……？」

「便秘と下痢が一度に来たような顔してるぞ」

それって健康じゃないか。いや、そうでもないのかな。

「大丈夫だよ」

「宿題ができないのか？ それとも三角関係の悩みか？」

タツヤは鍋の底に沈めていたものを棍棒で掻き出された気分になり、半裸の父親を睨みつけた。そう言えばタツヤは最近父親とあまり話していなかった。ずっと部屋にこもって、ハクアのために何ができるか、ちゃんと好きな肉料理を食べているか、いつになったらまた会えるのか、そればかりをずっと考えていた。廉太郎は好奇心満々の笑顔を見せる。

「父さんに、聞きたいことがある」

「おう、聞け聞け」

「……いまさ、すごく大事な友達と、はなればなれになりそうになってるんだ」

廉太郎の顔つきが変わった。たぶんもつと軽い話だと思ったに違いない。廉太郎が少し姿勢を直したので、タツヤは居心地が悪くなり、逃げるようにキッチンに入った。蛇口をひねり、水道水をくむ。廉太郎はビールを喉に一口流す。タツヤは聞こえるようにつぶやいた。

「もたもたしていると、大人たちが勝手に決めてしまうかもしれない」
コップの水を少し飲んだ。思ったよりもぬるかった。

「僕は どうしたらいいのかな」

すると、廉太郎は答えを言う前に、その友達是谁かと聞いた。タツヤは少し迷ったが、ハクアだと正直に返した。

廉太郎はハクアの秘密は知らないが、泊まりに来たとき、両親がいないことは知っていたはずだ。もちろん覚えていないかもしれない。廉太郎はどう思ったかわからないが、

「お前、何か考えていることがあるのか」

そう聞いてきた。タツヤは悩み、間を置いて答える。

「ある」

「だったら、迷うな。男なら意志を貫け。誰がどう言ったって、手放したら戻らないものがある。自分が心に決めたことを信じる」

廉太郎の言葉が胸に深く突き刺さる。ハクアの秘密は全然知らない。話せない。だけど、それは今まで誰に言われたことよりも、一番温かく、つらかった。

「そう思つて、食い下がつて、みんなに怒られたんだ！」

必死で言い返したつもりだが、廉太郎は急にお腹を抱えて笑い飛ばした。笑われたのが悔しくて、目がかち合った。廉太郎はテーブルに片肘をつき、余裕の顔を向けている。

「ちよつとキンタマを見せてみる」

「みつ、見せないよ！」

「なんだよ、俺は父さんだろ。タツヤ……いいか、何度だって怒られてくればいい。怒られるのがなんだ。それで何がなくなるんだ？」

胸が詰まる。何度だって怒られればいい。そんなふうに、誰か言つてほしかった。

「そうだろ？ お前がやりたいことをやめて帰ってきたら、俺は百倍怒るぞ」

目頭が熱くなる。タツヤはひたすら立ち尽くし、父の言葉を浴びていた。

「時間を戻したいのはお前よりも俺だ。その俺が言うんだ。まだ何とかなるなら、やってこい、バカ野郎！」

タツヤはぐつと唇を噛み、キッチンから飛び出した。全力で廊下

を駆け上がり、バッグをつかみ、携帯を突っ込んだ。

希、アラン、やっぱりいま何とかしたい。知らないうちに全部消えてたらダメなんだ！ まだ何とかなるなら まだ何とかなるなら、それを何度も胸に刻みつけ、タツヤは外に出て、自転車のスタンドを思いきり蹴った。

第14話 『男の意志とビーフコロッケ』 2 / 2

その夜、聡里が事務所で一人パソコンを使っていると、応援団の三人が現れた。

タツヤが一人でここに飛び込んで来るような予想はしていたが、三人揃ってというのは少し驚いた。デスクを離れ、ソファに座る。三人がそばに立ったまま詰め寄ってくる。山盛りのプチシユーを柵から出すような雰囲気ではない。

タツヤが先陣を切る。

「もう一度、シュタインさんと話したい。ハクアと会えなくてもいいです」

聡里は渋い顔を見せた。タツヤは構わず続ける。

「何が起きているか、本当にアジトは安全なのか、それが知りたいんです」

聡里はなるべく平常心で対応しようと、胸元から扇子を出してパツと広げた。相手が子供とは言え、冷徹な心を装うのは難しい。普段と同じ仕草をしていないと落ち着かなくて仕方なかった。

「みんなの気持ちはわかるわ。でも、どうしてシュタインからの連絡を待てないの？」

すると、アランが前に出る。

「タツヤの心配が当たったんだ。何かまずいことが起きてるんだろ？」

通信が一方的に断れたら、こうなることは聡里にも予想できた。再開のめども立たない上に、状況が悪化したと内密に今日伝えられた。シュタインやハクアの身が心配なのは聡里も同じだ。だが、その理由はこの子供たちには話せない。

シュタインがハクアを守るなら、この子たちの安全は自分が守るべきだ。そのために、ハクアと関係が切れたとすら思わせたい。だから、話さないと決めたのだ。しかし、口を閉ざす聡里に対し、語

気の荒いアランが追い込みをかける。

「俺たちも、担任の先生とか他の大人にまだ話したくないんだ！
頼みを聞いてよ！」

もうこれは 脅迫に近い。聡里は我慢する。

「シュタインからは安全だと聞いているわ。それに、私にところに
来ても外の鍵を開けてあげることとはできないの」

だが、希も必死で食らいつく。

「聡里さん。もしシュタインさんに会えないなら、わたし、先生や
お父さんお母さんに全部話すつもりなの」

この子が感情的な勢いで言うとは思えない。聡里はたじろいだ。

「ちよつと、そんなこと……。ねえ、あなたたち……。本気で言うて
るの？」

中央に立つタツヤが力強く頷いた。

「お願いです。僕たちはもう聡里さんのところに来るしかないんで
す」

一点の曇りもない眼差し。いや、タツヤという子は、前にハクア
と事務所に来たときからこうだったかもしれない。屈しない。大人
たちの意見や助言を、この子は全力ではねのける。ハクアはその無
類の強さを肌で感じたから、信じて秘密のすべてを話したのだ。羨
ましくて、ちよつと泣けてくる。聡里は声の調子を少し落とした。

「ねえ、待ちなさい　ハクアの秘密を話してしまっていていいと思う
の？　それがあなたたちの考えなの？」

「本当は、ハクアとそれを話したい。だけど、手放したら戻らない
ものがある。あとで聡里さんに謝られたって意味がないんだ。三人
で決めたんです。もう、僕たちは引きません」

聡里は目を伏せ、銀色の扇子を静かに閉じた。

「……わかったわ。明日の夜、車で連れて行くから。シュタインに
依頼する時間をちょうだい」

「お願いします。約束です！」

タツヤは小さな小指を立て、聡里の鼻先に突き出した。

扇子でグイッと弾き返す。タツヤは目を丸くした。
「なめないで。こっちにも預けた責任があるの。約束するわよ」

夕食の片付けが終わっても、ハクアは部屋から出てこなかった。カボチが様子を見に行ったが、布団を頭からかぶったまま、呼びかけにも答えなかったようだ。ブツシュの超能力「パラノイズ」は神経系に直接的なショックを与えるので、一日頭痛が治らないのは当然の結果だった。その上、もしタブレットが偽物ならば、ハクアの体調が悪化していることが回復を遅くしているだろうとみんな考えた。

一方、シュタインもまた、一度だけコーヒーのおかわりをもらいに来ただけで、それきり部屋から出てこなかった。機嫌が悪かったわけではなく、部屋にこもるときはだいたい考え事に集中していると কিনのだ。それで、他のメンバーはそのままにしておいた。

マリネとカボチは普通に過ごしたが、ブツシュも沼の魚みたいに存在感がなく、物静かだった。カボチが、せっかくハクアが復活したら食べてもらおうと思って焼いた厚切りのローストハムは、五分の一も食べられないまままでパックに入れられた。

「明日も食べられる料理でよかったよね」

そんな言葉を自分にかけたが、やはり元気を失い、早々に部屋に引っ込んでしまった。

マリネは風呂から上がり、リビングを通った。ブツシュが一人テーブルの隅で何か考え事をしている。マリネはバスタオルで髪をふきながら、さつくりと話しかけた。

「あはは、うぶねえ。女の子に手をあげたのがそんなにショックだった？」

「……そう見えるか？」

ブツシュの視線は暗く冷たかった。マリネにはそれが異様に腹立

たしい。

「まあ、両手縛るのは無しだけど、私、あんたの行動は支持するわ」
「　　だけど、シュタインを見苦しいと言ったじゃないか」

「あれは本音だけど、売り言葉よ。ほら、怒りをどっかに逸らさない
と止まんじゃないじゃない」

「　……そうだが」

「男の意志でしょ。後悔は気持ち悪いわ」

マリネは鼻歌混じりでテーブルの斜め前に座った。

「そう言っなよ」

伏し目がちにブツシュは苦笑する。

「とにかくあんたは支持するわ。じゃあ、答えてよ。あんどき、あんたが守ったものは何だったの？ シュタイン？ それともハクア？」

予想外の問いに、ブツシュは虚を突かれた。だが、真面目に考えを伝える。

「　シュタインだと思うが、本当はハクアかもしれないな」

マリネはすらりとした白い人差し指を立て、ノンノンと横に振った。ほんのり上気していて、手から湯気がうつすら漂って見える。

「あんたが守ったのは秩序よ」

マリネの喉は、本当はよく冷えたレモンティを欲していた。けれど、カボチは寝てしまったし、ブツシュの青臭い正義感をいじくるのも悪くない。

ブツシュの顔つきが少し変わる。

「秩序……？」

「あの子はさ、恐怖心から薬を独占する暴挙に出て、共同体のルールを破壊しかけたわけでしょ。それをみんな食い止めただけ。見苦しいのは、それに同情し、真に受けたこと」

マリネは卓上のソルトシェイカーをつまみ、くるくると踊らせる。
「これでハクアも目が覚めたでしょ。冷却期間なのよ、ほっときなさい。で、あんたはさっさと立ち直りなさい。でかいくせにしおれ

てたら、歩くのに邪魔だわ」

テーブルの隅にいるのに邪魔と言われて、ブッシュは何だか情けなかった。

「……ハクアは本当に目が覚めるだろうか」

「突き放せばいいのよ。これで反省しなかったら、今度は私が本気でぶちのめすわ」

すっと目が合う。

「いやいや。マリねえ、一回負けたじゃないか」

「ちよつと！ 『マリネちゃんマジ神モード』知らないわね！ 日傘六本持つてんのよ？！」

六本。それは知らなかった。思わず笑ってしまう。

「あはは、どうやって持つんだよ」

「四本を背中に差すのよ。縦二本と横二本で、こうクロスして」

マリネはテーブル上に指で何か描いているが、向かい側からは全然わからない。

「下に向けたら神輿だな」

「想像で担ぐな！ あのさあ とにかく、あんたはこのチームのくさびなの。アンカー。前線でどんな犠牲があっても退路を作つてよ。頼むわよ」

急に真面目な話になってブッシュは心臓が止まりそうだった。マリネはソルトを戻し、次はペッパーのやつをいじっている。指先で何かしていないと落ち着かないのだろうか。

「……大役だな」

「バカね。前線は口八丁だって大事なの。寡黙な朴念仁より、口の滑らかな美少女がいいのよ」

「適任だな」

すると、今度はマリネが意外そうな顔をする。

「美少女は否定しないのね」

「俺はいつもそう思ってる」

濡れた長い黒髪にバスタオルをかぶせる。その揺れ動く白い布の

隙間から、マリネの流し目がちらつと覗いて見えた。

「軽口は似合わないからやめなさい。はー、寝た寝た」

「そうだな。悪かった」

ブッシュはわざとらしく頭を下げる。いや、ここは礼を言うべきかな、と思つて顔を上げると、マリネの瞳もこちらをじつと見ていた。

「……ちよつとくらい添い寝してほしい？」

「いやいや。口の滑らかな添い寝は眠れないな」

「ふっ、ふふふ、面白いじゃない。ま、本気で言つてないわよ」

「俺はいつもそう思つてる」

「ちつ。死ねっ！」

マリネはテーブルの下からスリッパを飛ばして来た。すねに当たったが、所詮やわらかいやつだ。そして、飛び散つたスリッパを王女のようにブッシュに命じて拾わせると、バスタオルで髪を乾かしながら、また鼻歌を浮かべて部屋に戻つて行つた。

ブッシュは寝る前にキッチンに入り、水を一杯飲んだ。頭がすつと冷えていく。耳にこびりついてしまった犠牲という言葉の残響を振り払う。

「……ちくしょう。あんな恐いこと、笑顔で言うんじゃねえよ……」

その翌日、夕食が始まつたばかりの訓練学校の食堂で、こだまと紅花の二人は、隊服でなくトレーニングウェアを着て、湯田が見える位置に座つた。湯田が席にいることを、こだまは天童にメールで報告する。これが、作戦決行の第一段階だつた。

三枚の立て看板が並ぶ、夜の河川敷に、窓ガラスを黒塗りにしたワゴン車が止まっている。こだまからのメールを受け取り、赤い隊服に身を包んだ天童は、車から出る覚悟を固めた。その横には、同じく隊服姿のつばさも一緒にいる。ただ、つばさの肩にいつも通り

乗っているはずの南国九官鳥のデンロクがない。

つばさは、昨日のうちにおよそ特定できたサーチ範囲から発する拡散波長をさらに細かく解析し、今朝までにかなり絞り込みをかけた。そして、ワゴン車で近くまで来て、あとは自分たちで体感できるほど拡散波長が複数出ているポイントと、九官鳥デンロクの持つ超能力によって入口の場所をほぼ完璧に見つけた。

フォース系の天童にとっては、なおさら同じフォース系のハクアが発する拡散波長は捉えやすかった。メールを読み終わると、つばさは天童に状況を聞いた。

「向こうは大丈夫ですか？」

「ああ、随時報告が来ている。食堂に来たってことは、湯田はまだこっちの作戦に気づいてない。こだまもハクアとの戦いで、慎重さを身につけたよ」

つばさは頷く。メガネはいつものカジュアルなものでなく、密着性の高いスポーツタイプだった。天童は携帯画面をじっと見つめる。「さあ、こいつを送ったら出ようか」

その時刻、天童源兵衛は巨大な玉座に鎮座して、孫の将王から突入開始のメール報告を受け取った。これが成功すれば、校内のキーブタブレット配布禁止も解除できる。

この日、源兵衛の手元には、医務官や教官たちから生徒の心身被害が心配だという苦情がだいぶ届いていたが、その上に今夜まではずしつと文鎮を置いていた。

『帰還を待つ』

源兵衛は非通知設定で、天童隊長に短いメッセージを返した。

河川敷の上空を九官鳥のデンロクが飛び回り、やがて、三枚の立て看板のひとつに止まった。ようやく鍵穴の位置を探し当てたのだ。デンロクは地面に下りると、くちばしで看板の根元をつつき、ロック系第一段階「クイック・オープン」を発動した。続いて、石のベ

ンチへと飛び移る。

ワゴン車から出た天童とつばさの二人は、足早に土手を進み、デ
ンロクが止まっているベンチのそばに来た。天童がベンチを動か
してみると、ふたのように横へスライドして、梯子が現れた。天童は
懐中電灯で慎重に下を照らす。コンクリートの底がすぐ見えだが、
人の姿はなかった。つばさは眉根を寄せて覗き込む。

「こんなものが……」

「よし、突入だ」

そして、天童はこだまと紅花の携帯に湯田確保作戦のGOサイン
を送った。

笹ヶ瀬姻戚相談所の前に、派手なスポーツカーが現れた。運転席
には昨日と違う着物の聡里が険しい顔を向けている。タツヤと希は
知っていたが、猛々しいエンジン音にアランは啞然としていた。歩
道で待っていた応援団三人に、聡里は車の中から颯爽と手を上げた。
「ごめんね、後部座席は狭いから、希ちゃんは後ろね」

「あ、はい」

希は小走りに向かう。

「助手席は僕が座るよ」

少し腰が引けているアランに、タツヤは声をかけた。聡里を信用
していないわけではないが、助手席で道を見ながら、確実にハクア
のいる場所へ向かうことを自分の目で確かめたかった。少し窮屈そ
うだったが、アランは希とぴったりくつつく感じで乗り込んだ。

タツヤは聡里の表情を見る。昨日よりもずっと恐い表情のままだ。
これは自分たちがワガママを言ったことを怒っているのか、それと
も本当にアジトが危険な状況になっているのか知れたかったが、車
が走り出したら高速と爆音で流れる街の夜景を浴びて、もう聞けな
かった。

聡里は一日の時間の猶予をもらってから、ずっと悩んでいた。シ

ユタインとの契約を破らない範囲で、どのように子供たち三人を納得させるか、ずっと考えた。だが、とにかく河川敷までは連れていくしか思い浮かばなかった。

実は、聡里は昼までに移転先候補を調べてシユタインに伝えるつもりだった。それで、向こうに判断を委ねようと考えていた。だが、三人が前日に事務所に来たことで、聡里はそれを躊躇った。シユタインにはとにかく急いでくれと言われていたが、聡里は一日遅れても大丈夫だろうと勝手に判断したのだ。昼間のうちに催促は来なかったし、シユタインが緊急性を正確に伝えなかったこともあった。

ただ、シユタインに聞かれたときを考え、移転先候補の書類はタツヤたちに隠した形で持参していた。聡里が無言だったのは、勘の鋭いタツヤを少し恐れていたこともある。決心した以上、愚直に河川敷をめざし、車を走らせた。

車の中で、アランは隣りの希に一言謝り、いきなりパンを食べはじめた。タツヤは驚いて振り返る。今日、タツヤと希は家で夕食を済ませた後、すぐに出かけてきた。それぞれの親には近所の公園で天体観測すると言っている。

ただ、アランは親が共働きで、しかも帰りが遅いので、夕食はいつも十時くらいになるらしい。それでパンを買ってきたのだ。赤信号で止まると、タツヤはバッグから弁当箱を取り出し、アランに渡した。

「アラン、これ食べる？」

「え？」

ふたを開けると、まだ温かいビーフロッケがたくさん入っていた。香ばしい匂いが後部座席に立ちこめる。

「……お前、何で弁当なんか持ってきたんだ？ ハクアのか？」

「うん。もしハクアに渡してもらえるなら……」と思っただけ

「そっか。だったら、悪いよ」

「うっん、食べていいよ」

タツヤは、前にアランが泊まりに来たとき、アランの家庭の話を

話してくれたのを覚えていた。だから、たくさん作って持ってきた。廉太郎も由果も大好物の自信作なのだ。みんなにも食べてほしいと思っていた。

「じゃあ、一個もらうぞ」

アランはパンを膝の上に置き、嬉しそうにコロツケにかぶりつく。サクツと揚がった衣がはじけ、口の周りに油がついた。牛肉の粒がたくさん混ざっている。ハクアが喜びそうな味だ。

希もちよつと欲しいというので、アランは半分渡した。何だか希と一緒にものを食べるのも楽しかった。希はいきなり声を上げる。

「あつ。今日は水曜日、お弁当の日なんだね！ そつかあ！」

「天体観測のやつ？」

アランが希に聞く。でも、希と並んで食べるコロツケにも夢中だ。「うんっ！」

聡里のスポーツカーは屋根を完全に開いていた。

青信号になり、道路の上の夜空が再び流れ出す。やがてさえぎるビルもマンションも少なくなり、河川敷にどんどん近づいていた。郊外に出ると夜空が一気に広がり、星の動きも子供たちを待っていたみたいに、ゆっくりと時間を包みこむようだった。

平穏な会話のかけで黙っていた聡里が、不意にタツヤに話しかけた。

「タツヤくん　私が言ってもシユタインが応じてくれるか約束はできないわ」

昨日は約束すると言った聡里の口から出たのは、意外にも弱気な言葉だった。ただ、タツヤは三人の願いを聞き入れてくれた聡里に詰め寄る気持ちはひとつもなかった。

「僕は、ちゃんと通話してくれたシユタインさんの優しさを信じてます。僕たちはハクアを待っているとシユタインさんに伝えたいんです。そしたら帰ります」

聡里は「……そう」と短く切り、再び黙った。

四人を乗せたスポーツカーは、もうアジトに向かう以外の選択肢

はなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0758n/>

「全力のハクア」

2011年3月29日21時10分発行